
少年は境界を越えて・・・

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年は境界を越えて・・・

【Nコード】

N3514T

【作者名】

彩

【あらすじ】

過酷な人生を送り、遂には人間という境界を越えてしまった少年。彼は飛ばされてしまった異世界で何を思い、何を成すのか。

これは、人を越えた少年が織り成す麻帆良での物語。

————この作品はオリ主がネギまの世界に飛ばされて頑張っ
て生きていくお話です。初作品です。この作品は、厨二要素、ネ
タ、最強主人公、ヒロイン超強化、いろいろやらかします。なお、
原作開始まではほのまほライフが基本となります。

現在原作破壊計画ちまちまと実行中。

主人公設定（前書き）

前回の更新から一ヶ月が経ってしまいました……。理由は活動報告の通りです。

本当、虚淵クオリティハンパじゃありませんでした。

というわけで、

次話が活動報告より一日近く遅れそうなので、繋ぎとして、改訂版の設定を載せます。

話と話の間に入っているのが少し邪魔くさかったので、分けるのと同時に、

ごちゃごちゃした所をすっきりさせ、必要な所は説明をより詳しくしました。

一部変更点がありますが、物語に影響はありません。

主人公設定

主人公

名前…久^{くすの}寿野 彩^{さい}

年齢…16才

誕生日…10月22日—（不明なため、師から名前を貰った日を誕生日代わりとしている）

身長…174cm

体重…70？

体格…細身に見えるが筋肉質。

髪の色…黒

瞳の色…赤

髪型…剣心完全版一巻のカバーの下の再デザイン版剣心の後ろを一本にまとめた感じ。

人物…見た目は人間と変わらないが、その正体は『超越種』と呼ば

れる神に近い存在の最上位。

幼少期は少年兵として活動し、超越種として覚醒してからは修行三昧だったため、少々世間知らずな一面がある。また、少年兵時代の経験から、物事に対してやや疑り深く、人道的に反する事を極端に嫌う傾向があり、必要と判断した時には躊躇い無く人を殺せる。

基本的な性格は温厚でやや世話焼きであり、年齢の割にはやや落ち着いている印象を持たせる。

身内を大切にするタイプであり、師であり姉的存在であるシルヴィアや妹分である沙耶をとっても大事に思っている。特に、沙耶に対しては時々過保護と言えるような言動をとる事がある。

生活面では家事全般を得意とし、家電程度の機械なら自力で直せる。ちなみに、コンピュータ関連に関しては知識が無いため素人レベル。

視線や人の気配などに敏感なため、多くの視線を向けられるような目立つ事があまり得意ではない。

また、同様に殺気や敵意などの悪意にも敏感であるが、反対に好意にはやや鈍い。

戦闘面では刀を用いた近接戦を好むが、基本的には何でもこなすオールラウンダータイプ。

必要があれば武器を変え、魔術や錬金術などを用いる事もある。

――追加資料――

0～3歳…日本の小さな孤児院で過ごす。

3～5歳…彼を含めた五人の子供が引き取られる。
そして国外に連れて行かれ、「No. 6」という記号を付けられ、
少年兵としての訓練を受け始める。

5歳…戦時中の国の軍に売り渡され、山岳地帯で初の実戦を経験。

5～10歳…訓練や経験を重ね、徐々に力を付けながら戦い抜く。
元々身体能力が飛びぬけて高かったため、いつしか大人の実力者にも
劣らないような力を付けていた彼は、誰よりも多くの敵を殺して
いった。

おかげで周りからは「死神」と呼ばれ、腫れ物のように扱われた。

10～11歳…腫れ物のように扱われ続けてきた彼は、遂に配属が
変更される。配属先は、通称「掃き溜め」と呼ばれる部隊で、わけ
ありの兵を寄せ集めた捨て駒部隊だった。

この部隊の仲間と接する内に、徐々に個性が現れ始める。

11歳…戦争が終結。瀕死の重傷を負った状態だった所、一人の女
性に発見されて助けられる。

後に、中位超越種として覚醒すると同時に直死の魔眼を発現。

その女性「シルヴィア・デイス・ヴェルガン」の弟子として行動
を共にする。

11～12歳…力の制御及び扱い方、魔術、錬金術、各種武器の扱
いを習う。

「沙耶」という名前の妹分ができる。

12～15歳…シルヴィアの修行が続く。

制約付きでの竜種との戦闘を始めとする滅茶苦茶な事をさせられながら、時に事件に巻き込まれたり自分から首を突っ込んだり、慌ただしい日々を過ごす。

15歳…修行が全過程終了。シルヴィアから名前を貰い、表の世界で生きることになる。

が、自身を渦中に置いた事件が発生する。

この事件を経て、彩は最上位超越種になる。

15～16歳…沙耶と一緒に日本の片田舎で学生として暮らす。

少々戸惑いながらも、友人を作り、学生らしい青春を送る。

16歳…最上位超越種を留めて置くだけの許容量が世界には無く、このままでは均衡が崩れる危険を予知した人物達が、彩の存在の抹消にかかる。

数歩手前の所まで追い詰めるも、シルヴィア達により阻まれる。

そして、隙を突いて彩を平行世界に転移させ、現在に至る。

— — — — —

○超越種

幻想を超越する程の力を持つ種。人間の形をとっているが、人間とは比べ物にならない能力を有した存在。

超常的な能力を駆使し、抑止力の影響を受けない、という特異性を覗かせる人外。

その正体は、人と神が共存していた時代に生まれた人と神の混血の子孫が何らかの原因によって神の遺伝子を覚醒させたもの。

特性は以下の通り。

- ・ 神の部分が活発になるため、身体機能を始めとするステータスは格段に上がり、霊格も上昇し、神力が使えるようになり、万物に対してある程度の物理的及び霊的干渉、操作などが可能になる。
- 加えて、不老不死に近い代謝を得る（彩は不死性特化型のため、不老性がほとんど無い）。

- ・ 霊格の上昇に伴い、人為的に起こされた奇跡には干渉されにくくなるため、気や魔力を扱った術はほとんど受け付けなくなる。

- ・ 人の部分があるため、信仰の有無によって自身の力が左右される事は無い。

- ・ 霊的及び魔術的なパスが繋がっている相手には力がある程度分け与える事が可能。

- ・ また、先祖となった神の特性にちなんで固有能力が個々に存在する。

超越種にはランクが存在し、上位になればなるほど強力になる。

最上位<<上位<中位<下位

という具合になっており、上位超越種以上は正真正銘の神だと言ってしまっても差支えが無いほどの力がある。

・半分は人間のため、能力や身体機能は成長するが、ランクが上がるほど成長する事は基本的には無い。

・覚醒すると、ランクによって若干異なる所もあるが、容姿が少し変化する（中位種時代の彩は、体毛が銀色に変色したりした）。だが、神の部分を抑えることによって、容姿を覚醒前の状態に戻す事が出来る。

尚、その場合は神力の使用が不可能になり、覚醒状態で発生した能力のランクが大幅に低下する。

ちなみに、この特性のおかげで、彩はシルヴィアから何度も「厨二」や「銀色サイヤ人」と指摘をされた。

— — — — —

○ステータス（自己封印↓覚醒状態）

筋力B+↓?

耐久B↓?

敏捷A＋↓？

魔力A↓？

幸運C↓？

○彩の装備

アミュレット…ステータスを1.5ランク下げる効果がある封印処置を施した銀製のアミュレット。

自己封印状態でも高いステータスが目立つため、泣く泣く彩が自作したもの。

ちなみに、これを装備した状態の彩のステータスは以下の通りとなる。

筋力C

耐久C－

敏捷B

魔力B－

幸運C

○オリ武器

・無銘の刀…彩の基本装備。現代の刀匠が打った刀で、何の変哲も無い平凡な刀。魔力で強化して使っているため、刃こぼれは無い。

・夢想桜…刀身が桜色をした対魔の概念礼装。退魔刀として有名。人は斬れないが、妖怪や魔物に対する斬れ味は並みではない。

・御神木の木刀…樹齢六百年の御神木を圧縮して作った木刀。とても重い。

○オリ技一覧

・絶影…高速移動術。文字通り、影を絶つほどの速さでの移動を可能とする技。

その速度は瞬動や縮地の比ではない。

足場さえあれば何処でも使用が可能。

並外れた筋力を持つ人外用の技であり、人間が使えるものではない。無理に使おうとすれば、数回で筋肉が使い物にならなくなる。

同時に人外でも多様は出来ない技であり、回復能力が高い種族で無い限り好んで扱われる事が無い。

○確定ヒロイン

・桜咲刹那

・大河内アキラ

・絡繰茶々丸

主人公設定（後書き）

話が進むにつれて随時更新していきます。
オリキャラについては、また別に紹介覧を作って掲載するつもりです。

第一話 ver. 2.0 (前書き)

初作品です。ブームに乗って書きました。温かい目で見守ってください。

ちょっと追加、修正をしました。

第一話 v e r . 2 . 0

ジージージー

ジージージージー

————虫の鳴く音で少年は目を覚ました。

固い地面の感触に若干疑問を持ちながら目を開けると、見たことのない風景が広がっている。

（何処だよここ・・・ッっ！）

体を起こそうとしたら急な痛みを感じ少年は顔を少し歪める。

少年の服は所々が破れており、そこから覗く肌には幾つもの生々しい傷があった。

s i d e . 少年

どうやら師匠たちの術は成功したみたいだな。

あっちのみんなは無事なんだろうか・・・それだけが心配だが・・・。

・・・とりあえず、今はとりあえず現状の確認を先にしておくか。

まずは体の傷・・・結構キテるがまあ、動けない事もないな。

次に、感覚は・・・うえ、少し気持ち悪いかも。もしかして転移で酔ったのかな。

それで、持ってる装備も問題なし、と。

・・・結局、あんまり確認する事なかったな。

それにしても・・・向こうから何かおかしな雰囲気がある。

・・・少し近づいてみるか。

side out

(――――マズイ。)

・・・・・・

(これは・・・話と違うぞ。)

時間が増すにつれて悪化していくこの状況に、少女『桜咲刹那』は歯を食い縛っていた。

切っても切っても沸いて出てくる異形、異形、異形。

3mを越えるであろう巨体を持つ鬼や、小柄な体躯だが動きの早い狼。

すでにこの手で切り伏せた異形の数30に達したというのに異形の群れは減る気配を見せない。

体力も限界に近づき一瞬気がそれたその時、異形の重い攻撃が少女に襲い掛かった。

side・刹那

なぜだか知らないが、今日は普段からでは考えられないほど侵入者が多い。

そのため、いつもなら二、三人で撃退にあたる私たちも、今回に限りって単独で各エリアに担当することになった。

人手が足りない、というのももちろんだが・・・この学園都市、広すぎるのではないだろうか。

一人につき一エリアを任されたわけなんだが・・・一つのエリアが広すぎる上に人手が足りないため、先生の中では二エリア掛け持ちという事態すら発生しているようだし。

二エリアも担当することになった先生は一体どういった心境なんだろうか。

一エリアだけ担当の私だって、そろそろ体力も限界に近いのに。それとも、私の修行が足りないだけだろうか・・・。

いくら低級とは言え、これだけ数を揃えられればそれなりの脅威になってくる。

早くカタをつけようと思い、今対峙している鬼に切りかかろうとしたそのとき、不意に膝から力が抜けてしまった。そして、その隙を奴は見逃すはずもなく

「しまっ・うぐっ！」——ドスッ！——

横風ぎの一閃が私の脇腹を襲った。

その一撃に反応できずにまともに食らってしまった。

・・・今のはマズイな。

感覚的に肋骨が一、二本は折れてしまった感じがする。

「どうした嬢ちゃん？もうへばったんかいな」

「威勢のいいのは最初だけかいな」

これ見よがしにと鬼どもがニヤニヤしながら集まってくる。

ああ・・・私はここで終わってしまうのか・・・。お嬢様を守りきれずに・・・。

・・・だめだ！まだ終われない！！お嬢様を守ると誓ったじゃないか！！

立ち上がろうと、痛みと疲れで言うことを聞かない体に鞭を打つ。

「嬢ちゃんまだやるきかいな」

そんな私の様子を見た鬼が武器を構えながら言ってくる。

「当たり前だ！！私はお嬢様を守り通すまで終われない！」

「・・・なら、しゃあないのう」

「ワシらもホントはやりとおないんやがなあ・・・。カンニンな」

そう言って鬼どもが殺気を放ってくる。

今の体でどこまでできるかわからないが、やるしかない。
アレを使っても・・・

そう覚悟を決めたとき――――――

side. out

――――――

――ザクリ――

刹那に向かって棍棒を振り下ろそうとした鬼の頭部に一本の短刀が
突き刺さった。

「え？」

刹那は今何が起こったのか一瞬理解できなかった。

目の前には横たわって消えてゆく鬼。しかし切った覚えがない。

（何が起こったんだ？）

そう思った時、聞き覚えのない声がした。

「すごい光景だな・・・日本昔話かよ。子供はとっくに寝てる時間だぞ？」

全員が声の方を見ると、苦笑いした少年が歩いて来ていた。

――その手に一振りの刀を持って。

side・少年

妖怪集団が一斉にこちらを睨んでくる。数は35・・・この程度なら今の体でも問題ないな。

それにしても関西弁の鬼って・・・。

見た目はものすごくゴツイから口調とのギャップが半端でない。

・・・本当に日本の昔話に出てくる鬼のようだ。

しかし、今はそんなことよりも

「そこの女の子、俺も少し手をかすよ」

「は？ え？」

戸惑っているあの子は放っておき、俺は納刀したままの刀を手に、居合いの構えをとる。

「なんや兄ちゃんワシらとヤル気か？」

少し声にドスを効かせて鬼が言う。

いきなり不機嫌になったなこいつ等・・・まあ無理も無いか。

「ああ。お前らを殺る気だ。」

「カツ！オモロイやんけ兄ちゃん！そんな体で大丈夫かいな！？」

「大丈夫だ。問題ない。」

妖怪どもが一斉に襲い掛かってくる。

しかし、こちらの心配をしてくるなんて・・・関西人（？）は器がでかいんだな・・・。

・・・まあいい。

さて、肩慣らしといこうか。

side out

side 刹那

私は彼の技に見入っていた。はつきり言ってすごい一言だった。

耳に入ってくるのは鳴り止まない剣戟。

私の習ってきた神鳴流も相当特殊な剣術に分類されると思うが、彼の扱う剣術は更にその数段上をゆくものに見える。

気や魔力を使っているようには見えないのに、同時に八撃の剣閃が生まれたり、剣閃を飛ばしたりしている。

その一撃一撃が的確に急所に叩き込まれている。

脳天を叩き潰さんとする一撃を体を捻るだけかわし、

横なぎの一閃に抜刀術で相対して得物ごと鬼を切り伏せ、

首を食いちぎろうと飛びかかって来る狼の首を回し蹴りで切断していく。

戦いというより一方的に惨殺される異形、異形、異形。

— — —
— — —
— — —
— — —

痛みで意識が朦朧としてきたころ、ふと剣戟の嵐が止んだ。

間近に気配を感じて見上げてみると、先ほどの少年が私に話しかけてきた。

「大丈夫かい？見たところ肋骨がやられているみたいだけれどほかに怪我は？」

「えっ、ええ肋骨以外は無事ですが・・・！！」

突然抱きかかえられて思考がストップする。

・・・え？ワタシ、オヒメサマダッコサレテイル？

「あ、あのっ」

「悪いけれどしばらく我慢してくれない？この運び方のほうが体に負担をかけないんだ。」

反射的に暴れてしまいそうになり、なだめられてしまった。
体を気遣ってくれてのことなのに・・・恥ずかしい・・・。

「私は「その怪我じゃ歩くのキツイだろ？無理はしない方がいい」・
・！！・はい」

大丈夫、と言おうとしたところを遮られた。

どうやら私が何を言おうとしたのか分かっていたようだ。

「君の仲間が居るところに連れて行くから場所を教えてください」

「・・・わかりました。お願いします。」

悪い人では無いようだから、私は世界樹広場の場所を彼に伝えて意識を手放した。。

彼が最初から大怪我を負っていたことを知らずに・・・。

第一話 ver. 2.0 (後書き)

感想、誤字、脱字、アドバイス（主に戦闘描写）待ってます！
次回は主人公設定です。

第二話 ver. 2.0 (前書き)

プロローグを入れなかったのはわざとです。理由は後々明かします。原作開始前は戦闘少なめでいき、原作に入ったら厨二祭りが起こるかもしれません。

大改修しました。

第二話 ver. 2.0

— — — 翌日 — — —

少女はベッドで目を覚ました。

「・・・あれ？私は・・・」

覚醒しきっていない脳を働かせ、自分の現状を確認していると、

「刹那、目が覚めたかい？」

褐色肌の長身の少女が話しかける。

side. 刹那

「ああ」

そう龍宮に返し、昨晚の出来事を振り返る。

・・・そういえば彼はどこに居るのだろうか。

まだ礼を言えていない。

彼が何者かということよりも、そちらの方が気にかかった。

「なあ、わた「彼なら二つ隣のベッドで寝ているよ」・・・なに？」

なぜ私の言いたいことがわかったかということには敢て触れないでおこう・・・。

それよりもなぜ彼もここで寝ているのだろうか。

疑問に思っていると、また私の心境を悟ったであろう彼女がとんでもないことを口にした。

「彼は君よりもひどい怪我を負っていたみたいだよ」

「なんだと!？」

「しかも治癒魔法が効かないときたからどうしようもなくてね」

「な!？では彼は・・・」

「ははっ。そんなに心配しなくてもいいらしいよ」

「・・・どういふことだ？」

side out

――― 昨晚――― 広場にて

「そっちは大丈夫だったか？」

「死ぬかと思いましたよ」

「こちらですわ・・・」

などと今回の警備を担当した者達が談笑をしているなか、頭部の長い老人が姿を現した。

「皆、無事なようじゃの。まだ戻ってないものはおるかの？」

彼は、この大規模な学園都市「麻帆良」の学園長であり、東部の頭を務める近衛近右衛門である。

今夜の騒動が終わったことを実感し、各々が安堵の表情を見せる中、

「まだ刹那が戻っていない」

褐色肌の長身の少女「龍宮真名」は一言つぶやいた。

「なんじゃと？」

学園長や周りの人々は疑問に思った。彼女「桜咲刹那」は夜の警備を任せられている学生の中でもトップクラスの実力を持っており、任務遂行時間も比較的速い。彼女に対して、学園長や魔法先生たちは絶大な信頼を寄せている。

そんな彼女が誰よりも任務遂行が遅れていることに、周りは眉をひそめていた。

今回の場合は彼女の担当区は圧倒的に侵入者の数が多かったため、他の区域の侵入者の数は各々が一人でも対処しきれレベルだった。

「逃げ足の速いヤツが多かったのかもな」

などと、あまり心配しているものは少ない。皆が家路について行く中、

「……だといんだがね」

真名は一人そうつぶやいた。

side・真名

確かに一人で対処しきれぬ数ではあったんだが・・・今回の敵の動きは不自然な点が多かった。

それに、刹那が未だに戻らない事も気になるな。

・・・やはり、本命は刹那のエリア、と考えるのが妥当だろう。

少しばかり数があっても彼女なら対処しきれるとは思うけど・・・
なんだか妙な胸騒ぎがする。

・・・やはり応援に行ったほうがいいだろう。

「学園ちよ「えーっと、ここでいいのかな？」・・・！誰だい？」

向かう前に学園長に声をかけようとしたら、背後から聞きなれない声が出た。

声に振り返ってみると、刹那を抱きかかえた血まみれの少年がいた。

s i d e . o u t

s i d e . 彩

俺の声に振り返る褐色肌の少女とその他大勢。・・・それにしてもこの子背高いな。

「この子を届けに来た。肋骨が二本やられているから治療してあげてくれないか？」

「それはもちろんのことだが・・・君は大丈夫なのかい？君のほうが大事にみえるんだが」

この子、なかなか痛いところを突いてくるな・・・。

それに・・・なかなか場馴れしているような気配もする。

硝煙の臭いもするし、もしかして・・・っと、今はそれどころじゃないな。

「あー・・・大丈夫だよ。オートで治癒魔術が働くように掛けてあるんだ。一日休めば治る」

「本当かい？」

「ああ」

まあ、今はそう応えておこうか。

とりあえず抱えている少女を渡すと

「刹那君を助けてくれたこと、感謝するぞ。して、お主は？」

お爺さんが話しかけ・・・なんだコイツ。

人に紛れておかしいのが居るんだけれど・・・。

ええと・・・こういう妖怪をなんていうんだっけ。

頭の長い・・・

「・・・ぬらりひょん？」

「ふお！？いきなりひどい事言うの・・・」

あ、本気で傷ついてる。

ってことは・・・人？

・・・いやいやいや・・・ない。

頭の長さおかしいから。

そもそも人の説明に頭の長さを出すとかありえないし。

あっちの世界ですらこんな人種みたことないぞ・・・っていうか人
って認識していいのか？

・・・ま、まあ、周りも「学園長」とか呼んでるみたいだしな。
とりあえず、今は保留にしとこ・・・。

「失礼しました。はじめまして。俺は久寿野彩といいます」

一応挨拶しておいた。

「う、うむ。ワシは近衛近右衛門。この麻帆良の責任者じゃ」

「・・・麻帆良？」

「む？　もしやお主、麻帆良を知らぬのか？」

「え、ええ・・・。麻帆良とは何のことでしょうか」

「麻帆良とはこの土地のことなんじゃが・・・。知らないとなると、お主はいつたい・・・」

・・・しまった。

いきなりやらかしてしまった。

どうやらまだ頭がボケているらしい・・・今更弁解は不可能だな。

・・・仕方ない。

開き直ろう。

重要なところはばかすけれど・・・。

妖怪や魔術が存在する世界なんだからおそらく信じてもらえるだろう。

・・・はぁ・・・面倒だ。

「と、言いたいところじゃが、お主もひどい怪我じゃ。一日休めば治る、という話が本当ならば明日改めて話を聞かせてもらえるかの。寢床はこちらで用意させてもらうがかまわんの？」

「・・・ありがとうございます」

「では、真名君。彼を案内してくれるかの」

「はい。じゃあ、ついて来てくれ」

といって前を進む少女に続きながら、俺は広場を後にした。

_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
	_____	_____
	_____	_____
	_____	_____

— — — 救護室 (?) — — —

「ここだよ。君はこのベッドを使ってくれ」
「どうやら着いたようだ。」

「ああ、ありがとう」

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私は龍宮真名。仲間を救ってくれた事、改めて礼を言わせてもらおうよ。」

「ああ。さっきも言ったが、俺は久寿野彩だよ。彩で構わない。よろしく、真名」

「ああ、よろしく。ところで、君は治癒魔法は使えないかい？ 私はつかえないんだ」

「治癒……ね。まあ、使えないでもないよ」

魔法ではなく魔術の方だが。

「なら、彼女を治してやってくれないかな。他の人たちはみんな帰ってしまったんだよ」

「帰った？それはまた薄情な連中だな・・・」

「彼女が有象無象に後れを取るなんて夢にも思っていないからね」

「五十を超える数を敵に回してもか？」

「・・・他は十体そこそこしかいなかったからね。そこまで考えが回っていなかったんだろうね」

「・・・まあいい。それよりも治癒だったな」

治癒系統はあまり得意じゃないんだけどな・・・。
まあ、この程度の傷なら難なく治せるだろう。

まずは体に手を当てて、と。

「・・・」

「・・・呪文を唱えないのかい？」

「ああ、俺には必要ないからね」

そんな事を言っている間に魔力が巡り、骨を修復させる。

「ほれ、治ったぞ」

「・・・そんなことができるならどうして自分には使わないんだい？」

「ちつとばかり特殊な体質でね、相当強大な術以外は全部レジストされてしまうんだ」

「それはまた・・・難儀なものだね」

「だろう？ところで、そろそろ俺も寝てもいいか？」

「ああ、そうか。自動回復術があるんだったね。今はあまり深くは訊かないことにするよ」

「そう言ってもらえると助かるよ」

「それじゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

「・・・真名は本当に鋭いな・・・敵に回すと面倒くさそうだ。」

side out

—
—
—
—
—
—
—

「まあ、そういうわけだね。今晚にでも礼は済ませられるんじゃないか？」

「そんなことが・・・」

「刹那は今日欠席連絡をしておくから、彼が起きたら学園長室まで連れて来てくれ」

「え？」

「治療魔法をかけてもらったとはいえ、君は大怪我をしたんだ。大事をとって一日休め」

「・・・わかった」

第二話 ver. 2.0 (後書き)

誤字脱字、意見、感想、アドバイスなどお待ちしています。

第三話 ver. 2.0 (前書き)

今回のグダグダ感が何時にも増して漂ってきます。

大改修により、グダグダ感を緩和しました。
型月理論ってすごかったいいですねー。

第三話 ver. 2.0

— — — — —
side. 刹那

日が沈み始め部屋が赤い光に照らされる中、彼が目を覚ましたので私は声を掛けた。

「おはようございます。体の具合はいかがですか？」

「ああ、おはよう・・・って夕方に言うのも変な感じだな。体はもう大丈夫みたいだ。君のほうこそもういいのか？えーと・・・」

「桜咲刹那です。ええっとそれで・・・」

「ん？・・・ああ、俺は久寿野彩だよ。彩で構わない。よろしくな刹那」

「ええ。よろしく願いします。それで、彩さん」

「ん？」

「昨晚は助けていただきありがとうございました。それに治癒までしていただいて・・・あなたも大怪我をしていたのに・・・」

昨晚のことを思い出すと本当に申し訳ないと思う。自分も大変だったはずなのに・・・。

そんなことを考えていると、彼・・・彩さんは一瞬ぽかんとして

「ああ、そんなことか。気にしないでいいよ。困ったときはお互い様って言うだろ？」

と、笑顔でそう言った。

彼はそう言うが私はまだ申し訳ないという思いが強かった。

どんよりとした考えが頭の中を巡っていると、それを見かねたであろう彼が口を開いた。

「まあ、お互い今こうしていられているからそれでいいんじゃないか？」

「それはそうですが・・・」

「そういつまでも落ち込んでいないで。今回失敗したと思うなら、次で挽回すればいい」

「・・・それもそうですね。すみません、お見苦しいところをお見せしてしまって」

「構わないよ。それからさ、今日学園長と話をする予定になってたハズなんだけれど・・・」

「あ、ああ。それなら私が学園長室まで案内します。もう出歩いても平気なら今からでも大丈夫ですが」

「そうだね・・・じゃあ今から行こうか。案内よろしくな」

「はい」

ネガティブ思考に陥っていたためか、案内するということをすっかり忘れていた私だった・・・。

side.
out

—
—
—
—
—
—
学園長室
—
—
—

S
i
d
e.
彩

コンコンコン。刹那が学園長室の戸をノックすると、

「うむ、入ってよいぞ」

学園長の声がした。

「失礼します」

刹那と共に中に入ると、中には学園長と白づくめの渋い顔をした男性がいた。

「久寿野君、体のほうは平気かの？」

「ええ。無事に回復しました」

すると、傍らに佇んでいた白い男性が口を開いた。

「学園長、彼が？」

「そうじゃ。刹那君を救ってくれた……」

「久寿野彩といいます」

「きみが……。僕は高畑・T・タカミチだよ。刹那君を助けてくれたそうだね。ありがとう」

そう言って俺に頭を下げるタカミチさん。

紳士なのは見た目だけではなかった。

「いえ、当然のことをしたまでです。礼を言う必要はありません」

「……では、そのことも踏まえて本題に入っても良いかの？」

「「「はい」」」

「ではまず、君の名前と顔から戸籍を割り出したり魔法世界の者たちに尋ねたりしたのじゃが、情報に一致するものはひとつとして存

在しなかった。君は何者なのじゃ？」

・・・徹底的だな。まあ、責任者なら当然か。

「そうですね・・・信じてもらえないかもしれませんが、平行世界・
・異世界からこの世界に飛ばされたものです」

「「え!？」」

「・・・・・・・・この世界に存在していた痕跡が無いということは、
どうやら信じる他はないようじゃのう・・・して、この世界に来た
理由は？」

「理由はありません。事故のようなものです」

・・・今はこう言っておこう。

本当のことは言える訳がない。

話がややこしくなるし、なにより俺が話したくない。

「帰る方法はあるのかの？」

「・・・・・・・・ありません」

これは本当だ。

万が一帰る方法があったとしても・・・俺は帰れない。
帰るわけにはいかないしな。

「・・・・・・・・では、麻帆良に住んでみるきはないかのう」

「・・・・・・・・ハイ？」

思わずアホみたいな声を出してしまった。

・・・仕方がないと思う。

しかし、見かけによらず・・・というわけでもないが、なかなか突拍子の無い事を言うなあ。

聞き間違えでなければこの町に住まないかどうか訊かれた気がするが・・・。

「・・・すみません学園長、もう一度伺ってもよろしいでしょうか」

「じゃから、この麻帆良に住まぬかと訊いているのじゃよ」

「・・・本気ですか？」

「うむ」

「こんな得体の知れないモノを？」

「悪人でないことはお主の行いからわかる。のう、刹那君」

「あ、はい」

「あれだけで信じるのですか？」

「あの行動だからこそじゃ。自分の身に大事があるにもかかわらず見ず知らずの他人を助けるということは滅多にできることではない。それも悪人ならなおさらじゃ」

「し、しかし・・・」

「ここに住まぬとして、お主には行くあてはあるのかの？」

「っ！・・・いいえ、ありません。」

「じゃろ？行くあてがないなら、この土地に住んでみてはくれぬかのう。この土地に住まわせてやるくらいしか、お主に返せるものが無いのじゃ」

「・・・俺はあなたに何か貸しを作りましたか？」

「うむ。ものすごく大きな貸しを作りおったわ」

「・・・は？」

「この学校の大切な生徒の命を救ってくれたじゃろ？ワシらにとって生徒の命は何よりも大事なもののじゃ。じゃから、それを救った君にこのまま何も返さないでおくことなぞ、責任者であるワシが許せんのだ。ワシを助けると思ってこの申し入れを受けてくれぬか？」

・・・なるほど。

「どうやら責任者としてけじめと言うヤツをつけたいようだ。」

「まあ、こちらとしては、それはとてもありがたい。」

でも・・・

「ここに住ませてもらうことはとてもありがたいんですが・・・」

「住む所と戸籍はこちらで用意させよう」

「・・・」

「これが心配だったんじゃない？」

「……はい、そうですが……」

「そういえば、年はいくつじゃ？」

「？16です」

「ふむ……ならあとは、通う学校じゃな……」

「ちょ、ちょっとまってください！」

「ふお？何か問題でもあったかの？」

「学校に通うお金なんてありません。それに、衣食住費が必要です
のでここに住むなら働き口をさがします」

「それならワシが「受け付けません！」ふお！？」

「住居と戸籍だけでも十分です。それ以上は何があっても絶対に
受け取れません」

「うゝむ……ならワシから頼みたい仕事があるのじゃが、それを
引き受けてはもらえぬかの？」

「はい？なんででしょうか」

「……お主、勉強はどの程度できるのかの」

「? 数学と物理でしたら、アメリカで高等教育の教員免許を取得しています」

「「えっ!? (ふお!?)」」

「……残念ながら本当のことだ。」

『魔術を駆使するのなら魔術の教本を読み、その術を学ぶのが定石というのなら、物理戦を好む俺達は物理学を学び、自然学を身につけるのもまた定石』とは師匠の談。

修行の合間にみっちり教え込まれ、『せめて人に教えることのできる位まで知識をまとめなさい』といわれ、そのテストということでアメリカにとばされて試験を受けさせられたのは14歳のころ。そのおかげもあってか、物理戦での戦術の幅が尋常じゃない程広がった。

「……でもあのときの日々の事は正直思い出したくない。それにしても、勉強ってことは……家庭教師でもさせる気か？」

「では今年度だけ女子中等部の数学の先生をやってもらえるかの」

「……学園長、俺の年で教師をするなんてこの国の法律に引っかかると思うのですが」

「そ、そうですよ! さすがに無理があります!!」 (刹那)

「大丈夫じゃよ。麻帆良ではワシが法律じゃから」

「「……」」

「……だめだこのジジイ。早く何とかしないと。そう思わずに入られなかった。」

「引き受けてくれるかの？」

「・・・わかりました。引き受けましょう。・・・その様子だとまだ何かありそうですね」

「僕からもひとついいかな？」

「？何でしょうかタカミチさん」

「僕の受け持っているクラスの副担任をやってももらえないかな？僕は出張が多くてね。もしよければ迷惑ついでに引き受けてもらえると助かるんだけど。あ、もちろんお礼はするよ」

タカミチさん先生だったんだ・・・まあ確かについだし、受けてもいいだろう。

「ええ。わかりました」

「本当かい？ありがとう。助かるよ」

「では手続きはワシのほうからやっておこう」

「お願いします。」

「ところで、君の住む所じゃが・・・」

「俺の住む所がどうかしたのですか？」

「お主の住むのは女子寮の管理人部屋での・・・」

・・・ああ、そうですか。

つまり女子寮の管理人もやってくれということか。

それに加えておそらく昨晚のように妖怪大戦争が勃発すれば駆り出されるわけだな。

・・・仕事には困らないが・・・さすがにこれは・・・厳しくはないだろうか。

いや、ここまでしてもらっているんだから断るわけには行かないな。

「管理人をすればいいんですね。わかりました」

「いいのかの？」

いいのかの？じゃないだろう。

確信犯が何を言うか、と言ってやりたかった。

刹那もあまりの急展開続きに頭が回りきっていないようだ・・・。
当然だろうな・・・俺だってもうなげやり状態になってきた。

「それに加えて昨晚のような夜の仕事もですよ」

「・・・よくわかったのう。すまぬがたのめるかの」

「乗りかかった船ですからね。致し方ありません」

「そう言ってもらえると助かるんじゃないが・・・」

「そういえば、この世界について聞きたい事があるので教えていた
だいてもよろしいですか？」

「ふお？何が訊きたいのじゃ？」

「先ほど言っていた『魔法世界』を始めとするこの世界の裏の事情を」

「・・・うむ。よいじゃろう」

— — — — —

— — — — —

「・・・と、いうわけじゃ」

「そうですか・・・」

お互いの世界の魔術、魔法に関しての情報を軽く交換してみたのだが、所々で価値観や法則を始めとする齟齬が目立った。

特に、奇跡の秘匿に関してはいろいろと面倒な掟のようなものが俺の居た世界ではあったんだが、この世界での決まりごとなどを聞く限りでは、その辺りはいささか大雑把であるような印象を受けた。

そして、聞いた中でも最も価値観の齟齬を際立たせたものは、目指すものの違いだった。

俺達の知る魔術師は、日々研究を重ね、根源の渦に至るためにと日

夜励んでいる。

それはもう、絵に描いたような根暗な研究員の如く、寝る間も惜しんで頑張っているものらしい。

まあ、俺はその有様を直に見たわけでもないんだが。ていうか、見たいとも思わない。

そして、この世界では魔法使い達が目指すものは『立派な魔法使い』とか言うものがポピュラーなものらしい。

魔法学校に通って知識や技術を身に付けたり、友人と切磋琢磨しあったりもするらしい。

そうして、自身で磨き上げた技を人々のために使う。

研究成果を外に漏らす事を極端に嫌う魔術師と比べると、対極とも言えるほどに違いがある。

それに、魔術、魔法という呼称の違い。

ちなみに、これについては価値観も何も関係はない。

ただ、個人的に引かかったただけの事なんだが・・・

俺の世界で魔法と言うのは、『いくら時間とお金を割いても実現不可能な事象を引き起こす奇跡』の事を指し、それ以外はすべて魔術と分類される。

ちなみに、この世界の魔法は俺達の言うところの魔術に当てはめられる。

そんなことを頭の中であらかた整理し、一旦途切れた話の続きをする事にした。

「それで、今日はこれからどうすれば？」

「そ、そうじゃのう。とりあえず昨晚妖怪退治をしたことの報酬を渡しておくから生活必需品などは自分で調達するようにの。教師の仕事は明後日から臨時教員として2－Aの担当になるからよろしくたのむぞい。夜の警備については・・・今夜の十一時に昨晚の広場に來てくれるかの。詳しい説明はそこでしよう」

「わかりました」

「では、ここでの話しはこの辺りで終いにしておこうかの。」

「刹那君、彼を女子寮まで案内してあげてくれるかい？」

「え？は、はい！」

思考にふけっていた刹那が帰ってきた。

・・・まあ、気持ちは分かる。

「失礼しました」

二人で学園長室を出る。

「じゃあ、また案内頼むよ刹那」

「は、はい」

戻ってきたのはいいが、やはり今の状況に困惑する刹那だった。

第三話 ver. 2.0 (後書き)

やりとりが難しいところだったのでかなりグダグダになってしまいました・・・。

意見、感想、誤字脱字、アドバイス、使えそうなネタの提供待っています。

次々回辺りから日常パートが始まります。

第四話 ver. 2.0 (前書き)

タカミチを噛ませ犬にして主人公の強さをアピールするのは、最強主人公ものを作るのには欠かせませんよね。そういうわけで今回はタカミチフルボッコ祭りです。

言うほどフルボッコしませんか……。グダグダにならないように努力します。

エヴァとのやり取りを追加。ここで絡みを入れないとタイミングが無い……。

第四話 ver. 2.0

— — — — —

— — — 女子寮前 — — —

side. 彩

ここに来るまで二人とも無言のままだった。

・・・わかると思うが原因は刹那だ。

頭の中を整理しているのか、道中ずっとぶつぶつと何かを呟いていた。

『彩さんが副担任で寮の管理人で・・・』とか、『ならば稽古を・・・』

とか色々。

・・・それは寮に着いた今も続いていた。

・・・それは寮の前でずっと立ち止まっている。

寮に入っていく女生徒達は、そんな刹那と俺を怪訝そうな顔で見ていた。

・・・そして、そんな状況に耐えられなくなった俺は刹那に声をかけた。

「刹那、管理人室はどこにあるんだ？・・・もしもし、聞こえるか？」

「・・・ハッ!? あ、ええ! こちらです。このカウンターのすぐ隣

の」

「へえ、ここがか」

管理人室はなかなか立派なもので、間取り10畳、キッチン3畳、トイレ、シャワールームもあり、おまけに四畳のロフトがあった。家具も完備されていて、あと必要なものは食器と服とタオル、石鹸などの生活必需品、食材くらいだった。
・・・となると早速買い物に行かないと。

現在午後6時。約束の時間までかなり余裕がある。
刹那に案内でも頼んでみようかな。

「刹那、これから少し時間あるか？」

「え？まあ、特に用事はありませんが」

「じゃあさ、頼んでばかりで悪いんだけど買い物したいから町を少し案内してもらえないか？」

side. out

一一一商店街一一一

side・刹那

私は今、彩さんと町を歩いている。

・・・それにしても、今日は色々なことがあってなんだか頭がいっぱいだ。主に彩さんのことなんだが・・・。

聞くところ、彼は平行世界からやって来たと言う。

だからもちろん住む所もお金もなかったのだが、学園長の提案もどうかと思う。

彼に、夜の警備から始まり女子寮の管理、加えて教師もやらせると言っている。

彼はまだ16歳だ。私とほとんど年が離れていない。

16歳といえばまだ高校一、二年せいだろう。

働きたいと言ってはいたが16歳の少年に教師をやらせるなんて・・・。

いったい学園長は何をたくらんでいるのだろうか。

そうこうしている間に買い物はほとんど済み、残るは彼が仕事で使うスーツを買うだけだった。

買い物をしている中で驚いたことは、彼は自炊をするということだ。男性は料理をしないもの、というイメージが私の中では大きいからだ。

彼曰く『今時の男はできて当然』とのこと。

そこで、どの程度できるのか訊いてみたところ『よろしい。ならば
今晚ご馳走してあげよう』と自信満々な返答が返ってきた。

「なあ、教師ってどういうの着るんだ？たくさんあってよくわから
ん」

・・・まあ無理も無い、というか私もよくわからない。

「それは私もちよつと・・・。あ、そういえば高畑先生はこういっ
た感じのものを着ていますよね」

「まあそうだけれど・・・さすがに俺には着こなせそうに無いかな」

・・・つい苦し紛れで出してしまった私が言うのもなんだが・・・
同感だ。

「う・・・ではこれは？」

「うーん・・・俺はどちらかと言ったらこっちの方が・・・」

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

・・・二人で悩みに悩んだ末、スーツはダークブルーの無難なも
のにし、シャツは薄いライトブルー、ネクタイは赤、という組み合
わせになった。

side. out

――女子寮管理人室――

現在午後8時30分。管理人室では食事が始まろうとしていた。

「これは・・・なかなか・・・」

と、驚きの声を上げたのは刹那だった。

「どうだ？俺、結構料理は得意なんだ」

食卓に並べられたのはすべて和食。ご飯、味噌汁、肉じゃが、冷奴。某弓兵にも負けず劣らずの一品たち。

「じゃあ、」

「いただきます」

二人で言い、食事を始める。

「あ、美味しい」

「そう言ってもらえるとうれしいよ」

と、満足気に微笑む彩し対して、

「（美味しいけどなんだか複雑な気分だ。自信無くなるな・・・。）
」

刹那がこんなことを思ったことはここだけの話。

―――広場―――

午後11時

「今日は皆に紹介したい者がおる。ワシの古い知人のせがれなんじやが、今日からこの夜の警備を手伝ってくれることになった。久寿野君」

さすがに『平行世界からきた』などと突拍子もないことは言えないため、学園長は比較的無難な方法で彩を紹介した。

「はい。久寿野彩といいます。本日から警備に参加することになりました。よろしくお願いします」

前に出る彩。

「彼の实力はいかほどのもので？」

と真っ先に声を上げたのは、『正義』という言葉をごよなく愛する一児のパパ、ガンドルフィーニだった。

「うむ。その点についてはこれから彼に模擬戦をしてもらい、皆に彼の力を見てもらいたい。では誰にしようかのう・・・」

side. 彩

模擬戦か・・・。

面倒だなあ・・・主に手加減がだが。

弱いやつだと加減しても一瞬で終わってしまうだろうし。

この中でそれなりに戦えそうなのは・・・タカミチさんとかかな。

「学園長、俺が相手を選んでもいいですか？」

「ふお？構わんが・・・だれにするのじゃ？」

「タカミチさん、相手をお願いしてもよろしいですか？」

俺が尋ねてみると、周りはざわめきだす中タカミチさんは相変わら

ず人のよさそうな笑みを浮かべたままだった。

「僕でよかったら喜んで相手になるよ」

穏やかな声でそう言うが、身にまとう雰囲気は戦う者のソレに変わっていた。

学園長をはじめ、周りの人たちが下がっていく。
さて、こちらでも多少気合を入れていかないとな。

s i d e . o u t

「準備はよいな?・・・では、始めい!!」

二人して構えをとり、相手の様子を伺う。タカミチは両手をポケットの中に入れ、彩は木刀を構える。

「へえ、変わった構えですね。拳の居合いですか?」

先に言葉を発したのは彩だった。

「君の方こそその木刀、魔力で強化してるのかい?」

「これですか?これ強化も何もしてませんよ。この木刀は樹齢60歳の御神木を圧縮して作ったもので、霊脈から神力をたくさん吸

ってるので魔力などによる強化は不要です」

「へえ・・・そんなものが・・・」

タカミチは素直に驚いていた。

「それはそうとして、かかって来ないんですか？」

軽口を叩き、挑発をする彩。

それに対して、挑発に乗ったわけではないが

「そうだね。じゃあ・・・いくよ」

タカミチが攻め込み拳を放っていく中、彩は涼しげな表情でそれかわす。

そして、そんな拳の雨の間を流れるように動き、タカミチの首筋に木刀を突きつける。

「タカミチさん、あなた程の人間なら俺の実力がどの程度か想像がつくでしょう。本気で来ないのは俺に対する侮辱か何かですか？」

「・・・そうだね。すまなかったね。じゃあ、これからは正真正銘、僕の本気だよ」

不満げな顔をする彩に対してタカミチが答える。
その顔には更なる闘気が宿っていた。

side・刹那

・・・すごい。

再び見る彼の戦いに対する私の感想は、やはりその一言だった。

無駄のない動きで居合い拳をかわし、最小限の動きで相手を仕留める。

多少手を抜いているとはいえあんなにもたやすく高畑先生を下すなんて・・・。

しかし、ここからは先生も本気・・・彼は大丈夫だろうか。

そんなことを考えていると、高畑先生の攻撃が始まった。

さっきとは比べられない程の速度でポケットから拳が放たれていく。最早私の目には止まらない速度だ。

しかし、彩さんはそれを木刀ですべて弾いていた。

得物が無手と同様・・・いや、それ以上の速度で動きまわっている。やはり、私の目ではとてもじゃないが追いきることができない。

音すら追いつけない速度で放たれる拳と木刀の一閃。

両者が向かい合って互いに最高速度の攻撃をぶつけ合う。

そんな攻防がいくらか続き、ふと二人が距離を開けた。

「左腕に魔力、右腕に気・・・合成！」

咸卦法・・・正真正銘、高畑先生の本気の技だ。
私も初めて見るが、あんな状態の高畑先生の一撃を食らったただでは済まない事くらいは嫌でもわかる。彩さんは少し驚いた様子をしているが、大丈夫だろうか。

side out

「（気と魔力の合成か・・・なるほど、その方法なら俺の体でも強化可能かもしれないな）」

「じゃあ・・・行くよ」

ズドン！！と、彩の居た所が轟音と共に土煙に包まれた。

「さ、彩さん！？」

周りの魔法先生や魔法生徒は彩が攻撃を食らったものだと思い、ざわめきだしている。

刹那も例外ではなく、少し心配そうな顔をしながら土煙が晴れるのを見守っている。

対するタカミチは真剣な眼差しで土煙を見つめている。

やがて土煙が晴れると、そこには大きく抉れた地面とそのすぐ後ろに立つ無傷の彩の姿があった。

「驚いたな・・・まさか初見で避けられるとは思わなかったよ」

「・・・動体視力には自信があるんです」

少し目をそらしてバツの悪そうな顔をして彩が言った。

「そうなんだ・・・」

「それじゃあ、次はこちらから・・・行きますよ」

表情を戻した彩は、構えなおして少し体制を屈めた。

そして・・・タカミチの視界から一瞬で消えた。

「!?!?（まさか、気も魔力も練らずに瞬動を発動させたのか!?!?）」

タカミチは驚愕し、急いで気配を探ろうとする。

しかし・・・

「まだ、手はありますか？」

そんな間を与えずにタカミチの背後から先程まで向かい合っていた少年の声が聞こえた。

そして、首筋には先程と同じ木の感触を感じたタカミチは負けを自覚した。

「・・・いや、打つ手無しだよ。悔しいけど僕の負けだ」

こうして、タカミチの敗北宣言によりこの模擬戦の勝者が決定した。
周りの魔法教師、生徒はその事実には驚愕の表情を表していた。

「・・・ふお！？や、やめい！！」

学園長も、まさかタカミチが敗北するなど夢にも思っていなかった
ようで、半ば啞然としていた。

――
――
――
――
――

――
――
――
――
――

」

――
――
――
――
――

そして、魔法先生や生徒達と自己紹介をし、彩は詳しい説明を受け、
解散となった。

side. タカミチ

完敗だった。

僕は大戦時から師匠に教わって、磨き続けてきたこの腕に少なから
ず自信があった。

なのに今、こうして僕の半分程の年の少年に敗北してしまった。

なら彼は、いったいどれだけの修行を積んできたのだろうか。

彼の年であれだけ戦えるということは、はつきり言って異常だと思

う。

彼はどれだけ過酷な道のりを辿って来たのか……。

そこまで強くなければいけないかったのか……。

少なくとも、身のこなしなどから並大抵の人生を送っていないということは嫌でもわかる。

……ならば、前の世界との関わりが絶たれた今、この世界では平穏の中に居させてあげたいものだね……。

side. out

side. 彩

————ほとんどの人と一通り挨拶を済ませた。

生徒からは模擬戦のおかげで尊敬の眼差しを向けられることが多いかった。

教師陣からもそれなりに歓迎の言葉を頂いた。

その内の一部……と言うか、ガンドルフィー二つという先生からは、やれ正義の魔法使いだの悪を倒そうだのと勝手なことを一方的に言われるだけだった。

やはり、自称正義の味方は頭が固い連中が多い。

何が『正義』で何が『悪』なんだろう……くだらない。

善悪の概念なんてどこにも存在なんてしないのに……。

・・・ともかく面倒くさかったからテキストに答えてさっさと切り上げてきたら、真名と刹那がやって来た。

「やあ、見事な戦いだっただね。まさか高畑先生を倒すとは思ってもしなかったよ。それはそうと、ウチの副担任になったんだってね。刹那に聞いたよ。学園長は何を考えているのやら」

・・・そうだ。

刹那に聞いていたが真名も2-Aだったな・・・にわかに信じがたい話だが。

「まったくだよ。まあ、これからよろしくな」

「こちらこそよろしくたのむよ。彩先生」

そう言って、真名は去って行った。

それにしても、彩先生か・・・うん、悪くないよな。

そんなことを考えていたら、刹那が意を決したかのように口を開いた。

「さ、彩さん、模擬戦お見事でした。」

「?ああ。ありがとう」

「それで、ですね・・・私も剣を使うのですが・・・その、よろしければ私に稽古をつけていただけないでしょうか」

「稽古?」

「はい。あなたの戦いを見ると、私はいかに未熟か思い知らされま

す。なので実践型での指導をしていただきたいのです」

今度ははっきりと言われた。

その目には確かな決意と熱意が籠っていた。

・・・どうやら本気みたいだな。

「それは構わないけれど、どうして君は強くなりたいんだい？」

「守りたいものがあるからです」

「・・・それは君にとってどれだけ大切なものなのなんだ？」

「私にとって何よりも大事で、かけがえのないものです」

「・・・なるほどね・・・わかった。俺の時間があるときならいつでも稽古をつけてやる」

「！ありがとうございます！！」

まだ迷いはあるが、いい眼をしている・・・。

それにしても、守りたいもの・・・か。

この世界でも俺は見つけられるのだろうか。

俺にとって守りたいものを・・・。

そうして刹那も去って行き、俺も家路につこうと思ったが・・・背後に人外の気配を感じる。

「おい、その小僧。お前がじじいの言ってた異世界から来たとかいうやつだな」

「？お嬢ちゃん誰？」

振り返ってみると金髪の10歳くらいの女の子がいた。

・・・そういえば学園長が『伝えておきたい者がおる』とかいってたな。

「何？・・・まさかお前、私を知らないのか？」

・・・デジャビュってやつだろうか・・・前もあんな事を誰かにきかれたな。

「知らん」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。真祖の吸血鬼だ。じいから聞いてないのか？」

「聞いてはいるけれど誰とまでは・・・まて、真祖だと？」

驚いた・・・この世界にもあんな怪物級の生き物が居るのかよ・・・つくづく頭が痛くなるな。

「そうだ・・・とは言っても、今は呪いのせいで身動きがとれんな」

「星の触覚である真祖が呪いなんぞにかかるのか？」

「・・・星の触覚？お前何を言ってるんだ？」

「？お前は真祖じゃなかったのか？」

「真祖だが・・・って！さっきからわけのわからんことを言うな！」

・・・わけがわからんのはこっちだ。

「じゃあ、お前の言う真祖ってなんだ？教えてくれよ」

「フン！分からんなら最初からそう言えばいいんだ。真祖とはだな・
・・」

幼女が真祖について説明してる。

・・・幼女の見えた目からは想像できないような難しい単語がポンポンと口から飛び出してくる。

なかなかお目にかかれる光景じゃないだろうな・・・。

「・・・と言うわけだ。わかったか？」

話が終わってこちらに確認をとるエヴァンジェリン。

ぶっきらぼうな口調をしているが、わりと丁寧な性格をしているようだ。

「ああ、この世界の真祖がどんなものか分かった」

「そうか、なら私がどんなものかわかったらう？」

「ああ、大まかにな。なんて言うのかな・・・悪の哲学？とにかく立派なもんだよ」

「・・・何？お前も『正義の魔法使い』を目指しているんじゃない

のか？」

「いや、そんなつもりは一切ない」

「は？じゃあお前は『悪の魔法使い』にでもなるのか？」

「・・・両極端だな。どっちにもなるつもりはないよ。そもそもさ、お前は正義と悪っていったい何なんだと思う？」

「はあ？いきなり何を言い出すんだお前は」

「俺にはよくわからないんだよ。正義と悪の境界線ってヤツが」

「・・・」

「行動には、必ず理由というものが付いて回る。そして、理由や本人の意思に関係なくその行動の結果が発生する。そうだろう？」

「・・・ああ」

「俺にはさ・・・正義の味方っていう連中は、その結果だけを見て『悪』を作り出しているように思えてならないんだよ。行動の理由には目を向けず、結果だけを見て裁きを下し、『自分こそが正しい』と自己に酔う・・・そんな取るに足らない存在に思えてならないんだよ」

「・・・」

「そして、極め付けにアイツ等が起こした行動はなんだ？被害者の少女を悪に仕立て上げ、守るべき者を駆逐する対象として裁いてい

る・・・！お前は、そんな正義が許せるか？俺は許せない。そんな自分勝手な理想を他人に押し付けて、正義だの悪だの、くだらない概念に囚われているあいつ等が・・・！だから、そんな自分勝手な理想を掲げる連中が正しい正義の見方って言うのなら・・・俺はそんなものになるつもりは無い」

「・・・・・・・・」

・・・口調が荒くなるのがわかる。
こればかりは仕方ない・・・。

十歳の女の子にこの仕打ちは・・・あまりにもひどい・・・。
ただ生きようとしていただけの女の子を何度も何度も殺そうとして・・・

そんなものが正義だなんて、俺は絶対に認めない。

「・・・・・・・・」

「・・・どうしたんだ？さっきから黙って」

「・・・・・・・・ククク・・・ハハハハハハ！！！」

「いきなりどうした？」

「気に入った・・・気に入ったぞお前！力が少しばかりあるただの小僧だと思っていたが・・・なかなかどうして、見込みがある奴だ。では・・・っと、ふん、時間も時間だしな・・・また改めて話をするぞ。詳しい話はその時に。・・・ではな、先生」

・・・・・・・・なぜか気に入られてしまっている。
しかも颯爽と去って行った。

・ ・ ・ すごいな ・ ・ ・ あれで大体600歳だそうだ。

・ ・ ・ そういえば、学園長から携帯電話を持つように言われてたな。
明日は地理の把握も兼ねて、買いに行ってみようかな。

第四話 ver. 2.0 (後書き)

ガンドルフイーニとの正義うんぬんのやりとりは今回見送りました。
誰か・・・アドバイスをくれ!!
そんなことを思った今日このころ・・・。

第五話（前書き）

日常編です。

夢の二話連続UP・・・！！

第五話

――翌日――

side・彩

さて、今俺は所謂ケータイショップに来ているのだが・・・困ったことになっている。

機種が多すぎてどれにすればいいのかわからない。

型だけならいくつか候補が挙げられる・・・けれども機能がいまいちよくわからない。

正直電話とメールができれば問題ないのだが・・・せっかく他の機能が付いているんだからできれば便利に使いたいと思っている。

・・・それにしても携帯電話ってすごいんだな。

無線と同じ位の大きさなのに使える機能が通話だけじゃないなんて！！

・・・なんかテンション上がってきたな・・・携帯電話を見るのは初めてですがなにか？

というか、こんな年でカルチャーショックを受けているのは果たしてどうなのだろうか・・・うん。とりあえず店員に聞いてみるか。

「すみません」

「いかなされましたか？」

「この機種と、これとこれではどれが一番便利でしょうか」

「そうですね・・・ではまず、それぞれの長所と短所から説明いたします」

俺のドストレートな質問に丁寧な答えしてくれる店員さん・・・少し感動した。

――――

店員さんの丁寧な説明を受け、俺は防水かつ画素の高めのカメラ機能のある赤い折りたたみ式の機種にした。

・・・だってカメラだぞ？電話にカメラだぞ？画質いいんだぞ？これを買わずにいったい何を買えと言うのか。

「これください！」

「申し訳ございません。未成年の方は保護者の方がいなければ契約できないんですよ」

「え？」

・・・なん・・・だと？

ここまできてソレか・・・あのポケジジイ・・・！！

なんでこのことを教えなかった!?
ちくしょう、これが公明の罠か・・・。

——カランカラン——

「いらっしやいませ」

誰だ、こんな狙ったようなタイミングで入って来やがるのは。

「ああ、やっぱり彩君じゃないか」

・・・。

・・・タカミチさんだった。

俺に用でもあったのだろうか。

「どうしたんですか？」

「いや、困ってるみたいだったからさ。携帯電話を買おうとしてたのかい？」

「・・・はい。でも俺じゃ買えませんでした」

「?・・・ああ、そうか。未成年だしね、彩君は」

「はい・・・」

「じゃあ、僕が主契約をするよ。どの機種がいいんだい？」

「え? あ、ああ・・・っと。この機種ですが・・・いいんですか？」

「そんなに遠慮しなくてもいいよ。子供は大人を頼るものだからね」

「……ありがとうございます」

実はあの戦いの後タカミチさんとも話をしたんだが、『今まで大変な人生を歩んできたみたいだね』ということを書いて来た。

……やはり彼は気づいていた。

この年で彼ほどの人を圧倒するほどの戦闘能力を持っているのだ・
・まず、その時点でおかしい。

何よりも、実際に相手をした彼が気づかないはずがなかった。

思わず強張った表情を浮かべた俺に対して彼は、

『無理に話してもらおうとは思わないよ。ただね、おせっかいなオジサンから少しだけ言わせてもらおうとね・・・君は常に周りに対してある程度警戒をしている・・・君は前の世界ではとても過酷な道のりを辿って来たように見えるんだ。この世界に来るまでどれだけ大変な思いをしてきたかは分からないけどね・・・この世界では・
・もっと気を抜いて生きていけると思うんだよ。せっかくここに住むことになったんだから、これからの君には楽しく過ごしていった欲しい。それに、君はあまり周りに頼った事が無いだろう？まだ子供なんだから・・・これからは僕や、ここでできた親しい人に頼ってみなさい。・・・まあ、すぐにとは言わないけどね。この期に新しく人生を始めてみるのもいいんじゃないかな？』

裏の仕事をさせてしまっている僕たちがそんなこと言えた立場じゃないんだけどね。と、最後に少し自嘲気味の笑みを浮かべて彼はそう言ってくれた。

彼の目を見て、彼が心の底から言っているのだということが伝わっ

てきた。

・・・彼は優しい。

俺は、なるべく周りを頼ること、どうしても一人で抱え込んでしま
うことがあれば彼に相談することを約束した。

その時はただ、自分の事を何一つ彼に教えてあげられなかったこと
が少しだけ心苦しかった。

・・・時が来たらすべて話そう。と、そう心に誓った。

――――

「ありがとうございましたー」

――カランカラン――

タカミチさんに携帯電話の契約をしてもらい、店を出てお互いの連
絡先を交換した所で、

「じゃあ僕は仕事の途中だからこれで。気をつけて帰るんだよ」

彼がそう言った。

・・・仕事中にもかかわらず俺に気を掛けてくれたのか・・・なん
だか悪いな。

「タカミチさん、俺に手伝えることはありませんか？」

・・・この時間帯だと学校関連の仕事だろうか。

俺も明日から教師の仲間入りをするんだ・・・一日くらいフライン
グしても構わないだろう？

「それはありがたいけどね。ここの地理が把握できてないとなんともならないしことだよ?」

「ずっと歩き回っていたのでこの商店街周辺なら大体把握できました。」

「本当かい?それじゃあ少しだけお願いしようかな。彩君なら心配いらなさそうだしね」

「?」

「今僕がしてる仕事は広域指導員といってね、不真面目な子がいたりしたら少しだけその子と真面目になってくれるようにO☆H A☆NA☆S H Iをする、っていう仕事なんだよ。でもたまに元気のいい子がいてね、ちょっと体力がいるんだよ」

と、楽しそうに仕事の話をする彼（ただし気配は戦いに赴くもののソレ）。

「では、俺はこの商店街周辺をあたればいいんですね?」

「そうだね。ただ、この商店街の辺りは元気な子がいっぱいいるから頑張ってね。」

「はい。任せてください」

そう言って二人、広域指導という名の掃除に出発した。

加減に注意して、怪我させないように気をつけないとな。

・
・
・よし、
行こうか

第五話（後書き）

日常パートでは主人公は天然入ります。

それとタカミチさんが主人公の味方になりました。

誤字、脱字、感想、意見、アドバイス待ってます。

次回はついにあの子が登場？

第六話（前書き）

『ハーレム』ついてなんですが……。僕の中でハーレムというのは『多くの女の子が主人公に対して好意を持って集まってくる』と言う状態を表す単語です。なので、『一夫多妻でゴールイン』状態ではありません。僕の説明不足でした。すみません。

『それじゃあヒロインたくさんいるけどどうすんべ？』ということになるわけですが、マルチエンド方式をとってみようかと思っています。それぞれのルートで、『主人公は自分に向けられる多くの好意の中で悩み、一人をパートナーとして決めていく』姿を頑張って書いていきたいと思っています。

第六話

――商店街――

side. 彩

俺は今、商店街を巡回している。

このエリアはタカミチさんの言うとおり不良少年らしき少年が多かった。

特に路地の隙間には学園モノには欠かせないと思われるナンパが多々見られたため、すぐに止めに入った。

最初は学生同士の喧嘩に見られてしまうものかと内心ヒヤヒヤしていたが、着慣らすためと思って着てきたスーツが幸いしてか、周りからはタカミチさん同様に指導員という認識を受けているらしい。不良少年たちには『タカミチさんの代わりに回っている』という事を言ってみると、

――

「おい、今日はデス眼鏡来ねえってよオ!!」

「マジ！？よっしゃ！テメエら、今日はやつぞ！！！」

と、歓喜の雄たけびをあげて走り去ろうとするヤツばかりだった。
てか『デス眼鏡』て・・・。

タカミチさん普段どんな指導してんだよ・・・。

・・・まあ、もちろん走り去るのを俺がさせるワケもなく、回り込んで止めようとはしたが・・・

「まあまあ、その子嫌がつてるみたいだしさ。放してあげなよ」

「ああん？テメエには用ねーよ。さっさと消えな」

「俺も指導員やってるんだ。悪いけど見過ごせないねえ」

「なあ、もうこいつやっちまおうぜ？見た目弱そうじゃん」

「だな。さっきからウゼエし、いいんじゃない？」

お決まりのフラグが立ちました・・・あの少年たちにだが。

— — — — —

とまあ、こんな感じで元気のいい不良ちゃんをバツバツと指導してきたわけだが・・・。

「や、やめてください」

「ええー。いーじゃん。俺たちと遊ぼーよー」

俺のリーダーが死亡フラグをキャッチした。

これは死亡率100%の死亡フラグだね。

可哀想に・・・今から俺が行ってあげるからね。

・・・。

行ってみると、刹那たちと同じ制服を着た少女がチンピラのような少年に腕を掴まれていた。

・・・それにしてもこの子も背高いな・・・170cmは越えてるんじゃないか？

「はい、ストップ」

俺は少年の腕を解き、前に立ちふさがった

side. out

side. アキラ

「はい、ストップ」

男の人に腕を掴まれた時、誰かが腕を解いてくれて私を庇うようにして男の人の前に立った。

「あぁん？なんだデメエは」

私の腕を掴んだ男の人は困惑しながら目の前の彼に言った。

・・・正直私も困惑している。

この状態で助けに入るのは高畑先生だと思っていたけど・・・目の前に立っているのは少年だった。

それもスーツを着た。

私が困惑している中、前の二人の会話が耳に入った。

彼は高畑先生の代わりにこの商店街で指導をしていると言った。

・・・っていうことは、もしかして彼は先生？

でも、少なくとも私には彼が高校生位の少年に見えるんだけど・・・。

対するナンパの男の人たちは高畑先生が商店街を巡回していない事を知ると、彼を囲みだした。

・・・まずい。

このままだと彼がやられてしまう。

彼には悪いけど、彼の見た目はあまり喧嘩に強そうだとは思えなかった。

そして、男の人たちが彼に殴りかかった。

私は思わず目を瞑っちゃったから何が起こったのかわからなかった

けど、聞こえてきたのは殴りかかった男の人の『ぐえっ』という声だった。
驚いて目を開けてみると、殴りかかった五人の内三人が白めをむいて倒れてた。
対する彼は当然のように無傷。
更に、懲りずに殴りかかって行く二人を同時に投げ倒していた・・・
その間十数秒。

「すごい・・・」

私の口から漏れたのはそんな一言だった。

side out

side 彩

「すごい・・・」

そんな声が後ろから聞こえて振り返ってみると、先ほどの少女が啞然とした表情を浮かべていた。

「うん？ ああ・・・大変だったね、大丈夫か？」

「あ、はい。ありがとうございました」

声をかけると反射的にお礼を言ってくる少女。

・・・うん、できた子だなー。

「この辺りはよく不良少年の溜まり場になるみたいだから早く離れたほうがいいよ」

「はい。あ、あの・・・それで「アキラ〜!!」人呼んできたよ〜!!」

彼女が何かを言おうとしたとき、こちら（というか彼女）に手を振って走ってくる少女の姿があった。

「どうやらもう俺の出番は無いみたいだね。じゃ、俺は見回りがあ
るからそろそろ行くよ」

そう言って立ち去ろうとすると、まだ彼女は何かを訊きたそうにこちらを見ていたから、

「大丈夫。縁があったらまた会えるよ」

と、ちよつとクサイ台詞を残してその場を去ってみた。

それから俺は商店街周辺で不良少年たちを指導してまわり、あらかた片付いたところで帰宅した。

『笑う悪魔』という通り名が付いていたことを知ったのは結構後のこと。

それと・・・寮で顔を会わせるのはわかりきっていたが、まさか本当に彼女と縁があり、しかも毎日教室で顔を会わせることになるのはその時思ってもみなかった。

現在午後7時30分。

俺は刹那と森の中にいた。

理由は聞くまでもないと思うが剣の稽古だ。

稽古とは言っても唯の実戦訓練の指導だ。

彼女は京都神鳴流という、なにやら大層な名前の流派の剣術を扱うらしい。

型がある程度出来上がっているため、『剣術のいろは』はどうに身についていた。

さっき一度『奥義』というのを見せてもらったが、すべての技が『氣』を剣にのせて放っているものだった。

それにしても、刹那の得物は太刀か・・・よくあんな小柄な体躯で扱えるな。

手足も細いし・・・どうなってんだあの体は。

やはり人じゃない部分から得ている恩恵なのか？

刹那の体については・・・正直初めて見たときから気づいていた。

彼女の中を巡る『氣』の中に人外のものが含まれていた。

もちろん、このことは彼女には伝えていない。

彼女が話してくれる時まで知らないふりをすることにしておこうと思う。

おそらく触れられたくないことだしな・・・。

今日は様子見ということで、軽く打ち合ってから今後の指導方針を考えることにしてから稽古を終えた。

・・・さて、明日から教師の仕事と寮の管理人の仕事も始まる。
生徒たちと仲良くやってけるかな・・・？
そんなことを考えながら、俺の一日は終わりを告げた。

第六話（後書き）

誤字、脱字、質問、感想、アドバイス待ってます。

なるべくそれぞれに返信できるように心がけでいききたいと思います。
それと、重要なことを一つ。

一話一話の長さを増やして、しばらくは更新ペースを週一に下げます。

・・・このペースだとマジで単位落とします。察してください。
では、また次回で。

第七話（前書き）

一週間経って思った事が一つ。

先週あれだけ弱気な事を言っておきながらですが・・・
勉強やりながらでも意外となんとかなるものですね。
結構作れました。

と言うわけで、今回から教師です

第七話

――翌日、学園町室――

彩は朝一で学園長室を訪れていた。新任教師として学園長に挨拶をするためだ。

「では、今日から頑張るのじゃぞ」

「はい。学園長」

「フオフオフオ。そんなに気負う必要はないぞ」

「はぁ・・・」

「必要な教材などは職員室の君の机にまとめてあるから確認するのじゃぞ。あと、わからないことがあれば周りの先生に訊くように」

「わかりました。では「あ、彩先生。これを」・・・これは・・・クラス名簿ですか？」

「うん。早くみんなの顔と名前を一致させることができるといいね」

「そうですね・・・ありがとうございますタカミチ先生。ええつと・・・え！？嘘だろ・・・」

「？どうしたんだい？」

「い、いえ。なんでもありませんよ。それよりも、早く職員室に行
って他の先生に挨拶をしないといけませんよね」

「おっと、そうだったね。じゃあ行こうか。学園長、失礼します」

「失礼します」

「うむ」

そして、学園長室を出た彩とタカミチは職員室に向かった。

side. タカミチ

今日は彩君の・・・おっと、今日からは彩先生だね。・・・彩先生
の教師初日だ。

それにしても・・・彩先生もあんな風に緊張するのか。彼はどこか
大人びていて、人との関わりに消極的な面が見られる。しかし、昨
日の携帯の件で、彼も人に対して年相応に振舞うことができるかわ
かって僕は少しホッとした。彼は本来は優しくて素直な性格なんだ
ろう。ならば、おそらく彼ならこの学校の生徒たちとうまくやって

いけるだろう・・・もちろん2-Aの子達ともだ。この学校の生徒は優しい子たちばかりだからね。

彼女たちの影響を受けて彼がどのように変わっていくのか、少し楽しみだ。

side. out

――職員室――

side. 彩

――とりあえず先生たちには一通り挨拶は済ませておいた。

一般の先生の中には驚いていた先生も多くいたが、すぐに持ち直して俺を歓迎してくれた。

さて、俺は英語圏での暮らしが長かったため、基本的には人を呼ぶときは名前呼びなんだが・・・新田先生だけはどうしても名前

で呼べそうにない。

なんと言おうか・・・風格と言うのか、はたまたカリスマと言うべきなのか・・・なにやら教師として尋常でない『オーラ』的なものを感じる。

何が言いたかったのかというと・・・『とにかくとんでもない先生だった』ということだ。

そして、最も重大な問題が・・・そう、2－Aについてだ。

タカミチ先生から『個性的な子が多い』ということは聞いてはいたんだが・・・これはいったいどういうことだろう。

もう個性がどうかそういう問題ではない。

並ぶ名前は、東西様々な国からの留学生の集うカオスカつグローバルな事になっていた。

それに刹那に真名にエヴァンジェリンという恐ろしい面子が勢ぞろいしている。

・・・中等部の主戦力じゃん。

迂闊に本気を出せば体育祭とか勝負にすらならないであろう事が容易に想像できる。

・・・そして、極めつけは出席番号一番のこの子。

相坂さよ・・・義務教育なのにも関わらず、いったい何年在籍しているんだ。

このクラス・・・ツツコミ所が多すぎてツツコミが追いつきそうに無い・・・というか見落としすらありそうだった。

・・・そこで、『まあ、さすがにこのクラスだけということは無いだろう』と、思いと言う名の願いを込めつつ職員室で他のクラス名簿も見せてもらったのだが・・・案の定、他のクラスは

『平凡』の一言に尽きるものだった。

幽霊も宇宙人も超能力者もロボットだって居やしない・・・オールヒューマン構成である。

・・・ではなぜこのクラスだけ？と、思ったのも束の間・・・頭に真っ先に浮かんできたのはあの憎きぬらりひよんの顔だった（携帯の件をまだ根にもっている）。

・・・あの妖怪はいったい何を考えているんだろうか。

タカミチ先生よろしく一度きっちりO☆H A☆N A☆S H Iをやる必要があるな。

・・・そういえば、近衛木乃香という子が2－Aにいるな。

近衛・・・ね。珍しい名字でも無いし、唯の偶然だろう。

・・・もうアクシデントは起こりえない！・・・はずだ。

共通点なんて微塵も見当たらないしな・・・っと。

ともかく、新任の手には余りすぎる・・・ん？

タカミチ先生と目が合った。

『大丈夫。彩先生ならうまくやれるるよ！！』

・・・俺の心境を悟ったのか知らないが、彼の目がそう語っていた。

しかもご丁寧に『グッ！！』と親指までつきたてていらっしゃる。

・・・とりあえず応援してくれていることはわかるんだけど・・・今の俺にとってそれは、傷ついた兵士に追い討ちをかける事に等しいものだ。

やめてくださいタカミチ先生、俺のライフはもうゼロです・・・。

—
—
—
—
—

・・・。

タカミチ先生がホームルームを始めたようだ。

ちなみに俺は、タカミチ先生に紹介される形で入室することになっている。

・・・お？どうやらそろそろその時が来そうだ。

「彩先生、入って来て下さい」

「はい」

と返事をして扉を開け、中に入る。

「では、自己紹介をお願いします」

「はい。・・・皆さん、はじめまして。今日から一年、このクラスの副担任をすることになった久寿野彩です。担当教科は数学で、このA組とB、C組を担当します。みんなとは仲良くやっていきたいので、みんなも校内では自分の事を『彩先生』と呼んでください。一年間よろしくね」

・・・こんなところだろうか。こういう場での自己紹介なんて初めてなのであまり自信が無い。

タカミチ先生が教えてくれた自己紹介をほぼ丸写し状態だ。それにしても・・・

――シーン――

まずい。

まずいまずいまずい。

無反応・・・だと？

初日でしくじってしまった・・・鬱だ・・・死のう。

・・・あ、そういえば俺死なないじゃん。

・・・／＼（＾Ｏ＾）／。

・・・と、ネガティブスパイラルにはまっていこうとした時

『『か・・・』』

・・・ん？

『『かつこいいゝゝ！！！！！！』』

！?!?!?!?

一瞬何が起こったのか理解できずに半ば啞然としていると

「ねえねえ、年はいくつ？」 「その眼ってカラコンなの？」 「彼女いる？」

降って来る質問の嵐。

しかし、俺の中では『自己紹介が失敗でなかった』ということに対する喜びで頭がいっぱいだったため、俺へ質問はすべて右から左に受け流されていた。

「ちよゝつとまった!!」

・・・なんだ?

「ここでの質問はみんなにかわってこの!2-Aの番記者であるこの朝倉におまかせを!!」

なにやら知らない間に話が進んでいたようだ。

「ではまず、彩先生はいくつなのでしょう?見た感じ高校生くらいに見えますけど」

「ん?ああ・・・年齢ね、16だよ」

『『嘘お!?!』』

・・・案の定驚かれた。なら、おそらく次に来る質問は・・・

「どうして16で先生をやってるんですか?」

ほらきたよ・・・。

「学園長に半ばはめられて・・・」

『『ああ・・・あ』』

なぜか納得するみんな・・・まあ、認識障害が働いているからだろうが。

・・・あのジジイ、いつもこんな突拍子の無いことしてんのかよ。調子に乗りすぎじゃないんだろうか・・・。

あの頭を絶壁にしてやったらまともな思考ができるようになるのかな・・・。

「では、恋人はいますか？」

「いません」

「おおーっと、私たちにもチャンスあります！！」

『『おおーっ！！！！』』

言うまでも無いが、恋人なんざいたこともない。
ほしいと思っているヒマも作っているヒマもなかったからだ。

「じゃあ次、昨日配られたプリントで『寮の管理人がかわります』と書いてあり、その管理人の名前も『久寿野彩』だったので・・・」

「あゝ・・・うん。俺だね」

「ということは、私たちは一日中先生と一緒にということになりますねっ」

「？そういうことになるのか・・・な？」

『『キャ~~~~！！！！』』

・・・ものすごく歓声があがっている。
この子達は大丈夫なのか？若い男が女子寮の管理人だぞ？
・・・あれ？もしかして俺がおかしいの？

・・・ちくしょう、否定しきれない。

「では最後に、ズバリこのクラスの中で気になる人はっ!？」

「・・・え？」

・・・マジか。

あまりにも普通の質問ばかりだったから油断していた・・・。

そうだった・・・相手女の子じゃ・・・そりゃ、こういう質問も来るわな。

教室中を見回してみる。

写真で見たとき敢てスルーしておいたが・・・女子”中学校”だよな?・・・なんか小学校低学年にいな子とか大学にいな子とか、明らかに中学生に見えない子がいるんだが・・・。
真名とか絶対大学生だろ・・・お前浮いているぞ。

そしてあの子・・・間違いなく昨日の子だ。大河内アキラっていうのか・・・。

・・・で、出席番号一番、相坂さよ・・・居るんだけど・・・。
・幽霊で・・・。

絡繰茶々丸・・・お前まさかロボットか・・・？

見ろ、まだツツコミ所があるぞ。

と言うか・・・なんだこのクラス。

ほとんどの生徒の保有魔力、または潜在能力が明らかに一般人レベ

ルを凌駕している。

一まとめにしておくなんて、学園長は何を考えているんだ・・・？

・・・いや、それよりも今はさっきの質問に答えるのが先だ。

「・・・まだみんなのこと何も知らないから、みんな気になるかな・・・？」

・・・。

「おおーとこれは大胆発言だー！！みんな気になるんだって！！」

「え、ちょ『キャーーーーーーーー！！』・・・」

あの番記者め・・・『物は言いよう』とはよく言ったもんだな。
隣に佇んでいるタカミチ先生もなにやらニヤニヤしている・・・
こうなるとわかっていたな・・・。

こうして、俺への質問は終わった。

ここでタカミチ先生がホームルーム終了を告げようとしたが、俺はみんなに言っておきたいことがあったので少し時間をもらった。

「さっきも言ったとおり、俺はみんなの事をまだ知りません。なので、明日から昼休みと放課後を使って個人面談をやりうと思います。まあ面談とは言っても、唯俺と世間話するだけだから特に気負う必要は無いからね」

『『はい！』』

「いい返事だね。じゃあ、一時間目は俺の数学だから準備したら始

めるよー」

なんだかんだ言って、うまくやれるような気がした。

side. out

――放課後、職員室前――

side. アキラ

今、私は職員室の前に居る。

なんで居るのかというと、今日私達のクラスの副担任になった彩先生のために『歓迎会』をやる事になったため、私が呼びにくることになったからだった。

私が呼びにくることになった理由は、早乙女さんの『大河内さんからラブなオーラが!!』という一言で決まった。

・・・ラブなオーラってなんなんだろう・・・確かに彩先生の事は気にはなってたけど・・・。

・・・ともかく、そういう訳で来たんだけど・・・先生が見当たらない。

先生の机は扉の外から良く見えるところにあるから一目で確認できた。

でもどこに居るんだろう？

「誰に用があるの？」

「え？あ、彩・・・久寿野先生ですが、居ませんでした」

「ああ、久寿野先生ね。今さっき2－Aの教室に入っていくのを見たよ」

「2－Aですか？ありがとうございます」

中に入ろうとした先生に声を掛けられた。

・・・それにしても、教室に忘れ物でもしたのかな・・・？

side out

俺は今教室に来ている。

何をしに来ているかと言うと・・・

「出席番号一番、相坂さよちゃんだね。聞こえるかい？」

そう、この子と話をするために戻ってきたのだ。

周りのみんなは気づいていない様子だったため、話をするならみんなが帰ってからの方がいいだろうと思って、今に至る。

「・・・え？ 彩先生・・・私のこと・・・視えるんですか？」

「うん。ばっちり視えるね」

「ほ、本当ですか！？ や・・・やった〜！」

・・・ひどく喜んでいらっしゃる。やはり悪霊とかの類ではなかった。

「ど、どうしたのかな？」

・・・あまりの喜びぶりに少し気圧されてしまった。

「だって・・・だって・・・気づいてくれたの、彩先生だけだったから・・・！！」

今度は感動のあまり泣き出しちゃったよ・・忙しい子だなあ。

「よしよし、寂しかったね」

「うえ~~~~ん！」

・・・不謹慎かもしれないが、泣いているのが幽霊で本当に良かった・・・そうじゃなかったら俺の首が飛んでいたところだろう・・・。

「ええ〜と、もう大丈夫かな？」

「は、はい。ずびばぜん」

「ああもう、しっかり顔を拭きなさい。せっかくかわいい顔してるのに」

そう言って顔を”拭いて”やる。

「そんな、かわいいだな・・・!? 先生、どうして私に触れるんですか!？」

「霊感が強いと霊にも触れられるらしいぞ？」

とりあえず今はそう言っておく。

実は『超越種』の保有能力の内のひとつで、霊体に触れる事ができる。

しかも物騒な話、その魂を自分の好きなように扱う事もできる・・・

生かすも殺すもだ。

そんな能力が役に立ったことに地味に感激していると

――ガラガラガラ――

「あ、彩先生いた」

「・・・アキラ？どうしたんだ？」

「これから先生の歓迎会をやるので来てくれませんか？」

「・・・え？歓迎会？」

「はい。・・・もしかしてこの後用事が？」

「い、いや！そんなことはない！ちょっとびっくりしてただけだよ。
俺でなければ喜んで行かせてもらおうよ」

「ふふっ。先生のために開くんだから、先生が来てくれないと意味ないじゃないですか」

「・・・俺の・・・ため」

「？どうしたんですか？？」

「いや、なんでもないよ。じゃあ行こうか」

こっそりさよに手招きをして、俺はアキラについて行った。

・ ・ ・ 『俺のために』か。

いきなりやって来た俺にこんなことまでしてくれるなんて ・ ・ ・ 彼女たちはやさしいな。

・ ・ ・ 彼女たちの日常を守るためにも、しっかりやらないとな。

第七話（後書き）

前書きで述べたように、余裕があるので更新ペースが少し速めになります。

一日一話は難しいかもしれませんが。

第八話（前書き）

ストックが少したまってるのでそれをアップしながら新しい話をちまちまと作ってます。

さて、最近ヒロインを増やしてみようかな〜と考えてもいるわけですが、希望があれば言ってみたりしてみてください。

多かったキャラはヒロインになっちゃうかもしれません。

原作開始編になるときつい所もあるかもしれませんが、日常パートの今の内なら大抵はなんとかありますでしょう。

第八話

side・彩

早いもので、今は日曜日。・・・あつという間に一週間が過ぎた。

あの後歓迎パーティーではアキラを助けたことについて周りから賞賛をうけ、木乃香がぬらりひよんの孫だという事が発覚したり、忍者と中国拳士に勝負を挑まれたり、楽しかったがとにかく大騒ぎだった。

面談も全員終わり、ほとんどの子と打ち解ける事ができた。

おかげで勤務中以外では基本的に『彩くん』とか『彩さん』と呼ばれるようになった。

その点についてはまあ年も近い事だし構わないと思う。

それに、寮の中でまで『先生』と呼ばれるのはなんだか息が詰まる。

そして、寮の方は・・・最初は2－A以外の子からはかなり警戒されていた。だが、寮の備品の修理をしたり、部屋の機械を直してあげたりしているためか、けっこう警戒は下がってきていると思う。

ちなみに、携帯電話を見たことが無かった俺が家電製品を直せる理由は、登場人物紹介すらされていないのに、ここにきて俺に何度もその理不尽の片鱗を語らせてくれる師匠にある。

あの人は家事をまったく言っていないほどしない・・・と言うかできなない人だ。

事あるごとに『これも修行』などとそそのかされ、あれやこれやとやっている内に何時の間にか『家事』というカテゴリーと『日曜大工』と言うカテゴリーが修行の項目に追加されていた。

だが、気づいたときには時既に遅し。
本来の修行が終了する前に、一人の主夫が完成していた、と言うわけだ。

・・・それにしても2－Aは本当に恐ろしいクラスだ。

二日目でいきなり教室にトラップを仕掛けてきやがった。主犯は言うまでもなく風香と史伽と美空だ。

しかもあろうことか、その初日で俺はトラップを全回避してしまったため、彼女らは未だに俺をはめようと企んでいる。可哀想に・・・俺に罠は効かないんだよ・・・。

とまあ、そんなこんなで本日日曜日、エヴァンジェリンからお呼びがかかったらしい。

「・・・なあ茶々丸、どうしてエヴァンジェリンは自分から来ないのだろうか」

「それは言わない約束ですよ、彩さん」

聞くところ、茶々丸は案の定ロボットで、なおかつエヴァンジェリンの従者だそうだ。

すごいな・・・この世界の科学技術はいったいどれだけ進歩しているんだろう。

この子を見ていると、少なくとも俺の居た世界よりも数十年は先を進んでいるような気がしてならない。

「彩さん、こちらです」

「ほお。なかなか立派なもんだな」

茶々丸に案内された所は、なかなかおしゃれな構えのログハウスだった。

・・・そういえば、俺も修行のときはログハウスで寝泊りした事もあったなあ。

「マスター、彩さんをお連れしました」

茶々丸が扉を開け、中に入るとエヴァンジェリンが腕を組んで仁王立ちをしていた。

足音が聞こえなかったから、しばらくあの体制でいた事が容易に想像できる。

いったい何時からあの格好でいるのだろうか・・・。

「よく来たな」

「おはようエヴァンジェリン。ところで、何時からそんな格好でいたんだ?」

「私が出る前には既に今の体制で待機していました」

「お、おい茶々丸!?!」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「何か言わんか!!」

こんなとき何を言ったらいいのだろうか。少なくとも謝る場面ではないと思うが……。

「マスター、先生、お茶をお持ちします」

沈黙を破ったのは茶々丸だった。……ありがとう茶々丸、やっぱり君はできた子だ。

「あ、ああ……オホン。では、そこに掛けてくれ先生」

「あ、ああ。わかった」

ぎこちないまま会話が始まった。

「では、前回の続きだが……お前n「彩だ」……何？」

「教室で名乗っただろ？名前知ってるんだからそう呼んでくれよ」

「……わかった。ならば私の事も『エヴァ』と呼べ」

「はいよ、エヴァ」

「ああ。……では話を戻すが、彩の居た世界について話せ。まずは……真祖についてだ。私が真祖だと言った時、なにやらわけの分からない事を言っていたな」

「真祖ねえ……。俺の居た世界では……と言うか、俺の知って

る真祖っていうのは人が作るものじゃない。星が生むものだ」

「・・・星が生むだと？　どういうことだ？」

「言葉通りの意味だよ。真祖っていうのはね――――以下略――」

・・・と、俺の持っている真祖の知識を話してみたところ

「――――ってな感じかな」

「と、とんでもないものだな・・・そっちの真祖は」

「俺もそう思うよ・・・っと。他には？」

と言いながら、俺はさっき茶々丸が持ってきてくれた紅茶を飲む。
・うん、おいしい。

「そうだな・・・では魔法だ。そちらの魔法は少しこちらのものと勝手が違うようだな」

「ああ、はいはい。これも――――以下略――――」

と、これまたさらっと説明していく。その間、『以下略って便利だよね、なんだか癖になりそう』と言う声が聞こえてきたがなんだったんだろう。

「――――とまあ、こんな感じかな」

「なかなか興味深いな……。解呪のものもあるのか？」

「もちろん。解呪の魔術なんてごまんとあるよ。エヴァの呪いを解けそうなものにもいくつか心当たりがある」

「何！？それは本当か！？」

「ああ。見たところ、エヴァの呪いは一見滅茶苦茶に見えるけれど、要所要所ははつきりとしているからね。そこを、突いて、やればいい」

「それを今すぐやれ！やってくれ！」

「うん。いいよ」

「何でも欲しいものをやr……。何？今やると言ったのか？」

「ああ。やると言った」

「なぜだ？」

「なぜって……。やってほしいんだろ？それに……」

「それに？」

「『3年で呪いを解く』と言う約束だったんだろ？時効ってやつだ。もう十分だろ？」

「……。フツ。それもそうだな」

「・・・ああ、そうそう。呪いを解くついでに一つおまけを付けておいてやろう」

「おまけだと？」

「呪いを敢て残したままにして、エヴァの任意で解けたりかかったりできるようにする」

「・・・なぜそんな面倒な真似をする？そもそもそんな事が本当にできるのか？」

「エヴァの呪いは学園の結界と連動してるんだろ？解けっぱなしだと『正義の味方』どもがさわぐからね。あ、ちなみに任意で解呪しても学園の結界は『呪いがかかっている』ものだど認識したままだから特に気をつけることも無いと思うよ。できるかできないかは・・・まあ、問題なくできるだろうね」

「そ、そうか。なら頼むぞっ！」

お、なんかすごく嬉しそうな顔してる・・・。やっぱり人は笑顔が一番だな、うん。

俺がどうするか、だが・・・要は霊体と同じで、触れてしまえばこちらのものだ。

つまりは『視て』、『触って』、『いじって』、『終わり』、という見事なプロセスが俺の中で成り立っているわけだ。

どうだろう、あれだけ偉そうなことを抜かしておきながら魔術もクソもあつたものではない。

まあいいや、解けてしまえば何の問題もないんだから。

「よし、じゃあやるか」

「あ、ああ。頼むぞ」

「あ、そうだ。俺の言った通りになったらお前、ちゃんと授業に出ろよ?」

「はあ!? う・・・ま、まあいい。本当にお前の言った通りになったら授業でもなんでもでてやる!」

「よし! じゃあ、今度こそ」

ええーと、ここと・・・ここと・・・後、ここに・・・それから・・・うわぁ・・・。

これはなんと言うか・・・この呪いを掛けたヤツは酒でも飲みながら掛けていたのか? ゴチャゴチャしすぎだろ・・・。

「ん? なぜため息をついている?」

「・・・いや、なんでもない」

・・・。。。

・・・。。。。。。。。。

・・・これで最後か・・・たまには地味作業もいかなと思ったらこれかよ・・・ちくしょう。

『千の呪文の男>サウザンドマスター<』とかいうヤツ・・・もしどっかで会ったりしたらはり倒してやろう。

「ふう。終わったぞ。ためしに解除してみろ。念じればできるはず

だ」

「む、わかったが・・・なぜ少し不機嫌になっているんだ？」

「エ?・・・おほん。そんなことないぞ？」

「?・・・そうか。では、やるぞ」

「ああ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうだ？」

「・・・・・・・・やった・・・」

「・・・・・・・・ん？」

「やったぞ!!これで私は自由だ!!感謝するぞ彩」

「ああ、はいはい。でもちゃんと卒業するまで授業にはでろよ」

「それはわかっている。いくらでも出てやるさ。二年くらいどうと
いうことはない」

「それは良かったよ」

それからしばらく談笑をして、エヴァと茶々丸に別れを告げた。
それにしても、茶々丸はすごい。

あの子は一般常識には欠けるが、こと飲食に関しては尋常でない知識を持ち合わせているようだ。

おかげで、刹那に語った俺の自信が一瞬にして崩れ去ってしまった。
・・。

そして、別れ際にエヴァは『また来い』とそっぽを向いて言っていたが・・少しは仲良くなれたんだろうか。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

そして、買い物をして帰って俺は、今度は森の中に居た。

この一週間は侵入者がなかったため、夜は刹那の稽古をするのが日課になりつつある。

「はあっ！」

「重心が右にずれてきてる！その動作だと簡単に体制を崩されるぞ！」

「はい！」

刹那の才能には目を見張るものがある。

・・まあ、彼女の年齢でここまでできる事自体とんでもないことなんだが。

俺が指導を始めて間もないのに、もう上達の兆しを見せている。さて、彼女の指導方針なんだが・・・彼女の持ち味は『速さ』だ。小柄な体軀を生かした小回りの効くスタイルで、実に彼女向きだと思う。

だが克服すべき問題もいくつかあり、まずは、重心の意識が甘いこと、太刀筋が正直すぎることで、の二点。この二点を克服できたら次の段階に移るつもりだが、おそらく後二週間ほどで移れるだろう。

「よし、一旦休憩にしよう」

「はあ、はあ・・・はい」

「ほら、これで汗を拭け。風邪引くぞ」

「あ、ありがとう・・・ございます」

稽古をしてあげてることあったか、刹那とは結構仲良くなってきたと思う。

時には学園長の愚痴を言い合ったり、剣術の話をしたりと話が合うところも多々あるようだ。

そんな刹那の守りたいものというのが、木乃香だという事を知ったのは四日前。

刹那の木乃香に対する視線に思うところがあったから話を聞いてみたところ案の定、というわけだ。

なんでも、二人は幼馴染だったらしいが、木乃香の父が西側のトップであり、木乃香を魔帆良に入学させる際に身を案じて刹那に護衛を頼んだという。

確かに刹那は腕が立つが・・・気づかれずに護衛をするというのは

第八話（後書き）

それにしても・・・原作開始からバトルに熱を入れるつもりなんです
すが・・・。

戦闘シーンをうまく書ける自信が皆無です。

誰か・・・アドバイスを・・・！

第九話（前書き）

今回はやっちゃった感がでかいです。
なので先に謝っておきます。

ごめんなさい。出来心なんです！！
次話はきちんとしますから・・・！！

第九話

彩がエヴァと親睦を深めたその次の日、事件はおこった。

side. 彩

いつものように職員室で事務をしていると、まき絵が職員室に駆け込んできた。

「さ、彩先生〜〜!」

「どうしたんだ・・・ってお前、手擦りむいてるじゃないか! 何があっただんだ?」

「ウ、ウルスラの先輩がちょっかいかけてきたんだよ」

「なに? ちょっとそこに連れて行ってくれ」

「う、うん」

—
—
—
—
—
—
—
—

— — — — —
— — — — —
— — — — —

バレエコートに連れて来られた俺が見たものは、喧嘩番長よろしくガンを飛ばしあっている明日菜率いる2—Aの特攻部隊とウルスラの女生徒達だった。

この子たちは将来レディースにもなるつもりなんだろうか・・・周りが引いている。

「・・・明日菜、なにやってるんだ」

「あ！彩先生、聞いてよ！」

・・・。。。

明日菜の話によると、バレエコートで先にバレエをしていた2—Aに対し、後からやって来たウルスラの生徒が『年下は年上に譲るべき』とわけの分からないことを口走り、それに反発した明日菜率いる特攻部隊とウルスラ連合による第一次取っ組み合い戦争が勃発し、巻き込まれたまき絵含む数名が負傷して、今まさに第二次が発生しようとしているわけだ。

明日菜・・・こういう時だけ妙なりーダーシップを発揮させるなよ。
・・・ん？

『ウルスラ』といえば・・・確か高音がいたな・・・よかった、さすがにこの中には居ないようだ。

「・・・話はわかった。で？高等部の君達が、どうしてわざわざ中等部のコートに来たんだ？」

「それはもちろんバレエをするためです。というか、あなたは何なんでしょうか？私と同年位にみえますが、さっき先生と呼ばれていましたわね」

「それなら高等部の敷地でやれ。それと、俺はこの子達の副担任だ。」

「副担任ですって？あなたのように大して頭のよさそうに見えない方にも先生なんて務まるものなんですか？」

「な！？ちょっとあんた！先生に向かってなんてこと言ってるのよ！」

「明日菜、そう食いつくな」

「でも！」

「これは俺に対する挑戦だな？なら、ウルスラの君達」

「な、なんですか？」

「俺は数学の教科担任をやっているね、高等教育程度までなら俺の管轄内なんだよ。そこで、だ。君達の分からないところを持ってくるといい。そうだな・・・今日の放課後にしよう。俺が君達が納得のいくように教える事ができたら、今日の事をこの子達に謝りなさい」

「ええ。いいでしょう。では、もしも私達が納得のできなかったらどうしてくれるんですか？」

「んー。そうだね、俺とこの子達が君達に謝ろう。『年上の言う事をきけなくてごめんなさい』ってな感じで」

「ええ。その条件なら構いませんわ。では、今日の放課後ですね」

おっほっほっほ、と勝ち誇ったような笑い声をあげながらウルスラの女生徒は去って行った。

あんな笑い方する人って本当にいるものなんだ・・・。

って言うか、俺の顔ってそんなに頭悪そうに見えるのか・・・？
・・・しよっく。

「先生！大丈夫なの！？」

「高校の数学って難しいんだよね、大丈夫？」

「私達、絶対に謝らないよ！先生、しっかりね！」

2－Aのみんなは大分心配しているようだが・・・それは杞憂に終わる事になるだろう。

君たちは知らないだろうが・・・俺は高等教育の教員免許も持っているんだよ！！

さあて、ちょっと大人気ないけれど・・・うちの生徒に怪我をさせた罪は重いぜ？

「大丈夫だ。問題ない」

とりあえずみんなにはこう答えておいた。

・・・これだけ『大丈夫か』って言われたら仕方ないと思うんだ・・・。

side out

side. 2-A

「ねえ、先生大丈夫かな」

「高校の数学ってすごく難しいらしいよ」

「でも、あの人たち一年生だからそんなに難しい問題は持ってこないんじゃない？」

「そうだよ！それに先生の授業ってわかりやすいもんね」

「「ね」」

「「そうやなー」」

「それに先生かっこいいもんね」

「「ね」」

「「そうやそうやー」」

「「ちょっと、話がずれてるわよ」」

「「えー？先生なら大丈夫だよー」」

「でも、先生って16だよ？16っていったらまだ高校一、二年生

なのに・・・」

「なになに？アキラったらそんなに先生の事心配なの？」

「え？わ、私、そんなつもりは・・・」

「ラブ臭が！」

『キャ～～』

「・・・ん？どうしたんだ刹那？少しむくれているが」

「た、龍宮！？な、なんでもない！」

「ん？せっちゃんどうしたん？」

「お、お嬢さま！？し、失礼します！！」

「あっ、せっちゃん！」

・・・。

・・・。

・・・。

side. 彩

さて、決戦のときが来た・・・とは言ってもこちらの圧勝で終わるのは目に見えているんだが。

「よく逃げずに来られましたわね」

と、勝ち誇った笑みを浮かべて言ったのは高等部一年の『寺島智美』てらしまでもみという子らしい。

その後ろにいる子達も同様に勝ち誇った笑みを浮かべている・・・
いったいどんな問題を持ってきたことやら。

「で？どの問題を解説すればいいのかな？」

「それは・・・これですわ！！この第一問を解説してくださいな」

「・・・・・・・・」

何を持ってきたかと思ったら、数学？・Aのセンター過去問題集だった。

これは馬鹿にされているのだろうか・・・愚問だったな・・・馬鹿にされている。

いや、でも高校一年生でこの時期は二次関数を習ってる最中だしな・・・ってことはマジで難しいと思ってるのか・・・こんなワンパタ

ー問題を。

まあ習ったばかりで無理も無いが、これは・・・思ったよりも早く済みそうだな。

「最初からやればいいのか？」

少しカマを掛けてみよう

「ええ、お願いします」

・・・やっぱり。この子達は問題に手を付けていないな。『センタ
ー試験問題Ⅱ難しい』という間違った方程式が構成されてしまっ
ているらしい。

まあ、そのところの誤解を解消してあげるのが俺たち教師だしな

「じゃあ、まず(1)から。このグラフが点(1, -4)を通ると
きのaの値は――――」

.....

「ここは平方完成して――――」

.....

「ここはこういう場合分けが必要で、理由は――――」

と言う感じで(1)を30分かけて懇切丁寧に説明し、

「次、(2)にいくぞ」。Aの箱から一枚カードを出す――――」

・・・

「確率＝場合の数／総数、だから――」

つてな感じで（２）もさらっと解説してやった。

「どうかな、君たち。まだ分からない事があったら訊いてきなさい
（勝ち誇った笑み）」

『お・・・おみそれしました!!』

あっさりと負けを認めた。

まあ、素直に負けを認めるのはいいんだが・・・

「じゃあ約束どおり２－Ａのみんなに謝って二度とこんな事はしないという約束もしなさい」

『う・・・』

「何？まさかここまでさせておいて『知りません』なんて言わないよね？なあ、寺島智美？」

「わ・・・わかってますわよ!!」

「うん、よろしい」

「あの・・・それで」

「うん？」

「今朝は失礼な事を言って申し訳ありませんでした。それで・・・も、もしよろしければ・・・また勉強を教えていただけませんか？」

「・・・・・・・・」

「あ、あの・・・」

「あ、うん。いいよ」

「ほ、本当ですか!？」

「うん。約束をきちんと守れたらいくらでも教えてあげるよ」

「は、はい!ありがとうございます!」

『ありがとうございます!!』

「じゃあ、明日ちゃんと謝っておくように」

『はい!さようなら!!』

「はい、さようならと・・・」

「・・・何あの子達。実はめちゃくちゃいい子なんじゃないだろうか。」

「すごい笑顔で去って行ったし。」

『彩先生~~~~!!』

2-Aの子達が走ってくる。
彼女たちは、うちのパラッチの仕掛けたカメラで一部始終を見ていたのだ。

「先生すごい！」

「高校の数学もできたんだね！」

「先生かっこよかったえ」

「ビデオ見ててあの問題私も少しわかつちやった」

『・・・え！？』

・・・。。。。。

「みんなー！そういうわけだから、明日ちゃんと許してやれよー！」

『はい！』

一名のとんでもない発言はスルーして、今日は解散した。

この後、この一部始終を見ていたタカミチ先生に呼び出しをくらい、事の成り行きを説明することになった。

今日の事件をきっかけに、俺の名前は中等部だけでなくウルスラにも知れ渡る事になった。

――――

――――

その夜・・・高音が俺のところに謝りに来た。

なんでも、彼女は智美たちのクラスのクラス委員であり、今回彼女たちが迷惑をかけたことの責任を取りに来たと言う。

しかも、『私って人をまとめる力が無いのでしょうか』と、ものすごく落ち込んでいらっしやったからなだめるのにも結構時間がかかってしまった。

そのあと何とか復活して今後の意気込みを力強く掲げて帰って行った。

高音とそのクラスの一員と少し仲良くなった、そんな日だった。

ちなみに、翌日智美率いるウルスラ一年某クラスが2－Aに謝りに来て、無事(?)に仲直りができたそうだ。

第九話（後書き）

次はきちんとします！！

第十話（前書き）

日常編に入って主人公の口調がどんどん砕けてきてます。

さて、ヒロイン化希望ですが

今のところ

『真名』 『茶々丸』 『ネギパーティー全員』 という希望が届いてます。

日常編が終わる少し前までヒロイン化希望を聞いてみたいと思っています。

ですので、ヒロイン化したらいいな、と思うキャラがいたらぜひ！！

希望上位のキャラと個人的に入れようと思ったキャラはヒロイン化されると思います。

第十話

side・彩

あつという間に四月が終わり、ゴールデンウィークに入った。

学校ではこの間の一件から特に事件もなく、平穏な状態を維持している（まだ5日も経ってないが）。

そして、ほんの少しだが俺もやっと2－Aのテンションについて行けるようになった。

あの子たちは同世代の子と比べて元気がありすぎる。

おそらく・・・うちのクラスで元玉気を作ったなら、フリーザくらい一発で片付けられるだろう。

・・・ともかく、元気がいいのは結構な事なんだが、こちらとしてはもうちょつとでもいいから抑えて欲しいという少し複雑な心境だ。ちなみに夜の警備のほうは、三日前に雑魚が数匹侵入してきた位だ。初日のような大群じゃなかったから、お偉い『正義の味方』様方が出向いて片付けたようだ。

さて・・・話が飛んでしまったが、俺は買い物をするべく昼過ぎから町に出ていた。

買うものと言っても事務用品と食品くらいだ。

さっさと終わらせて散歩でもしよう。

「あゝ、彩くんやゝ」

和やかになるようなゆっくりとした関西弁で俺を呼ぶのはうちのク

ラスの近衛木乃香。

・・・にわかに信じがたい話だが、こんなかわいい顔をした女の子の血の四分の一はあのぬらりひよんの血で構成されている。

しかし、正直言ったところ共通点なんて皆無である。

ただ、保有魔力が桁外れに大きく、その量は極東一を誇るものらしい。

その一点だけなら、他称『学園最強の魔法使い』であるあの人間もどきの血縁者かもしれないと思えない事も無いような気がしないでもない。

「ああ、木乃・・・香？」

・・・。

目の前には日本が誇る大和撫子を絵に描いたような少女が居た。

私服・・・じゃあないよな？

まるで『これからお見合いに行きます』というような格好をしている中学生がいる。

・・・いや、まさかな。

「そ、そんなにおめかししてどうしたんだ？」

「うち、「木乃香お嬢様ーーーー！！」！？さ、彩くん助けて！うち連れてかれてまう！」

「は？連れてかれるって？」

「うち、お見合いなんてしたくないんや」

向こうの方を見ると四人のSPのような服装の男たちが木乃香の名前を叫びながらこちらに向かってくる。

・・・というかやっぱりお見合いだったんだ・・・。
まあ・・・本人が嫌がつてるなら、逃がしてしまってもかまわんの
だろう？

「わかった。木乃香、行くぞ！」

「わかったえ！」

・・・

とりあえず手を引いて走りたい・・・が、木乃香の格好が格好なのであまり速度は出せない。

対するSPは・・・早歩きか。

まだ距離はあるが、おそらく五十秒くらいで埋まるな・・・。

・・・これはあれか？お決まりのごとお姫様抱っこで走れと？

・・・冗談じゃない。

そんな事したらもう明日から外を歩けないじゃないか！

そこで、運良く目の前にあったデパートに入り、すぐエレベーターに乗った。

このデパートの4階には服売り場がある。

要は、変装をしてやり過ぎそうということだ。

幸い、あの人たちの身のこなしは素人に等しかった・・・ただの使用人か何かだろう。

少し出費が増えてしまうが・・・保身のためだ。背に腹は変えられない。

「木乃香、服を買おう」

「え？」

「その格好じゃ目立つし、動きづらいだろ？」

「でも・・・お金ないえ？」

「俺が出してやる」

「・・・ええの？」

「まあ、今回はしかたないからなあ・・・あと、高いのは無しで」

「わかってるえ。ごめんな、うちのせいで・・・」

「いいって。それより、ちゃっちゃと選んじまえて」

「うん。彩くんありがとうな」

「おう」

・・・。。。

約束通り、木乃香は手軽な値段の服を三分程度で決め、その場で会計を済まして試着室で着替えをした。

木乃香は化粧を落とし、ワイシャツにGパン、スニーカーという先ほどとは真逆の格好に、帽子を深く被っている。ちなみに、長い髪は帽子の中にしまい、先ほどまで着ていた服はこの店の袋の中にあるため、チラッと見ただけでは木乃香と判別する事は不可能に近いだろう。

「よし、じゃあ出るか」

「うん！なんやたのしくなってきたえ」

それにしてもこの木乃香、ノリノリである。

— — — — —

— — — — —

— — —

思った通り、あの人たちの真横をこれ見よがしにとすれ違ってやっ
たけれどまったくの無反応だった。

「ってなわけで、無事に帰って来ました」

「いえい」

パシ！と二人でハイタッチを交わす

「よし、それじゃあ俺はこれで・・・」

「あ、彩くん待って」

「うん？」

「今日のお礼に晩御飯うちの所に食べに来てくれへん？」

「いいのか？」

「うちが来てっていったんやからええに決まってるやん」

「そうか、じゃあご馳走になろうかな」

「うん！じゃあ、7時になったら来てな」

「はいよー」

というわけで、今日の晩御飯は木乃香がご馳走してくれるそうだ。お札なんてよかったのに・・・やっぱりこの学校はいい子が多い。そんな事をしみじみと思いながら歩いていると

「あ、彩さん」

「ああ、アキラか。おかえり、今日も部活だったの？」

「ただいま。はい、今日は一日練習だったので少し疲れました。彩さんは今日はなにをやってたんですか？」

俺は寮の管理人ということで、生徒とこういった挨拶をする事も多々ある。

特に、アキラのように笑顔で挨拶を返してくれると本当に嬉しくなる。

「ははは。頑張ってるみたいだね、お疲れさん。俺は買い物に行つて・・・あ。」

「?どうしたんですか？」

「買い物に行ったらちょっと厄介ごとに巻き込まれてね・・・結局

買い物できないまま帰って来てちゃったんだよ・・・」

「そ、それは大変でしたね……。買い物って食品ですか？」

「ああ・・・それと事務用品をちよつと」

「じゃあ、今日の晩御飯は大丈夫なんですか？」

「ん？ああ。まだ少し残ってるし、今日は木乃香がご馳走してくれるみたいなんだよ」

「え？近衛さんが・・・？」

「ああ。今日の厄介って木乃香関連でね・・・手助けをしたら『お礼に』ってさ」

「そう、ですか・・・」

「？どうした？」

「い、いえ！なんでもありません！」

「そうか？じゃ、今日はしっかり休めよ」

「は、はい」

アキラと別れて俺は一旦部屋に戻った。

s i d e . o u t

s i d e . アキラ

彩さんが近衛さんたちと夕飯を食べると聞いた時、少し心がざわめいた気がした。
なんでなんだろう・・・。

それにしても、彩さん本当にすごい人だと思う。
魔帆良にやって来てまだ一ヶ月も経っていないのに、学校のみんなからも、ウルスラの先輩たちからも人気を集めている。
寮でも学校でも、みんなのためにいろいろな事をしていているところが人気の秘訣なんだと思う。
それに、話していると所々で気を配ってくれているのもわかる。
今日だって疲れた私の体の心配をしてくれた。
だから、そんな彼に私も少しはお礼がしたい。
近衛さんみたいに今度なにかご馳走してみようかな。

s i d e . o u t

side. 彩

午後6時50分、俺は木乃香の部屋を訪ねた。

——コンコン——

「は〜い」

と、ドアの向こうからおいしそうな香りと共に、パタパタとこちらに向かってくる音がする。

——ガチャ——

「彩くんいらっしや〜い」

「あ、彩さんこんばんは」

「おう。こんばんは、明日菜」

木乃香は明日菜と相部屋になっている。

そのためか、この二人は学校でも仲がいい。

よくいろんなところに遊びに行っているため、刹那も護衛が大変だと言っていた。

「ていうか、木乃香って料理得意だったの？」

「うん。料理は得意やえ」

「彩さん、木乃香って本当に料理美味しいのよ？」

「へえ〜。じゃあ、期待させてもらってもいいのかな？」

「今日のは自信作やよ〜」

と言って料理を運んでくる木乃香。

「ねえ彩さん、今日は大活躍だったみたいね」

「え？」

「木乃香のお見合い。木乃香ったらすごく楽しそうに話してたのよ？」

「ああ、そのことね。って言うか、木乃香って前からお見合いしたりしてたのか？」

「って言ってもいっつも逃げてたんだけどね。なんか学園長が勝手に話をつけちゃってるみたいなの」

「……………」

またヤツの仕業か……………」

まだこの世界にきて一ヶ月も経ってないというのに……………」

あのジジイは厄介ごとの象徴として度々俺の頭を痛くしてくれる存在になっていた。

最初は『感謝の気持ち』と『いい加減にしろ』の割合が7…3位だったけど、この短期間で3…7位の割合にまでなってきた。

ちなみに、それなりに好き勝手やらかしてくれる俺の師匠でもここまでひどくは無い。

「明日菜、手伝って」

「あ、わかったー」

「俺も手伝うか？」

「あ、彩くんはそのままでええよ」

「そうそう。彩さんはそこで待ってて」

「・・・りょーかい」

・・・。。。

そして、みんなで楽しく雑談をしながら夕食を食べた。

明日菜は今日、バイトが終わって一休みしてから買い物に出かけていたようだ。

学費を稼ぐために自分から働こうとするのはえらい事だと思うが・
・この年でバイトというのはさすがにどうなんだろう。

まあ、人様の家庭事情にズカズカと首を突っ込むもんじゃないからあまり深い事は訊かないでおいだが。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

「「「ごちそうさまでした」」」

「木乃香って本当に料理上手なんだな。美味しかったよ」

「そうでしょそうでしょ！」

「もー、なんで明日菜が自慢してるん？」

「えー、いいじゃない」

「ははは・・・っと。じゃあ、俺はそろそろ戻るよ。木乃香、今日はありがとな」

「うちこそ、今日はありがとな」

「じゃ、おやすみ」

「「おやすみなさい」」

そして、俺は部屋に戻った。

――
――
――
――

今日は刹那も部活の一日練習があったみたいだから、稽古はやめておいた。

刹那は少々不満げだったが、疲労がたまった状態では身に付く事も身に付かなくなることと言うとしぶしぶだが納得して『明日は絶対に相手をしてくださいね』と言う言葉を残して電話を終えた。熱意があるのは結構だが、体が壊れてしまったら本末転倒だ。

それで、時間が空いた俺はと言うと・・・特にする事がなかった。

なので、今の自分の状態を確認してみたところ、どうやら早くも世界になじむ事ができたらしく、本来の力が出せるようになった。

・・・とは言っても、自己封印リミッターをはずす事なんて滅多なことがない限りはないし、掛かったままでも尋常でないステータスを誇っているから更にアミュレットなどで簡易リミッターを掛けている始末。しかも、その状態でさえ平均ランクC（F a t e 風）だ。

・・・トップアスリートですらDにも満たないのに。

万全の状態になったのは喜ばしい事だが、実質ほとんど変化はない。体調が少し良くなった程度だ。

・・・このやるせない気持ちを俺はどこにぶつけよう。

第十話（後書き）

そのうち『主人公設定その2』的なものを作って技や武器解説を載せたいと思います。

第十一話（前書き）

前回のタイトルを間違えて第十一話にしてました。

すぐに修正しましたが・・・。

これが本当の十一話です。

ヒロイン化希望も徐々に集まり始めました。

マルチエンド予定なのでいくら増えようがストーリー上の問題はあんまりありません

ただ、作者がちょっと大変になるだけですｗｗｗｗ

今回はちよつと長めです

第十一話

ゴールデンウィーク最終日、彩と刹那は昼から森の中に居た。

今日は刹那も部活はなく、彩も今日の仕事は朝のうちにあらかた済ませていたためこうして稽古を付ける事になったというわけだ。

ゴールデンウィーク中は刹那の部活や夜の警備が重なって、こうして稽古を付けるのは五日ぶりである。

「じゃあ、今日も先日の続きでまず俺に打ち込んで来い。この五日でどうなったか見てやる」

「はい！」

そうして二人とも木刀を構える。

「では・・・いきます！」

と、先に刹那が仕掛ける。

「ほう、前よりも重心がまとまり始めたな」

「はっ！せい！」

「太刀筋にも多様性が見られるな・・・よし、これから俺も打ってくから今の調子でいけよ？」

「はい！」

そして、彩が軽めに打っていく

「ほら、どうだ？防ぐとなるとまた勝手が変わってくるだろう？」

「そうっ！ですね！こちら、から、合わせない、と、いけません、から、ね！」

「その通り。相手の攻撃の重さを想定して体重のかけ具合を調節する。ちよつとした応用編だな」

「せい！・・・あっ」

うまく彩の攻撃を受け切れなかった刹那は体勢を崩してしまう。

「ほら、そこ」

「くっ！まだ「ほい残念」！」

何とか体勢を立て直そうとするよりも先に、彩の木刀が刹那の首に向けられていた。

「体勢を崩したときの隙は簡単に埋めることはできない。無理に防ごうとするよりもこういうときはできるだけかわした方がいい。いつもの癖が出てるぞ」

「はい」

「まあ、俺から打ったのは最初の実力把握以来だったけれど・・・少し油断してたな？」

「う……」

「それと、瞬動からモーションに移る時無防備になってる。次はそこも意識しろよ？」

「……はい」

と、軽く今日の方針を述べていると

「やあ、休みなのに精が出るね」

「た、龍宮！？……何時からそこに？」

「割と始めからだよ。まあ、彩さんは気づいてたみたいだけどね」

「な……じゃあ気づかなかったのは私だけ……？」

「そんな落ち込むなよ。気配消されてたんだし、稽古中だったろ？」

「それでも……」

彩はそうフォローするが、刹那はまだ少し釈然としない表情を浮かべている

「気づけた彩さんがすごいだけだよ。正直私も気づかれるとは思わなかった」

「……まあ、な。それで？気配消して稽古を見た感想はいかがかな？」

と、真名の口調を少し真似して彩が問う

「剣のことは正直よくわからないんだけどね・・・見事なものだったとは思うよ？」

「・・・龍宮、それは私に対するあてつけか？」

「そうむすつとしないでくれ。馬鹿にしてるわけじゃないんだ。刹那は確か『京都神鳴流』を収めていたと思うけど、彩さんはどうなんだい？ いったいどんな人を師にもっていたのかな？」

「あ、それは私も気になります」

真名がそう彩に問うと、刹那も『そういえば』というような顔をしながら同じく彩にたずねた。

「・・・俺の師匠が気になるのか？」

一方、彩は少し呆然としている。

「はい」

「ああ」

「・・・マジか」

「「？」」

「そ、そうだな・・・俺が師匠『シルヴィア・デイス・ヴェルガ

ン』に会ったのは11歳の頃だったな」

「11歳！？じゃあ、彩さんはたった5年でそれほどの腕を身に付けたのですか！？」

「ああ。俺はそれなりに体が鍛えられていたからね、基礎体力作りの時間をすっ飛ばして教えてもらってたんだ。ちなみに習ってたのは剣だけじゃない」

そう。話したりはしないが、彩は少年兵として・・・それも山岳兵として、訓練期間も含めて八年近く戦ってきた。

そのため筋力、判断力が高く、足場を選ばない戦闘も慣れていた。しかも、『超越種』としての規格外能力が加わっていたため多量の技術、知識を尋常でない速さで頭、体に刻み込む事ができた。

「・・・剣だけじゃないってことは、他には何が扱えるんだい？」

「そうだな・・・近、中、遠距離・・・よっぽど特殊なものじゃなければ大体は」

「「・・・・・・・・」」

あまりの衝撃発言に二人とも絶句していた。

「・・・別に全部師匠から習ったわけじゃないぞ？」

「で、ですよね」

「さ、さすがにね・・・」

そう言い直すと二人ともとてもいい笑顔で納得(?)していた。

「ええ〜と・・・話を続けていいのか？」

「どうぞ」

「きっかけは、本当に偶然だった・・・いや、もしかしたら必然だったのかもしれないな。あの人と出会ったのは」

彩は懐かしむように話し始めた。

「シルヴは滅多な事がないと人前に姿を現さないんだ。だから出会いも唐突だったんだよ。そしていきなり『お前、私の弟子になりなさい』なんて言われてな、有無を言わさず師事することになったんだ」

「それはまたすごい師匠だね・・・。どんな人なんだい？」

「あの人の事はな・・・正直俺もよくわからん」

「「・・・え？」」

「修行の時意外はいつも家事を人に押し付けてフラッと消えるし、帰ってきたと思ったら必ず変なもの持ってるし、変な知り合い多いし、実戦訓練とか言って竜と戦わせるし・・・」

最早愚痴に変貌を遂げた説明をつらつらと語る彩。

心なしか、口調もいつもより砕けている。

だが、そんな事よりも二人の少女は気になる事が一点あった。

「ちょ、ちょっと待ってください。今『竜』と言いませんでしたか？」

「あ、ああ。私にもそう聞こえたが・・・」

「うん？言ったけれど・・・あれ？魔法関係者なら竜くらい珍しくもないだろ？」

「いやいや！竜なんて滅多な事があっても見ませんよ！！て言うか竜ってなんですか！？そんなものと戦ったんですか、彩さんは!？」

「うん。なんとか勝ったけれど、あの時はちょっときつかったかな」

「しかも勝った!？」

「ちなみに13の時な」

「13歳で!？」

「（面白い反応するなー）」

刹那の反応があまりにも面白いため、彩はついつい追加で補足（事実）を入れる。

一方真名は、こめかみを押さえて頭が痛そうにしている。

「・・・いったいどんな修行を積みば2年で竜に勝てるようになるのか知りたいね・・・」

「・・・修行内容についてはあまり訊かないでくれ・・・思い出したくないんだよ・・・」

と、真名の問いに対して顔を引きつらせながら彩は答えた。

彩がこんな表情を浮かべるものだから、刹那も真名も想像を巡らせるのを止めた。

「（彩さんがこんな顔をするなんて・・・いったいどんな修行をしてたんだ・・・）」

「ま、まあでも・・・修行自体はすごく意義のあるものだったと思うよ。・・・今思えばね」

「へえ。そんなにすごい人なら、何時かは会ってみたいものだね」

「そうですね・・・私も機会があるなら会ってみたいです」

「（多分もう会う事は無いだろうけどな・・・）」

「・・・ん？彩さん、どうしたんだい？」

「え？い、いや・・・なんでもない。そうだな、縁があったら会えるかもしれないな」

「そうだといけどね。・・・それじゃあ、私はそろそろ行こうかな。それじゃあ、また学校でな」

「「ああ」」

・・・。。。

・・・。。。

「・・・結局真名は何をしに来たんだろうな」

「さ、さあ」

「「・・・・・・・・」」

「まあいいか。刹那、続きをしようか」

「そうですね」

何事も無かったかのように稽古を再開する二人だった。

side・真名

彩さんは不思議な人だ。

・・・別に謎が多いからというわけじゃない。

彼には人を惹きつける力がある。

最近、寮や学校では様々な生徒や先生と話をしているのを見かける事が多々ある。

かくいう私も、彩さんと話をするのは楽しいと思っている。

軽口を言い合ったり、世間話をしたりと他愛のない話ばかりだが、不思議と会話が弾む感じがする。

ちなみに、今日私が森の中に来ていたのは単なる偶然だ。

本当に気まぐれに、ただ足の進むように歩みを進めていたら彩さんと刹那の稽古を目撃したというだけだ。

・・・それにしても彩さんの師匠か・・・いったいどんな人なんだろう。

彼の言う限りでは謎の多い人物らしいが・・・彩さんも人のことは言えないよ。

彼は自分の事をあまり話したがらない。

訊いてみても上手く話を逸らされたりしてしまう・・・ほかの事なら大体は笑って答えてくれるんだけどね。

刹那から異世界から来たことは聞いているが、やっぱり異世界の事は話づらいのだろうか。

彼の高い戦闘能力に・・・漂う血生臭い戦場の臭い・・・結局今日も訊きそびれてしまったな。

まあ、時間はまだたくさんあることだし・・・機会があつたらまた訊いてみよう。

s i d e . o u t

s i d e . 彩

あれから稽古を続ける事数時間。辺りは夕日に照らされて赤く染ま
ってきいてた。

そろそろ終わり時だな・・・。

「刹那、今日はこのくらいにしとこう。明日から学校もあるしな」

「はい！今日もありがとうございました」

刹那は自主練習もしているようで、なかなか上達していた。

だから、久々（？）に稽古をつけて驚かされた点がいくらかあった。
悪い癖も徐々に自覚し始めているし、最近は絶好調と言ってもいい
くらいだ。

それにしても・・・師匠か・・・。

あの人は今頃どうしてるんだろう・・・。

相変わらず神出鬼没でそこら中を放浪しているのだろうか。

・・・。。。。。

ははは・・・簡単に想像できるよ。

きっと、あの人なら今も変わらず元気にやってるんだろうな・・・
って言ってもまだ一ヶ月くらいしか経ってないじゃん・・・。

「彩さん、どうしたんですか？」

ふと思考を中断すると刹那がこちらを心配そうに見つめている。

「ん？どうしたって？」

「なんだか寂しそうな顔をしています」

・・・いかん。

顔に出ていたのか・・・って、俺はホームシックにでもなったガキかよ。

まったく、弟子(?)の前でみっともない。

・・・この世界には何も不安なんて無いじゃないか。

この世界で生きるって決めたじゃないか。

そして、なにより・・・俺の日常がここにはあるじゃないか。

こんなにも暖かい場所なのに、俺は何を考えてんだ・・・アホらし。

「・・・いや、なんでもない。心配しなくてもいいよ」

「そうですか・・・」

「・・・」

「・・・」

二人して黙ってしまった。

・・・。

どうすりゃいい？

「・・・」

「・・・」

・・・誰か助けてくれよ・・・。

・・・。

ほんとうに・・・

side out

side. 刹那

……どうしよう。

「……………」

「……………」

さっきからずっとこんな調子だ。

稽古が終わってから彩さんが寂しそうな顔をしていた。

彼はなんでもないと言っていたが、多分師匠の事だろう。

師匠の話をする時の彩さんは楽しそうな顔だった。

もしかして、所謂ホームシックというやつなのだろうか……。

彼は不意の事故でこの世界にやって来たと言っていたし、急に離れ離れになってしまったら寂しくなってしまうのも無理はないと思う。

彼には何から何まで世話になりっぱなしだ……私も何か力にならないだろうか。

私だってこのちゃん……お嬢さまと離れ離れになってしまった時は本当に寂しかった。

って、私がそんな事を思っていないはずがないのに……。

……………ん？

確か、彩さんの師匠の名前は『シルヴィア』って言っていたような

気がする。

名前からおそらく女性……いやいや、本人が師弟関係だったと言ったじゃないか……って、なぜこんなことで少しもやもやした感じがするんだ！

そんな事よりどうやって声をかけよう……。

彼はなんでもないと言ったとき清々しい顔をしていたが、本当に大丈夫だろうか。

私は口下手だからもしかしたら変な事を口走ってしまうかも……。
……..
本当に……。

side out

「どうすればいいんだ……」

二人がふと呟いた一言が偶然にも重なった。

そして、またも同時に二人できょとした顔を見合わせる。

「……」

「……」

「……ぷっ」

森を出る間、私は意を決してもう一度だけ訊いてみた。

二人でひとしきり笑いあった後だから聞くまでも無いと思うが、彼の口から聞いてみたかった。

彩さんはまたもきよとした顔をしてから

「ああ、もう大丈夫だよ。確かに少しだけ寂しいとは思うけどさ・
・今の俺の居場所はここにあるから。みんなと笑って、楽しく過ごせる毎日があるからさ・・その事を今更だけれど実感したよ。だから・・俺はもう大丈夫だ」

そう言った彼の笑顔は今まで見たどの笑顔よりも輝いて見えた。

・・・・・かっこいいな。

「・・・ん？刹那、どうした？」

「ひゃ、ひゃい?!」

「お、おい」

「な、なんでもありません!!」

「そ、そうか」

・・・・・は、はずかしい!
穴があったら入りたい・・・そうだ、無いなら自分で掘ればいいんだ。

「お、おい。なんで急に穴なんて掘ってるんだ・・・?」

「無いなら自分で作ろうと思ひまして」

「は？」

・・・。。

もう自分が何を言って何をやっているかわからない。

いったい私はどうしたんだ？

彩さんの笑顔を見てからずっと顔に熱が上ったままだ。

— — — — —

— — — — —

— — —

—

あの後何とか持ち直す事ができた。

彩さんは特に気にせずにも愛の無い話を振ってフォローしてくれた。

そして、そのまま森が出る事ができたが・・・いや、やめよう。

森が出る間、きっと私は何かに取り憑かれていたんだ！

・・・そうだったと信じたい・・・。

side. out

— — — 商店街 — — —

side. 彩

森を出て刹那と別れた俺は商店街に来ていた。
特に理由も無く、ただ散歩しているだけだ。

あの沈黙を破った後は、気まずい事は何一つ無く、他愛の無い会話を
して別れた。

こんな事ならもっと早くに口を開けばよかったのかな・・・。
それにしてもなんで刹那は穴なんて掘り出したんだ？

噛んだのがそんなに恥ずかしかったのか？

などと考えていると・・・猫と戯れている茶々丸の姿が目に入った。
へえ、これは意外な一面を見たな・・・あ、向こうもこっちに気が
付いたみたいだ。

「あ・・・彩さん。こんにちは」

「こんにちは。なあ茶々丸、猫が好きなのか？」

「『好き』という感情がどういうものかは分かりませんが、不思議
と惹き込まれる何かを感じます」

「・・・それが好きって事なんじゃないのか？」

「そうなのですか？」

「多分ね。それに、今の茶々丸すごくいい顔してるしな」

「え？」

「優しい顔をしてる」

「優しい顔・・・ですか？」

「そうだよ。って言っても、まだ難しいかな？」

「そうですね。まだよく理解できません」

無理も無いか・・・まだ一歳と少しだもんな。

「そうか・・・でも、やっぱり茶々丸には感情が芽生え始めてるんだと思うよ。そんな表情ができるんだからさ。始めは戸惑うかもしれないけれど、自覚できたら大切にするんだぞ」

「・・・はい」

少しきよんとしてたけれどはつきりと茶々丸は頷いてくれた。
さてと、これ以上邪魔しちゃう悪いし・・・そろそろ行くか。

「それじゃあ、俺はもう行くよ。」

「あ、彩さん」

「ん？」

「マスターが休暇中に彩さんが来なかったので少し拗ねていました」

・・・あ。

そういえば『また来い』って言われてから一回も行っていなかったな。

・・・。

・・・明日仕事が終わったら行こう・・・。

「わ、わかった。じゃあ、また学校でな」

「はい。さようなら」

丁寧にお辞儀をする茶々丸。

・・・やっぱりできた子だ。

さて、さっさと帰って明日の仕事を減らそう

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

次の日、エヴァの機嫌を直すのに苦労したと言う事は言うでもない
と思う・・・。

第十一話（後書き）

アンケートまだまだ募集中です。

第十二話（前書き）

今回もほのぼのとしています。

ヒロイン化ですが・・・なかなかハードな要望がきますね。
当初の予定の倍以上の数の総ヒロイン数になりそうな予感です
W W

第十二話

定期考査も終わり、もうすぐ学園祭の出し物を決める時期になった頃のこと

side. 彩

俺は登校時間ギリギリにもかかわらず、自分の部屋にいた。

しかし、それは俺だけじゃなかった。

定期考査が終わり、五月も終わりに差し掛かった頃……生徒の期待に応えるかのようにヤツはやって来た。

……そう、台風だ。

一時間ほど前から暴風警報が発令されている。

俺は寮の管理人として寮生に連絡を回さないといけないから、今こうして携帯電話をポケットに突っ込んで学園からの連絡をいつでも受けられるようにしつつ戸締りの確認をして回っていた。

「あ、彩さん。おはよう、なにやってるの？」

「ああ、おはよう明日菜。今戸締りのチェックしてるんだよ。雨も風も強いから中がビタビタになっちまうよ」

「一人じゃ大変じゃない？ 私も手伝うわ」

「それは助かるよ。じゃあ、ここから向こうまで頼んでもいいか？」

「まかせて！」

元気に走り去って行く明日菜。

『雨降ってるんだから滑るぞ？』と言おうと思ったが

――――バタ！――――

「ふぎゃっ！」

俺に言う暇も与えず、明日菜が盛大にすっ転んだ。

・・・危ないなあ、もう少しで下着見えるぞ・・・。

「まったく・・・大丈夫か？」

明日菜に手を差し伸べる。

・・・膝とかも擦りむいてないみたいだし、よかったよかった。
って言うかあんな転び方してよく怪我の一つも無いな・・・。

「う・・・ありがと・・・」

と、涙目になって俺の手を取る。

「雨降ってるんだから、気をつけないとだめだろ？」

「う・・・もっと早く言ってよ」

「言う前に走り去ったのが何言ってんだ」

「だって・・・早くしないと雨が入っちゃうじゃない・・・」

「そんなの雑巾かければ済む話だろ？ お前が怪我するよりはよっぽどいい」

「う・・・ありがとう」

少し照れながらそう言ってくる。

この子は少しキツ目の言動が目立つが、実は本当に優しい子だ。性格面ではまったく問題が見られないこの子の問題点は・・・勉強だ。

この間の定期テスト期間で知ったが、2－Aには『バカレンジャー』と言う学年最下位クラスの成績を持つ子たちがいるという話だ。中でも明日菜は『バカレッド』という大層不名誉な称号を持っている、学年トップクラスの成績を持つ子がいるのにも関わらずうちのクラスが学年最下位の総合成績を収める事に貢献してしまっているようだ。

だから、俺は今回の考査ではなんとしてもその不名誉な称号を五人から払拭すべく立ち上がった。

まずは学年最下位脱出をスローガンに掲げ、タカミチ先生と一緒にその旨を2－Aのみんなに語ってはみたが・・・エレベーター式は恐ろしい。

危機感を感じている子は皆無と言ってもよかった。

そこで、なんとかみんなにやる気を持たせようとしてタカミチ先生と考えていたところ、タカミチ先生が『僕にいい考えがあるんだ』と笑顔で言っていたから任せてみた。

そして、次に授業で自習にした時俺は驚愕した。

やる気を一片も見せなかった子達がものすごく真剣な顔をして勉強

に励んでいた。

結果、総合成績では中間くらいだったが、数学の平均点数では見事一位に輝いた。

その結果のおかげで新田先生始めとする女子中等部の先生たちからお褒めの言葉をいただいた。

それにしても・・・あの新田先生から褒められるなんて夢にも思わなかった。

・・・結局教えてくれなかったけれど、タカミチさんはいったい何を言ったんだろう・・・。

「彩さんどうしたの？」

「いや、明日菜はこの前の考査頑張ったな〜って思ってたさ」

「あれはみんな頑張ってたじゃない？」

「でも、今までクラス最下位だったのに数学は10番台だったじゃないか。よく頑張ったと思うよ」

「そ、そうかな」

「ああ。これからもこの調子でいけよ？明日菜だってやればできるんだから」

「う・・・頑張ってみる」

そう言って明日菜は戸締りチェックに向かった。

もちろん今度は歩いている。

さて、俺もぼちぼち行きますか。

早くしないと雨水入っちゃうしな。

side. out

side. 明日菜

定期考査か・・・。

あの時の高畑先生が放った言葉はまさに鶴の一声だった。

『彩先生がきて初めての定期考査か……。この考査で彼の評価が決まるな・・・A、B、C組の点数が低かったら彩先生どうなるんだろう・・・』

教室を去る時に明らかにみんなに聞こえる声で言っていた。

でも、その時の私たちはそんな事は『なぜ聞こえるように言ったのか』よりも『彩先生の評価』という点にしか意識が向いていなかった。

当然その一言を聞いてからクラス中は大パニック。

そこで私たちは緊急集会を行って『彩先生のために頑張ろう勉強会』を毎日開く事になり、彩さんが教えているのは数学だから数学だけは学年トップになるという目標がたった。

もちろん反対は0人。

そして、いざ勉強！となって驚いた事が一つだけ。

私たち『バカレンジャー』全員が真面目になって勉強している事はまあよしとして………エヴァンジェリンさんが見た事も無いような真剣な表情で勉強していた。

………そういえば彩さんが来てからエヴァンジェリンさんはほとんど毎日授業に出るようになった。

今までほとんど授業にでなかったのに……彩さんいったい何したのよ。

おまけに、何時の間にかB、C組にも例の話が広まっていたてその子達も目に炎を宿す勢いでやる気に満ち溢れていた。

その結果、数学の平均点数は1位A組、2位C組、3位B組と、見事に彩さんの担当クラスの組がトップ3を飾ることができた。

って言うか彩さんっていったいどれだけ人徳があるの!?

まだ二ヶ月経って無いのにすぎすぎよ……。

確かに……彩さんはいい人だし、みんなに優しいし、何かあったら助けてくれるし、さっきも手をとっててくれたし……って、私はなにを!?

私には高畑先生がいるじゃない!!

……ま、まあそれだけ彩さんが人気者ってことね。

そういえば『やればできる』なんて言ってくれたし……もう少し勉強頑張ってみようかな……。

さ、まずはちゃっちゃと戸締り確認するわよ!

……歩いてだけどね。

side out

Side.
彩

戸締りの確認も終わらせたし、後は暴風警報の解除と学校からの連絡を待つだけになった。

茶々丸がいるから心配無いとは思うけれど・・・戸締りは大丈夫かな・・・？

携帯電話ってなんて便利なんだ……文明の利器っていいね。ええと、エヴァの家の番号は……あった。

四回コール音がしてから受話器を取る音が聞こえた。

「あ、茶々丸か？俺、彩だよ」

『ああ、彩さんでしたか。どうされましたか？』

「ほら、今台風来てるだろ？家の戸締りとか大丈夫か？エヴァが寝ぼけて窓開けたりしてないか？」

『ええ、今のところは問題ありません。』

「そうか。じゃあ、学校から連絡がきたらまた電話するよ」

『わかりました。では』

——ガチャ、ツー、ツー——

電話を切る。

よかった、どうやらエヴァ宅は無事のようだ。

それにしても・・・茶々丸は少ししゃべり方に感情が見え隠れするようになってきてはいるんだが・・・まだ少し固いな。

まあでも、順調っていえば順調かな・・・ん？

・・・そういえばさよってどうしてるんだろ。

さすがに気候の影響は受けないとは思うけれど・・・まあ、一応いつものコンビニに行ってみるか。

多分コンビニのラジオで暴風警報のことも知ってるだろうし、あそこにいるだろ。

————————————————————

————————————————————

————————————————————

————————

「さ、彩さ〜ん！」

「……………」

暴風に吹き飛ばされそうになっている幽霊がいる…………。

まあ、霊体って軽いもんね。
・・・。

ということだ、おい。

霊体って物理的な干渉を受けつけないんじゃないのか？
何この世界。

関西弁の鬼がいるし、頭の長い人がいるし、真祖造れるし、幽霊が
風に飛ばされてるし・・・。

さすが・・・許容量の大きい世界は起こる事の規模が違うぜ。

「さ〜い〜さ〜ん〜」

あ、やべ。

さよのことすっかり忘れてたわ。

「ほっ！」

軽くジャンプしてさよの手を取る。

うわ、さよの体ホントに軽い。

「あ、ありがとうございます」

「風強いんだから出てきちゃだめだろ？」

「だって・・・彩さんが見えたから・・・」

「ああ、気持ちは分からないでもないよ」

「でしょっ!？」

「いや、でも危ないから。次から気をつけろよ？」

「・・・はい。というか、彩さんはどうしてここに？」

「ああ、台風の中さよはどうしてるのかなって思ってたさ」

「え？もしかして心配して来てくれたんですか？」

「うん。まさか風に飛ばされるとは思ってもみなかったけれど」

「う・・・」

「これからどうするんだ？」

「え？どうするって？」

「台風が去ってくまで、さよはどう過ごすんだ？」

「ああ、それでしたら・・・コンビニで立ち読み？」

「・・・」

「・・・」

「よし、一緒に寮に行こう」

「え？」

「一人じゃ退屈だろ？それに学校から連絡が来た時回せないだろ？」

「私が行ってもいいんですか？」

「管理人が許してるから問題なし」

「………」

「……いやか？」

「い、いえ！そんな事はありません！行きます、行きたいです！！」

「よし、じゃあ行こうか」

「はい！」

また飛ばされないようにさよの手を離さずに寮に戻った。

その間、風に煽られているさよが凧のような状態になっていた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

そして、今

「彩さん、面白い子連れてきたね」

真名が目の前にいる。

特に回想する必要も無い。

帰ってきたらロビーに真名がいました。
終わり。

「ああ、そういえば真名は視えるんだったな」

「・・・知っていたのかい？」

「いや、わかるだけだよ」

「へえ・・・っと、話が逸れてしまったね。その子は？」

「うちの出席番号一番のさよ」

「・・・彼女がかい？」

「ああ。真名、さよの声は聞こえるか？」

「大丈夫だよ」

「よし。さよ、あれをやるんだ」

「は、はい・・・はじめまして。2年A組の相坂さよです。趣味は読書です。もしよかったら友達になってくれたら嬉しいです」

そう、さよは長い間一人だった。

だからずっと友達が欲しいと思っていたらしい。

でも、2-Aの子は誰も気づいてくれなかったらしい。

・・・何人かはぜったいに気づいていただろうな。

真名とかエヴァ辺りは気づいていてもスルーしそうだし。

「・・・」

「・・・」

「あの・・・」

「真名、さよが困ってるぞ。応えてやれよ」

「え、私？・・・はじめまして。同じく2年A組の龍宮真名だ。趣味はダーツかな。私でよかったら友達になってもかまわないよ」

「！！彩さん、やりました！！」

「ああ。よかったな、さよ！」

二人で盛り上がる中、真名は一人取り残されていた。

まあ・・・すぐにテンションも落ち着いて、真名とさよと一緒に談笑に入っただけだね。

side. out

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

結局、暴風警報は解除されたが今日の授業は無くなった。

気づけば辺りも暗くなり始めたころ、さよは寮を出ようとしていた。

「別にいてもよかったと思うんだけどね」

「いえいえ、他のみんなが怖がっちゃいますから」

真名とさよはけっこう仲良くなっていた。

さよが聞き上手だったため、真名も彩もいろいろな話をしていたら何時の間にか二人は名前で呼び合っていた。

「真名さん。私と友達になってくれてありがとうございました。最初はちょっとだけ怖かったですけど」

そう言ってぺろっと舌を出すさよ

「私も、まさか幽霊の友人ができるなんてね。夢にも思わなかったよ」

真名も軽く微笑みながらそう返す。
すると、さよの体が光り始めた。
残った未練がもう無いからだ。

「・・・もう、行ってしまうのかい？」

「・・・はい。最後にこんなに楽しく過ごす事ができてよかったです」

「また会えるかい？」

「はい。きっと」

「・・・そうか。なら、さよならは言わないでおくよ」

「私も、さよならなんて言いません」

「「じゃあね、真名さん（さよ）」」

その言葉を最後に、さよは消えた。

「・・・また会おう」

そう言って微笑んだ真名は、部屋に戻っていった。

一方で彩は

「（あ、さよの霊格が上がった。自縛霊から浮遊霊か・・・今まで普通に歩き回ってたのに自縛霊だったのか？）」

と、少し疑問を浮かべていた。

実はさよは成仏したのではなく、自縛霊から浮遊霊にランクアップしただけであった。

これによって、先ほどの感動（？）が台無しになってしまった事を真名が知るのとはそう遠くは無い。

第十二話（後書き）

そろそろ麻帆良祭に入ります。

第十三話（前書き）

一回消えてしまったので作り直しました。

学園祭準備期間に入ります。

第十三話

学園祭の出し物も決まり、詳しい内容をLHRで決めている時のこと。

黒板には大きく出し物の名前が書かれていた。

『ドキッ☆女だらけのメイド喫茶』

side. 彩

「・・・どうしてこうなった」

教室に入ってからの一言目がこれだよ。

今日はタカミチ先生が出張に出ているから俺がLHRの担当をすることになった。

それよりも・・・前のLHRでいったい何があったんだろう。

名前はぶっ飛んでるけれど・・・メイド喫茶だよな・・・？

女子校なんだから女だらけなんてことは当然分かってきている。

でも・・・『ドキッ☆』てなんだろう？なんかすごそうなんだけど。
・・・。

「あの・・・先生？」

「・・・あ、ごめん。始めようか」

「起立、礼」

『おねがいしまーす』

「着席」

「じゃあ、今日のは出し物の内容を決めるんだよな。メイド喫茶だから・・・衣装とメニューと経費かな」

「せんせー見てよ、衣装もうあるよ?」

と和美が言ったのを合図に、数人が制服姿からメイド衣装になる。
・・・すごいな今の。
いったいどうやったら制服の中にあんなの着れるんだろうか。

「すごいでしょ?」

「すごいな・・・いったい何時の間に用意してたんだ?」

「私が用意させていただきました」

「あやかが?」

「そうだよ先生。いいんちよお金持ちだからよくやってくれるの」
そうだ。

うちのクラスで委員長を務めるこの子『雪広あやか』は『雪広財閥』
当主の娘であり、びっくりするほどのお金持ちだ。
責任感が強く、よくまとめ役を買って出てくれるため俺はいつも助
かっている。

去年もこうして必要経費の立て替えをしてくれたらしい。

「いつもありがとな、あやか」

「いえ、当然のことをしたままですわっ」

かく言う彼女も現在メイド服を着ているためノリノリでお辞儀をし
てくる。

・・・。

とりあえずメイド服を着ている子たちをしてみる。

菲、楓、あやか、千鶴、鈴音。

・・・もしかするとこのクラスにとってこの手の出し物は適材適
所なんじゃないのか？

ものすごく似合っている。

「先生、どうアルか？」

中国独自の訛りで話すのは菲。
明るく素直な元気っ子だ。

この子は・・・忘れもしない。

初日から隣にいる楓と共に俺に戦いを挑んできた子だ。

まあ、結局一度も手合わせをしていないが・・・この子はなかなか
好戦的な性格のようだ。

いつも俺に戦いを挑んでくるし、よく街中で胴着を着た人を蹴散ら
している姿を目撃する。

曰く、『強い人を見るとワクワクする』とのこと。

・・・この戦闘民族だ。

あれか？お前実はサイヤ人だろ。

・・・おほん。

話を戻して・・・

「ああ。似合ってるぞ」

「ホントアルか！？じゃあ今日の放課後勝負アル！」

「待て待て待て！わけがわからんわ！！」

「えー、勝負しないアルか？」

「ま、まあ・・・いつかな」

というように、最近では日常会話にさりげなく『勝負』という単語を混ぜてはめようとしてくる。

うっかり『ああ』なんて言ったらものすごく面倒な事になりそうだ。

「では、拙者はどうでござるか？似合ってるでござるか？」

・・・ちくしょう、やっぱりきやがったよ。

うちの戦鬪民族その2、楓だ。

優しくて穏やかだが、口調からも分かるように忍者である。

本人曰く『忍者であることは秘密』らしいが・・・隠す気なんてまったく感じられない。

むしろ堂々とカミングアウトしているように見える。

そんな彼女も初日に俺に勝負を申し込んできた。

少し違うところは、勝負を挑んでくる頻度が週に一度位だということ。

ただ、裏事情を知らない子と戦うというのは気が引ける。

まあ、忍者も堂々と表に明かすのはどうかと思うんだが。

「ああ・・・似合ってるよ」

「本当でござるか？なら「ダメ」・・・まだなにも「勝負は無し！」
・・・」

・・・少ししょんぼりしてる。

「ま、また今度な」

「ほ、本当でござるか？約束でござるよ！」

今度はぱあっと笑顔を見せて戦闘民族同士ハイタッチを交わしている。

・・・どうしよう。マジで勝負するの？

「先生、私たちはどうですか？似合ってますか？」

こめかみに指を当てて唸っていると千鶴が声をかけてきた。

「あ、ああ・・・千鶴か。うん。三人もよく似合ってるよ。衣装は大丈夫そうだな。メニューとか考えてあるか？」

「はい。まずは――――」

・・・。

メニューは一般的な喫茶店のメニューを取り扱うことにしたらしい。幸い、うちのクラスには料理が得意な子がたくさんいるためそっちの方は問題ない。

ただ、メイドなので口調はもちろんアレで行う。
心配なのはどかだ。

「・・・はあ・・・」

思わずため息が出る。

男の人と言え、2-Aには高畑先生と彩先生がいる。

彩先生は年が近いこともあって最初は怖かった。

だけど、面談に行ってみて少し話をしてみると全然怖い人じゃない・
・むしろ優しい人だった。

彼の優しいところは折り紙つきで、困った事があるといつも助けてくれる、とみんなが言うほどだ。

私もたまにお世話になる時がある。

だから、私は少しずつだけど自分から挨拶をするようにしている。
・・・まだぎこちないけど。

「あ、のどか。今日も図書館に行くのか？」

「うひゃっ！？さ、彩先生？」

いきなり男の人から声をかけられたと思ったら彩先生だった。

やっぱりいきなり男の人に声をかけられるとびっくりする。

噂話をしてたわけじゃないんだけど・・・こんな事ってあるんだ。

「そ、そこまで驚かないでくれよ・・・」

すこしがつくりとする彩先生。

「す、すみません。」

「あ、ああ・・・いいんだよ。いきなり声をかけて悪かったね」

「い、いえ・・・それで、あの・・・」

「どうしたんですか？」と続けるつもりだったのにつつかえてしま
う。

「ああ、そうそう・・・って、それよりもすごい数の本だな。これ
から返しに行くのか？」

「は、はい」

「重くないか？」

「え？す、少し・・・」

「半分持つよ」

「え、でも・・・」

「落としたら大変だろ？」

こうした気配りが人気の秘訣なのかな・・・。
確かに助かるけど・・・先生に悪い気がする。

「ほら、ちゃっちゃと行っちゃおう」

そんな事を言いながら私の持っている本の6割ほどをひょいっと持
って先を歩いていく。

追いついて、悩んだ末に隣に並んだ時

「ウエイトレスできそうか？」

こんな事を訊かれた。

彩先生は私が男の人が苦手だと言う事を知ってる。
もしかして、私の心配をして声をかけてくれたんだろうか。

「え、えっと・・・ちょっと怖いです」

「だよな。多分当日は男子生徒とかいっぱい来るだろうし」

「う・・・」

そのことを考えるとやっぱり不安になってくる。
ミスをして怒られてしまったらどうしよう・・・。

「準備期間にちょっとだけ練習してみるか？」

「え？」

「俺が男性客の役やるからさ、少しでも慣れておかないか？」

・・・。

どうしてここまでしてくれるんだろう。

確かに、本番を向かえる前に慣れておいたほうがいいと思う。
でも・・・先生に迷惑が掛からないだろうか。

「で、でも・・・」

「あ、いやだったか？」

「い、いえ！そんなことは・・・」

「じゃあ、やってみるか？」

「え、えっと・・・お願いします・・・」

「ああ、任せとけ」

なんとか肯定であることを伝える事ができた。

そうして、準備期間の間に私と彩先生で特訓をする事になった。

・・・それにしても、今のはさすがに私でもよくできたと思った。

side out

こうして、のどかの男性苦手克服作戦がはじまった。

第十三話（後書き）

気づいた点などがありましたら気軽にどうぞ。

第十四話（前書き）

今回の話は色々詰め込んであります。

さて、ヒロインですが今のところは
のどか、夕映、茶々丸、エヴァ、真名、明日菜、ザジ、木乃香、さよ
辺りが昇格しそうな予感です。

第十四話

学園都市のいたるところには『学園祭まであと18日』の垂れ幕が設置されている。

街の飾り付けや各学校の準備も順調に進んでいるようで、何時にも増して活気にあふれている中、

2-Aの準備も順調に進んでいた。

厨房班は使う食材を決めて実際に作ってみたり、ウエイトレス班は互いに接客練習をしていた。

そんな一方で

「・・・・」

「・・・・」

彩とのどかは向かい合って固まっていた。

とは言っても、固まっているのは主にのどかだった。

「・・・・」

「・・・・」

もう五分はこの調子である。

のどかは、口を開こうとしては閉じての繰り返しを何度も続けている。

「……」

「……」

「……なにしてるですか？」

「ひゃっ！？ゆ、夕映？」

ついに見かねた夕映が口を開いた。

「のどか、恥ずかしがる事ないです。客なんて全部じゃがいもだと思えばいいですよ」

「そ、それが難しいんだよ」

「じゃあ、私も一緒にやるですから頑張ってみましょう」

「う、うん」

「いくですよ？せーの、」

「お、おかえりなさいませ……ご主人様……って、夕映！？」

夕映は口を開かず、結局のどかが一人で言う事になってしまっていた。

「「のどか、言えるじゃないか（ですか）」」

「そ、それはそうだけど・・・」

「ほら、この調子でどんどんやるですよ」

「ええ!?! じ、じゃあ夕映もやってみてよ」

「お帰りなさいませご主人様」

しれっとした顔で言う夕映。

「そんなにあっさり!?!」

「へえゝなかなか様になってるな」

「楽勝です。ほら、のどかも」

「う・・・」

「のどかー頑張れー」

「ほら、彩先生も言ってるですよ」

「う、うん・・・お、お帰りなさいませ・・・ご主人様」

のどかは顔を真っ赤にしながら何とか言いきることができた。

「やっぱり一人で言えるじゃないか。その調子でいこうぜ」

「は、はい・・・でもやっぱり恥ずかしい・・・」

「そこは慣れです」

「う、うん」

「ほら、どんどんいくですよ！」

「本屋ちゃん頑張れー」

気づけば2－Aのギャラリーができていた。
だが、のどかはまだ気づかないまま

「お、お帰りなさいませ、ご主人様！」

今度はさつきよりも大きい声で言いきった。

『おおーっ！』

2－Aから歓声があがる。

のどかはここで初めてみんなの前だということに気が付いた。

「え？あれ？な、なんでみんな・・・」

「本屋ちゃんやればできるじゃない」

「かわいかったよー」

「私も負けられないわね」

と、2－Aの面子からもみくちゃんにされているのどか。
そして・・・

「やればできるじゃないか。いい感じだったぞ」

「え・・・あの・・・きゆう」

彩の追撃で完全にやられてしまった。

「「のどかー！」」

「え、ほ、本屋ちゃん？」

「よっぽど恥ずかしかったみたいね」

「みんなー、本屋ちゃんを寝かせてあげてー！」

『おー！』

・・・。

こうして作戦初日はなかなか良いスタートを切っているようだ。
しかし、まだまだ道は長そうだった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

— — — 放課後・職員室 — — —

職員室で事務をし終えてタカミチ先生と雑談をしている時、学園祭の話題に入った。

「そういえば、クラスの出し物の準備はどうなんだい？ 決まってからまだ一度も見えていないからね」

「ええ、順調に進んでいますよ。恥ずかしがり屋ののどかも頑張つてウエイトレスの練習をしているんです。もちろん他の子たちも頑張っていますよ」

「へえ・・・それは次に見に行く時が楽しみだね。メニューは決まっているのかい？」

「はい。一般的な喫茶店のメニューに加えて少しだけ変り種も入りましたが・・・」

「変り種？ いったい何があるんだい？」

「ははっ、それは見てのお楽しみですよ」

・・・・・・。

と言う感じで話が続いている。

タカミチ先生とはデスクが隣だから出張でもない限りはいつもこんな感じだ。

たまに他の先生も混じって談笑する事がある。

先生たちとは仲良くやれている。

時々だが、俺の年齢を度忘れした先生から『飲みに行かないか』と誘われる事がある。

まあ、もちろんそんな事を他の先生が許す事も無く・・・タカミチ先生、しずな先生、新田先生からの鉄槌が下る、ということはもうお馴染みの事になっていた。

だけど、食事ならたまに行くことがある。

この先生の行きつけの定食屋だそうで、安くて速くて美味しいという三拍子が揃ったお店だった。

・・・。。

雑談が少し長引いてしまい、もうすぐ寮に戻らないといけない時間になってきていた。

「・・・つと、そろそろ寮に行かないと・・・」

「ん？ 本当だ・・・。長々と付き合わせてしまっただけ悪かったね」

「いえいえ。では、俺はこれで」

「お疲れ様、彩先生」

「お先に失礼します」

いつもどおりの挨拶をして寮に帰る。

今日は刹那と稽古の約束があったからな・・・ちやっちやと帰ろう。

side out

「学園長」

『うむ、侵入者じゃな』

「森付近の方は刹那が向かっています。俺は離れたところの固まりを仕留めます」

『頼むぞ』

「はい」

そう言って電話を切った彩は絶影を使い三キロ先に向かった。

side. 刹那

・・・。

目の前には鬼が3体。

しかも、そのすべてが上位種の鬼。

上位種の鬼とは何度か戦った事はあるが、3体同時はさすがに無かった。

彩さんからは『無理だと思ったら逃げろ』と言われている。

でも・・・いつも稽古をつけてもらっているんだから、逃げたりなんかしたら彩さんに申し訳が立たなくなる。

それに、お嬢さまに降りかかる危険が増す事になる。

・・・しかし、やれるか？

稽古の成果はそれなりに感じるようになってきてはいる。けど、この状況を打破できるほどの力が付いているか、と聞かれても素直に頷くことができない。

「嬢ちゃん、どうした？来ないならワシから行くぞ？」

ここまでできたらもう引けない。

これは試練だ。

ここで引いてしまえばお嬢さまに危険が及ぶ。

なんとしてでも・・・ここでヤツ等を倒す！

side. 彩

・・・。。。

今回のは前のヤツ等よりもでかいな。

5m強はあるし、妖力もそこそこ大きい。

ここは久しぶりにアレを使おうかな。

・・・そう、『夢想桜』だ。

この刀は、俺の居た世界で退魔を営む者なら誰もが知っている。

妖力を持たない人間などはまったく斬れないが、妖怪に対しては最強とも言える切れ味をもつ退魔刀だ。

刹那も心配だからさっさと片付けて援護に行こう。

「小僧、貴様がワシらの相手か？」

今回ののは関西弁じゃないあたり、召喚したヤツも少しは本気になっているようだ。

「時間が惜しい。さっさと始めるぞ」

「ハッ！　どうやら威勢はいいようだな、小僧。だが・・・それが何時まで持つか！！」

そう言って1体目が棍棒を持って襲い掛かってくる。周りは偉そうに見物としゃれ込んでいる。

「お前等も・・・その余裕が何時まで持つのかな？」

言い終わると同時に1体目の後ろに回り込み、首を削ぎ落とす。さすがは最強の退魔刀だ・・・上位の鬼程度は難なく切り伏せられる。

先日の無銘の刀とは性能がダンチである。

「な・・・！？　小僧おおお！」

さて、鬼とは単純かつ短気な性格で知られている。

これはランクに関係なく、すべてに当てはまる。

だから、余裕綽綽の鬼どもを逆上させ、より短絡的思考にさせるためには最初の1体をいかに素早く、圧倒的に倒すかにあるわけだ。よって、今の鬼どもには狂戦士のように盲目的に戦うしかなくなるため、倒すのは容易い。だが、

「オラァァ!!」

————ズガン!!————

全力で振り回してくるため、一発受ければ人間ならば粉々になる事だろう。

「調子づきおって小僧がああ!!」

2体、3体と次々に鬼どもが突っ込んでくる。

その動きは単純であり、簡単に避けられる。

ただ、こちらとしては早く刹那の元に向かいたいためさっさと片付ける事にしよう。

「……ふっ!」

高速の抜刀術から生まれた斬撃が飛び、俺の目の前で棍棒を振り落とそうとしていた鬼を切り裂く。

「グアァァァ!!」

斬られた鬼はなすすべも無く、ただ夜の闇の中に溶けるように消えていった。

そのまま続けて鬼を斬り倒しにかかる。

————降って来る棍棒を蹴り碎き、唐竹割りで鬼を真っ二つにする。

————俺の首を掴もうとする腕を切断し、その勢いで首を飛ばす。

――――後ろから俺を殴り飛ばそうとする拳をかわし、その腕に飛び乗って頭を貫く。

そして、最後の1体の棍棒の乱舞をかわしながら間合いに詰め込み、腹を切り裂いた。

それにしても・・・刹那が心配だ。

この程度のスピードなら刹那も捌ききれんだろうが・・・相手の得物が大きい。

かすってしまったても大惨事に繋がる恐れがある。
速く援護に行かないと・・・

「小僧・・・」

・・・浅かったか？

動けなくなった最後の鬼が話しかけてくる。

「なんだ？」

「気も使わずにどうしてあれほどの力が出せる・・・？オマエ・・・人間じゃないな？」

「・・・それがどうかしたか？」

「・・・人間の中で生きているのか？」

「ああ・・・お前たちも昔はそうだったんだろ？」

「・・・ふっ。そんなこともあったな・・・だが、何時の間にか人は我等を恐れていた。おかげで・・・今では都合のいいとき

だけ呼ばれてこき使われる身だ」

「・・・恐れられたのは、お前等がそう在ったからだ」

「・・・何？」

「お前等の在り方が人々に恐怖を与えたんだよ。何時からか人を見下し、人から物を盗み、力を振りかざすようになった。そんな在り方が人には怖くて仕方がなかったんだ」

「・・・ならば小僧、在り方次第ではワシ等も人と生きられたと抜かすのか？」

「ああ、そうだ」

「はっ！ 抜かせ小僧・・・だがまあ、そんな在り方も・・・でき
たかもしれない・・・」

その言葉を最後に、鬼は消えていった。

それよりも、刹那がヤバイそうだ。

危ないと感じたら逃げるように言っているのに・・・。

急いで刹那の援護に向かう。

side out

side. 刹那

これは先日の再現だろうか……。

こちらはすでにボロボロ。

攻撃を防ぐだけであちこちに跳ね飛ばされてしまう始末。

やっぱり鬼なんかとまともに打ち合うものじゃない。

それに……今回は司令官の鬼がいるようで、鬼の動きに無駄が少ない。

今も、2体の鬼が私を挟み撃ちにしようとしじりじりと詰め寄ってくる……が、詰めが甘い！

「百列桜華斬！！」

ありったけの気を込めて2体の鬼に斬りかかる。

しかし……やはりそこは、さすが上位種と言ったところか。

致命傷に繋がる手傷を負わせるにはいたら無かった。

「どうした？ 神鳴流はその程度か？」

さっきから高みの見物をしている鬼がそんな事を抜かしてくる。

「なめるな！ 斬岩剣！！」

さっきの一撃で重心が崩れた鬼に斬りかかる。

腕を一本落とせたが、まだ致命傷には繋がらない。

「小娘がァ！」

腕を落とされた鬼が鬼気を放ちながら睨んでくる・・・どうやら怒らせてしまったようだ。

思い切り地面を踏みつけ、土塊を飛ばしてくる。
そのうちの二つが避けきれずに右足に命中した。

「ぐっ！」

まずい。

当たった箇所を見てみると、赤くはれ上がっているが、どうやら骨は折れてはいないようだった。

しかし、足を動かすたびに激痛が走る。

まだ1体も倒せていないのに、思うように動けない。

そして、怒った鬼はそのまま私を吹っ飛ばそうと突っ込んでくる。

・・・おそらく避けきれない。

正体を明かすか、ここで果てるか・・・選択の余地は無かった。

この地を去ることになろうとも・・・こいつ等だけは、ここで倒す！

烏族の証である翼が現れると共に、体に力が溢れてくる。

そして、そのまま向かってくる鬼を全力で切り伏せた。

気を爆発的に放ちながら撃った一撃は、鬼の巨体を両断した。

「ほう、禁忌の翼をもつ烏族か・・・面白い」

やけに渋みのある声の司令官の鬼が構える。

今の一撃で疲労困憊な私は構えるだけで精一杯だ。

やはり、ほとんど使った事の無い力なので制御が難しい・・・。

だが、そんな私の気なんか知りもしない鬼は遠慮なしにこちらに向かってくる。

「殺しはせんよ。しばらく動けなくするだけだ・・・」

そういつて鬼が棍棒を振り下ろそうとしたその時

――ズガン!!――

鬼の胴体に横から鋭い飛び蹴りが直撃し、鬼の巨体を数メートル吹き飛ばした。

「おいおい、二度目はさすがに笑えんぞ？」

目の前に彩さんが立っていた。

「あ、え・・・彩さん？」

「本当にギリギリだったな・・・刹那、しばらく休め。あとは俺がやる」

今の彼には有無を言わさない迫力があつた。

翼が出ている事を気にする間もなく、私の意識は薄れていった。

side. out

side. 彩

刹那が気絶すると、翼は見る見る内に消えていった。

そうか・・・あれがあの子のコンプレックス。

あの時の俺と同じ・・・純粋な人間でない事を心から嘆いている所以。

・・・っと、今はコイツ等だ。

「オマエ・・・今何をした？気も魔力も使わずに・・・」

「そんな事はどうでもいい。殺してやるからかかって来い」

「はっ！また威勢のいいやつが現れよってからに・・・行くぞ小僧！」

今は時間が惜しい・・・こちらから攻めよう。

刹那の治癒をするために早いとこ病室に運ばないと・・・。

――ズシャッ！――

近くの1体を一息で切り伏せる。

残りは雰囲気の違い1体だけ。

コイツは珍しく、少し落ち着いている・・・だが

――ザクリ！――

時間が無いからこちらも悠長に構えているつもりは無い。

コイツも一撃で片付けて、刹那を運んだ。

・・・。

しかし・・・あの翼を見てしまったからには、彼女ももう隠し通せない。

彼女からはどういう反応が返ってくるのか・・・。

ともかく、明日は学校が終わるまで刹那には病室にいてもらおう。
場合によっては、俺の事も少しだけ話す事になるかもしれない。
・。

第十四話（後書き）

気づいた点があればお気軽にどうぞ。

のどかの作戦に平行して、刹那のフラグを回収しておきます。

・・・そろそろ刹那はデレてもいいと思うんです。

その次はアキラをデレさせたいですねえww

なんか最近出番少ないし・・・

第十五話（前書き）

今回は結構作るのに時間がかかった上に、上手くまとまった自信がありません。

ちよつとだけ改修しました

第十五話

翌日、とある病室で刹那は目を覚ました。

Side.
刹那

目が覚めたとき、私は何時ぞやの病室に居た。かれこれ二ヶ月近くぶりだ。

「う・ん・つ！」

体を起こそうとするが痛くて思うように動かせない。

体中が筋肉痛になっているような感覚だ。

昨晚のことを思い返していると、一つ思い当たる節があった。

「……そういえば、私は翼を出したまま戦っていた。」

慣れない力を使ったからその反動が出ているんだろうか……。

-
-
-
-
-
-

冴えきっていない頭を回転させるうちに、重大な事に気が付いた。

・
・
・
彩さんに翼を見られた・
・
・
○

顔をあわせたら何を言われるだろうか。

哀れむような目で見られるのか……。それとも罵声を浴びせられ

るのか・・・いや、彩さんなら受け入れてくれるのだろうか・・・
・・・そういえば、今は何時だろう・・・だいぶ日が昇ってきてい
るように見える。

壁に掛かっている時計を見てみると、10時を少し過ぎたくらいだ
った。

この時間から行くのは気が引けるな・・・。

「・・・はあ・・・」

ため息をつきながら体を横に向けてみると、四つ折にされた紙が枕
元におかれていた。

・・・手紙だろうか・・・。

開いて見てみると、彩さんの字で

『放課後まで少しだけ待っててくれ。少しだけ話がしたい。今日は
欠席扱いにしておくからしっかり休んでおけよ？ 彩』

と書いてあった。

・・・。。。。。

「・・・はあ・・・」

二度目のため息がこぼれた。

どうやら思ったよりも早くに顔を会わせる事になりそうだ・・・。

・・・今はあまり考え事をしたくないな・・・もう一度寝よう・・・。

・・・。。。。。

そうして、私は眠りに付いた。

side out

――その頃、2―A教室では――

「お、お帰りなさいませご主人様」

「のどか、いい感じですよ」

「そ、そうかな？」

「そうですよ。彩先生もそう思うですよね？」

「ん？ああ。なかなかよくなってきたよな」

「そ、そうですか？えへへ・・・」

「あー！本屋ちゃんだけずるーい！先生、私は？私は？」

「え？えっと・・・」

「うちもうちも」

「あ、私もー」

「わ、私も・・・」

「せんせー、私はー!？」

「じゃあ、一人ずつ前でやっていけばいいんじゃない？」

『それだ!!』

「……………」

大変にぎやかな事になっていた。

side. 彩

……………どうしてこうなった。

『メイドコンテストin2-A』

と黒板にでかでかと書かれている。

いや……………どうしてこうなった。

今日は1限から準備になっていたからずっとこのどかの練習相手をしていて。

開始から一時間と少したったが、なかなか様になってきている。

まだ恥ずかしがっているところはあるけれど、ちゃんと一人で言えるようにはなった。

早くも俺相手は慣れてきたようだ。

そして、刹那の事は……………放課後に話をしたいという事を紙に書い

てはおいたが・・・大丈夫だろうか。
きっと一人で思いつめているはずだ。
その事が気がかりだが、今はこちらを優先しなければいけない。

「じゃあ、くじで順番決めようか」

うちの和美がまたもやらかしてくれている。
ババラッテ

みんなが釣れるエサというものをわかりきっている上に、ネタになりそうな事を毎回けしかけてくる。
・・・本当に恐ろしい子だ。

「あ、私一番・・・」

「私四番く！」

「二番は私か・・・」

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

二分そこらで順番が決まった。
教卓の方を見ると、アキラがスタンバイしている。

「では、一番の方どうぞ！」

アキラが少し前に出てくる。
結構緊張しているようだ。
そして

「お、お帰りなさいませご主人様」

少し顔を赤くしながら言った。

・・・これはなかなか・・・。

アキラが着ると本物のメイドのような清楚な感じに見えるな。
アキラはメイド服も着こなして見せるのか・・・。

「先生、採点をどうぞ!」

「何点満点?」

「十点満点でお願いします!」

「十点で」

「はやっ!」

『おお～～!!!』

「で、では、彼女に一言お願いします」

「似合っててかわいいと思う」

「え、え!? か、かわ・・・」

『おお～～～～!!!』

更に顔を真っ赤にするアキラと、歓声を上げるみんな。
こんなに照れてるアキラもなんだか珍しいな。

「で、では、次！二番の方、どうぞ！」

お？次は千雨か。

あの子はどんな感じなんだろう・・・こういうのはあまり乗り気じゃないイメージがあるしな。

・・・

「お帰りなさいませご主人様っ☆」

「・・・」

・・・マジか。

・・・千雨どうした！？

いつもあんなツンケンした態度とってるのに・・・！

・・・てか千雨マジか・・・！？

『おおっ！！！』

「先生、採点をどうぞ！」

「十点」

「またはやつ！」

いやいやいや。

こればかりは仕方ないよ。

語尾に『☆』付けられる人なんて滅多にいないって。

俺初めて見たよ・・・てか千雨マジか。

「では、一言お願いします！」

「なんと言うか・・・いろいろとすごかった」

「いろいろってなんだよ？」

「いやほら、語尾に『☆』・・・」

「は？」

「い、いや何でもない。ともかく、千雨も似合ってたかわいいと思う・・・よ？」

「そ、そうか・・・」

『おお〜！！！』

千雨が頬を掻きながら席に戻って行く。

・・・すごいな。

本当にさっき語尾に『☆』を付けたのか・・・？
なんというか、切り替えが上手い・・・というよりも慣れてる感じ
だな。

— — —
— — —
— — —

「では、八番の方、どうぞ！」

次は・・・茶々丸か。

あの子もなかなか清楚な感じに着こなしているな。

・・・とは思ってみても、エヴァの家でメイド服が似合うっていうことはもう知ってたしな。
やはり、デザインが異なっても似合う事には変わりなかった。

「お帰りなさいませご主人様」

お辞儀の角度もばっちり決まっている。

それに、動きに無駄を感じない。

・・・本物のメイドは伊達ではなかった。
これには周りも少し唖然としている。

「と、得点は!？」

「もちろん十点」

『おお〜!!』

・・・。

俺のジャッジが甘いのか、それともみんなのレベルが高いのかはわからないが、これまでの全員の得点の平均は10.00。

つまりは全員が十点満点をたたき出している。

・・・俺は別にひいきしているつもりはない。

「では、彼女に一言!」

「やっぱり茶々丸はメイド服似合うよな。うん、かわいいと思う」

さっきからコメントも似たような事ばかり言っている気がする。

まあ、俺も上手く言葉に出せない事もあるけれど・・・なによりも重要な事が一つ。

・・・みんなものすごく似合っている・・・それはもう反則的に
だ。

「あ、ありがとうございます・・・」

・・・へえ。

茶々丸も結構表情が出てくるようになったな・・・うん、いい
ことだ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「次、十九番の方、どうぞ！」

次は・・・なに？

エヴァ・・・なんだかもじもじしているが・・・まさかやるのか？

「お・・・お帰りなさいませご主人様・・・って！なんで私がこんなことせにゃならんだ！！」

・・・分かりきってはいたが、結局こうなってしまいうわけだ。

・・・それにしても惜しい。

途中まではよかったのに・・・。

『かわい～～！』

「ええい、黙れ！黙らんか！」

「で、では採点をどうぞ！」

「八点」

「な、なに！？どこだ！？どこがいけなかったのだ！？」

「え、ええと、一言お願いします」

「・・・いやエヴァ、挨拶はしっかりやっとうぜ？まあ、かわいかったんだけどな」

「そ、そうか・・・ま、まあ・・・そこまで言うなら挨拶もやってやらんでもないぞ？」

少し照れながらも席に戻って行くエヴァ。

・・・どうやら褒め慣れていないみたいだな。

それにしても、少しずつだがクラスになじみ始めているようだ。
まだちょこちょこ冷やかしの声がある。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「では、最後の方どうぞ！」

最後はザジか・・・。

あの子が口を開いたのを見た事が無い。
どうなるんだろう・・・。

「お帰りのさいませご主人様」

ニコッと笑顔も忘れずに動作をしきった。

・・・喋れるなら普段から喋って欲しいんだが・・・。

『しゃ、しゃべった〜!』

・・・。

・・・この子は入学してから今まで一言も喋らなかったのか？

「気になる得点は!？」

「あ、ああ。十点だ」

『おお〜!!!』

「では、彼女に一言!」

「あ、ああ・・・うん。似合ってたし、笑顔もよかった」

「ありがとうございます」

「あ、ああ」

初めてザジと会話したよ・・・なんか感動した。

そうして、なんとか時間内に全員終える事ができた。

結果はほぼみんな十点。

十点じゃなかった子は何があったかと言うと、

『お帰りなさいませご主人様。ご飯にする？お風呂にする？それとも・・・わ・た・し?』

とか、

『お帰りでごさる御館様』

と、明らかにメイドの言葉ではない言葉を吐いていた。

・・・まあ、楓は少し惜しかったな・・・でも、御館様で。
メイド服でそんなことを言われたって萌えもしなければ蕩れもしない。

ただただシユールなだけだった。

ちなみに、のどかは緊張してはいたがきちんと言えることができたから満点をあげた。

そろそろメニューをとる練習に移ってもよさそうだな。

今日帰ったら食品サンプルでも練成しよう。

side. out

――放課後・刹那の病室――

仕事を片付けた彩はその足で病室に向かった。

――コン、コン――

「は、はい」

「刹那か？俺、彩だが」

「え、ええ。どうぞ」

――ガチャ――

防音兼人払いの結界を張り、彩がドアを開けて中に入ると、緊張した顔の刹那がベッドの上で上体を起こしていた。

「もう体は大丈夫か？」

「・・・はい。もう平気です」

「じゃあ、少し訊きたい事があるんだがいいか？」

「・・・はい」

「訊きたい事は分かると思うが、俺は昨日刹那の背中中の翼を見た。なぜ翼があるんだ？」

刹那の顔が少しずつ強張っていく。

・・・。

少し沈黙があり、刹那は口を開いた。

「・・・あの翼は、私が人間でない事の証です。私は烏族という種族と人間の間に生まれた混血児なんです・・・それも、禁忌とも言われる白い翼をもった忌み子。そんな化け物が・・・私の・・・」

私の正体なんです・・・」

それから、ポツポツと刹那は自分の生い立ちを語り始めた。
両親が他界して、集落から追い出された事・・・

近衛家に引き取られた事・・・

近衛家の一部の使用人から浴びせられた罵声や侮蔑の視線・・・
それに耐えながらも剣の修行に明け暮れた日々・・・
すべて話し終わった後、彩は口を開いた。

「そうか・・・ずっと一人で負い込んでいたんだな・・・」

思いもよらない一言に刹那は訳が分からなくなった。

「え？あ、あの・・・私が気持ち悪いとか思わないんですか？こんな化け物なんですよ？」

「・・・はあ？」

彩は呆れた表情をした。

side・刹那

「・・・はあ？」

彩さんが呆れた顔をしてこちらを見ている。

・・・正直わけがわからなかった。

「で、ですから私のようなば「ちょっと待て」・・・？」

「なあ、刹那・・・化け物ってどういうモノの事指すのかわかってないだろう」

「え？」

「化け物っていうのはな、意識を持って破壊や残虐な事象を引き起こすモノのことを言うんだよ。たかだか翼が生えた程度じゃ化け物なんて呼べやしない」

・・・たかだか翼って。

・・・確かに13歳で竜を倒す人にとってはそう思えるかもしれないけど・・・。

やっぱり異世界の人とは価値観が違ってくるものなのだろうか。

「・・・だけど、やっぱり私は人とは違う・・・」

「あのなあ・・・刹那がどこからの範囲で人って言っているのかは知らんが、人はみんなそれぞれが特徴を持っている。お前はその翼が特徴なだけの人なんだよ。東洋人と西洋人の違い並みに些細な事だ」

「・・・どうしてそこまで言えるんですか？」

そうだ。

彼はどうしてそこまで言えるんだろう。

彩さんのいた世界では私のような存在でも人として認めてもらえていたんだろうか。

「俺だって純粋な人間じゃないからな」

「・・・え？それって、どういう・・・」

「言葉では分かりづらいと思うから・・・ちょっと見てろ」

困惑する私を横目に彩さんはどこからともなく短刀を持ち出した。

「ええと、ちっとばかりグロテスクなんだけど・・・刹那ってホラー平気？」

「・・・いきなり何を訊いてくるんだろうかこの人は。
まあ、退魔の仕事のおかげで苦手ではないんだけど・・・」

「は、はあ・・・一応大丈夫ですが」

「なら心配ないな・・・刹那、よく見ておけ」

と、そう言うなり彩さんは右手で持った短刀を思い切り振り下ろし、自分の左腕を肘から切断した。

「な！？さ、彩さん！何をやって・・・！？」

彩さんの斬り落ちた腕が地面に着いた瞬間砂のように消えていき、切断された腕が元に戻っていく。

二秒もかからずに切られる前の状態に戻っていた。
・・・これは魔法でどうにかできるものではない。

・・・と言う事は、彩さんの体の再生能力？
混乱していると彩さんが話しかけてきた

「どう思った？」

「はい？」

「だから、今を見た感想は？」

「え？あ、びっくりしました」

「怖いとか、気持ち悪いとか思わなかったか？」

「え？いえ、そんなことはありません」

・・・彩さんは何を言っているんだ。
そんなことで彩さんを怖がるわけがわからない。

「・・・わけが分からないって顔してるな。言っておくが、それは俺から見た刹那と同じだからな」

「・・・え？」

「刹那は怖くも無ければ気持ち悪くも無いって事」

「あ・・・」

「お前は、付加要素なんて関係なしに俺の本質を見てくれてるんだよな？」

「え？そ、そうなんでしょか・・・」

「そうだろうよ。俺のこんな能力をみてそんな反応出来るのがいい証拠さ。相手の付加要素・・・つまるところ、刹那の翼や俺の能力、容姿とかについて深く考慮に入れないで、相手の本質のみに目を向ける事・・・頭の固いやツラにはどうにもこの考え方が出来ないみたいなんだ。どうやら、刹那の前に居たところでは運悪くそんな連中が多かったらしいな。大体な、付加要素なんて全部ひっくるめて個性のようなものなんだから、そもそも気にする必要なんてないんだよ」

・・・そうなのだろうか。

なら、私はこのちゃんと・・・お嬢さまと一緒にいる事ができるんだろうか。

私が正体を明かしても、ありのままの私を受け入れてくれるのだろうか・・・。

「それにさ、お前混血児だろ？鳥族ともう一方の血はなんだ？」

・・・人だ。

それはわかっている。

・・・だけど、人の血が半分は言ってるからといってあまり喜べたものじゃない。

「・・・人間です。ですが「それだよ」・・・え？」

「俺が言いたいののはさ、おまえ自身が証なんだよ。『共に生きるのに種族なんて関係ない』っていうな」

「・・・え？」

「刹那の両親が命を張ってまで証明してるじゃないか。結ばれて、子を生す・・・そこまで出来たんだぞ？そんな事実がありながら、お前はいったい何を迷っているんだ？」

「・・・」

言葉が出なかった。

・・・そうだ。

私の両親が・・・烏族とうさんと人間かあさんが手を取り合ったからこそ混血児わたしがいるんじゃないか。

どうして今まで生きてて気が付かなかったんだろう・・・。
今まで周りの言葉ばかり気にしてしまっていて、この体を何度も嘆いてきた。

・・・だけど、そんな必要は無かったんだ。

・・・私自身が証か・・・。

本当に彩さんはすごい人だ・・・私自身気が付かなかったのに・・・。

「ここまで言えば、もう迷う事はないだろう？」

「はい・・・！」

「なら、自分に誇りを持って・・・生きられるよな？」

「はい！」

二度目ははっきりと頷く。

そうだ・・・私はこの身を誇りに思うべきだったんだ。
何も恥じる必要は無い。

私は私として、みんなと過ごしていこう……。
私たちは分かり合って生きていけるんだから……。！

「・・・刹那、泣いているのか？」

「・・・え・・・？」

目元に指を当ててみると、水っぽい感触があった。
気づかないうちに涙が流れてしまっていたようだ。

「ははっ。仕方ないな、刹那は」

彩さんはそう言って私の頭を撫でてくれる。
なんだかとても暖かい気持ちになった。

・・・こんな風にしてもらうのはどれだけぶりだろう。

「うええっくん！」

気づけば私は子供のように声を上げて泣いていた……。
彩さんはそんな私を優しく抱きしめてくれた。

・・・今くらいは甘えても大丈夫かな……。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「落ち着いたか？」

「は、はい・・・」

結局涙が止まるまで抱きしめてくれていた……。それにしても……。恥ずかしくて顔を会わせられない。いったい私はどうしたんだろう……。泣いたのを見られただけではないような気がするけど……。

「そういえば刹那」

「は、はひ!？」

き、急に名前を呼ばれたから驚いてしまった……。いったいどうしたんだろう

「これで気兼ねなく木乃香のそばにいられるな」

「へ？」

「幼馴染なんだろう？ 仲良くしないとな」

「で、でも……。私は護衛だし……」

「一緒にいた方が護衛しやすいだろう？ それに……。刹那、たまに木乃香達の方見て混ざりたそうな顔してるしなあ？」

「う……。」

いたずらっぽく茶化す彩さん。

この人はいったいどれだけ鋭いんだ……。というか顔にまで出てたのか……。

「本当は一緒に居たいんだろ？」

「・・・はい」

「けれど、どう声をかければいいか分からない、と」

「・・・はい」

まったく言い返す言葉が無い。

本当にどうすればいいんだろう・・・。

やっと一歩踏み出せるのに・・・。

「じゃあさ、この時期を利用してしろよ」

「はい？」

「学園祭だよ。一緒に回ってみたらどうだ？いい思い出になるんじゃないか？」

「なるほど・・・」

確かに、学園祭と一緒に回れたらそれは楽しいと思う。

それに、会話のネタにも困らないだろう。

でも・・・どうやって誘おう・・・

「手紙でも直接言うでもいいんじゃないか？どっちだろうと喜ぶと思うぞ」

「そうですね、なら・・・って！今心を読みませんでした!？」

「いや、いくら俺でもそれはできないよ。刹那は分かりやすいから

な」

「そ、そうですか・・・」

「じゃあ、後は自分で何とかするんだぞ。もう大丈夫みたいだしな。俺はこれからやらないといけないことがあるからそろそろ帰るよ。じゃあ、また明日な」

そう言って去って行く彩さん。

「え？あ、あの！」

必死に振り絞って出した声は彼には届かなかった。

・・・と言うか、私は呼び止めていっただい何を言いたかったんだろう・・・？

side. out

その夜、彩は昼間に宣言（？）したとおり食品サンプルを量産していた。

ロフトに広がるのは数種類のパスタ、紅茶、コーヒー、etc・・・かれこれ40個を超える数が生産されていた。

刹那と別れた後、彩はホームセンターに寄ってプラスチック素材を大量に購入していた。

プラスチック素材を購入したからといっても一から作るわけではなく、これを対価に食品サンプルを地道に練成している。ただ、精度にこだわった為パソコンで画像と見比べながら作っているうちに、本来なら一時間とかからない作業が三時間に及んでしまったのはまた別の話。

第十五話（後書き）

刹那フラグ回収完了。

これでいつでもデレさせられますWW

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

第十六話（前書き）

今回はわりとあっさりした感じです。

そろそろ学園祭本番に入れようかな、と思っています。

ヒロイン化希望アンケートですが、次話で現状を報告します。

それと、小説とはまったく関係ないプライベートな話なんですが・
・。

ミートボールとスコッチエッグを見間違えて電子レンジでチンして
食べようとしたら・・・スコッチエッグが爆発しました。

文字通り爆発しました。

箸を刺した瞬間飛び散りました。

あれはいつたいなんなんでしょうね・・・。

皆さんも気をつけてくださいね。

第十六話

――翌日 限目学園祭準備・2-A教室――

『す、すご〜い!!』

2-Aの中心には、昨晚彩が練成した食品サンプルの山があった。通常の三倍以上の時間をかけた事もあり、その出来栄は本物と区別が付かないほどだった。

しかも、内部には金属を入れて重さの調節がしてある辺りがその徹底さを物語っている。

「先生ーこれどうしたの？」

「知り合いから貰ったんだよ。なかなかよくできてるだろ？」

「本物かと思ったよ」

「・・・食いつきそうになってたもんな」

「う・・・それは言わないでよ・・・」

「ははは・・・でも、これでより練習がしやすくなったろ？みんな、

今日も頑張ろう！」

『おー！！！』

side. 彩

さて、今日のどかの練習を・・・と言いたい所だが、昨日の騒ぎのおかげでクラスの子達をグループ分けして一定時間ごとにローテーション形式で俺が客役をする事になった。

やっぱり、みんなも男相手に接客練習をやっておきたいようだ。

確かに、俺がのどこにつきっきりだと不公平だしな・・・。

まずは班分けをする事になった。

ウェイトレス組と厨房組で分かれているんだが、厨房組もなぜか加わってくじで班分けをする事になった。（作者がサイコロ振った）

結果、

- ・ 一班 亜子、美空、のどか、夏美、史伽
- ・ 二班 木乃香、刹那、エヴァ、茶々丸、風香
- ・ 三班 楓、真名、ザジ、和美、裕奈
- ・ 四班 鈴音、聡美、ハルナ、アキラ、まき絵
- ・ 五班 千雨、あやか、桜子、夕映、千鶴
- ・ 六班 明日菜、美砂、円、菲、五月

「先生やる〜!」

「・・・よいしょと。・・・どれだけ運ぼうとしてんだ!」

「ええ〜と・・・13?」

「多すぎるわ!トレイ一つにしとけ!」

「ええ〜」

「ええ〜、じゃない!まったく・・・次はのどかだったか?」

「は、はい。よろしくお願いします・・・」

— — — — —

— — — — —

— — — — —
二班の場合 — — — — —

「お待たせしました。カルボナーラをお持ちしました」

「さすが茶々丸だな。見事な動きだ」

「ありがとうございます」

「みんなはどう思った?」

「うゝん・・・何かが足りない気がするんよ」

「何かとは？」

「メイドさんやから口調もメイドさんっぽくせんと」

「「ああ」」

「メイドっぽく・・・と言うと？」

「うゝん・・・ご主人様、お待たせしましたっ！・・・とかええんやない？」

「それをやればよろしいのですか？」

「ん？・・・どうした茶々丸？彩の方をちらちら見て」

「い、いえ！なんでもありません」

「なあせっちゃん、茶々丸さんが照れてるえ」

「そ、そうですね」

「茶々丸、やってみるか？」

「は、はい（彩さんがご主人様・・・）」

・・・

「ご主人様、お待たせしました」

「今度はどうだ？」

「後はアレやね。萌え萌えキューーン！、やね！」

「はい？」

「メイドさんならこれもやらなあかんと思うえ」

「・・・木乃香、楽しそうだな」

「うん！」

「……………萌え萌えきゅーん」

「茶々丸！？」

「「「かわいー！」」」

「――――」

「――――」

「――――三班の場合――――」

「御館様、お待たせしました」

「……………（出オチ感がハンパない……………けど……………）」

「む？彩殿、どうしたでござるか？」

「・・・なんかもう御館様でもいいような気がしてきた」

「そうでござろう？そうでござろう？」

「じゃあ先生、私のは？」

「いや・・・裕奈のはさ・・・旦那さんができたらやってやれよ・・・
きつと喜ぶから」

「ところがぎつちゃん・・・私はお父さん一筋ですから！残念！！」

「・・・さいですか・・・」

「ご主人様、コーヒーはいかがですか？」

「ああ・・・真名か。よかった・・・しっかりしてるのがいたよ」

「・・・飲んだね？」

「ん？ああ。美味しかったよ」

「四百円になります」

「・・・は？」

「コーヒーの代金ですご主人様」

「・・・そうくると思ったよちくしょう」

――
――
――

――
――
――

――
――
――

――
――
――四班の場合――
――

「・・・聡美、これはなんだ？」

「私が開発した栄養ドリンクでございませうご主人様」

「いやいやいや。これ明らかに液体じゃないって。ひっくり返しても垂れてこないもん」

「ご主人様、ストローいるカ？」

「・・・結局飲まないといけないのか？」

「ここまできたら飲まなきゃだめでしょ」

「じゃあハルナが飲むか？」

「・・・やめときます」

「ご主人様がんばって」

「・・・」

――じー――

「わかったよ・・・」

――ゴクゴク――

「固い寒天みたいだった・・・」

「うわ！ホントに飲んだよ！」

「・・・どういう意味だよ」

「実はそれ失敗作・・・」

「何飲ませんだコラ！」

「まあまあ、ちょっとお茶目が過ぎ・・・え？大河内さんどうしたの？え、ちょ・・・アー―ッ！」

――――

――――

――

――五班の場合――

「お帰りなさいませご主人様」

「ああ、もう！違う違う！もっとこう、こうやってだな・・・」

「そ、そうですもの？難しいですね」

「お手本をやってみてもらえる？」

「・・・よし、見とけよ？・・・お帰りなさいませご主人様っ☆」

「」「」「おおう」「」「」

「よし、綾瀬やってみろ」

「お帰りなさいませご主人様っ」

「ああ違う違う。最後をもっとこう、きらめかせるんだよ。これですべてが決まるんだ」

「・・・意味がわかりません」

「・・・俺居る意味なくね？」

――
――
――

――
――
――

――
――
――六班の場合――
――

「ええつと・・・コーヒー」つと、チョコレートケーキ一つですね？少々お待ちくださいませ」

「よかった。真面目な班だ・・・」

「彩先生、大変だったね・・・」

「円・・・分かってくれるのか？」

「・・・なんか見ててすごかったからね」

「これが毎日あるんだよな・・・」

「・・・先生頑張って・・・」

「・・・ありがと」

「ご主人様ー、コーヒーお持ちしたアル」

「あ、ああ。ありがとう（・・・いやな予感がする）」

「ご主人様、武道大会出ないアルか？」

「あー・・・あれか・・・」

「どうアルか？」

「うーん・・・っておい。今は練習中だろ？」

「む・・・また気づかれたアル」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

・ ・ ・ ・ ・。

ものすごく疲れた．．．精神的に。

これが毎日あるのはきつい。

タカミチ先生無しで全員の相手をしきるのは結構骨が折れる。

タカミチ先生が加われればのどかの練習のハードルも上げられるのに
なあ．．．。

そろそろ出張から戻ってくるはずなんだがなあ．．．。

．．．それにしても、真名に四百円取られたのが悔しいな。

マジで取ることないよな．．．四百円て地味に痛いんだぜ？

真名め、覚えてろよ．．．。

s i d e . o u t

— — — 放課後 — — —

「ん？ねえ、木乃香の靴箱手紙入ってない？」

「え？・・・ほんとや。誰からやろ・・・」

木乃香は手紙を開けて中を確かめると、差出人の名前は自分のよく知った者からだった。

「ねえ、誰から？誰から？」

「・・・せつちゃん・・・」

明日菜の問いかけに応えたわけではないが、木乃香はその差出人の名前を呟いていた。

離れ離れになってから疎遠になりかかってしまっている幼馴染の名前を。

手紙の内容を見た木乃香は一瞬驚きはしたが、すぐに喜びの表情へと変わっていた。

手紙には、『今まで避けてしまっていたが、木乃香と仲良くしたいと思っているのは昔と変わらない』ということ、『そのために学園祭と一緒に回りたい』ということが刹那なりに一生懸命書かれていた。

「せつちゃんって・・・うちのクラスの桜咲さんのことよね？確か、木乃香の幼馴染の。なんでわざわざ手紙なんて書いてたのかな・・・って木乃香？なんだかうれしそうね」

「ふふふ。そう見える？」

「そう見える。どんな内容だったの？」

「ふふふ。なんやと思う？」

「えゝ？なによー」

「秘密。明日菜ゝ今日の晩御飯なにがええ？うち、今日ならなんでも作っちゃうえゝ」

「え、ホント！？じゃあ・・・」

・・・。

こうして、笑顔の二人は仲良く家路について行った。

第十六話（後書き）

まとめみたいな感じになりましたね・・・w
w

誤字、脱字、気づいた点、感想などありましたらお気軽にどうぞ。

第十七話（前書き）

ヒロイン化アンケート中間発表です。

和美 2

のどか 5

裕奈 5

シャークティ 2

亜子 2

夕映 4

千鶴 2

さよ 2

エヴァ 4

ザジ 4

茶々丸 6

愛衣 1

月詠 1

千雨 2

木乃香 4

真名 5

ク1 2

楓 2

明日菜 2

です。

個人的に加えたいキャラクターはさよ、木乃香、茶々丸、明日菜、真名 です。

ただ、最近のどこかを登場させているうちに愛着がわいてきました W W
だってかわいいんだから仕方ないと思うんです。

とりあえず、現状トップの茶々丸はヒロインに昇格確定とさせます。
あと2、3人ほどヒロインを加えようかと思っています。

ネギが登場するまでは投票は受け付けますので、この子こそは!!
という子があれば投票してみてください。

第十七話

日曜日。

学園祭本番まで残り5日となった。

麻帆良中の飾り付けや格学校の出し物もすべて最終段階に入っていた。

まだ準備が終わっていないところは日曜日にも関わらず、クラス総出で準備に励んでいた。

ちなみに、彩たち2－Aは教室の飾りなどの準備もすべて終わっている。

厨房組は各部屋で練習をし、ウェイトレス組は各自室で接客練習をしている。

そんな中、彩はさよを連れてエヴァの家に来ていた。

茶々丸は買い物に出かけたのか、中にはエヴァしかなかった。

「・・・おい、そいつはなんだ？」

「うちの出席番号一番のさよだよ。知ってるだろ？」

「そんなことはわかつとる。・・・なぜここにいいのか聞いてるんだ」

「ああ、そうそう。その事についてなんだけども、ちょっとここで作りたいものがあるんだよ」

「何を作るんだ？」

「この子の体・・・って言っても人形なんだけどな」

そう。

みんなが学園祭の雰囲気盛り上がる中、さよは少し取り残されていた。

準備にも参加できず、おそらく当日も楽しめるものがほとんど無い。そんなさよを見かねた彩は、急遽さよが自由に歩いて回れるための体を用意する事にした。

材料もここ数日で作ったり集めたりして準備を重ね、とうとう実行に移す時が来たのである。

「え！？さ、彩さん、そんなことができるんですか！？」

「大丈夫。材料は揃ってるから、後は作るだけだ」

「・・・それで、できた体に不都合が生じた場合にすぐ対処できるようにここで作るわけか」

「そ。何か借りたら代金は払うからさ。・・・いいか？」

「・・・はあ。いきなり訪ねてきたと思ったらこれか・・・好きにすれば良いさ。その代わり・・・」

「その代わり？」

「今度私と手合わせしろ。前にタカミチと戦った時、まだ本気じゃなかったらう？」

「・・・わかったよ。また今度な」

「逃げるなよ？」

「はいよ・・・。じゃあ、そろそろ始めるか」

そう言っしてしぶしぶ頷きながら、彩は陣が書かれた布を床に敷いてその上に材料を置き始めた。

「なあ彩、人形にはどの素材を使うんだ？」

「ちょっと悩んだんだけどな・・・やっぱり、ここは無難にエーテル体にしようと思うんだ。霊体に馴染みやすいし、物質的にも安定してるからな。さよ、ちょっとこっちに来てくれ」

「はい？なんです・・・うひゃっ!？」

「ああ、動かないでくれ。今、作る体のイメージを構成してるから」

さよの頭に手をのせる彩。

干渉能力を使って、さよ魂から死ぬ前の肉体の情報を調べるためだ。

つまり、身長、体重、スリーサイズ、など乙女の秘密を漁りまくってしまっているわけである。

「さよ、もういいよ。・・・よし、改めて始めるか」

陣に手を置くと、陣が発光して材料がざわめき始める。そして、少しずつ肉体の構成が始まる。

「わぁ……」

「ほう……錬金術か。珍しいな……」

その光景に心を奪われるさよと、静かに佇むエヴァ。

そして、ある程度輪郭が出来上がってきたところで彩がローブを着せている。

「彩さん？何をかけているんですか？」

「ただのローブ。体が出来上がってからだと恥ずかしいだろう？これはさよの体なんだからな？」

「！……は、はい。ありがとうございます……。」

彩の説明でやっと真意を知ったさよはもじもじして蚊の鳴くような声で言った。

そんなやり取りをしているうちに、体のほとんどが構成され終わった。

見た目はやはり、幽霊状態のさよそのままである。

違いは、姿がはつきりしていることと足があることだ。

彩は出来上がった人形の体を解析して、一応エヴァに問う。

「なあエヴァ、どう思う？俺は問題はないと思うんだが」

「……ああ。いいんじゃないか？特に問題もなさそうだしな」

「……だ、そうだ。さよ、入ってみろよ」

「は、はい」

やや緊張気味に応え、体に入っていくさよ。

・・・しばらくすると、人形の目が開いて辺りをきょろきょろと見回し始めた。

「さよ、体の調子はどうだ？立てるか？」

「・・・」

「さよ？」

「す・・・」

「す？」

「すごいです彩さん！！手が動きます！足も動きます！本物の体みた・・・きゃっ！」

手足を伸ばしたり曲げたりして喜ぶさよだったが、足があるのは久しぶりなため上手く立ち上がる事ができずに転んでしまう。

また立ち上がろうとするが、生まれたての小鹿のように足がプルプルと足が震えているためやっぱり体勢を崩してしまう。

「ははは。ほれ、大丈夫か？」

苦笑いをしながらさよに手を差し伸べる彩。

さよは少し涙目になって、額を片手でさすりながら彩の手を取った。

「あ、ありがとうございます」

「俺も手伝ってやるからさ、立って歩く練習しようか」

「よ、よろしくお願いします」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

— — — — 二時間後 — — — —

side. 彩

さて、あれから二時間経ったわけだが、さよはどうなったかというと

「へえ、エヴァさんってお裁縫上手なんですね」

「そうだろう？ 私の右に出るものなどそうはおらんだろうさ」

・・・。

歩く、走るに関しては30分程度で勘を取り戻した。

リハビリ患者のように筋肉が衰えてしまっているわけではないんだし、だいたいこのくらいじゃないだろうか。

体と魂の相互関係も良好のようだし、問題が発生する事はほとんどないだろう。

・・・そして、俺が目を離して気づいた時にはなぜかエヴァと親睦が深まっていた。

おそらく、この子は周りに波長を合わせられるタイプなんだろう。

・・・いや、でも短時間でエヴァとここまで仲良くなれるか？

波長を合わせるのと同時にマイナスイオンでも放出してるんじゃないのか？

その証拠に・・・見ろよ、エヴァもまんざらでないような表情をしている。

・・・さよすげええ。

・・・さて、突然だがさよの寝泊りするところが無い。

女子寮に空き部屋が無いわけでもない。

ただ、寮に住むとなると真名とのエンカウントは避けられない。

どうして今真名に合わせたくないかというと、当日にばったり会わせて驚かせてやりたいから、という俺の個人的な意見があるからだ。やられっぱなしはよろしくない・・・せめて、四百円相当の驚きの表情はしてもらわないと、こちらとしては面白くないと思っている。それに、真名は未だにさよは成仏したものだと思ってるしな。・・・これは期待してもいいだろう。

そこで、さよをどこに泊まらせるか、という話になるわけだ。

俺としてはエヴァの家にはさよを泊まらせようと思っている。

それに、さよにはいざというときに身を守るための術を身に付けさせる必要があるからな、ついでに鍛えてみてもらえないかな・・・。エヴァの家には便利な別荘があることだし、そのあたりについては不自由はないんだし。

「なあ、エヴァ」

「む、なんだ？」

リズムよく動かしていた針を止めて振り向くエヴァ

「さよをしばらく泊めてやってくれないか？できればついでに鍛えてやってくれるとありがたいんだけど」

「ああ、いいぞ」

早っ！

マジかエヴァ・・・さよパワー超すげえっ！

「・・・ホントにいいのか？」

「まあ・・・なんだ、こいつのことは・・・嫌いじゃないからな」

・・・。

最早言葉が出なかった。

エヴァがもうデレてる・・・マジかさよ。

いったいどうやったらこんなに仲良くなれるんだ!？

というか友達が少なかったとか絶対嘘だろ・・・？

「へ？鍛えるってなんですか？」

「おまえの体は特別製だからな。なにかとやっかいごとに巻き込まれる事が増えるはずだ」

「そうなんですか？」

「ああ、そうだ。だから、私がお前を鍛えてやろう」

「エヴァさんですか！？なんだかすごそうですね！」

・・・あの子を見ていると、敵と遭遇した時『会話してただけど、気づいたら味方になってたよ☆』みたいなことが起こる気がしてならない・・・ていうか絶対起こる。

「ええと・・・じゃあエヴァ、さよのことよろしくな？」

「ふん。言われるまでも無い。お前こそ、手合わせするのを忘れるなよ？」

「・・・わかったよ。さよも、なにかあったらすぐに俺に言うんだぞ？」

「はい！今日はありがとうございました！私、学園祭の日が楽しみです！」

「ははは。喜んでもらえたみたいでなによりだよ。あ、それとさ・・・当日に真名を驚かせてやりたいからさ、当日まで真名と会うのは待ってもらってもいいか？」

「ふふふ。それは面白そうですねっ。真名さん、驚きますかね？」

「ああ。きつと驚くぞ。当日はめいっぱい驚かせてやろうぜ？」

「はい！」

「よし、それじゃあな」

「ああ」

「また、学園祭で」

少しにぎやかになったエヴァの家を出ると、ちょうど買い物から帰ってきたらしい茶々丸と会った。

「茶々丸おかえり。買い物おつかれさん」

「さ、彩さん？いらしてたんですか？」

「ああ。二時間と少しくらい前にな」

「!?!?・・・どうして来るなら来ると、先に言ってくれなかったんですか？」

「へ? あ、えっと・・・」

「・・・」じー

・・・視線が痛い。

「・・・ゴメンナサイ」

「はあ・・・まあいいでしょう。次からはきちんと連絡をくださいね?」

「・・・ハイ」

・・・まだ少しムスツとした表情でこっちを見てくる。
しかも、それが拗ねた子供に見えて仕方が無い。
・・・やばい、笑みが押さえきれそうに無い。

「・・・彩さん、何かおかしいですか？」

また更にムスツとする茶々丸。

今度は頬まで膨らませそうな勢いだ。

「ははははは。いや、茶々丸もそんな表情ができるようになったんだな」

「え？」

「さっきの顔、子供みたいにムスツとしてたぞ？こんな感じで」

そう言ってちょっとだけさっきの表情を真似してやる。

「そ、そんな顔はしていません」

「ほらほら、そんな事言ってるよまた」

「う・・・も、もう・・・知りません！」

そう言ってプイッとそっぽを向く茶々丸。

・・・あ、けっこうかわいいかも。

「ははは。本当に最近の茶々丸は表情が増えたよな」

「え？」

「笑顔になったり、戸惑ったり、さっきみたいにムスツとしたりさ・
・・自分でもわかるだろ？」

「・・・はい。何かに突き動かされるように、自然と表情が作られていくのはわかりますし、たまにマスターから指摘される事もあります。これが感情なのでしょうか・・・」

「そうだよ。その、突き動かす何かが感情なんだ。こればかりは自分で制御しきれるものじゃないからな・・・まだ少し戸惑うのか？」

「どうなのでしょうか・・・私でも把握しきれません」

少し困惑気味の表情を浮かべている。

でも、俺的にはけっこう理解できてきているような気もする。

練習の班が同じなためか、最近は木乃香ともよく話すようになった。いろんな人と接するうちに学習してきているんだろうか。

「まあ、難しく考える必要は無いよ。そういうものは自然と理解できようになるからな」

そう言って茶々丸の頭を撫でてみる。

「はい」

されるがままになっている茶々丸が応える。

・・・少し話し込んでしまったけど、食品は大丈夫なんだろうか・
・。

袋の中にアイスの箱が見えるんだが・・・。

「じ、じゃあ、そろそろ俺は帰るよ。また来る時はちゃんと電話するからさ」

「約束ですよ？」

「ああ、約束するよ。それじゃあな」

「はい。さようなら」

そうして、こんどこそ家路についた。

それにしても・・・エヴァと手合わせか。

終わったらいろいろと問いただされるだろうな・・・。

・・・。

・・・ていうか、ここでも勝負かよ。

まあ、ここまでさせてしまってるんだからそれくらいは応じるさ。

でも勝負かぁ・・・。

全力は出さないけど本気でやらないと怒るよな・・・。

・・・。

今は疲れたし・・・帰って少し休も。

明日はやつとタカミチさんが戻ってくるし、俺も少し楽になるな・・・。

第十七話（後書き）

最近アキラの出番が少ないです。

学園祭本番では登場させまくれるといいなあ〜と思います。

誤字、脱字、感想、意見などお待ちしています。

アンケートも待ってますよ。

第十八話（前書き）

少しですが、ネット環境が落ち着いてきました。

四日ぶりですが、けっこう久しぶりに感じます。

第十八話

学園祭当日、彩は朝早くから世界樹広場を訪れていた。

side・彩

遂に学園祭の日が来た。

まだ7時なんだが、やる気満々な2-Aは全員そろって教室で各自チェックをし直していた。

俺も見にいつてあげたいのは山々なんだが・・・目の前でバルタン星人みたいな笑い声を上げているぬらりひょんのおかげで叶わずにいた。

・・・学校行事なんだし、今日くらいはまともな事を言ってくれるんだろうか。

「ふおおおお。今日お主達に集まってもらったのは他でもないこの学園祭についてじゃ」

未だに笑っているんだが何がそんなに楽しいんだろうか・・・。

「広域指導員のシフトは前回話したのう。今日の話は、最終日に行

われるおにごっこについてじゃ」

「・・・は？」

・・・最終日におにごっこ？
そんな事をするのか？

「どうかしたかの久寿野君？」

「おにごっこについて初耳なんですが、詳しく教えていただけませんか？」

「ふお？まだ言っとらんかったかの？今年の最終日にこの麻帆良のほぼ全域をつかって、全員参加のおにごっこをやるのじゃよ。それでの、鬼を教師陣から数十人か出そうと思っておっての」

・・・

・・・もしかして、あの時タカミチ先生が配ってたプリントのことか？

何かの冗談かと思ってスルーしてたんだが・・・。

「若い者、体力に自信のある者を選ぶかと思つての。わしがリストアップしてみたんじゃ」

そう言つて教師陣にプリントが渡される。

目を通してみると、体育教師、若い教師が宣言どおり数十名リストアップされていた。

そして、なぜか俺とタカミチ先生と数名の教師の名前が赤丸で囲まれている。

「この赤丸はなんですか？」

「ああ、それはの・・・残り時間が減ってから投入される者の名前じゃ。いきなり全員投入してしまったら全員つかまってしまうかも知れんしのう・・・」

冗談めかして言うてはいるが、その一方で割と真剣な目で俺とタカミチ先生をちらちらと見てくる。

「はっはっはっは。そんな事を言われてしまつては私たちも手は抜けませんな」

「え、ええ・・・そうですね」

赤丸を付けられた体育教師が愉快そうに笑いながら俺に振ってきたから、とりあえず相槌を打っておいた。

・・・いくらお祭り好きな人が多いからといってこれはどうなんだろう。

正直歯止めが利かなくなる気がしてならないんだが・・・。

ていうか、学園長の突拍子無さに慣れてきてる自分がいることが怖い。

side out

午前9時、各教室でホームルームが終わる頃、麻帆良のいたところの放送機器から学園長の開始宣言が行われた。長々と決まった文句を延べ、最後に

『これより、麻帆良祭を開始する！！』

———ヒュルルル………パーン！———

学園長の宣言と同時に花火が上がり、風船が舞い、飛行船の電光掲示板も派手に彩られている。

麻帆良中がいつも以上に活気に満ち溢れる中

「これはすごいな………」

彩はただただその光景に心を奪われていた。

side. のどか

とうとう麻帆良祭が始まった。

多分、もう少ししたらお客さんが来るんだろう。

緊張してきた……練習どおりにできるかな……。

彩先生との練習はとてもためになったと思う。

最初は挨拶すらまともに言うことができなかった。

だけど、彩先生がいろんなアドバイスや緊張を紛らわす方法を教えてくれたし、夕映もいつも一緒に練習に付き合ってくれたし、クラスのみんなも私の進歩を自分のことのように喜んでくれた。

そのおかげで、最後には彩先生以外の男の先生が相手でもあまり緊張しないで練習する事ができた・・・と思う。

そんな事を考えながら扉の近くで待機していると、こっちに向かってくる彩先生と目が合った。

「のどか、あまり緊張する事はないよ。練習どおりにやればいい」

やっぱり私が緊張してることもわかってたんだ・・・彩先生ってすごいなあ。

「は、はい。あの・・・先生はどこかに行くんですか？」

今のはよく訊けたと思う。

これも練習のおかげなのかな・・・？

「ああ、広域指導のシフトが入ってるから見回りに行くんだ。ここには後でまた見に来るよ」

「は、はい。せ、先生も頑張ってくださいね」

「おう、のどかも頑張ってたな」

「は、はい！」

今日の私はどうしたんだろう。

やっぱりこれも練習のおかげ・・・？

なんだか彩先生には話しかける時に緊張する事が少なくなってきたような気がする。

・・・よし。

先生も頑張りに行くんだから、私も頑張ろう。

side out

side 彩

のどこかもけっこう緊張がほぐれたみたいだったな。

これならきつと練習どおりうまくできるだろう。

ナンパの断り方までは上手くできないかもしれないが、万が一手を
出されようものならウチの武闘派が黙っていないからな。

自分で思っておいてなんだけど・・・ナンパするヤツに軽く同情するよ。

さて、そろそろさよが待ち合わせ場所に来る頃だな。
さっさと真名を呼んで合流させて、巡回を始めるか。
。。。。。

「あ、いたいた。彩さ〜ん!!」

待ち合わせ場所が見えたと思ったら、こっちに向かって手が千切れんばかりにブンブン振ってるさよの姿があった。

「よ、おまたせ」

「いえいえ。私も今来たところですから。それより、どうですかこの服っ?! エヴァさんたちが作ってくれたんです!」

さて、この麻帆良祭、基本的には仮装・・・と言うかコスプレをする子が大半を占める。

愛着が沸いたのか、さよの今の格好は60年前の女子中等部制服＋ネコ耳。

・・・ていうかエヴァと更に仲良くなっていらっしゃるのか。

「ああ、やっぱりその制服よく似合うよな、さよは」

「えへへ、そうですかっ? そうですかっ?」

こんな言葉でよかったのか・・・と思ったら、ものすごく喜ぶさよ。今にもスキップでも始めそうな勢いだ。

「じゃあ、そろそろ真名を呼ぶか。真名のシフトは午後からだからな」

「はいっ！」

携帯電話で真名の番号に電話をかける。

•
•
•
•
•
•
•
○

『もしもし、龍宮だ』

「もしもし、彩だ」

『彩先生……どうしたんだい？』

「今、時間あるか？」

『今かい？まあ、空いていないことも無いよ』

「そうか、空いてるんだな。なら、今から世界樹広場に来てくれ」

『いきなりだね・・・まあ、いいよ。少し待っててくれ』

「はいよ。じゃ、また後でな」

—
—
プ[○]
ツ
ツ
—
—

_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
	_____	_____
	_____	_____
	_____	_____

十分後、真名がやってきた。

「やあ、彩先生。先生からデートの誘いがくるとは思ってもみなかったよ」

「はい？デート？」

「おや、違うのかい？私はてっきりそういうものかと思っていたんだけどね」

ぜったいにからかつてるな・・・目でわかるぞ、おい。

「・・・ここに呼んだのは、会わせたい子がいるからだよ」

「会わせたい子？誰だい、そ「真名さん、お久しぶりです！」・・・え？」

真名の問いに答えるようにさよが世界樹の陰からひよこつと姿を現した。

一方、真名はさよを目の前にフリーズしてしまっている。

「あのー・・・真名さん？」

「・・・」

「おーい、真名？」

「・・・先生、目の前にさよのような子がいるんだが」

「ああ、さよだよ」

「いやいやいや、あの時さよは成仏して「いや、成仏してないからえ？」」

「だからさ、成仏してないんだよ」

「え、だってあの時光って消えて・・・」

「あれは霊格が上がっただけ。前は自縛霊、今は浮遊霊。真名が成仏したって信じきってるから今まで目に映らなかったんだろうよ」

「じ、じゃあ、この体は・・・？」

「俺が作った人形体だよ。日曜日に作ったんだ」

「な・・・」

「「はい？」」

「なんだってえええええ！？」

・・・。

正直ここまで驚いてくれるなんて思ってもみなかった。

・・・やばい。俺だけのせいじゃないと思うけど、やりすぎた感と罪悪感がひたすらこみ上げてくる・・・。

・・・このくらいのドッキリでこれだけ自分への心的ダメージがかいのに・・・いったい学園長の神経はどれだけ図太いんだろう。呆れを通り越して感心してしまう。

・・・真名・・・ごめんね、ここまでキャラ崩壊するなんて思わなかったんだ。

「真名さん」

「・・・はっ！なんだい、さよ？」

「あらためまして、お久しぶりです。今日は一緒に学園祭を見て回ってくれませんか？」

「あ、ああ。久しぶりだね、さよ。また会えて嬉しいよ。今日は午後から私はクラスに戻らなくちゃいけないけど、それでもよかったら一緒に回ろうか」

「はい！」

「・・・ああ、そうだ彩先生」

「・・・な、なになな？」

「後でO☆H A☆N A☆S H Iがあるからそのつもりでね。じゃあ、行こうか、さよ」

「・・・」

顔は笑っているが、額に青筋を浮かべて真名はさよと去って行った。あんな表情は今まで見た事が無い・・・ていうか結局悪いのは俺なんだろうか。

「あ、彩先生」

「ん？ ああ、アキラか」

どんよりしていると、アキラが声をかけてきた。そういえばアキラも午後からだったな。

「せ、先生、いったいどうしたんですか？」

「いや、ちょっと精神的に疲れることがあってね・・・」

「そうなんですか・・・なにかあったらいつでも言ってお下さいね」

心配そうにこちらを見てくるアキラ。

ああ、なんだかアキラが天使に見えるよ。

「うん。先生、アキラのその言葉だけで頑張れそうだよ」

「はい?? あ、そうだ。先生、いまからどこかに行くんですか？」

「どこに行くってわけでも無いけどさ、広域指導のシフトが入ってるから見回りを兼ねていろいろ回ってみようかなって思ってるんだ」

「そうなんですか。じ、じゃあ、私も付いて行ってもいいですか？」

・・・そういえば、アキラと仲のいい子はみんな今日は午前中シフトだったな。

一人で回るよりも誰かと回った方が楽しそうだし、一緒に回ってみるか。

「ああ、いいよ。一緒に行こうか」

「はい！」

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

――ウルスラ・智美のクラス――

道順に沿って歩いて最初の出し物は智美や高音のクラスだった。

先週パンフレットをもらって面白そうだったし、個人的にもこの出し物には期待をしている。

この間トリックアートっていうのを初めて見たんだが、果たしてどこまで再現できているんだろう。

「ここは何をやってるんですか？」

「『立体トリックアート』だよ」

「立体トリックアート？」

「トリックアートってるだろ？あの、見方でいろんな絵に見えたりするだまし絵。あれを二次元から三次元にしてみたんだって」

「なんだかすごそうですね」

「そうだろ？これは俺も面白そうだと思ったんだよ」

そんな会話をしながら教室の中に入った。

入り口からは、保健室にあるようなキヤスター付きカーテンで区切られた小部屋のようなものが見えた。

「あら、彩先生、来て下さったんですの？」

受付に行ってみると、相変わらず上品な口調で話す智美に会った。

「ああ、トリックアートを立体化なんて面白そうじゃないか。結構楽しみにしてたんだぞ？」

「まあ、本当ですか！？では、じっくり見ていってくださいませ」

時間をかけて準備した作品を楽しみにされていた事に喜んだのか、上機嫌になった知美に案内されて中に入った。

まずは一つ目の小部屋、擬人的絵画のところに行った。

擬人的絵画とは、名前の通り、人意外を描いた絵が人に見えるものの事を指す。

この部屋に飾ってあるのは、本で作られたオブジェ。

しかし、よく見てみると、眼鏡をクイツとかけ直す男の顔にも見える。

二つ目の部屋は、さかさ絵。

ひっくり返して見ると、また別の絵に変化するという面白い絵のことだ。

飾ってあるのは知ってる人も多いであろう『うさぎとかもめ』だった。

「アキラ、これ何に見える？」

「え？えっと、うさぎに見えます」

「俺は、口を開きかけてるかもめに見えるな」

「あ。ホントだ、すごい・・・」

どうやらアキラもなかなか楽しんでくれているようだ。

三つ目の部屋は、目の錯覚。

名前の通り、目の錯覚を誘うトリックアートだ。

この部屋は円と線を使ったものと、平行四辺形と鉛筆をつかったものがあつた。

円と線を使ったものは、五百円玉が横に三枚密着され、縦に少し間隔をあけて二枚並んでいる。

そして、縦、横に並んだ五百円玉の両端に糸をつけてある。

要は、どちらの糸が長いか、ということ。

結論から言うとどちらも同じ長さになるんだが、実際に見てみると長さが違って見える。

平行四辺形と鉛筆も同じように、大きい平行四辺形と小さい平行四辺形に鉛筆を置き、長さを比べるものだ。

これまたどちらも同じ長さなんだが、実際に見てみると長さが違って見える。

「アキラ、どっちが長いと思う？」

「え？こっちです」

「じゃあ測ってみるか」

・・・。

「え？どっちも一緒なんですか・・・？」

「そうみたいだね」

アキラも見事に引っかかっていた。

次に、『エイムズの部屋』があった。

これは、端と端に立っているものの大きさが本来の大きさと違って見える部屋だ。

試しに俺とアキラが両端に立ってみた。

本当はアキラと俺の背はあまり変わらない（俺の方が少し高い）。

しかし、この部屋に入って向かいの鏡を見ると、俺の方がアキラよりも小さく見える。

「あ、先生縮んでますよ」

「いや、アキラが大きくなったんじゃない？」

— — — — —
— — — — —

他にも色々あったんだが、どれもよくできていたと思う。

「彩先生、いかがでした？」

「すごく面白かったよ。な、アキラ？」

「はい。トリックアートっていうのは初めて見ましたが、本当に面白かったです」

「そ、そうですか？そこまで言われるのなら、作ったかいがありましたわ」

すこし照れている知美を後に、俺とアキラは次に向かった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ん？もうすぐお昼だな」

「あ、本当ですね」

ある程度歩き回って時計を見たら、11時30分くらいだった。結局、指導するような事件も無く巡回を終える事ができた。アキラたちの午後のシフトは12時10分集合になっていたな。そろそろ昼食を取らないとまずいんじゃないだろうか。チョコバナナを一本ずつ食べただけだから、お腹がすいている頃だろうし。

「そろそろ何か食べないか？お腹減ってきたし」

「そうですね、何を食べましょうか？」

「お祭りなんだから、俺はお好み焼きとか食べたいなあ」

「あ、いいですね。私も食べたいです」

「ちょうどあそこに屋台が出てるし、俺が買ってくるよ。座る場所をとっというてくれるか？」

「はい。わかりました」

アキラはすぐそこにあったベンチに移動し、俺は屋台に向かった。

・・・。

「おまたせ。豚とミックスがあるけどどっちがいい？」

アキラはどれがいいのか分からなかったため、俺は豚玉とミックスを一枚ずつ買った。

「ありがとうございます。先生が好きな方を選んでください」

「いや、アキラから選んでくれ。俺はどっちも好きだから」

「うーん・・・じゃあ、半分ずつ分けませんか？」

「ははは。そうだね、そうしよう」

「・・・あ、そういえば、いくらですか？」

「うん？」

「お好み焼きですよ。まだお金払ってません・・・」

「ああ、いいいいいよ。午後から頑張るアキラに差し入れてことで」

「でも・・・」

「生徒がそんなこと気にしない。さめないうちに食べちゃおう、おいしそうだぞ？」

「・・・ありがとうございます」

少し唸っていたアキラだったが、なんとか納得してくれたようだ。
うん、人の好意は黙って受け取るのが一番だよ。

—
—
—
—

「「ごちそうさまでした」」

「よし、じゃあクラスに戻るか」

「あれ、先生も来るんですか？」

「うん、どんな状況か一回見ておきたいからね。みんなの頑張っているところを」

「ふふふ、先生は相変わらずですね。じゃあ、行きましようか」

「? ? ああ、行こうか」

食べ終わったお好み焼きの容器を捨てて、俺たちは2-Aに向かった。

アキラの言った『相変わらず』がいったいどういう意味なのかはよく分からなかったけど・・・。

第十八話（後書き）

というわけで、学園祭が始まりました。

一話で一日というのはさすがに無理があつたので分割してあります。

そして久々のアキラWW

しかし、まだまだこんなものじゃもの足りません。

学園祭が終わったら、少しアキラにスポットを当ててみようかと思っています。

第十九話（前書き）

今日も元気に載せちゃいます。

学園祭一日目の後編です。

それと、連載開始から丁度一ヶ月です。

一ヶ月応援してくれている方も、昨日から応援してくれている方もありがとうございます。

何時の話になるかはわかりませんが、これからも完結目指して頑張っていきたいと思いますので、これからも応援よろしくお願いします。

第十九話

――2――A教室前――

「「すごい（な）・・・」」

クラスに戻った彩とアキラが一言目に放った言葉だった。

教室前の廊下には、長蛇の列という言葉がぴったりあうような光景があった。

しかも、最後尾には即席で作ったであろう『一時間待ち』の看板が設置してある。

そして、教室に入ってみると案の定満席であり、客のほとんどが男子生徒だった。

「（これはまた・・・のどか大丈夫かな）」

彩がそんな事を考えていると、接客するのどかの姿がちょうど彩の目に入った。

「え、ええと、コーヒー一つですね？少々お待ちくださいませ」

まだおどおどした感じは抜けないが、きちんと接客できていた。そして、厨房に入っていた中から

「本屋ちゃん、今回もばっちりできたね」

「もうすぐ交代だからがんばってね」

「う、うん！」

少し疲れた顔を覗かせてはいるが、クラスのみんなと声を掛け合ってせこせこ動き回っている姿があった。

――
――
――

十五分後、客が全員会計を済ませたところで、教室の扉に『準備中、少々お待ちください』と書かれた立て札を掛けて、小休憩兼交代の時間になった。

「みんなお疲れ様、今更だけど差し入れだ」

そう言って、さっき職員室に戻って取ってきたクーラーボックスを開けて、中からスポーツドリンクを取り出す彩。

暑い中頑張ってきた彼女たちにとって、これはかなり嬉しいものだったらしく

「先生気が利くねえ」

「やったー！せんせー大好き！」

「先生、ありがとう」

と、大絶賛を受けている。

「そういえばさ、廊下にすごい行列ができてたんだけど、いつからなんだ？」

「え？ 最初からだよ？」

「マジで？」

「うん、マジで」

「すごいな・・・そうだ、迷惑な客とかいなかったか？ ナンパがしつこかったり」

「うーん・・・いたにはいたんだけど・・・」

「けど？」

「クーちゃんたちが対処してるうちになくなっちゃった」

「・・・」

彩の心配は現実のものとなっていて、武闘派の活躍によって開始から数十分で『ナンパ禁止』が客の間で暗黙の鉄則になっていた。

「・・・あ、そうだ。そろそろ着替えないと」

時刻は12時35分になっていた。

午後の部は1時開始ということになっているため、そろそろ準備を始める時間になっている。

「ん？あ、そうか。午前中のみんなお疲れ様！午後のみんなも頑張
ってな！」

『はい！』

元気のいい返事を聞いて、彩は教室を後にした。

—
—
—

side. 刹那

「さ、彩先生」

私は廊下に出た彩さんを追い、声をかけた。
よかった、声は裏返っていないみたいだ。

「ん？刹那、どうした？」

いつもの調子で返してくる彩さん。
どうしよう・・・だんだん緊張してきた。

「あ、あの・・・この後はどう過ごされる予定なのでしょうか・・・
？」

「そうだね、広域指導の仕事も今日はもう無いから、いろいろと見て回ってみようと思ってるよ」

・・・よかった。どうやらチャンスはあるみたいだ。

彩さんはクラスからも・・・というか、何時の間にか学校中で人気者になっていたから、一緒に回れるか心配だった。

実は、お嬢様と私は今日だけシフトが別になってしまったから、今日は一緒に回る事ができない。

だから、もっと前から声をかけていればよかったんだが・・・なかなか踏み出す事ができなくて、結局ギリギリになってしまった。

「そ、そうですか・・・な、なら私も一緒にしてもよろしいでしょうか!？」

しまった・・・勢いあまって早口になってしまった。

多分私の顔は真っ赤になってる事だろう。

彩さんも苦笑いをしてる・・・う、もうだめだぁ・・・OTZ

「いいよ」

「・・・へ?」

「学園祭、一緒に回ろう」

「は、はい!」

よ・・・よかった。

みっともない姿を見せてしまったけど、なんとか一緒に回る事ができそうだ。

s i d e . o u t

— — —
— — —
— — —

s i d e . 彩

あれから十数分。

俺と刹那は今、茶道部に来ているんだが

「・・・」

「・・・」

・・・これだよ。

なぜか茶々丸と刹那が目を合わせたまま動かない。

事の発端は今から数十秒前。

茶道部の活動場所に来てエヴァと茶々丸に声をかけるまではよかった。

「あ、彩先生」

と、よく見なければ分からないけどはつきりと笑みを浮かべて歩み寄ってきたところまではよかった。

だけど、俺の後ろから刹那の顔がひょこつと出るや否や

「・・・・・・・・」じー

いつぞやのムスツとした表情になってこちらを見つめ

「こちらへどうぞ」

と、機械的な挨拶をして俺たちを奥に案内してからずっと刹那を見つめている。

対する刹那もじーじーじーと茶々丸を見つめ返したまま動かなくなってしまった。

ちなみに、今更・・・本つつつ当に今更の話になるんだが、俺と茶々丸はよく一緒に食品を買いに行ったり、猫と戯れたりしていたりして、結構仲良くなっている。

たまにエヴァの家に行って一緒に料理をしたりする事もある。

どこかの怠惰なヤツのせいでこんなに説明調になってしまったが、まあ・・・そういうことだ。

「・・・・・・・・」

「!?!」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「!」

「・・・・・・・・♪」

「・・・OTZ」

「お、おい茶々丸!」

「・・・いったい何が起こったのか知らないが、刹那が勝ったようだ。そして、がっくりと項垂れる茶々丸と、その肩をポンポンと叩くエヴァの姿がそこにはあった。」

「お、おい茶々丸、しっかりしろ」

「マ、マスター・・・私、負けてしまいました」

「な、何があったかは知らんが、負けたのなら次で勝てば問題なからう?」

「エヴァもよく分かっておらず、受けあたりばかりで返している。」

「次で、ですか?」

「ああそうだ。それも、圧倒的に勝ってやれ。そうすれば相手は悔しがるぞ?」

「なるほど、その手がありましたか。さすがマスターです」

がしつとエヴァの手を握る茶々丸。

「そ、そうか？」

そして、わけも分からず照れていた。

・
・
・
・
・

「・・・改めて、ようこそいらっしゃいました」

少し間をおいてから、まるで何事も無かったかのように茶々丸が挨拶を始めた。

しかし、改めて見てみるとエヴァと茶々丸の和服姿はとても似合っている。

それぞれ髪の色に合わせた色のものを着ていて、帯も落ち着いた色になっているから、少し大人びた印象を受ける。

「む？彩、どうかしたのか？」

「いやさ、二人ともその着物がよく似合ってると思ってね」

「そ、そうか・・・ふ、ふん。褒めても何も出んぞ？」

「え、あ、その・・・ありがとうございます」

二人ともそれぞれの反応を見せてくれる。

エヴァは満更でもないようで、相変わらず照れ隠しをしてる。対する茶々丸は、素直に照れているようだった。

「む・・・」

「ん？刹那どうしたんだ、眉間にしわなんか寄せて？」

「ひゃい！？な、なんでもありませんヨ？」

・・・なぜ片言？

「続けてもよろしいですか？」

「あ、ああ、どうぞ」

では、と言って茶々丸は慣れた手つきで道具を用意してお茶を作り始めた。

・・・そういえば、茶道って『人をもてなす時に現れる心の美しさ』を目的にしたものなんだったな。

俺は茶道の心得がまったく無いんだが、茶々丸の流れるような動作に目が釘付けになっていた。

その隣ではエヴァも同じ動作をしていて、やはり茶々丸と同じ・・・いや、それ以上に洗練されたような動きに見えた。

こういった『文化』っていうものについて知識として知ってはいても、触れる機会が多くなかった俺にとってとても貴重な経験だ。

こう、なんというか・・・趣を感じるっていうのはこういうことなんだな。

「どうぞ」

何時の間にか出来上がっていたらしく、茶々丸の声で我に返った。

「えっと、何回か回せばいいんだっけ・・・？」

・・・自分でも呆れるくらいに素人丸出しの一言だった。

「作法は気にしなくても構いません。自由にやってみてください」

茶々丸はそう言ってくれるが、エヴァの顔が少し引きつっている。日本文化をこよなく愛するエヴァにとって、日本人が日本の文化を心得ていないと言う事は納得のいかないことだろうしな。

ちなみに、隣では刹那が慣れた手つきで黙々と動作を行っているが、こちらは硬直状態。

・・・とりあえずこのままというのも居たたまれなくなったから、刹那の動作を全部真似してそのままやってみる事にした。

・・・。

「なんだ、結局できているじゃないか」

「まあ、ね」

引きつっていたエヴァの顔も、何時の間にか満足そうな顔に変わっていた。

・・・よかった。大恥をかかずにすんだ。

そして、少し雑談をしてから茶道部を後にした。

s i d e . o u t

side・茶々丸

彩さんは約束どおり、茶道部に足を運んでくれました。

なんだか胸部が温かくなるような感覚でしたが、桜咲さんと一緒だということが分かると、胸部に妙な感覚がしました。

そして、桜咲さんと対話をしてみました。

なんでも、一緒に回ってくれるように頼んだんだとか……。

盲点でした。自分の活動場に足を運んでもらう事だけに注意を払いすぎていたのかもしれませんが。

それにしてもなんなんでしょう、この『もやもや』という擬音が該当しそうな感覚は……。

なんらかの感情が作用している事は理解できるのですが、どんな感情かまでは特定できませんでした。

ですが、マスターは負けた、悔しい、という言葉を使っていたので、悔しいという感情なのかもしれません。

そういえば、彩さんに着物を褒められた時には胸部が温かくなるような感覚と、頭部に熱が上ってくるような感覚がありました。

あの感覚は『照れる』というものだど、彩さんに教えていただきました。

彩さんと一緒にいる時は、不思議と体がいつもより安定するような感じがします。

どうしてなのでしょう……？

私も彩さんに一緒に回ってもらえないか頼んでみましょうか……。

s i d e . o u t

s i d e . 刹那

あれから数時間経った。

私たちは色々な場所を見て回った。

面白かったところは地図に丸印を付けて、お嬢様と回る時に案内で
きるようにしておいた。

・・・それにしても、楽しかったな・・・。

出し物自体も面白かったが、彩さんと一緒に回れたのは私にとって
本当に有意義な時間になった。

・・・でも、彩さんは私と一緒にいても楽しいと思ってくれていた
んだろうか。

私は口下手だし、気の利いたことを言う自信が無い。

今日だって、彩さんが話を振ってくるこの方が多くて、自分から
話題を作る事があまりできなかった。

「・・・はあ」

自分の不甲斐無さに呆れてしまう。

「ええっと、俺と一緒に楽しくなかったか？」

「い、いえ！そんなことはありません！今日は本当に楽しかったです！！」

間違った認識をされまいと、必死に首をぶんぶん振ってしまった。
・・・少し頭痛い・・・。

「じゃあ、どうしたんだ？なにかあったのか？」

「いえ、その・・・彩さんは・・・私と一緒に、退屈じゃありませんでしたか？」

少し目を伏せて言うと、彩さんは一旦きょんととして

「いや、俺は刹那と一緒に回って楽しかったよ」

「え・・・？」 PBR<

「たしかに口数は少なかったけどさ、刹那は分かりやすいから」

「分かりやすい・・・？」

「そう。楽しかったら思いっきり顔が綻ぶし、驚いた時には肩が面白いくらいビクッってなるんだぞ？」

「う・・・」

私はそこまで分かりやすいのか・・・。

彩さんが退屈でなかったのはいいけど・・・素直に喜べない。

「前も言っただろ？刹那は分かりやすいんだよ、黙っててもさ。こっちとしてはそんな刹那の反応を見るのも楽しかったよ。まあ、もう少し思った事を口にしてくれても良かった気がするけど」

う・・・彩さんにずっと見られていたって思うとだんだん恥ずかしくなってくる・・・。

「ん？刹那？」

「え、い、いえ！なんでもありません！そ、それよりも、彩さんは武闘大会に出なくてもよかったんですか？」

「・・・あのねえ刹那、一般人相手に俺が戦ったらいったいどうなると思ってるんだ？」

「・・・あ」

苦し紛れに放った自分の言葉に自分の首を絞められた。

・・・そういえば、彩さんってどんな種族なんだろう。

もしかして、マグダウェルさんのように真祖だったりするのだろうか。

結局、聞く機会が無かったからずっと気になってはいるんだが、訊くに利けない。

「賞金が出るからといって、そんな浅はかなことはしないよ。それに・・・」

「それに？」

「あの戦闘ふたりぐみ民族達の歯止めが効かなくなりそうだ・・・」

「ああ・・・」

あの二人には悪いが、こればかりは私も頷かざるをえない。

・・・そういえば、二人とも武闘大会にエントリーしていた気がする。

「そういえば、もうすぐ予選がありますよね。見に行きますか？」

「そうだなあ・・・応援くらいはしてあげたいしな」

なんだかんと言っても、やはり彩さんは彩さんだった。

話し方は最初に出会った時と変わってきているが、面倒見のいいところは相変わらず変わらない。

・・・。。

『Aブロックの勝者、長瀬楓選手&古菲選手ー！！二人とも我等2ーAが誇る武闘派だあー！！』

『おおおおおー！！』

・・・。

応援に来てはみたが、既に二人の予選突破は決定していた。

Aブロックの周りには、無造作に転がる生徒の姿があった。

・・・まだ始まって数分しか経っていないはずなんだが・・・。

果たして他者にとって二人が強かったのか、それとも二人にとって相手が弱かったのか……。

結局、私達は特に何をするでもなく、無人になったAブロックを見に来るだけとなってしまった。

さあ……明日はいよいよお嬢様と学園祭を回る約束の日だ。

頑張ろう……頑張って、またお嬢様と話せるようになるんだ……。

第十九話（後書き）

一日目終了です。

ちよつと遊びすぎちゃった感もありますがW W

それにしても、最近茶々丸が無双してますね。出番的な意味でW W

二日目は刹那と木乃香にスポットを当ててみます。

それと、茶々丸視点が難しい・・・。

感想、指摘などあったらいつでもどうぞ。

第二十話（前書き）

風邪から復活しました。

学園祭二日目です。長くなるので2パートに分けてあります。

第二十話

side. 彩

学園祭二日目。
午前中の武闘大会が終わり、午後になった。

武闘大会の結果だけを先に言うと、菲が優勝した。

しかし、この世界の一般人っていったいなんだろう・・・気弾とか普通に使ってるんだけど。

しかも、驚いてる子がほとんどいない・・・おかしいな。

俺の居た世界で人前で気弾なんて放ったらテレビに出れるどころの話じゃ済まないだろう。

認識阻害って恐ろしいな・・・もし結界が消えたりしたらこの都市いったいどうなるんだろうか。

・・・おっと、話が逸れてしまったが、決勝で菲の相手になったのは言うまでも無く楓だった。

出場者の内の2割程度の割合だった女子同士の決勝戦に、会場も大いに盛り上がっていた。

ただ・・・この大会は刃物などの殺傷力のある得物の持込が禁止されていた。

つまり、楓は無手での戦闘を強いられたに等しかった。

これは忍者にとってはなかなか痛手であったようだ。

しかも、相手が八極拳の使い手・・・無手のエキスパートなら尚更の事だった。

善戦していたとは思うが、やはり本来の戦いをできない楓は菲の動きに翻弄されてしまい、敗北した。

仕方の無いということは重々承知だったと思うが、楓は少し悔しそうにしていた。

対する菲も、あまり納得していない様子で優勝を放棄しようとしていたが、楓に説得されて優勝の座につくことになった。

そして、今度は万全の状態で全力で戦う事を約束して、絆を深めていた。

こんな状態の中俺が声をかけるわけにもいかず、熱が冷める中夜祭まで祝いの言葉はとっておくことにした。

ちなみに、昨日の中夜祭はなかなか盛り上がったらしいが、俺は急な仕事が入ってしまって参加できなかった。

それで、今は特に仕事も無いから昨日の続きで学園祭を回ろうかと思っている。

ていうかお腹すいたなあ・・・俺まだお昼たべてないんだよ・・・せっかく屋台が出てるんだからなにか買って食べたいところだよな。そんな事を考えていると

「彩先生」

「ん？」

茶々丸の声に振り返ってみると、エヴァとさよも一緒にいた。

茶々丸の目が少し泳いでいるがいったいどうしたんだろう？

「茶々丸、どうかしたのか？」

「い、いえ・・・その・・・」

今度は少しもじもしだす茶々丸。

エヴァはよく状況が理解できていないようで、茶々丸の後ろからさよが「頑張ってください、茶々丸さん」って言うてるけど何のことなんだ？

「も、もしよろしければ・・・あの、私達と一緒に学園祭を回っていただけませんか？」

「うん、いいよ」

「ほ、本当ですか？」

「いや、嘘なんてついてどうすんのさ・・・。俺でよければ一緒に回るぞ？」

「あ、ありがとうございます」

静かに笑顔を浮かべる茶々丸。

「・・・おい、私たちは無視か？」

「「え？」」

二人してエヴァの方を向いてみると、昨日の茶々丸のようにムツとした表情のエヴァの姿があった。

おそらく、この顔をデフォルメ化したら口の部分がバツテンになっているんだろうな。

「え？ じゃないわ！ 私たちを放っておいて何を二人だけの世界に入ってるんだ！」

「もう、エヴァさんったら拗ねちゃだめですよ？ 彩先生たちだって別に忘れていたわけじゃないんですからね？」

笑顔でエヴァをなだめるさよ。

これじゃどっちが年上か分からなくなるな。

というか、見た目で言うならさよの方が年上に見える・・・まあ、当たり前なんだけどね。

「・・・なにやら失礼な事を考えていなかったか？」

「いや、そんなことはないぞ？」

「む、そうか・・・確かに感じたんだがな・・・」

まだ少し唸っているエヴァ。

なんとかやり過ごせたようだ。

ふふふ・・・残念だったなエヴァ、俺はポーカーフェイスには定評があるのさ・・・！

「おほん・・・それで、だ。これからどうするんだ？」

「うーん・・・エヴァたちってもうお昼食べた？」

「いや、まだだ」

「じゃあ、まずはお昼を食べよう。で、どこで食べようか？」

「任せる。男ならしつかりエスコートして見せろ」

そう言って口をニヤリとさせてエヴァが言う。

どこに連れて行っても何か一言つけられそうだな・・・。

「え、ええと、さよは？」

「私ですか？私もどこでも構いませんよ。お任せしますっ」

ニコツと笑顔を向けてくれるさよ。

しかも、期待の眼差しが混じっている。

・・・まさかの伏兵にハードルを上げられたっ！

「じ、じゃあ、茶々丸は・・・？」

何か言ってくれるかもしれないと思って訊いてみた。

「あの・・・私は食事を必要としないんです・・・すみません」

ものすごく申し訳なさそうな顔をする茶々丸。

・・・少しどんよりオーラが見える。

「い、いや！茶々丸は何も悪くない、悪いのはむしろ俺！だから気にするな！」

「・・・はい」

どんよりオーラは消えたが、まだどこか申し訳なさそうな表情が見え隠れしている。

困ったな・・・。

何とかして笑顔に戻してあげたいところなんだけど・・・何をしてあげれば喜ぶんだろう。

こういうときに限って役に立たない頭を必死に回転させていると

「おや、これはまた珍しい組み合わせだね」

計ったようなタイミングで現れたのはタカミチ先生だった。

そういえば、今日はタカミチ先生は指導員のシフトがあつたな。

「あ、タカミチ先生お疲れ様です」

「ははは、まだ始まったばかりだよ。疲れるようなことが起こらないと良いんだけどね。彩先生は楽しんでるかい？」

「はい。教師が学校行事を楽しむのもちょっとアレなのですが、楽しんでますよ」

「それならよかったよ。これからどこに行くところなんだい？」

「まずはお昼を食べようかと思ってるんですが・・・タカミチ先生、お勧めとかありませんか？」

「そうだね・・・」

そう言って考えてくれるタカミチ先生に対し、エヴァが「チツ、もう少しだったというのに」と言ってるのが聞こえた。

・・・やっぱり楽しんでたんだな・・・。

シルヴもエヴァも、いったい何が楽しくて俺をからかうんだろうか・・・。

「そういえば、女子中等部の3－Dが好評だったかな」

「3－Dですか？」

「うん、確か日本料理を作ってたよ」

・・・そう言えば・・・3－Dからは一週間ちよっと前から美味しそうな匂いが漂ってきてたな。

まさか仕込みだったのか、アレは・・・？

「・・・マジですか？」

「それがマジなんだよ。僕も驚いたんだ。人気だから早めに行った方が良いよ？」

「分かりました。ありがとうございます」

「うん・・・ああそうだ、エヴァ」

「なんだ？」

「彩先生を困らせちゃだめだよ？」

「子ども扱いするなーーーーー!!」

「はっはっは、それじゃあ、僕はこれで」

爽快な笑い声を上げてタカミチ先生は去っていった。
そして、残ったのが・・・

「むう・・・」

「・・・・・・・・」ずーん・・・

「あははは・・・」

頬を膨らませたエヴァと、どんより状態に戻ってしまい地面に『の字を書いてる茶々丸と、苦笑いをするさよと、俺だった。

「ええと・・・そこでもいいか？」

「・・・・・・・・ああ」

「私も構いませんよ？」

「・・・・・・・・」ずーん・・・

「ええつと、茶々丸？」

「・・・・・・・・はい」

「行こう・・・ぜ？」

とりあえず手を差し伸べてみた。

「・・・・・・・・はい」

茶々丸は俺と差し出した手を交互に見てから、手を取って立ち上がった。

そして、手をじーっと見て固まっている。

「えっと・・・茶々丸？」

「・・・はっ！いい、いえ、なんでもありません。さあ、行きましよう」

そして、俺の手を取ったまま歩き出した。

離そうとしてみたが、茶々丸のほうがガッチリとホールドしているため離れない。

「えっと・・・どうしましたか？」

そして、やや緊張した顔で俺に問いかけてくる。

何時の間にかどんより状態から完全回復していた。

「あゝ・・・なんでもない」

・・・。

結局手をつないだまま3-Dに向かう事になった。

ちなみに、エヴァとさよは目を見合わせてぽかんとしていた。

・・・さて、今頃は刹那と木乃香が一緒に回っているころだな。

刹那、頑張れよ。

side out

side. 刹那

「あ、せっちゃん！」

待ち合わせ場所の世界樹広場に、時間通りお嬢様がやってきた。なんだか緊張してきた……。こうして二人きりになるのはいったい何年ぶりになるだろう。

「あ・・お、お嬢様」

「もう、お嬢様なんて呼ばへんくてもええのに」

昔と同じような笑顔を向けてくれるお嬢様。でも、この呼び方ばかりはまだ変えられそうに無い……。昔のように『このちゃん』って呼んでもいいのかな……。

「え、えっと……」

「うーん……ま、ええよ。せっちゃん呼びやすいように呼んでくれれば」

「す、すみません……」

「あ、そういえば、今日はどこを回るん？」

私があたふたしていると話題を変えてくれるお嬢様。
気配り上手なところはやっぱり変わってないんだな……。

「ふふっ」

「?せっちゃんどうしたん?」

「へ!?!あ、いえ……昔と変わらないんだな……と」

「んゝ、そうかな?」

「ええ」

……お、今のは結構自然に会話ができたんじゃないだろうか。
この調子だぞ、私。

「あ、そういえば、もう昼食はお済ですか?」

「まだやよ。せっちゃんは?」

「私もまだなんです。どこで食べましょうか」

「あ、それなんやけど、3—Dが美味しいらしいえ」

「3—Dですか?」

そういえば、3—Dは準備期間中からずっと美味しそうな匂いがしていたな。

なにをやっていたんだろう……?

「うん。噂によると、日本食らしいえ」

「そ、それはまた・・・珍しいですね」

なるほど・・・準備期間中の匂いは仕込みだったのか。

ずいぶん本格的にやっているんだな・・・。

「そうやろ？ 気になるし行ってみん？」

「はい」

[illegible]

3 D 教室

教室前に来てみると、結構混雑していて30分待ちの立て札があった。

「ほえー、やっぱり人気なんやね」

「そ、そうですね」

「……ん？ なあせつちゃん、あれって彩先生やない？」

「^?」

「ほら、あそこで茶々丸さんたちと一緒に並んでるん」

「（。D。）！？」

な、なななななな！？

マグダウエルさんと絡繰さんと知らない女生徒と一緒に！？

しかも、絡繰さんに手を取られている・・・！？

「せっちゃんどうしたん？」

「はっ！？ い、いえ、にゃ、にゃんでもないですよ！？」

「じーーーーー」

「あ、あの・・・」

「じーーーーー」

「え、えっと・・・」

「・・・ま、今回は保留にしとこか」

「・・・ほっ」

お嬢様に見逃してもらった私は安堵のため息を吐いた。

・・・昨日の今日で仕掛けてくるなんて、絡繰さんもやるな・・・。
私も負けていけない。

・・・もちろん、今はお嬢様と過ごすのが優先だが・・・。

一一一一一

暖簾を潜って教室内に入ってみると、掛け軸や絵画など、日本らしさを強調する飾り付けがされてあった。

麻帆良のような西洋風の造りも捨てがたいが、私にとってはやはりこのような造りの方が心が落ち着く。

どうやら彩さんたちとは入れ違いになったようで、中には姿が見当たらなかった。

私たちはちよつと高めの定食を食べたんだが、これがまた美味しいものだった。

学園祭の出し物として出すレベルを明らかに越えている気がした位だ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「美味しかったな」

「そうですね、学園祭の出し物であれほどの出来とは・・・」

昼食が終わって3-Dの教室を出る頃、私はそれなりにだがお嬢様と自然に会話が出来るようになってきた気がする。

思ったよりも美味しい昼食にありつけたことによって、お互い少し上機嫌になっていたからかもしれない。

「そうやね。あ、せっちゃん、次はどこに行くん？」

「あ、はい。まずは・・・ここに行きましょう」

ポケットから地図を出してお嬢様に見せる。

地図には私がつけた丸印がいくつかある。

「この丸がついてる所に回るん？」

「はい・・・えっと、いいですか？」

「嫌なわけないやん。せつちゃんが考えてくれたんやろ？楽しみやわ」

そう言ってニコニコと笑顔を向けてくれるお嬢様。

なんだか嬉しくなってくるな・・・。

この笑顔を見ていると、自然とこちらも笑顔になっていくのが分かる。

「行こ、せつちゃん」

「はい！」

side. out

side. 彩

・・・結局席に着くまで茶々丸と手をつないだままだった。

あ、3-Dの日本食だが・・・ものすごく美味しかった。
ていうか普通にお店とか出してもやっていけるレベルだと思う。
ちなみに、エヴァもさよも満足していたようで、顔が綻んでいるの
が見えた。

そして、今は・・・

「わっ！高いですねっ！」

観覧車の中にいる。

遊園地・・・っていうんだっけ？

とにかく、いろんなアトラクションがある所を巡っている。

「へえ・・・すごいもんだな。学園祭が一望できるよ」

「すごいもんだなってお前・・・まさか乗った事が無かったのか？」

「ああ、初体験だ」

「そうなのですか？」

「ちなみに、遊園地自体入った事が無い」

「自信もって言う事じゃないだろう・・・」

「・・・まあ、確かにな」

「お前の居た世界にはこういうのはなかったのか？」

「いやいや、あったよ。あったんだけど行く機会が無かったんだ」

ずっと田舎暮らしだったから、こういうのは名前しか聞いた事が無かった。

ちなみに、夏祭りとかは行った事があったけど、こんなに規模のかい祭りも初めてだ。

「む、そうなのか？」

「ああ、俺は田舎暮らしだったからな」

「ほう？それは初耳だな」

「そりゃ、初めて言ったからな」

「おい、揚げ足を取るな」

「・・・ごめんなさい」

「ふん、まあいい・・・それで？」

「それでってなんだよ？」

「お前はこういった生活をしていたのかと訊いている」

「それは私も気になります」

「あ、私입니다」

ここぞとばかりにみんなが詰め寄ってくる。
どんな生活って言われてもなあ・・・。

まあ、あの事件の後なんて普通に生活してただけだし。特に面白みも無いと思うんだけど・・・。

「どんなつて言われても、片田舎で普通に学生やってたとか・・・」

「そうなのですか？」

「ああ、普通に学校に通って、放課後はバイトしてって感じだったかな」

「バイト？一人暮らしでもしてたのか？」

「似たようなもんかな。妹とアパート借りて暮らしてたんだよ」

「・・・お前妹なんていたのか？」

「ああ。まあ、妹って言っても血は繋がってないんだけどな」

そういえば元気にしてるかな・・・。

家事は一通り出来るからあまりその辺の心配は無いんだけど、寂しがり屋だからなあ。

「どんな子なんですか？」

さよが訊いてくる。

「そうだな・・・ちょっと内気だけど、優しくて、気配りが上手で、なによりかわいい子だよ」

「へえ、妹さんの事を大事に思ってるんですね」

「ああ」

「む・・・」(茶々丸)

「ちなみにお名前は？」

「沙耶っていうんだよ。今年で14だから、みんなと同じ中学二年生だな」

— — —
— — —
— — —

結局、観覧車の中では俺の妹ークで残りの時間が過ぎていった。

・・・別にシスコンってわけじゃないぞ？本当にいい子なんだからな？

さて、今日の残りはザジのサーカスと、夜のライブか・・・。
その前にどこかで軽く休憩を取りたいな

第二十話（後書き）

書いてて思ったんですが・・・

刹那と茶々丸が暴走特急すぎる件 W W

そろそろ落ち着かせないと他のヒロインの入る余地がなくなってしまう W W

そして、彩にまさかの妹。

では、二日目パート2に続きます。

感想待ってます。

第二十一話（前書き）

二日目後編です。

ヒロインアンケートの現状を伝えようと思います。

一位 真名、のどか、裕奈

二位 木乃香

三位 エヴァ、ザジ

それと、まったく関係ないんですけど昨日ふと耳にした事がありました、

チワワって後ろから頭叩くと目が落ちちゃうって聞いたんですけど、
実際どうなんでしょう。さすがに嘘だと思えますけど・・・。

あ、ちなみに僕はそんなことどうでもいいんですけどね？

何を隠そう柴犬ラブなんです。

P・S・ 全国のチワワラブの方、申し訳ありませんでしたああ！！

以上、最近ノリがよく分からなくなってきた作者でした。

第二十一話

side・刹那

昼食も済み、一つ目のクラスに訪れた私たち。

『工学部プロデュース！レーザー銃シューティング』

名前の通り、麻帆良大の工学部が作ったアトラクションだ。

動くゴンドラのようなものに乗ってコースを回り、出てくる的を銃で狙って撃つものだ。

昨日彩さんと一緒にやってみたのだが、これがなかなか難しくくて、思うように点が取れない。

最高得点を収めた人には、最終日に景品が渡されるらしい・・・まあ、おそらく彩さんの手に渡るんだろうけど・・・。

察しがつくとは思いますが、彩さんの得点は100000点。

つまり、満点・・・全弾真ん中に命中させてとれる点数だ。

これには工学部の学生たちも開いた口が塞がらないようだった。当然の彩さんかというと

「ああ、まぐれまぐれ」

と、しれっとした顔で言っていたが・・・絶対嘘だと思う。
ミスショットなんて一度も無かったし、明らかに慣れた手つきだっ

た。

ちなみに、私は58000点。

彩さんの点数と比べるとかなり劣って見えるが、これでもそれなりに高い点数らしい。

今さっきリンク表を見てみたら、暫定11位だった。

・・・というか、100000点が一人増える。

登録名は・・・『MANA』。

龍宮・・・お前もか。

「面白そうやなく。せつちゃんってもう一回やってるんやっけ？」

「あ、はい。昨日に一度だけですが」

「そうなんや、何点やったん？」

「ええと、58000点でした」

「58000・・・ほえ、せつちゃん11位やん！うちも負けへんえ！」

やる気の炎をメラメラと滾らせているお嬢様。

私だって、今度は満点に近づけるように頑張ろう。

・・・

「お嬢様、右です！」

「あ、ホントや・・・って、せつちゃん前！前！」

「へ？あ！」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

結果、私が71600点、お嬢様64800点だった。

「あゝ、楽しかったなあ。せっちゃん何位やった？うち9位やったよ」

「あ、私は6位でした」

「ほえゝ・・・すごいなあ、せっちゃん」

「それを言うならお嬢様こそ、一回目の私の点数より上じゃないですか？」

「せっちゃんがサポートしてくれへんかったらもつと低かったえ。せっちゃんのおかげやな」

「そ、そうですか？」

「うんっ」

「・・・」

ニコニコと笑顔を向けてくれるお嬢様。
やっぱり、面と向かって言われると照れるな・・・。

「ん？どうしたん？」

「い、いえっ！なんでもありませんよ！？さ、さあ、次に行きましよう！」

そう言って、お嬢様の手を無意識的に握ってグイグイと引いてしま

う。

気づいてハッとした時にはお嬢様に手を握り返されていた。

「うん！次はどこやらな」

♪♪♪と、鼻歌を歌いながら私の手を握り、ぴったりと横に並ぶお嬢様。

しかも、先ほどよりも幾分か上機嫌になっている。

どうしてなのかは分からないが、とりあえずは楽しんでくれているみたいだ。

よし、この調子でいくぞ・・・！

side out

side 彩

俺たちは今、遊園地(?)のアトラクションをあらかた回り終わり、ベンチで一休みしている。

ちなみに、『全部』という言い表しをしなかった理由はおおよその見当が付くだろう。

「むう・・・」

さっきからずっと不機嫌顔を維持し続けているエヴァの様子を見てしまえば答えなんてわかったようなものなんだが、ここは『人間、言葉が無ければ伝わる事も伝わらない』という先人の教えに敢て従って言わせてもらおうと思う。

「まさか、身長制限があるなんて思わないよなあ」

「うっさいわ!」――ヒュン!――

荒ぶるエヴァのパンチをかわして、丁度目の前にあった柱のてっぺんの時計を見ると、3時36分。

ザジのサーカスが4時30分開演だったから、もう少ししたら移動を始めないといけない。

「だいたいな、幻術を使えば軽く足りてたんだぞ!」

「いや、あんな姿見たら正義の味方(笑)が騒ぎ出すだろうからダメだってば」

「むう・・・」

ちなみに、さっきからずっと似たようなやり取りを何度も繰り返している。

さっきまではさよも茶々丸も加わっていたんだが、三回目が終わったところで「私、なにか買って来ます!」と言ってさよは売店に走っていき、茶々丸に至っては突如出現した猫の親子に夢中になっている。

つまり、残された俺がエヴァの機嫌を取らなければいけないんだが・・・。

「なあ、そろそろ機嫌直せよ。他にも回れるところなんてたくさんあるんだから・・・」

「大体な、素直に従うお前もお前だ! 仮にも教師なら上手く論破して見せるものだろう!？」

・・・。。。

エヴァちゃん聞いちゃいねえよ・・・。

・・・っていうか堂々と職権乱用をさせようとするな。そんなことしたら俺がクビになるわ。

「うーん・・・どうすっかなあ・・・」

そんな言葉を呟いた時、

「た、ただいま戻りました!」

息を切らしたさよが戻ってきた。

それにしても、実にすばらしいタイミングだ。賞賛に値する。

「む、さよか。どこかに行ってたのか?」

さよが戻ってきたらさっそく落ち着きを見せるエヴァ。

凄いな。もうSPの効果が現れてるよ。

さよパワー

ていうかさよが居なくなってた事に気づいてなかったのか……。

「はい。飲み物買いに行ってたんですよ。エヴァさん、喉渴いてませんか？」

「む、そうか……すまん、さよ」

「いえいえ、エヴァさんにはいつもお世話になってるんですから
っ」

えへへ、と笑うさよに対して満更でもない表情を見せるエヴァ。

「あ、彩先生と茶々丸さんはコーヒーでよかったですね？」

「お、ありがとう」

コーヒーを二人分受け取ってさよにお礼を言う。

その内の一つを俺の左隣に座ってる茶々丸に渡そうと思ってみるが

「茶々丸、コーヒーだよ」

「……」

猫に夢中である。

とりあえず、懲りずに声をかけてみることにした。

「おい、茶々丸？」

「……」

うーん・・・まだだめか・・・。

よし、次は耳元(?)で言ってみよう。

「茶々丸ちゃん、コーヒーいらない？」

「ひゃっ!？」

ビクツとする茶々丸。

それに驚いた猫が逃げていく。

「さ、さささ彩先生!？どどどどうしたんですか？」

必死に冷静さを保とうとしてるけどおもいつきし動揺中の茶々丸。

「コーヒー、さよが買って来てくれたんだけど・・・これ、茶々丸の分」

「え? あ、はい・・・ありがとうございます」

もじもじしつつコーヒーを受け取る茶々丸。

さて、茶々丸が飲食物に躊躇い無く口をつけるようになったのは、食事が『取れない』ワケではなく、単に『必要じゃないだけ』という事がわかったからだ。

実は、昼食の時どうしても気になって訊いてみた

――
――
――
――
――

「食事を必要としないって言ってたけどさ、味覚があるってことは、単に『栄養補給を目的として食べる必要が無い』ってだけで『食事が不可能』ってわけじゃないんじゃないか？」

「「「え？」」」

「それに、料理の時はいつも味見してるだろ？その後ちゃんと飲み込んでるし」

「確かにな・・・」

「あゝ、なるほど」

「え・・・あの・・・」

みんなが納得する中、目をぱちくりさせておろおろする茶々丸。

「おい、彩、ハカセに電話してみろ」

「はいよ」

・・・というわけで、エヴァに言われて電話してみたところ

・・・

「なあ、茶々丸って食事できるのか？必要不必要関係なしで」

『うん、できますよー』

「え、マジで!？」

『・・・自分から振っておいて驚かないでくださいよ』

「・・・ごめん」

『ま、いいですよ。えっとですね、まず茶々丸のボディについて説明させてもらいますと「ストップ!」・・・はい?』

「食事が出来る事だけわかればよかったんだよ。ありがとな!」

『え、ちょっ―――』プツッ

・・・。。。

危ない危ない・・・もう少しで『ガイノイド講義・マンツーマン』が開講される所だ。

「で? どうだったんだ?」

エヴァが尋ねてくる。

まあ、俺の反応から予想は付いてるだろうけど・・・。

「ああ・・・思ったとおり、食事できるってさ」

――
――
――

茶々丸が食事を出来る事を知った俺たちは、茶々丸にもメニューを選ばせて一緒に食事をした。

初めての食事に少し戸惑っていた茶々丸だったけど、だんだんと箸

が進むようになっていき、気づけば一食をペロリと完食していた。どうやら茶々丸の口に合う物だったらしく、顔がいくらか綻んでいた。

まあ、そんな事があって茶々丸はみんなと食卓を囲んで楽しく食事が出来るようになったわけだ。

・・・さて、現在午後4時3分。そろそろ行かないと席が取れなくなるかもしれないな。

「よし。みんな、そろそろ次に行くか」

side. out

— — — — —
— — — — —
— — — — —

side. 刹那

午後7時30分。

大通りがパレードで盛り上がる中、私はお嬢様と一緒に女子中等部の屋上にやって来た。

ちなみに、今のところ私たち以外に誰の姿も見当たらない。つまりところ貸切状態だ。

「うわああ〜綺麗・・・」

「本当ですね・・・」

確かに、この高さから一望する学園祭の風景は、どこもかしこも彩られていて綺麗だ。

だけど・・・私は風景を見るために、この誰もいない屋上に来たわけじゃない。

お嬢様に告げなければいけないことがある。

――今日一日お嬢様と一緒に学園祭を回って、本当に楽しかった。

――私のいきなりの申し出に嫌な顔一つせずに応じてくれて、本当に嬉しかった。

だからこそ、面と向かって告げなければいけないことがある。

今日、私に昔と変わらない笑顔を向けてくれたこの子に。

今日、私に昔と変わらない温もりをくれたこの子に。

私のすべて・・・私の正体を彼女に告げなければならない・・・いや、告げたいと思う。

これは、これからの私を始めるための儀式のようなものだ。

これを話せなかったら、私はこの先ずっとお嬢様の前で自分を偽ることになる。

さあ言え、覚悟は決めたはずだろう桜咲刹那！！

自分に誇りを持って生きると、彩さんと両親に誓っただろう！！

「お、お嬢様・・・あの・・・」

緊張してしまった口から絞り出すように声を発する。

練習は少しだけしたが、やっぱり本番と練習は違う・・・。

「ん？なあに？」

変わらない笑顔で振り返るお嬢様。

「えっと・・・実は・・・ずっと言いたかった事が、あつて・・・」

「うん。言ってみ？」

私の表情から読み取ったのか、お嬢様の表情が穏やかなものに変わる。

まるで、赤子をあやす母親のように。

「この一年と二ヶ月、私はひどく素っ気無い態度をとっていると思われているはずですよ」

「・・・うん、そうやね。ホントの事を言うところちょっと寂しかったんよ・・・」

緊張が落ち着いた私が静かに言うと、お嬢様も少し寂しそうな顔をして言った。

「どうしてやったか・・・教えてくれるん？」

「・・・はい。全て話します・・・聞いてくれますか？」

「うん」

「では・・・まずは見てもらいたいものがあります。どうか大声を出さないでください」

「・・・うん」

私の意志が伝わったのか、真剣な表情になるお嬢様。
私は周りから見えていないことを確認して、翼を解き放った。

「・・・え？」

少し驚くお嬢様。

まあ、初めて見せるんだから無理も無いと思う。

「ちなみに手品などではなく、真正銘本物です。嘘だと思うのなら触ってみてもかまいません」

そう言って服を上げて背中を見せる。

「・・・ううん。せっちゃんが言うんやから、信じるえ」

「・・・ありがとうございます。見ての通り、これが私の正体です。
この姿、あなたにはどう映りますか？」

「え、どうって・・・すごく綺麗やと思うよ。もしかして、せっちゃんって天使やったん？」

「い、いえ、天使だなんて・・・っと、私は天使ではなく、鳥族と人間の間に生まれたハーフなんです。」

て、天使なんて言われるなんて思わなかった。
おかげで少しだけ照れてしまった。

「えっと・・・うぞくってなんなん？」

「あ、すみません。烏族と言うのは黒い翼を持つ人型の妖怪のことです」

「え、でも・・・」

「お嬢様の言いたい事は分かります。私の翼は白い。お嬢様は『天使』と言ってくださりましたが、烏族にとってはそんな綺麗な存在ではないんです」

「・・・え？」

「この白い翼は烏族最大の禁忌。それも、私のような人間との混血児だと言うのなら尚更忌むべき存在となります」

「そんな・・・じゃあせつちゃんは・・・」

「・・・はい。両親が亡くなった後、里を追い出され、行き倒れていたところをお嬢様のお父上に拾われました」

「!！」

「・・・」

それから、私は彩さんに語ったようにお嬢様に話した。もちろん、魔法、退魔業などについてはぼかしてあるが。

「・・・そういうことがあって、私はお嬢様のそばに居てはいけないモノなのだ・・・お、お嬢様!？」

チラッとお嬢様の方を見ると、お嬢様は涙をポロポロと零して

いた。

「えっと、お嬢さ「せっちゃん!!」!？」

そして、気づけばお嬢様に抱きしめられていた。

「せっちゃん・・・ごめんね」

「え？」

どうしてお嬢様が謝るんだろう。
謝るべきなのは私のはずなのに・・・。

「ずっと、一人で苦しんだのに・・・うち、全然気づけへんくて・・・!」

「え・・・」

「あんなに一緒に居だのに!・・・うぢ、何もでげべんぐで・・・
ごめんね・・・ぜっちゃん・・・ふえええええん」

涙声で嗚咽を漏らしながら一生懸命言葉を発するお嬢様。

・・・。

私は・・・本当に、馬鹿みたいだ。

この姿を見たって、このちゃんはこのなんにも私の事を思ってくれて
いるのに・・・。

何時だって私の事を気にかけてくれていたのに・・・。

それに比べて私はどうだ。

私の事を思ってくれる言葉をつっぱねて、挙句の果てには逃げ出して・・・。

・・・結局、余計なバリケードを作っていたのは私の方だったんだね。

本当に・・・馬鹿じゃないか。
悔しくて涙が出てくる。

・・・そんなに謝らないでよ、このちゃん。
謝るべきなのは、うちなんやから。

「・・・うちかてこのちゃんのこと避けてばかりで・・・寂しい
思いさせて・・・謝るんはうちの方なのに・・・！」

「グズッ・・・ううん。せっちゃん、謝るんはうちのほうや・・・」

「そ、そんな・・・うちの方やって・・・」

「うちやって！」

「ちやうよ、うちやって！」

「「むゝゝゝ！」」

「「・・・ふふっ」」

あまりにも子供みたいなやり取りに、二人で噴出してしまう。
まるで昔に戻ったみたいだ。

・・・まったく・・・。

「どちらが悪いと思っているのなら、どちらとも謝ってしまえばいい」

きっと彩さんなら、こんな事を言うんだろうな・・・。

「「あははははは！」」

「・・・せっちゃん、ごめんな・・・うち、なんにもでけへんくて」

「ええんよ、このちゃん・・・うちこそごめんな、こんなにもうちの事思ててくれたんに」

「ええんよ、せっちゃん。でも・・・」

「でも？」

「これからは普通に話せるんよね？せっちゃん」

「・・・うん！」

二人でもう一度抱き合って、涙を流した。

そして、二人で顔をあわせたときには、二人とも涙でくしゃくしゃでそんな顔を見合わせていっぱい笑った。

・・・。

こうして、私たちはあの時と同じ・・・いや、あの時以上の幼馴染になった。

side. out

「そろそろ話は済んだかな？」

「「え!？」」

二人が振り返った先に居たのは彩だった。

彩は屋上の、室内に繋がる扉がある所の上に腰掛けていた。

「え、彩さん・・・何時からそこに？」

「今さっき来たところだよ。それはそうと、そろそろ翼仕舞った方がいいんじゃない？」

「え?・・・はっ!? み、見んといてゝ!？」

刹那は自分の格好を思い出して顔が真っ赤になる。

背中のかなり上の方まで服を上げているため、下着が丸見えになっている。

翼を仕舞って急いで服を下ろす刹那。

まあ、もちろん彩は下着が見えていることを指摘したかったわけではないのだが・・・。

――ヒュン!!――

「うおっ、危え・・・って金槌!？」

突如顔面に向かって飛んできた何かをかわし、その正体を見て更に

驚く彩。

飛んできた方向を見てみると、木乃香がとてもいい笑顔をしていた。ちなみに木乃香はまだ、彩が刹那の翼の存在を知っている事を知らない。

「・・・彩くん？」

「は、はい!？」

「今見た事「こ、このちゃん!彩さんは全部知ってるんよ!」・・・へ?」

木乃香がどんな意味で何を言おうとしたか察しが付いた刹那は、木乃香を後ろから抱きしめてなだめる。

「・・・おほん、彩さんは私の事情を全部知ってます。私がこのちゃんに全部話そうと思えたのも、彩さんのおかげなんです」

「え? そうなん?」

「は、はい」

「え・・・えっと、ごめんな?彩くん。うち、知らへんくて・・・」

今度はひどく申し訳なさそうな顔で彩を見る木乃香。
対する彩は、特に気にした様子も無く

「ま、まあ・・・誤解が解けたようだなによりだよ・・・っと」

軽くため息をついて屋上に飛び降りた。

「ああそうそう、二人とも」

「「?。」」

「あと10分位したら2—Aのみんなが来るからさ、顔拭っておい
た方がいいぞ?」

「「へ?。」」

「涙で凄い事になってる」

「「!?。」」

ついさっき二度も泣いた事を思い出した二人は、顔を真っ赤にして
ポケットからハンカチを取り出し、顔を拭い始めた。

「さ、彩くん、何時まで見てるん!?!」

「ちょ!あぶっ!」——ヒュン!ヒュン!——

片手で顔を拭いながらも片方の手で金槌をブンブン投げるとい
う高等技術を披露する木乃香に対し、ちゃっかり木乃香の陰に隠れて
顔を拭っている刹那の姿があった。

これではどちらが護衛か分からなくなってしまうものである。

そして、十分後にクラスみんなが目にしたのは、笑顔で彩に向か
って金槌を投げ続ける木乃香と、愚痴を吐きながらもそれを華麗に
かわす彩の姿だったという。

第二十一話（後書き）

上手くまとまったか分かりませんが、和解させました。

もしかしたら、何度か書き直すことがあるかもしれませんが・・・。

それと、現在「彩の過去編」の構成を平行して練っています。

登場人物設定と大まかなストーリー展開は大体整ってきました。

彩の過去編はタイミングのよさげな場面で入りたいと思っています。

それと、次は三日目。

鬼ごっこです。

そして、真名のO☆H A☆N A☆S H Iとはいったいなんなのか。

感想、指摘、何でも待っています。

全力で返信しますのでお気軽にどうぞww

おまけ 二日目の打ち上げ(前書き)

おまけです。

少しぶっ飛んでますが作りました。

あと、何時の間にかPV210000、ユニーク210000 いました。

みなさん、ご愛読ありがとうございます!!

これから頑張ります!!

おまけ 二日目の打ち上げ

『・・・・・・・・』

屋上に集まった2-Aの面子は啞然としていた。

——ヒュンヒュン！——

笑顔で金槌を投げる木乃香。

——シュババツ！——

それをバック転で華麗にかわす彩。

——ヒュルル・・・・・・・・ぱしっ——

まるでブーメランのように持ち主の手に戻る金槌。

「・・・・・・・・」

2-Aのみんなに同じく、啞然としている刹那。
・・・・・・・・

そして、戻ってきた金槌を再び投げようとする木乃香。

「ちよっ、木乃香ストップ！！みんな来たから！」

「え？あ、ホントやね」

「・・・ほっ」

安堵の表情を浮かべる彩だが

「隙ありっ♪」ーヒュン！ー

「ちょ、危ねっ！・・・し、死んだらどうする！？」ーサッー

「あ、大丈夫だよ。今ギャグパートやから」ーぱしっー

「いや、現実になんねえよ！？」

「いやいや、それがあるんよ」

明らかにテンションがおかしい二人である。

木乃香のノリに少し悪ノリをした彩だったが、調子に乗りすぎて謎のハイテンションシンドラームに飲み込まれていた。

・
・
・
・
・
・

そんなやり取りがしばし続き、

「・・・」

「・・・」

沈黙する二人。

そして、沈黙によってさっきの異様なテンションからクールダウンして我に返り始める。

所謂『賢者タイム』である。

悪ノりをしばらく続けて、遂には2－A全員の前で晒してしまったわけだ。

「（……え、何このテンション怖い）」

二人の表情はだんだん苦笑いへと変わっていく。

「……………」

「……………」

「な、なあ……………」

「ごめん……何も言わんというて」

「……………」

「……………」

アイコンタクトをして頷き合う彩と木乃香。
そして

「さ、打ち上げ始めるぞ（え）～～」

『ええ!?!』

・・・。

こうして打ち上げは始まった。
それにしてもこの二人、なかなか良いコンビである。

――

――

――

――入り口付近――

「あ、茶々丸さん」

「？木乃香さん、どうされましたか？」

「今日のお昼に彩先生と手、繋いどらんかった？」

「！？な、ななななぜ！？」

「うーん、なんでやろな〜♪」

「~~~~~！！」

「え、なににに！？絡繰さん、彩先生とデートしてたの！？」

「な、なんだって〜！？それ、本当なの！？」

「え、その・・・し、失礼します！」

「あ、絡繰さんが逃げた〜!」

「まってよー!」

「そうだ、絡繰さんが居ないんだったら、彩先生に! 彩せんせ〜!」

・
・
・
・
・

――同時期・奥側付近――

「彩先生」

「ああ、タカミチ先生・・・お疲れ様です」

「彩先生こそね。ひどく疲れた顔をしてるよ?」

「あゝ・・・まあ、疲れたと言えば疲れたのかもしれませんが」

「ははは、エヴァに連れ回されたりしたのかい?」

「それもあるんですが・・・やっぱり、俺自身がはしゃいじゃった
りしてたのかもしれないね」

「彩先生がかい?」

「え、ええ。なにしろ、こんなに大規模なお祭りは初めてだったの
でつい・・・」

「ははははは」

「どうかしましたか？」

「いや、ごめんごめん。やっぱり、出来のいい弟を持った気分だと思ってるね」

「弟・・・ですか？」

「うん。ちょっと子供っぽい面はあるけど仕事はきちんとこなす、そんな姿を見るとつくづくそう思うんだ。」

「はぁ・・・」

「うーん・・・やっぱりよく分からないか「彩せんせー！！」・・・おっと、どうやらお呼びのようだよ？彩先生？」

「・・・何これ嫌な予感しかない」

「・・・」

この後、2-Aの子たちにもみくちゃにされる彩と、それを見守りながら微笑むタカミチの姿があった。

おまけ 二日目の打ち上げ（後書き）

次こそ本当に三日目です。

鬼ごっこです。

鬼ごっこオンリーに仕上がるかもしれません。

感想、意見、お待ちしております。

作者はこれらに全力で返信する気力を持ち合わせていると思います。

第二十二話（前書き）

鬼ごっこ前編です。

書いてたらテンション上がってきてやらかしました。
その結果がこれです。

読んでやってください。

第二十二話

学園祭三日目。

この日は午前中でクラス、部活、サークル企画の出し物は終わり、残りの時間は終日イベントの準備に勤しんでいた。

ただ、準備とは言っても別に大規模なものではない。

参加者は動きやすい服装に着替えて待機するだけだ。

そのため、暇な時間で教室の片づけをするクラスもある。

一方、教師陣は世界樹広場に集まっていた。

side. 彩

午後になった。

2-Aは最後まで大きな失敗はすることなく、好評のまま終わりを迎える事が出来た。

そのおかげで売上金ものすごい事になっているらしく、みんな目が点になっていた。

ああ、そうそう。

のどかは、日に日に指名される回数が増えていた。

今日なんて、『おどおどしてる姿キャウワイイ!!』と言って指名されまくっていた。

ハラハラしながら見守っていたんだが、2－Aのみんなに励まされて、少し疲れた顔をしていたがなんとか全部裁ききっていた。

練習の成果・・・かはわからないけど、最初の彼女からは想像も出来ないような進歩だと思う。

もちろんのどかだけじゃなく、みんなもすごく頑張っていた。

こういう学校行事ではみんなのいつもと違った一面を見ることができるから、クラス全体の仲が深まるきっかけになると言う事を改めて知った気がした。

そして、俺たち教師陣は今、おにごっこの鬼の方のルールの最終確認をしていた。

現在、何時に無く真面目な顔をした学園長が説明をしているところだ。

「では、繰り返すぞ。一つ、開始時刻は2時30分。終了時刻は6時じゃ」

『はい』

「二つ、鬼となる先生は、工学部が作成した特殊手袋を装着する事。この手袋の手の平には特殊なインクを使用したスタンプがあり、捕まった生徒を特定する事が出来るようにするためじゃ」

『はい』

「三つ、行動範囲は麻帆良全域じゃが建物の中は禁止じゃ」

『はい』

「四つ、赤丸の付いた六名の先生は40分経過ごとに二人ずつ加わるものとする」

『はい』

「五つ、言うまでも無いのじゃが、双方乗り物などを使用しての逃走、追跡は禁止じゃ」

『はい』

「特に気をつけるべきことは以上じゃ。皆は教師じゃから大丈夫だと思うが、イベントだからと言って度が過ぎた真似はせぬように」

『はい』

「以上じゃ。皆準備にかかるのじゃ」

『はい』

解散した先生たちは、既に着替えを終えていたため、準備運動に入った。

俺は、いつも刹那との稽古の時に着ているジャージ姿だ。

・・・そりゃあ、稽古でスーツなんて着ねえよ。

あれ、結構高かったんだよ・・・それに、身動きの範囲も限られるし。

さて、形だけだけど俺も準備運動でもしておくか。
そう思っていると・・・

「ふんっ！ふんっ！ふんっ！ふんっ！」

・・・。。。

・・・。。。

みんなが屈伸運動なりラジオ体操なりをそれぞれやっている中、一人だけのすごい形相でヒンドウスクワットをしてる先生がいる。
・・・。

「ふんっ！ふんっ！ふんっ！ふんっ！」

・・・。。。

「ふんっ！ふんっ！ふんっ！」

おい、マジか。

なんかもうやる気があるとかそう言う話じゃn「ふんっ！ふんっ！ふんっ！ふんっ！」
・・・。

「ふんっ！ふんっ！ふんっ！ふんっ！」

・・・うるさいな。

どこのブートキャンプだよ・・・カンベンしてくれ。見てて暑苦しいわ。

「ふんっ！ふんっ！・・・ふう・・・む？」

「！？」

やべえ・・・目合っちゃったよ。

ガチムチ体型に浅黒い肌・・・西洋系の顔にスキンヘッド・・・

・・・あ。あの先生ってアレじゃん。

赤丸付けられてて、学園祭初日に俺に話振ってきたあの先生だよ。顔に似合わずやたらと日本語が上手い英語教師。

確かロスマー先生だっけ？

それにしても・・・面倒そうだ。

「いやあ先生！暑いですな！準備運動はすませましたか！？」

うわあ・・・こっち来んなし。

そんな姿見てるこっちは暑さ四倍増しくらいに感じるんだぞ。ていうか本当に熱気がパネェ・・・。

「え、ええと・・・これからですね。そちらはもうお済みで？」

「はっはっはっは！いやあ、まだまだですよ！どうですか、一緒に！？」

「え・・・遠慮します」

「はっはっは！そうですか！まあ、やりたくなったらいつでも来てください！」

はっはっはっは、と高らかに笑い声を上げながら元の場所に戻っていった。

・・・うわあ、なんか今度はポーチからゴムバンド出したよ。
何するんだろ・・・。

・・・いや、やめよう。気にするだけ無駄だ。

とりあえず、始める前から度を越えちゃったあの先生は意識の外に
はずす事にした。

・・・ああいう軍人っぽいタイプの人はどうも苦手なんだよなあ。
我ながらよく対応しきったと思う。

・・・さて、俺もそろそろ準備運動始めるか。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

とりあえず申し訳程度に一通り準備運動を済ませた。
一方、ロスマー先生はというと

「ぬうあ！ぬうあ！ぬうあ！ぬうあ！」

ゴムバンドを装着して腕立て伏せをしている。
・・・あれっでもう準備運動じゃないよね。

・・・

よし、今度こそ意識から外そう。
見てると体感温度が増すしな。

・・・さて、開始まであと一時間近くある。
しかも、俺とタカミチ先生は最後の追加要員だ。
つまり、実質あと三時間近くあるわけだ。
俺・・・超ヒマじゃん。どうすんべ？
そんな事を思っている

「あら、彩先生」

「あ、しずな先生。こんにちは」

通りかかったしずな先生に声をかけられた。
ちなみにしずな先生は鬼じゃなく、審判の一人になっている。

「ええ、こんにちは。もう準備は整いましたか？」

「はい。後は出番を待つだけです」

「あらあら、やる気満々ですね。最近は暑くなってきたので熱中症
には気をつけてくださいね？」

「はい。しずな先生も気をつけてくださいね」

「うふふ、ありがとうございます。では、彩先生も頑張ってください
いね」

そう言ってしずな先生は去っていった。

しずな先生は、タカミチ先生のように俺によく気を配ってくれる。
それに、女子校の先生をやってる俺にとっては、生徒との接し方の
相談を受けてくれる女性教師がいてくれるのは本当にありがたいと

思う。

ちなみに、俺やタカミチ先生と席が近い事もあって、主要雑談参加メンバーである。

彼女の話はためになる内容が多いから、俺もよく学ばせてもらっている。

さて・・・またヒマになってしまった。

どうすっかな・・・。

――――
――――
――――

結局、何をするでもなくただぶらぶらしてるだけだった。

時刻は2時半のちょっと前。

つまり、おにごっこ開始になる。

現在、和美がアナウンスでルール説明をしている。

この内容は・・・まあ、さっき学園長の話してた事とあまり変わらないから割愛させてもらおうかな。

『では、開始10秒前！9、8、7、6、5、4、3、2、1、始め！！』

合図と同時に先生34人が世界樹広場から駆け出した。

・・・俺たちも入れて40人なんだけど、ちょっと足りなくない？
相手100000人近くいるんだぞ？

全員捕まえる事を前提とすると1人辺り2500人捕まえなくてはならなくなる。

・・・2500だぞ？

小学生が混じっているからといっても安心できる数ではない。

まあ、みんな全員捕まえる気なんて微塵も無いみたいだったけど。
・・・ただ一人を除いて。

「ハッハア！腕が鳴りますなああ！！！」

ロスマー先生だよ・・・。

もう面倒だからみんなして放置しているんだが、放置？だからどうした、と言わんばかりにさっきから五分に一回くらいこうして雄叫びを上げている。

一人挟んで向こう側に居るんだが、正直鬱陶しくて敵わない。

さっきから五分おきに話しかけられている隣の先生が不憫に思えて仕方が無い。

――
――
――
――
――

約八十分後、待ちに待ったロスマー先生たちの出番がやってきた。
ていうかロスマー先生・・・。

和美がアナウンスで紹介をしているが、そんなものには全くと言っていいほど耳を傾けていない。

その目はまるで獲物を狙う肉食獣の如くギラギラと輝いている。

・・・今更なんだが、本当に先生なんだろうか。

最早ただの危険人物に思えてならない。

『では、ロスマー先生、中里先生、どう「ヒヤツツツツハアアアアアア！！！！！！！！」・・・ぞ？』

和美の合図が終わる前に、すさまじい雄叫びを上げて風の如く突っ走っていった。中里先生は啞然としている。

・・・。

・・・何あの先生。

なんで肩にスパイクアーマー装着してるの？

度がすぎるっていうレベルじゃないじゃん。

・・・だれか止めろよあの猛獣。絶対怪我人出るから。

――――

――――

――――

更に三十分後。

残り約76800人。

和美のアナウンスが始まり、俺たちの紹介が始まった。

『さあ、次に追加されるのは我等が2-Aの担任、高畑・T・タカミチ！授業は優しく、丁寧に進めてくれ、生徒の相談にもいつでも乗ってくれる！校内では生徒から高い人気を誇り、校外では広域指導員としても信頼されています！その笑顔とは裏腹に、ものすごく強く、不良たちからは「デス眼鏡」という通り名まで付くほどです！』

・・・和美クオリティハンパない。

見ろよ、あのタカミチ先生の顔が若干引きつってるぞ。

『そして！！』

え・・・俺もやるの？

『続いて紹介しますのは、我等が副担任、久寿野彩！この春に流星の如く現れて、2-Aの副担任の座に着いた16歳という若さの数学教師！彼の授業も丁寧かつ分かりやすく、職員室に質問に行けば、笑顔で説明してくれる上に、高校生の質問まで受け付けてしまうスパー16歳だ！また、女子寮の管理人としての仕事も申し分なく家電の修理、備品の修理、その他もろもろ何でもござれ！それに加えて広域指導員の仕事までこなしてしまい、笑顔で不良を殲滅して行くその姿からついたあだ名は「笑う悪魔」「麻帆良のリーサルウェポン」！さあ、そんな寧猛二人を相手にしてはたして逃げ切る事が出来るのか！？』

・・・ジーザス。

・・・。

・・・。。

おい和美。

俺がいったい何をした！？

ていうか『笑う悪魔』って何！？

『麻帆良のリーサルウェポン』って何ぞ！？

街中でたまに聞く名前だと思ったら俺のことだったかよ！？

抗議したくて仕方が無い気持ちを抑えていると、タカミチ先生と目が合った。

「…………ハア」

ため息がはもっただけだった。

互いの励ましの言葉さえ浮かばない。

これ、麻帆良全体に放送されてんだぜ？

敵にすら回してないのにこれだけの仕打ちを受けるんだぞ？

敵に回ったらいったいどんな目にあうんだろう・・・想像すらしたくない。

俺は和美の敵には絶対にならんぞ・・・。

・・・そういう教訓を得たのです。

『さあ、最後の2人が開放されるまで・・・10!』

俺たちのメンタルをブレイクした張本人は、俺たちの事なんか構いなしにカウントを始める。

・・・和美、マジで覚えてろよ？

『9、8、7、6、5、4、3、2、1、始め!』

「・・・・・・・・」

『あ、あれ？あのく初めていいですよく?』

「・・・・・・・・行こうか」

「・・・・・・・・そうですね」

「・・・・・・・・ハア」

出だしから大不調だった。

第二十二話（後書き）

カオスですね W W

次話とかいったいどうなるんでしょう。

たぶん明日には載せられると思いますが・・・やり過ぎないようにします。

感想、意見、いつでもどうぞ。

作者は全力で返信します。

あ、ヒロインアンケートも待っていますよ？

第二十三話（前書き）

おにごっこの続きです。

今回はオール彩視点です。

ていうか、最近 হচ্ছেতেきましたよね W W

なんか最近前書きで書くことがあまりにも無い事に気が付きました。

第二十三話

side. 彩

・・・・。

和美からの公開処刑に等しい紹介をされ、タカミチ先生と一緒に最悪のスタートを切ったんだけど・・・

「・・・・・・」

・・・寒気がする。

別に、ロスマー先生が居なくなったおかげで体感温度が下がったからではない。

なんか、こう・・・一歩踏み出したら何かしらが起こる気がする。

そう、例えば900m先の建物の屋上でPSG-1を構えている褐色スナイパーが行動を起こすような気がしてならない。

・・・・・・。

ヤツは、ロスマー先生が出動して二十分位してからあの場所に出現した。

そして、こちらに照準を合わせて硬直している。

銃口の角度的にヘッドショットを狙ってるのは間違いないだろう。

・・・さて、逝ってみようか。

俺が前に足を踏み出した次の瞬間

———・・・ビチャッ———

・・・・・。

・・・・・。

俺のすぐ左の地面が蛍光ピンクに染まっていた。

ペイント弾だ。

俺が前に進む、と見せかけて右に移動しようとしたのには気が回らなかったようだ。

『おおーっと！彩先生に何者かがペイント弾で襲撃！これは予想外だ！』

「・・・チッ」

・・・ガチの舌打ちありがとうございます。

俺の聴力を舐めないでもらいたい。

デビルイヤーなんか足元にも及ばないわ。

さて、まずは真名を捕まえに行くか。

建物の中には入れないから、こっそり絶影つかって上ろうかね。
目立たないところでなら少しだけ使っていいって言われたし。

———
———
———
———
———

――――

そういうわけで、80人ほど捕まえながら真名が居る建物の下に着いた。

まだ移動してないみたいだから、さっさと捕まえちゃおうか。

・
・
・
・
・

「真名ちゃんめーっけ！」

「な、後ろから！？どうやって・・・」

「まあ、そこは企業秘密で」

「・・・はあ。やっぱりダメだったか」

「なにが？」

「彩先生ピンク色計画」

「なにそれこわい」

「あーあ、成功したら売上金の半分がもらえたんだけどな」

「そんなあくどいことすんなや！？金の亡者め！」

「いやいや、私もピンク色になった先生が見てみたかったからね」

「えー・・・」

「ああ、そうだ。そういえば先生にはO☆H A☆N A☆S H Iがあったね」

「えゝゝゝな、なんででしょうか」

「さよのことだよ。どうして教えてくれなかったんだい？」

珍しくムスツとした顔で真名が言う。

やっぱり、少なからず寂しかったらしい。

「ええとな、最初は真名も知ってるのかと思ってたんだ。けど、一週間経ってもさよと話していないのを見て、やっと真名が気づいてないのがわかったんだ」

「へえ？で、それでも教えてくれなかった理由はなんなんだい？」

どんどんジト目になっていく真名。

なんだか居たたまれなくなってくるゝゝゝ。

「あ、ああゝゝゝさよの体を作った時にな、学園祭当日に会って驚かせてやろう、って俺が提案したんだよ。まあ、教えなかったのは悪かったと思ってるよゝゝゝ」

「ゝゝゝゝゝゝ」

「ゝゝゝゝゝゝゝ」

「ゝゝゝはあ、仕方ないね。学園祭を楽しんでいたさよに免じて、今回は水に流すよ」

「・・・それはどうも」

「それに・・・まあ、気づかなかった私もいけなかったんだしね」

「はぁ・・・」

「体ができたおかげでさよと触れ合うことも出来るようになったし・
・その、感謝しているんだ」

そっぽを向いて頬をかく真名。本当に珍しい事もあったものだ。

「そっか」

「ああ」

「そんじゃ、真名も捕まえた事だし、俺は他の子を捕まえに行くよ」

「そうか、頑張ってくれ」

「おう、じゃあな」

そう言って建物の陰に飛び降りる。

・・・。。。

さっき真名にタッチして初めて気づいたんだが、この手の平のスタンプ・・・

『彩先生に捕まっちゃった、てへっ☆』

2-Aのトップ2が作ったものだから嫌な予感はしていたんだ。
名前付きとかマジでやめてくれよ。恥ずかしいわ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

残り一時間。

俺が捕まえた人数は3200人。

商店街の路地裏やわき道にうようよ居たから、そこを攻めてみた。
結構捕まえたつもりなんだが、それでも残りは三万人弱だ。

さて、後はどこを探そうか・・・

「ハッハア!!先生!!」

うわぁ、出た。

「あ、ああ・・・どうも」

「ハアッハア!!どうしましたか!まさかバテてしまいましたか!
」?

「先生は元気ですね・・・」

「ツハア！まだまだこの程度、全然いけますYO！」

もう誰だよこの人。

見るたびに性格が掴めなくなっていくんだけど・・・。
ていうか暑苦しい。

頼むから早くどっか行って下さい。

・・・あ、そうだ。

「あ、先生！あそこにまだ捕まってない子が！」

ビシッとあらぬ方を指差してみる。

もちろん誰の気配もない。

まあ、さすがにひっかからな「ヒヤツツツハアア！！」・・・。

・・・。

・・・。

血走った目をした猛獣が一匹走っていった。

・・・よし、今の内にここから離れよう。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

更に二十分経過。

残り四十分。

残り24000人。

俺は更に1700人捕まえた。

変わった事といえば、工学部の作った鬼撃退トラップが暴走しすぎて軽傷者がちらほら現れ始めた。

俺とタカミチ先生は、トラップを見つけたら破壊して欲しい、と学園長から連絡された。

俺はまだお目にかかっていないけど、いったいどんなモノが仕掛けられてるんだろ・・・

そんな事を考えていると、早速発見。

どうやら、ドラム缶型の自動迎撃ロボットのようだ。

ゴム弾を正面を中心に左右およそ120度の範囲で発射可能・・・のようだ。

どうやら自動照準がイカレてしまつて、ターゲットの見境がつかなくなっているらしい。

それにしても・・・本当にこの世界の科学技術は進歩しすぎなんじゃないだろうか。

大学の生徒が自主制作するようなクオリティだとはとてもじゃないが思えない。

・・・。

とりあえず、人目につく事を前提に行動しないといけない。

素手で一気に片付ける位なら、認識障害で何とかなるだろう。

――ウィーン・・・ガチャッ！――

ドラム缶があらぬ方を向いている。

・・・その先には、アキラとまき絵がいた。

「ね、ねえ、もう鬼いない？」

「うん、いないみたい」

「よ、よかった。私もう疲れちゃったよ」

「私も少し疲れたかな。ちょっと休もうか」

どうやら、こちらにもドラム缶にも気づいてないようだ。
撃たれる前にアレを破壊しないと・・・。

多分、ある程度接近したら迎撃をするように設定されているんだろう。

幸い、この周辺には人の気配はほとんど無いし、こちらに意識を向けてる人もいない。

ならば、俺が取る行動は一つ。

ドラム缶の正面に移動し、銃口を曲げて、外装を破ってコードを引きちぎる。

俺は足音を敢てたてながらドラム缶に接近した。

足音を聞きつけたドラム缶は反応して、照準をこちらに向ける。

——ウィーン・・・ガチャッ！——

予想射撃範囲に入ってから一気に加速し、一速で距離を詰める。

——ガチャン！——

銃口を掴んだ瞬間、弾の装填する音がした。

俺はそのまま銃口を縦に捻じ曲げ、銃口の稼動範囲の隙間から手を突っ込み、手についたコードを力任せに引きちぎった。

。。。。。

ドラム缶はそれっきり動かなくなった。

——ガゴォオン！！——

試しに蹴り飛ばしてみるが、反応は無い。

ただのガラクタのようだ。

「え、彩先生！？」

「まき絵、逃げない！」

さすがにこれだけ音がすれば気づかれるわな。

アキラとまき絵が逃げていく・・・が、

「そいつは御屋が許すまじ！」

「「え！？」」

。。。

。。。

それなりに速く走って、アキラとまき絵を捕まえた。

アキラはどうやら、まき絵にペースを合わせていたようで、割と遅めだった。

「ハア・・・ハア・・・先生速いよ」

「・・・うん、私もびっくりした」

「まあ、赤丸追加要員だからな」

「笑う悪魔だもんね」

「う・・・」

生徒にまで言われた・・・もう泣いてもいいですか？

「そ、それに、麻帆良のリーサルウェポンって・・・」

「・・・OTZ」

「せ、先生どうしたの!？」

「・・・和美許すまじ。

この恨み晴らさでおくべきか・・・。

ていうか、アキラまで・・・アキラにまで言われるなんてっ！

「うう・・・アキラにまで言われた・・・泣いてもいいですか？」

「え、え？」

「あゝ、アキラが先生泣かした」

「え、そんな・・・ま、まき絵だって」

「アキラだけは味方だって信じてたのに……」

「え、あの……」

茶々丸並みにおろおろし始めるアキラ。

……なんか見てると和むな。

「あ、あの……先生」

「ん？」

「これ、あげますから元気出してください。あと、私は先生の味方ですから」

そういつて俺に渡してくれたのはスポーツドリンクだった。

そういうえば、まだ一度も水分補給してなかったな。

まあ、その前に汗すらかいてないんだけど……。

「先生に会ったら渡そうと思ってたんですけど、なかなか会えなくて……。だから、温くなっちゃったんですけど、よかったら……」

……マジか。

そうだ。もともとこういう気遣いが出来る子だったな。

正直とても嬉しい。

アキラ……なんていい子なんだっ。

「アキラ」

「はい？」

「俺もアキラの味方だからな。何かあったらいつでも言うんだぞ」

即座に立ち直ってアキラの頭を撫でながら言う。

「え、えっと・・・はい」

きょとんとしたまま頷くアキラ。心なしか顔が少し赤い気がする。
・・・っと、そろそろ急がないと時間が終わっちゃう。

「それじゃ、これありがとな。そろそろ行くわ。2人とも、気を付けて戻れよー」

「はーい、先生も頑張ってね！」

「はい、先生も気をつけてくださいね」

第二十三話（後書き）

まだおにごっこが続きます。

・・・長いっすねWW

次でおわるかなあ・・・学園祭。

感想、意見、いつでもどうぞ!!

第二十四話（前書き）

すみません、ニア・レプリカントを買ってハマってました。

さて、彩の初めての麻帆良祭の結末やいかに

本当に前書きで書く事が無いですねWW

第二十四話

side. 彩

『3、2、1、終了〜〜〜!! 皆さん、お疲れ様でした!! 生徒の皆さんは後夜祭の準備に取り掛かってください!』

午後6時。

和美の放送で、鬼ごっこという名の地獄は終わりを告げた。

・
・
・
・
・

それにしても、最後の三十分は一番密度が濃い時間だった。

ドラム缶の暴走に便乗するかのようにロスマー先生が暴走の度合いを上げ、

楓と菲は鬼なんてお構いなしにドラム缶の破壊に夢中になったり、それに続くかのように一般生徒たちがドラム缶に飛び掛るが返り討ちにあったり、ととにかくえらい事になっていた。

ちなみに、暴走したロスマー先生は、何時の間にか失神して地面に転がっているところをタカミチ先生に拘束され、現在保健室で寝ているらしい。

ロスマー先生討伐の様子を目撃した生徒によると、ロスマー先生は女子中等部の生徒らしき子を追いかけていたらしい。少しすると、「このちゃんに何をしている!!」という声が聞こえた後に、突如出現したもう一人の女子中等部の生徒らしき子がロスマー先生の顔面に飛び膝蹴りをお見舞いして、一撃で沈黙させたらしい。

・・・まあ、この点については深く考えなくてもいいだろう。

これを機に、ロスマー先生にはスパイクアーマーやひゃっはーとは縁を切ってもらいたいものだ。

だいたい、まだ21世紀になって間もないんだから、どちらかといったら新世紀的にいけばいいと思う。

さて、この鬼ごっこなんだが・・・もらえる景品が豪華なのは、鬼をやった先生の方だ。

残った生徒にも景品はあるが、先生たちがもらえるものと比べると多少見劣りしてしまう。

残った生徒には後から各担任が後夜祭で渡すことになっているが、先生は世界樹広場で受け取ることになっている。

・・・何故か表彰つきで。

side out

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『では、結果を発表します。残った生徒の数・・・14427人で

す』

鬼ごっこの結果発表が、和美の放送で開始された。

世界樹広場には教師全員が集まっていて、ほとんどの先生が疲れた顔をしていた。

「ああ、彩先生。お疲れ様」

「タカミチ先生も、お疲れ様です」

彩に話しかけるタカミチも、心なしか疲れた表情をしている。

ちなみに、先生はクラスごとに別れて並んでいるため、彩とタカミチは隣同士で並んでいる。

『では、続いて・・・たくさんの参加者捕まえた鬼ベスト5を発表します。まず、第五位・・・ミハイル・ロスマー先生。記録、782人です』

「・・・・・・・・」

ロスマーの名前を聞いた彩とタカミチは表情が固まった。

この鬼ごっこのおかげで、2人はロスマーに対し激しい苦手意識を持つ事になったからだ。

もちろん、この2人だけということは決して無く、周りを見渡せばほとんどの教師陣の表情が凍り付いている。

『え、ええと・・・第四位は、中里明良先生。記録、921人です』

ロスマーの名前が発せられた瞬間に訪れたダウンナーな空気に若干圧されながらも和美が続ける。

ちなみに、中里先生は特にこれといった特徴もなく、目だった印象も無い先生だったが、これを機に生徒からの人気が上がったのはまた別の話。

『続いてはトップ3の発表です！第三位は、神多羅木先生。記録は・
・すごい、3024人です！』

驚きの声を上げる和美や一般教師に対し、やはり沈黙を貫く神多羅木。

だが、どこも無く満更でもないような表情をしている。

『第二位は・・・高畑・T・タカミチ先生。記録・・・え、嘘！？
ろ、6472人です！！』

教師陣は声をあげて驚く中、彩とタカミチは苦笑いをしていた。

「タカミチ先生・・・」

「いやあ・・・つい気分が上がっちゃってね」

彩の視線に対してあはは、と少し子供っぽく笑いタカミチが応える。

・
・
・

・
・
・
・
・

軽くとがめるような視線を送る彩だが、彼はまだ気づいていない。

自分の方がとんでもない記録をたたき出しているという事に。

『続いて第一位の発表です！気になる第一位は・・・久寿野彩先生

です!』

「・・・え？」

無情にも放たれた言葉に、彩の表情は固まった。

「・・・彩先生、いったい何人捕まえたんだい？」

さっきとは逆に、今度はタカミチから問われる彩。

その表情は未だに固まったままである。

「そんな・・・あんまり目立ちたくないから、三位辺りになるつもりで途中まで計算してたのに」

「・・・途中までなんだ」

・・・

『ええーと、記録は・・・え？嘘？すみませーん、これって何かの間違いじゃないですか?』

「「・・・」」

和美のその言葉から事態を把握した2人は最早言葉を発する事は無かった。

『え!?!間違いない!?!?・・・えっと・・・し、失礼しました。彩先生の記録はなんと、10203人!10203人!驚異的な人数です!麻帆良のリーサルウェポンの異名は伊達ではなかったあ!』

はたして、一時間と三十分でこれだけの人数が捕まえられるものなのだろうか。

「・・・今回に限って、彩は認識阻害に救われる事になった。」

「彩先生・・・」

「・・・やりすぎたのは俺でした」

彩の肩にポン、と手を置くタカミチと、がっくりと項垂れている彩の姿がそこにはあった。

周りから見たら、『普通逆だろ?』と思わせるような光景である。

結局、教師陣は少し訝しげな顔をしたまま結果発表が終わり、表彰もそのままの様子で終える事となった。

— — — — —

— — — — —

— — — — —

— — — — —

side. 彩

「・・・はぁ・・・」

もう何度目か分からないため息をついて、後夜祭を過ごしている。

和美の放送を聞きながら作業をしていたらしいみんなは、俺とタカミチ先生がみんなのところに戻ると、それはもういろんなことを言ってくれた。

『お疲れ様』に始まり『さすがリーサルウェポンアル』まで、ソフ

トランディング式にどんどんメンタルをブレイクする内容にシフトしていった。

・・・

おかげで今の俺は真っ白に燃え尽きている。
芝生の上で仰向けにゴロ寝状態だ。

向こうの方ではキャンプファイヤーをやって盛り上がっているみたいだが、俺にはそんな元氣は全くと言っていいほど残っていない。
ちなみに、今なら目を瞑った瞬間に眠れると断言できる。

「ハッハッハッハ。彩、随分と疲れているようだな」

寝転がっている俺に最初に声をかけたのは意外にもエヴァだった。
何が愉快なのかはわからないが、大層機嫌がよろしい。

「そりゃ、あんだけ言われたら精神的に疲れもするわ」

「ククク、麻帆良のリーサルウェポンねえ・・・随分な言われようじゃないか」

しゃがんで俺の頬を人差し指で突つつきながら言うエヴァ。
というか、爪が長いから地味に痛い。

「勘弁してくれよ・・・言われるこっちの身にもなってくれ」

「なんだ、嫌なのか？せっかく通り名が付いたと言うのに」

「お前、街中で呼ばれるところ想像してみろよ」

「・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・フツ」

「あ、お前今笑ったろ!？」

「アハハハハハハ!」

「・・・・・・・・」

「ま、まあ・・・フフツ・・・頑張・・・フフフ・・・がん・・・フハハハハハハ!」

「・・・・・・・・OTZ」

「ハハハハ・・・はあ、久しぶりにこんなに笑わせてもらったよ」

「俺は笑われただけだったけどな・・・ていうか、結局何しに来たんだ?」

「お前をからかいに来ただけだが?」

「ちくしょう、そういう事だろうと思ってたよ!」

「もう十分笑わせてもらったからな・・・そろそろ茶々丸とさよの所に戻るか」

じゃあな、と言って、悪魔のような少女は去っていった。
ここに残されたのは俺だけ・・・

それでも、エヴァにツッコミを入れたりしたせいかな、テンションがものすごく中途半端だ。

おかげで、ゴロ寝する気にも戻れない。

よし、なら俺もそろそろみんなの所に行くか。

……って言っても、5 mくらいしか離れてないんだけど。

•

•
•
•
•

•
•
•

「あー、彩先生来たよ！」

「先生やつと来たの？遅いよー」

明るい声に迎え入れられ、俺は2-Aのキャンプファイヤーに参加した。

そこでは、今日の鬼ごっこでの武勇伝を語る子、

クラス企画での裏話を教えてくれる子、

面白い出し物を見つけた話をする子、

この三日の間で作った思い出をとて楽しんで話している。

俺としても、とても充実した時間を過ごせたと思っている。

ここに来て初めての学園祭。

みんなと作った初めての学園祭。

・
・
・
・
・

本当に楽しい思い出を作る事が出来た。

来年の学園祭も、みんなとこうして過ごせたらいいな・・・。

花火で彩られた空を背景に、そんな事を考えながら俺の初めての学園祭は幕を閉じた。

第二十四話（後書き）

一万人越えは少しやりすぎた感がありますけど・・・ま、大丈夫ですよね W W

次回からは日常編に戻ります。

感想、意見、待ってます。

作者は全力で返信します W W

第二十五話（前書き）

学園祭後の日常編です。

夏休みに入るとイベントがたくさんありますし、夏休み編が少しだけ長くなるかもしれませんねww

さて、ヒロイン化アンケートの現状を報告いたします。

一位 真名、のどか

二位 裕奈、木乃香

三位 エヴァ、亜子、夕映、和美

っていう感じです。

第二十五話

七月上旬の終わり頃。

期末考査も終わり、後は終業式を待つだけとなった生徒たちを尻目に、彩たち教師陣は生徒の通知表につける評価を付けている。

とはいっても・・・彩の場合は、担当したクラスが中間も期末も平均点数は超高得点であったため、彩がパソコンに打っている数字は4と5だけである。

外野視点で見ると、それなりにとんでもない事だが、職員室中の先生は不自然ともなんとも思っていないかった。

・・・それもそのはず。

平均点を60点に想定されているテストを出していると言うのに、この三クラスの平均点数は87.94点。

現在、他のクラスでは追試験まで考えられてる中、この三クラスだけは涼しい顔をしている。

そのおかげで他クラスからは『数学御三家』という通称が付く事となった。

「あゝ・・・やっと終わった」

担当クラス全員分の評価がやっと終わり、机の上を片付けながら伸びをする彩。

「お先に失礼します」

「あ、お疲れ様です」

と、いつもの挨拶をして彩は寮に戻った。

— — —
— — —
— — —

s a i d e . 彩

やっと評定が全て付け終わった・・・。

これで、今の所は特に大きな仕事もあらかた片付いたため、俺も終業式を待つだけとなった。

この二週間と少しで変わった事と言えば、さよの復学が決定したということだ。

ただ、この時期からだと色々面倒ごとがあるため、二学期からの復学扱いとなる。

・・・。

・・・それにしても、さよを見た学園長の反応は多分一生忘れないだろう。

椅子から転げ落ちて狼狽する様は、見ていて実に滑稽なものだった。寿命がちつとばかり減ってしまったかもしれないが、日々突拍子の

ないことを言ってくるあの人にはいい意思返しになったんじゃないだろうか。

「・・・ふふっ」

「??・・・彩さん、どうしたんですか?」

「ああ、この間学園長にさよの復学のことを話に行ったときの事を思い出してさ」

「ああ、相坂さんの・・・なにがあったんですか?」

「それがさ・・・連れて入った途端に目を見開いて、口をパクパクさせて固まったと思ったら、今度は椅子から転げ落ちてさよのこと指差して『で、出たー!!』なんて言いながら部屋の隅まで後退っていくんだよ」

「え・・・が、学園長がですか?」

「そ、学園長が」

「・・・ふふ」

「・・・」

「あはははははー!!」

腹を抱えて大爆笑をする刹那。

無理も無い。ボケをかましまくってはいるが、あの人は腐っても責任者。

カリスマ的なものは一応持ち合わせているわけで、それなりに周りからの信用も厚いわけだ。

そんな人が、女子中学生との出会い頭に慌てふためくという姿を想像したら誰だって笑ってしまうものだろう。

あの時あの場所にいた全員だって、肩を震わせて後ろを向いていたくらいなんだから。

――――

――――

――――

「あははは・・・はあ、これはさすがに・・・」

やっと笑いが収まった刹那。目には涙が溜っている。

それにしても、刹那がこんなになってまで笑う姿を初めて見た。

どうやら、木乃香との仲直りで色々吹っ切ることが出来たようだ。

「さて・・・前振りが長くなっちゃったけど、そろそろ始めるか」

「はい！」

さっきまで緩んでいた表情が一気に引き締まる。

知っての通り、ここは森の中。これから稽古が始まるわけだ。

刹那は順調に力を付けている。

学園祭期間はすこしゴタゴタとしてしまったためあまり相手が出来なかったが、そんな心配は無用だと言う事がこの二週間でわかった。

「重心のコントロールは完璧だし、今日からは相手の動きを先読みする手段についてやっていこうと思う」

「先読み・・・ですか？」

「そう。根拠の無い『予測』とは違う。相手の仕草、目の動き、重心の位置、光、影、音・・・感覚を研ぎ澄まして、あらゆる情報から相手の動きを『先読み』して行動するんだ。見てから動くのでは、さすがに遅いからね」

「そ、そんなことが出来るんですか？」

「これから出来るようにするんだよ。経験と技術を積み重ねて感覚を研ぎ澄ませる・・・しばらくは剣とはちよつと離れる事になるけど、これが出来るとなれば戦闘をかなり有利に進められるようになるんだ」

「なるほど・・・それで、私はどうすれば？」

「一つ一つの感覚を順番に鍛えていくんだよ。幸い、一番難しい重心についてはもう心配は要らないみたいだから・・・まずは音、聴覚の強化をしよう」

「はい」

「方法は至ってシンプル。視覚に頼らず、聴覚のみに頼って過ごす。つまりところ、目隠しだな。ちなみに、やった事はあるか？」

「いえ、一度もありません」

「だよな・・・この練習方法なんだけどさ、ちよつと難点があるんだよ」

「難点？」

「一日短時間の練習じゃほとんど身に付かない」

「え！？な、ならどうすれば・・・」

「その点なんだけどさ、ちよつとだけ裏ワザを使おうと思う」

「裏ワザ・・・ですか？」

「そう。多分何とかできるからあんまり心配しなくてもいい。とりあえず、今日は軽く触れる程度にしておこう」

「はい」

そうして、ポケットから目隠しを取り出そうとした時、俺は結界の反応に気が付いた。

・・・侵入者。

どうやら、今回は召喚された妖怪の類だけじゃないようだ。おそらく術者も入り込んできているんだろう。

「刹那」

「・・・侵入者ですか？」

俺の雰囲気から察したであろう刹那の顔が少し強張る。

一月前の事を思い出しているんだろうか・・・。

あの時のことは、俺にとっても苦い思い出。

俺の配慮が至らなかったせいで、刹那に怪我を負わせてしまった・・・。

――守るべきものを傷つけられて悔しかった。

――守るべきものを傷つけた鬼に腹が立った。

――そして、なによりも・・・配慮を怠った自分自身に腹が立った。

・・・もうあんな失敗は二度としたりはないし、するつもりもない。

「ああ、どうやら固まって動いているらしい。行けるか？」

「はい」

「よし、じゃあ急ごう」

side out

「何・・・あれ・・・」

アキラは目の前の光景に絶句していた。

彼女の目の前に広がるのは、地面に描かれた陣から這い出てくる異形、異形、異形。

そして、その傍らに佇むのは不適な笑みを浮かべる妙齡の男が数名。息を殺してその様子を木の陰から覗いているアキラの背中は冷や汗でぐっしりと濡れていた。

side. アキラ

少し遅くなってしまった部活の帰り、冷蔵庫の飲み物が無くなってしまった事を思い出してコンビニに買いに行っていた。・・・ついでにちよつとだけお菓子も買っちゃったけど。

そして、帰り道の途中で空を見上げてみたらとても星が綺麗だった。だから、もう少しだけ星空を見ていたくて少しだけ遠回りをして寮に帰ることにした。

だけど・・・それが私の運命を大きく変えることになってしまった。

「何・・・あれ・・・」

男の人が地面に何かを書いたと思ったら、そこからたくさん鬼や獣があふれ出てきてる。

そして、出てきた鬼たちは気だるそうな関西弁で男の人たちといくつか会話をしている。

―――どう考えても現実のものとは思えない。だから夢に決まっ

てる。

そんな思考を何度頭の中で作り出したか分からないくらい考えて、そのたびに自分の頬をつねってみた。

そして、つねった痛みで何度も現実にも引き戻されるのと一緒に、背中を伝う汗の感触で体が強張っていくという悪循環。頭では夢だと思っても、体がその考えを拒絶する。

――怖い

――このまま見つかってしまえば、きっとひどい目にあわされる。

そんな思考に囚われて、私はこの場所から動く事が出来なかった。息を殺してこの場をやり過ぎそうとはしているけど、何時まで持つかわからない。

膝はさっきから笑いっぱなしで、寒くも無いのに肩も震えている。

・・・本当に怖い。

気を抜いてしまえば今にも悲鳴を上げてしまいそうだ。

「そんじゃ、はよ行こか」

私の必死の努力をあざ笑うかのように、その声はだんだんと大きく聞こえてくる。

ズシン、ズシン、と明らかに人では出せそうに無い足音を立てて、何かが私の居る方向に歩いてくる。

――早く逃げないと

頭は指示を出すのに体が思うように動かない。

だけど、足音はどんどん近づいてくる。

――動け

――早く動け

頭は更に必死に指示を出すのに、体はやっぱり動いてくれない。

木の横に伸びている何かの影はどんどん大きくなってきて、そして・
・その何かと目が合った。

「あん？お嬢ちゃん、こんな所でなにやってんねん」

「ひっ・・・！」

鬼は、私を見るなりそんな事を言った。

私は恐怖で声が出せず・・・ただ、尻餅について後ろに後退ることしか出来なかった。

すると、鬼の隣にいた男の人たちが私を見て何か思いついたような顔をした。

「この制服・・・木乃香お嬢様と同じやな」

「うん？・・・ホンマや」

「・・・え？」

木乃香って・・・近衛さんの名前だ。

どうして近衛さんの名前が出てくるんだろう。

「なあ、お嬢ちゃん、近衛木乃香ゆう子知っとるか？お嬢ちゃんと

同じ学校やねんけど」

明らかに害意を持っている声色だった。

たぶん、知っているって答えたら居場所を聞かれる。

そして、居場所も答えたら絶対に近衛さんに危害が加わる。

私の中ではそんな方程式が成り立っていた。

「え、えっと・・・し・・・知りません」

やっとの事で搾り出した声は、案の定震えていた。

そして、私の答えを聞いた人たちはため息を一つついて、

「ま、そんな上手くいかんもんやもんな。しゃあないわ」

「せやな・・・んじゃあ、このお嬢ちゃんどうするん？ 思いつきし見られてるやんけ。お前、まさか人払い掛けてなかったんか？」

「あん？ 人払いはお前の担当やんけ。ま、記憶でも消して制服剥げばええんやない？ そうすりゃ潜入できるで？」

「そやなあ・・・この嬢ちゃんには悪いんやけど、俺等も仕事やから。堪忍な」

まるで当たり前のような顔をしてそんな事を言い放った。

第二十五話（後書き）

というわけで、予告どおりアキラに少しスポットを当てていきます。
裏に関わってしまったアキラの運命は？

そして、それを知った彩の心境は？

続きに期待していただけたら幸いです。

それからですが、まだヒロインアンケートは募集してますよ。
まだ投票していない方は投票してみてはいかがでしょう？

第二十六話（前書き）

本当は昨日載せるつもりだったんですけど、最初に書いたものがありにもゴタゴタしまくっていたので書き直していました。

ヒロインアンケートは、明日菜が若干追い上げてきましたねww
果たしてヒロインになれるのか!?

7/7 アカシックレコードの表記を変更しました

第二十六話

「い、いや・・・」

目に涙を溜めて震えながら後退るアキラにジリジリと詰め寄っていく三人の男。

一方、鬼は興味が無くなったのか、獣とじゃれている。

「お嬢ちゃあん、そんな怖がらんでええよ。ちつとも痛ないでえ」

震えるアキラを見て、まるで楽しんでいるかのように口元を歪める男。

そして、ポケットに手を入れ、文字が所狭しと埋められている札を取り出した。

「ああ、あったあった・・・嬢ちゃあん、運がええなあ。これは俺の特製や。ちよつと効果が強すぎて、記憶全部飛んでまうかも知れへんけどな」

そう言って、心底気味の悪い笑顔を浮かべる男。

そして、男の手がアキラの頭に触れようとした時

「あん？なんや兄ちゃ・・・グボア！！」

「おい、どうし・・・ぐあっ！」

何者かの蹴りを食らったらしき鬼が、アキラに近づく男たちを巻き込んで吹っ飛んでいった。

「え・・・？」

アキラの涙でにじんだ視界に映ったものは、彼女たちのよく知る少年と少女だった。

side. 彩

「つつつ・・・兄ちゃん、やってくれるやんけ。せつかくイイところやったのに・・・ただで済むと思うとるんか？」

術者の一人が起き上がってヘラヘラと悪態をついてくる。

おそらく、コイツらが学園長の言っていた過激派という連中なんだろう。

本当に・・・過激派というのはどこの世界でも変わらないんだな・・・。

性根の腐ったゴミクズばかりだ・・・会話する意味すら見出せない。

「・・・・・・・・」

「おい兄ちゃん、何とか言ったらどうやねん」

会話をするつもりが無い、というこちらの意思表示を全く読み取れていないのか、相変わらずの間抜け面で男はヘラヘラとしている。

「・・・・・・・・」

「もしかして怖いんか？せやったら、そこの嬢ちゃんと一緒に忘れさせたるで？」

そう言って俺の後ろの方を指差す。

指を指されたアキラは顔を強張らせて怯えている。

コイツら・・・・まだアキラを怯えさせるつもりなのか・・・・？

「どや？俺のとくs「黙れ」・・・・あん？」

いい加減、殺気が抑えられなくなってきた・・・・。

・・・・本当に、何から何まで変わらないな。

これ以上このクズどもの言葉を耳に入れていたら、本当に殺してしまいたい。

side out

side. 刹那

「黙れ」

今まで聞いた事の無いような低く鋭い声で、その一言は放たれた。

・・・

今、目の前にいるのは本当に彩さんだろうか。

今の彼には、いつものような穏やかな雰囲気は微塵も感じない。感じられるのは、相手に向けられた明確な怒気と・・・殺気。

おそらく・・・大河内さんを危険に晒した過激派に対する怒り。

それから、多分だが・・・事態を未然に防ぐ事が出来なかった、という自責の念に囚われているんだろう。

だけど、実際に悪いのは長の方針に従わずに好き勝手に動き回っている過激派であって、彩さんが責任を感じる事なんてないはずだ。

「刹那」

不意に名前を呼ばれた事で、私の思考は中断された。

「は、はい！」

「アキラを頼む」

「わ、わかりました」

それだけのやり取りをし終えると、彩さんは無手のままで過激派のいる方に向かっていった。

「さ・・・桜咲さん、いったい何が起こっているの？あれは何？」

「詳しい話は後で話します。お怪我も無いようですのし、ご無事で何よりです」

息も途絶え途絶えに尋ねてくる大河内さんに定型文の返答を返す私。
うーん・・・クラスメイトなんだから、もう少し言い方はなかった
んだろうか・・・。

それにしても・・・たった一人でこんな光景を目にして気を失わなかったのは本当にたいしたものだと思う。私だって始めて鬼を見たときは悲鳴くらいは上げたような覚えはあるんだが・・・

「そ、そうだ・・・それよりも彩さんは！？あんなに大きいのを相手にして平気なわけないよ！」

「あ、ああ・・・彩さんなら」

大丈夫です、と言おうと思ったその時

――ズドドドドドオオオオオン！！――

重量のあるものが倒れる音が何重にも重なって聞こえてきた。

その方向を目を凝らして見てみると、彩さんを中心にして、鬼や獣が無造作に横たわって消えていく姿があった。

そして、残ったのは術者の男三人のみ。

先程までのヘラヘラとした顔とは似ても似つかない表情をして凍りついていた。

side. out

side. 彩

馬鹿みたいに同時に襲い掛かってきた鬼と獣を一瞬で仕留める。
多方から迫り来る敵を仕留めるのに使った技は、アカシックレコード根源の渦から読み得た技の内の一つ。

刀を使わない、一族相伝の剣術。

己自身を一本の刀に仕立て上げるといふ異常性を持ち、七代に渡りようやく完了に至った、日本至上最強と言われる異端の剣法。

その七代目当主が編み出した奥義・・・七つの構えから繰り出されるそれぞれの奥義をほぼ同時に繰り出すという離れ業の改良版。
レンジ対応人数は1〜7。襲い掛かってきた敵の数が7体だったから反射的に使ってしまったが・・・。

明らかにオーバーキルだ。・・・やはり、雑魚相手に使うものじゃない。

少し頭に血が上りすぎていたようだ。

「な、なんや・・・今、いったい何をしたんや!？」

「答える義務は無いだろう」

先程まで余裕そうにヘラヘラしていたのが、今では一転してひどく狼狽している。

この状態ではまともな判断を下す事は不可能だろう。

こういうタイプは追い込まれると何をしでかすか分からないからな。

とりあえず・・・トチ狂った行動をされる前にコイツらを押さえる。

そうしたら、学園長にでも引き渡せばいいだろう。

やることの決まった俺は、一息で三人との距離をつめた。
そして、相手の反応を待たずに意識を落としかかった。

一人目と二人目の鳩尾に拳を入れ、残った三人目には膝蹴りをお見舞いした。

接近戦に慣れていなかったであろう彼等には、それだけで事足りた。
防御も受身も取ることとは適わず、その場に崩れ落ちた。

そして、崩れ落ちた三人を魔力で構成した糸で縛り上げ、学園長に連絡を入れて回収を頼んだ。

さて、侵入者はこれで片付いた・・・だけど、問題がもう一つだけ残っている。

・
・
・
・
・

「彩さん！」

2人のいるところに戻ってみると、アキラが涙を流しながら飛びついてきた。

「な!？」

「え、ア、アキラ？」

「よかった・・・無事で・・・。あんな大きい鬼と戦って・・・もしやられちゃったらって思ったら・・・私・・・」

そう言って涙をポロポロ流すアキラ。

その肩が小刻みに震えているのが、触れなくても分かる。

多分、俺たちが来る前から溜まっていた不安や恐怖も一緒になって一気に爆発したんだろう。

「大丈夫、俺は勝ったしどこも怪我なんてしてないよ。心配してくれてありがとうな。それと、来るのが遅くなってごめんな。アキラ、怖かったろ？」

「はい・・・怖かったです。本当に・・・怖くて怖くて・・・殺されるんじゃないかって・・・」

「本当に、ごめんな・・・」

「そ、そんな・・・謝らないでください。彩さんは私を助けてくれ

たじゃないですか」

「だけど・・・」

「怖かったですけど、彩さんに助けてもらったから、もう大丈夫です。そんな顔をしないでください」

「アキラ・・・」

涙の跡が残る顔で笑顔を作って俺を励ましてくれるアキラ。
あんな事があった後だって言うのに俺し気を遣ってくれる・・・本当に優しい子だ。
これじゃ、どっちが年上か分からなくなっちまうな。

「彩さん・・・」

何時の間にか見詰め合う形になっていた俺とアキラ。

・・・

「・・・こほん。それで、これからどうするんですか？」

「わっ、さ、桜咲さん・・・」

ようやく口を開いた刹那からの確な指摘が入った。
そして、なぜか刹那にジト目で見られる。

ちなみに、これから・・・というのは言うまでも無くアキラの事だ
彼女には選ばせないといけない事がある。

これ以上裏に関わることなく表を生きるか、裏に関わりながら生きるか・・・。

どちらにしろ、彼女の生活は今までと比べて多かれ少なかれ変わってしまう事になる。

俺としては彼女の意思を尊重したいと思うが、できることなら前者を選んでもらいたい。

・・・

さて、アキラも気持ちが落ち着いてきたようだし、そろそろ話すべきだろう。

・・・本当に気が引ける話だが、当事者となってしまった彼女には知る権利があり、その場に居合わせた俺たちには説明の義務がある。

「アキラ、俺たちに訊きたい事があるだろう？」

そう切り出してみると、アキラは顔を少し強張らせて頷いた。

「・・・はい。教えてくれるんですか？」

少し戸惑いも見えるが、向けられた瞳にはしっかりと意思が籠っている。

「ああ、全部話すよ。これから言う事をよく聞いてほしい」

・・・

・・・

・・・

・・・

「・・・ここまでは、俺の知ってることの全部だよ」

「そんな・・・」

俺はアキラにさっき起こった事の詳細・・・関東と関西の関係、鬼を始めとする妖怪の存在、呪術と呼ばれる秘術の存在に加えて、魔法に関連する話も一通り話した。

一般人目線から聞いたら馬鹿みたいに思うような話なんだが、当事者だったアキラは話した全てを真剣に聞いてくれた。

だけど、さすがに少なからずショックはあったようで、少し青い顔をしていた。

「どれも突拍子の無いなことばかりで頭が上手く回らないだろうから、すぐに理解しようとしなくてもいいよ。それから、俺からもアキラに一つだけ訊きたいことがあるんだ」

「え？」

「これらを知った君は、これからどうするんだ？」

side out

side. アキラ

「そんな・・・」

彩さんから聞いた話は全て耳を疑うような内容ばかりだった。

世界には魔法があって、妖怪がいる。

そして、この麻帆良には魔法使いがいっぱいて、関西の人たちや、外から攻めてくる人たちからここを守ってる・・・。

そして、関西の人が狙ってるのは近衛さんで・・・考え込めば込むほど頭がこんがらがってくる。

・・・だけど、全部本当の話。

今日私が体験したことがそれを証明していた。

「どれも突拍子の無いことばかりで頭が上手く回らないだろうから、すぐに理解しようとしなくてもいいよ。それから、俺からもアキラに一つだけ訊きたいことがあるんだ」

「え？」

訊きたい事ってなんだろう・・・。

「これらを知った君は、これからどうするんだ？」

「え、どうするって・・・？」

「明日からどう過ごすつもりなんだい？ 今日のことをすっぱり忘れて日常に戻るのか、それともこのまま足を踏み入れるのか・・・」

さっきよりも真剣な表情で彩さんが尋ねてくる。
だけど、今の私には忘れるだなんて選択肢は無い。

「みんなが命の危険を冒してまで麻帆良を守ってくれているのに・
・見て見ぬふりなんてできるわけありません！」

熱くなった私は迷わずにこう言った。

すると、彩さんは真剣な表情を崩さずにこう返してきた。

「一度関わればもう後戻りはできなくなる。一晚経って、冷静にな
ってからもう一度よく考え直せ。明日もう一度訊くから。それと・
・」

門限すぎてるから早く帰ろう、と言って先を歩き始めた。
私と桜咲さんは、そんな彩さんの後に続いて歩き出した。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

――
――
――
――
――
――

こうして、私にとってとても長かった夜が終わった。

結局寮につくまで会話は一切なく、軽く挨拶をして別れたんだけど・
・別れ際に彩さんが少しだけ悲しそうな顔をしていたのはなんで
なんだろう・・。

第二十六話（後書き）

彩さんが少しキレイました。

それでも、さすがに雑魚相手に七花八裂はやりすぎましたかね・・・

でも、反省はしてませんww

感想、意見、待ってます。

第二十七話（前書き）

家の冷凍庫にすいかバーがあると「夏になったな」って思います。

さて、ヒロインアンケートですが・・・

明日菜の快進撃がハンパじゃありません。

先週まで六位付近だったのが今では二位ですWW

いきなり過ぎて、不覚にも目を疑ってしまいました。

第二十七話

翌日の昼過ぎ、アキラは彩の部屋を訪れていた。

ミニテーブルを挟んで向かい合う二人は真剣な眼差しをしている。

side. アキラ

「それじゃあ、アキラの考えを聞かせてくれるか？」

「はい。私は、やっぱり忘れて生きる事は出来ません」

「!・・・そうか。理由を訊いてもいいか？」

私の答えを聞いた彩さんは、一瞬辛そうな顔をしたように見えた。

一晩が過ぎて、私は色々と考えてみた。

考えてはみたけど、やっぱり私の答えは変わる事は無かった。

私が平穩に暮らす裏で、彩さんや桜咲さんを始めとする大勢の人たちが自分の危険を顧みずに戦っているんだと思うと胸が痛くなる。私がみんなと笑っている間に彩さんたちが傷つき、私が寝ている間に彩さんたちが苦しんでいたりする姿を想像すると、涙が零れた。

そして、やっと気づいた。

昨日の夜に彩さんが悲しそうな顔をしていた理由……。

裏に関わって、生徒が傷つく事が嫌だったから。

だから、考え直すように私に言ったんだと思う。

だけど……私は彩さんたちに傷ついて欲しくない。

私にも出来る何かがあって、それをする事で彩さんたちが傷つく可能性が減るんだったら……私は彩さんたちと一緒に戦いたい。そして、麻帆良のみんなを守りたい。

彩さんには申し訳ないとは思うけど……それが私の答え。揺ぎ無い私の気持ち。

上手く言えたか分からないけど、その旨を彩さんに話してみた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

短いようで長かった沈黙が終わり、彩さんは口を開いた

「……わかったよ、アキラ……出来れば日常に戻って欲しかったけど……」

「彩さん・・・」

「これからの方針を話そう。付いてきてくれ」

「はい」

・・・よかった。

なんとか彩さんに認められることの出来たみたい。

でも、話をするって言っても・・・いったいどこでするんだろう・・・？

side. out

— — —
— — —
— — —
— — —

side. 彩

今、俺たちはダイオラマ魔法球・・・エヴァの別荘に居る。

ここでもう一日まるまる使って刹那の修行や、アキラの戦力アップが行える。

ここに来たばかりの時、アキラはかなり驚いていたんだが、少し時間が経った今は落ち着きを取り戻している。

ちなみに、刹那は木乃香と明日菜と一緒に出かけているから今は居ない。

・
・
・
・
・

アキラとの話が終わった後、エヴァの家に向かった。

アキラの意思と覚悟は、最初から最後までアキラらしいまっすぐな志が感じられた。

裏に足を踏み入れる事になってしまうのは悲しいけど、彼女が決めたんだから俺にはとやかく言う資格は無い。

なら、俺がするべきは彼女が生き残るための技術を与える事だ。

身を守る術から敵を倒す術まで、俺が教えられることは全て教えよう。

そう、心に決めた。

・
・
・
・
・

「じゃあ、アキラには今日からここで力をつけてもらう」

「はい！」

目に炎が浮かび上がっていきそうなくらい気合の入った返事をするアキラ。

今日やることはといっても、アキラの戦闘スタイルを確立させる事と、魔力か気のどちらを主体として扱うかを決定して、軽く基本を教えるくらいだ。

俺が見る限りでは、アキラは気を扱った近接格闘タイプが向いていると思うている。

とりあえず、基本スペックを測ってみる事にした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「・・・・・・マジかよ」

「おいおい、これは・・・」

学校で行われる体力テストのようなものをさせてみた所、アキラはとんでもないスペックを誇っているという事が発覚した。

瞬発力、筋力、動体視力、持久力・・・その全てがとんでもなく高い。

エヴァでさえ少し顔を引きつらせている。

ちなみに、俺の目から見たアキラの近接戦闘スタイルの適正レベルは

格闘術…A++

柔術…A++

剣術…B++

槍術…B+

棒術…B+

といった具合で、どれも高い適正を誇っている。

格闘なんて、その気になって修行を続けたらタカミチさんを超える力を付けることすら出来るかもしれない。

「アキラは近接格闘向きだね」

「格闘・・・ですか？」

「そう、適正が特に高いんだ。だから、これからは格闘術の訓練と気のコントロールを中心にして鍛えていきたいと思うんだけど・・・アキラって何か習ってた事ある？空手とか合気道とか」

「いいえ、ありません・・・」

「そっか、なら好都合だ」

「え、どうしてですか？」

「俺が教える技はちょっと特殊でね、型がある程度身に付いている人にとっては混乱しちゃう可能性があるんだよ」

「そうなんですか・・・」

「うん・・・まあ、前振りはこのくらいにして、さっそくやってみようか」

「はい！」

side out

side アキラ

こうして、私の修行が始まった。

今私が教えてもらっているのは、基本的な型と重心のコントロール。型に囚われて重心が偏ってしまったら、ちよつとした衝撃でバランスを崩して倒れてしまうらしい。

実際に型を作って静止させられた時には、軽く突っつかれただけで転んじやった。

重心とかあんまりイメージした事がなかったから最初は戸惑ったんだけど、彩さんがわかりやすく教えてくれたおかげでちよつとずつだけイメージが掴めてきたような気がする。

「ほう、拳法の心得もあったのか。お前は刀一筋かと思っていたんだがな」

絡繰さんや相坂さんと一緒に練習風景をずっと見ていたマグダウェルさんが彩さんに声をかけた。

・・・今更なんだけど、ずっと見られていると思うとちょっとやりづらい。

「え、そうなんですか？」

彩さんに訊いてみる。

昨日は何も持ってなかったから、彩さんも格闘タイプだと思ってただけど・・・。

「そうでもないよ。ただ・・・」

「「ただ？」」

「得物が手元に無くても戦う手段を用意しておくのは当たり前のことだろう？戦いの最中に得物が使えなくなる状況になる事なんて珍しくも無いんだし、『得物が無くなったから戦えない』なんて考えてるようじゃあ、事が起こったときには死ぬしかなくなっちゃう」

「ふん、やはり愚問だったようだな」

「そうでもないさ。おかげでアキラは勉強になった・・・だろ？」

「へ？あ、はい」

私が二人の話に聞き入っていると、不意に声をかけられた。

ほぼ反射的に頷いてたけど、確かに勉強になった。

得物がなくなったからと言って、相手が降参するとは限らない。

習った型の中には武装解除のものもあったから、このことを知っておいてよかったと思う。

それにしても、マグダウエルさんは知ってたのにどうしてわざわざ？

・・・もしかして、私のためにこの事を彩さんに効いたのかな？

そう思ってマグダウエルさんの方を見ると、目が合った。

「・・・ふんっ」

・・・あ、目をそらされた。

うーん、結局どうだったんだろう。

彼女は、最近では学校でも結構話しかけやすくなってきた。

言い方は少しぶっきらぼうだけど悪い子じゃないと思う。

だから、吸血鬼だって知った時も特に何とも思わなかった。

こっちに関わった事をきっかけに、少しでも仲良くなれたらいいな・

・・・と思う。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「よし、そろそろ休憩しようか。お疲れ様」

「ふう・・・はい」

あれから数時間、ひたすら重心を意識しながら型を出すのを繰り返した。

あんまり激しく動いた覚えは無いんだけど、気が付いたら結構汗をかいてた。

臭ってないかな・・・それに、服が体に張り付いてきて少し気持ち悪い。

どうしよう・・・。

そう思っていると、絡繰さんがやってきた。

「お疲れ様です。汗をかいているようですので、お風呂に入られてはいかがでしょうか」

「え、お風呂あるの？」

「はい。よろしければ案内いたします」

「あ、うん。それじゃあ、お願いしようかな」

ではこちらへ、と言って先を歩く絡繰さんについて行くと

・・・

「こちらになります」

「す、すごい・・・」

そこにあったのは、テレビに出てくるような高級なホテルとかにありそうな感じの、ライオンの口からお湯が出てくるタイプの豪華な大浴場だった。

「こ、これ・・・私が使ってもいいのかな・・・」

「構いません。マスターの許可は取っております。それから、マスターの要望で今は水風呂になっております」

「わかった。ありがとう」

いえ、と言って絡繰さんは去っていった。

マグダウエルさんが吸血鬼、と言われた次に知ったのは、絡繰さんがロボット（ガイノイドっていうんだっけ？）だって言う事だった。私たちが今まで気が付かなかったのは、特殊な魔法が作用しているせいらしい。

でも、やっぱり未だに信じられないくらい人間と変わらないと思う。学校ではあんまり話すことは無かったんだけど、街中で見かける彼女は子猫と遊んだり子供を助けたりしていて、ちょっと口数が少ないどこにでもいるような普通の女の子だ。

.....

うーん.....もしかして、麻帆良って他の所と比べて結構アブノーマルな所なんじゃないかな.....
だけど、私はそんな麻帆良が好きだ。

お風呂に浸かりながら、私はそんな事を考えていた。

第二十七話（後書き）

今回もアキラがメインのお話です。

別荘に入ってから少し落ち着きを見せ始めましたね。

彩に鍛えられるアキラは、これからどんなパワーアップを見せるのでしょうか。

意見、感想、待ってます。

第二十八話（前書き）

夏休みに入ったら日常オンリーが続きそうですね。

やっぱり夏休みといったらバーベキューなり、夏祭りなり、海水浴なり、いろいろありますよね。

うーん・・・どのイベントからやりましょうかW W

・・・あ、ハルナとコミケに出すのも面白いかもしれませんよねW W
作者の想像は膨らむばかりです。

第二十八話

七月下旬の直前、生徒にとっては待ちに待った終業式の日だ。

今日配られる、一部の生徒にとっては悪夢である通知表に一喜一憂すれば、明日からは晴れて夏休みの始まりである。

どの学校のどの生徒も、余すことなく夏休みを謳歌するべく、本業であるはずの勉強よりも頭を捻って予定を手帳に書き綴る姿が度々目に入る。

女子中等部2-Aに至っては例外どころか、テンションの上昇率が尋常でなく、クラス総出のイベントまで企画されていた。

そんなハイテンション状態が十日近く続き、タカミチ不在の中一人で対応していた彩は放課後になった今、職員室で机に体を預けてぐったりとしていた。

s a i d e . 彩

・・・やつとだ。

・・・やつと終わったぞ。

タカミチ先生が出張に行って十二日・・・なんとかやり過ごすことが出来た。

クーラーの効くこの静かな空間が本当にありがたい。

改めて思うけど・・・2－Aの元気の良さはヤバイ。この十日でイヤと言うほど再確認させてもらった。

特に、HRで『夏休みの暮らし』の話をする時なんて本当に恐ろしい事になった。補助に来てくれたしずな先生には感謝してもしきれないくらいだ。

それと、授業で夏美を指名した時、気の早い誰かが『え、夏休み！？』なんて言い出してクラス中のテンションが尋常でなく高まってしまつて授業が半分近く潰れる事になってしまったこともあった。まあ、潰れたとは言つても一学期に進める分はとくに終わつていたから、こちらとしては痛くも痒くもなかったんだけど・・・おかげで夏美の指名が不可能になつてしまい、指名が少し偏つてしまったのはちょっとつらかったかもしれない。

まあ、そんな俺の苦勞話はこの辺でお終いにしておいて・・・。
今回のタカミチ先生はイギリスに行っているらしい。

なんでも、エヴァにあの面倒な呪いをかけたり、そっちの業界では英雄だったりしたりする、かの有名な（・・・らしい）千の呪文の男の息子に会ったり、その子の通っている魔法学校の先生に挨拶をしに行くとの話だ。

三週間は滞在するらしく、その間の彼担当の警備や広域指導は全て俺が任されることになった。

あと二週間くらいか・・・夏休みともなると生徒のテンションも

上がって来るから、少し気合を入れていかないといけないかもしれない。

しかし・・・夏『休み』という単語が嫌でも耳に入ってくるこの時期に仕事が増えるというのはなかなかこう・・・げんなりしてしまふものだ。

「・・・はあ」

――ヴーヴーヴー――

俺のため息が吐かれるのと同時に、マナーモードにしていた携帯電話が鳴った。

机でぐだーつとしながら『うーん、このパターンはメールかな？』なんて思ったりする俺は、今ではすっかり我が物顔で携帯電話を扱っている。つい三ヶ月程前までは携帯電話に触った事が無かった事が自分でも信じられないくらいだ。

携帯電話を開いてメールを見ると、メールの送信元は瀬流彦先生からで、今日の警備のシフトに入っていない魔法先生に一斉送信されているようだ。

要約してみると、『親睦を深めるために今夜食事にも行かないか？』という内容だった。

・・・

まあ、いいんじゃないだろうか。それほど苦手な先生も居ないし。それに・・・食事会という名目なんだから、お酒は出てこないんだろう。

お酒が出てきたなんてことが知れたら、件のデルタフォースが黙っちゃいない。

デルタフォースが動き出す事態になってしまったら、おそらく発案

者であるところの瀬流彦先生がフルボッコになることは避けられないだろう。

彼とは年が割かし近い事もあって結構気が合うところも多いし、出来ればそんな目にはあって欲しくないものなんだけど・・・。

・・・

とりあえず『自分も参加します』という事をメールで伝えてから、俺は職員室を後にした。

—
—
—
—
—
—
—
—

—
—
—
—
—
—
—

—
—
—
—
—
—

寮に戻って昼食を済ませた俺は、すぐにエヴァの家へと向かった。
理由は簡単、二人の修行のためだ。

アキラはあの日から、刹那はその次の日から今日まで毎日別荘を使って修行をしている。

やはり、丸一日使えると言う事は大きい。

おかげで二人はぐんぐんと力をつけている。

刹那の場合は、五感も人間より少し高いらしく、俺の求める聴覚の基準値にあっさりと到達した。

そのため、今は視覚で得る事の出来る情報の読み取り方を教えている。

そして、区切りのついた所で軽く実践させてみて・・・それが済んだら反省会、といった感じだ。

真面目な彼女は毎回毎回律儀にノートを取っていて、毎日寝る前に復習しているそう。

一昨日そのノートを見せてもらったが、小さな文字でびっしりと綴られていて、既に一冊目が終わっていた。感心しながらペラペラとページを捲っていて、20ページ付近に差し掛かろうとした所で、顔を真っ赤にした刹那にノートをひったくられてしまったんだが・・・
・ いったい何を書いてあったんだろう。

そして、アキラ。

彼女の場合、前半では技の型と重心のコントロール、時々茶々丸と軽く組み手。

後半では刹那と俺に気の扱いを習っている。

前半、後半共にスポンジが水を吸うかの如く、教えたことを瞬く間に自分の力にしている。

やはり適正レベルの通り、この手に関しての才能はとても豊かなようだ。

本人は魔法が使ってみたいと言っていたが、エヴァに『素質が無い』とぼっさり切り捨てられてしまい、少しショックを受けていた。

とは言っても、全く才能が無いというわけでもないから、暇が出来たら少しだけ魔術を教えてみようと思ってる。強化や軽い治療系統

の魔術くらいなら使えるはずだし、彼女の助けにもなるだろう。

そして、エヴァに師事しているさよ。

エーテル体は魔力とも相性がいいため、魔法を習っているようだ。なんでも、家に居る間は毎日魔法の勉強をしているらしく、基礎はばっちりとの事。

そろそろ強めの魔法に手を出してみたい、とやる気満々の姿勢を見せている。

また、長年幽霊だった事もあり、周囲のものを自由に浮かせる事が出来るらしい。

まだ小さめの物しか操れてないがけど、訓練を重ねれば大きな物だって操れるようになるだろう。

• •
• •
• •
• •
•
•
•

といった感じで、それぞれ順調に力を付けてきているわけだ。

別荘を使ってこの調子で修行を続ければ、二学期が始まる頃にはそれなりの力になるはずだ。

「……まあ、年取るからあんまり使いすぎることは勧められないけど。」

side out

side. 刹那

エヴァンジェリンさんの別荘を使うことになったおかげで、いつもの修行は二時間から三時間ほどだったが、睡眠時間を除く一日がほとんど修行に費やせるようになった。

しかも、それでも実質は一時間しか使ったことにならない。

一日を普通に過ごして、一日を修行に費やす・・・なんだか一日が二回続いてる感覚だ。

そんな奇妙な感覚（茶々丸さんはあんまり気にならない様子だったが）を共有してくれるのは彩さんとエヴァンジェリンさんと、同じく別荘を使って修行をするアキラさんとさよさんと茶々丸さんだけだったから、自然と打ち解けあい、十日たった今では名前で呼び合うほどになった。

えーと・・・こういうのをなんて言うんだっけ？

心理的な理論で名前があったような気もするんだが・・・まあ、別に知らなくてもいいか。

「よし、じゃあそろそろ休憩しようか」

「「「はい」」」

彩さんの号令でみんなが休憩に入る中、彩さんが茶々丸さんに声を

かけた。

「茶々丸、いつも手伝ってくれてありがとな」

「構いません。彩さんの頼みですから」

そう言って微笑む茶々丸さん。

私達の前では滅多に表情を崩さない茶々丸さんは、なぜか彩さんの前ではよく微笑む姿を見せる。

エヴァンジェリンさんでさえ『猫と彩の前以外では滅多に笑わん。焦ることは多いがな』と言うほどだ。

うーん・・・いったいどういうことなんだろう・・・。

なんだか、二人を見てると胸がもやもやした感覚がする・・・。

「刹那さん、どうしましたか？ なんだか難しい顔してますよ？」

「へ？ あ、何でもありませんっ！。そ、それより、アキラさんも呼んでお風呂に行きましょう」

苦し紛れにそう振ってみた。

ちなみに・・・少し寂しい話なんだが、茶々丸さんと一緒にお風呂に入る事は出来そうに無い。

なんでも、今の体で入るのは難しいらしい。

だけど今、葉加瀬さんたちが茶々丸さんの新しい体を開発中らしく、それが完成したら一緒に入る事が出来るようになるかもしれないとの事。せっかく仲良くなってきたいるんだから、そうやって親睦を深めてみたいなあ、と思うのはきつと私だけではないと思う。

「??ま、それもそうですねっ。アキラさん、お風呂に行きませ

んかー!？」

「あ、今行くー!」

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

「刹那の翼って綺麗だね。やっぱりお手入れとか大変なの？」

「そうですね、割とデリケートなのでこまめにしないといけないんです」

「なんかこう、見てるともふもふしたくなりますよねー・・・えいっ!」

「うひゃっ!？さ、さよさん、くすぐった・・・うわっ!？」

飛びついてきたさよさんに引っ張られて、ぼちゃーん!と湯船に（・・・と言っても水なんだけど）頭からダイブしてしまう私たち。

「けほっ、けほっ・・・さよさん・・・」

湯船から（・・・といって（ry）脱出した私は、じとーっと軽くとがめるとうな目でさよさんを見してみる。

「けほっ、けほっ・・・あはは、やりすぎちゃいました」

そんな私の視線に対して片目を瞑り、ぺろっと舌を出すさよさん。
うーん・・・この顔をされると心が癒されて何も言えなくなっ
てしまっているだろうか・・・？

「ね、ねえ刹那」

「はい？」

「わ、私も少し触ってみてもいい？」

・・・。

今度は目を少しキラキラさせたアキラさんがこちらを見る。
もちろん、嫌なんて事は無いんだが・・・ちよっとだけ恥ずかしい。

「え、ええ。減るものでもないので構いませんよ」

「本当？じゃあ、少しだけ・・・」

そう言って私の翼に触れるアキラさん。
やっぱり目がキラキラしてる。

「わあ〜♪」

「あ、アキラばかりずるいですっ。私も〜♪」

「え、ちよ、さよさん・・・待・・・くすぐった・・・うひゃひゃひ
ゃひゃ！」

・・・
・・・

結果、お風呂に入っている間、私はもみくちゃにされっぱなしだった。

やっぱり少し恥ずかしかったけど、別に嫌な気分ではなかった。というか、翼があるからこそできたコミュニケーションだったのかなあ、なんて思っていたりもする。

・・・これも彩さんのおかげかな。

本当にどうしようもなかった私をここまで変えてくれた彩さんには感謝してもしきれない。

不謹慎かもしれないけど、この世界に来てくれてよかったと思っている。

・・・そうだ、今度お礼を兼ねて何かしよう。

私ばかり色々してもらってばかりじゃ釣り合わないし。

だけど・・・彩さんって何をすれば喜んでくれるんだろう・・・？

うーん・・・今度このちゃんに相談してみようかな。

第二十八話（後書き）

食事はおまけを作って載せるつもりです。

では、意見、感想待ってます。

おまけ 魔法先生と親睦を深めよう@食事会（前書き）

宣言どおり、おまけで作りました。

少し短いですが、ご了承くださいね。

おまけ 魔法先生と親睦を深めよう@食事会

side. 彩

修行を終えた後、エヴァの家で軽く雑談をしてからお開きになった。寮に戻ってからは、集合時間に間に合うくらいの時間になるまで軽く部屋の掃除をして暇をつぶした。

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

そして今、俺たちは店の前に来ている。参加者は瀬流彦さん、光さん、シャークティさん、刀子さん、俺・・・つまり全員だ。

食事会の場所となったお店は、西洋系の建物がほとんどを占めている真帆良の町並みの中では少々目立つが、なかなか立派な構えの純和風の店だ。

がらがら、と自動ドアが開いて中に入ってみると、夕食時にも関わらず客の数が少なかった。

しかし、だからと言って店内の雰囲気が悪いなんていうことは全く無く、むしろ外の作りと同じように立派な構えをしている。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか？」

「五人です」

ではこちらへ、と言う店員さんに付いて行ってみると、外側に面した座敷タイプの席に案内された。

靴を脱いで座布団に座ると、すぐにお冷とおしぼりが用意された。

そして、メニューを卓に置いて「ごゆっくりどうぞ」、と言って店員さんは去っていった。

そして、それぞれメニューを選び始めた。

ちなみに、並びはこんな感じになっている。

— 刀 俺 瀬

通路 — 食 卓 —

— シ 光

俺もメニュー表——（・・・ここではお品書きっていったほうがいいのかな）を見ながら何を注文か考える。

正直、こんなに立派なお店に来た事が無いから迷う。

この場ではどれを注文するのか一番適切なのかさっぱりだ。

・・・とりあえず、周りに合わせようかな。

刀子さん辺りなら割と無難なものを選びそうだし。

・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

「皆さん決まりましたか？」

瀬流彦さんがみんなに声をかけると、全員が頷いた。

それを確認した瀬流彦さんが「すみませーん」と近くに居た店員さんを呼んだ。

「ご注文はお決まりでしょうか」

という店員さんに「僕はこれを」、「私はこれを」と注文していく。そして、残りは俺と刀子さんになり、刀子さんが注文をした。

「これと・・・あと、生ビールひとつ」

「「えっ?」」

ハモったのは俺と瀬流彦さん。

瀬流彦さんとは同じ中部教師として一緒に仕事をする事が多い。だから・・・瀬流彦さんはデルタフォースの恐ろしさを知っている。

三人揃えば、揃うのは知恵ではなく力だと言う事を・・・。

・・・ていうか、あの三人は少々過保護すぎだと思うんだ。

気を遣ってくれるのはうれしいんだけど、教育に悪いから云々・・・というのは果たしてどうなんだろうか。まあ、教育者としては正しいスタンスだとは思うけど・・・言われる側としては少し恥ずかしかったりする。

俺、今年で17になるんだよ・・・。

うーん・・・もしかして、まだ子供っぽく見えるのかなあ。

なんて事を考えていると、刀子さんが不思議そうな顔をして俺たちを見ていた。

「?? どうしたんですか? そんな顔をして」

「いや・・・あの、お酒・・・」

「へ?」

「いえ、なんでもありません・・・」

結局、刀子さんにお酒のストップをお願いできなかった瀬流彦さん。
……だけど、その気持ちは分かる。

「♪」
「」

こんなに何かしらをやり遂げた顔をした人にそんな事言う事はできないよね……。

ていうか、刀子さんも仕事大変だったんだ。

……

……

・ ・ ・ ・ ・

午後6時47分。瀬流彦さんの死亡旗が立てられた瞬間だった。

そして、そんなことを知るはずが無いこの三人・・・料理が運ばれてくるのを心待ちにしている光さんと、静かに緑茶を飲んでいるシャークティさんと・・・お酒が入るのが嬉しいのか、少し上機嫌な刀子さんとは裏腹に

「彩君、僕はいったいどこで間違っただろう・・・」

「だ、大丈夫です。バレないように何とかすれば・・・」

「あの三人を相手にして、そんな事が出来ると思うかい・・・？」

「・・・」

――ポン――

まるでお通夜のような空気をかもし出している俺と瀬流彦さん。

そっちの三人とはまるっきり真逆の空気が漂っている。

自分で思うのもなんなんだけど・・・あまりにもテンションがはじめしすぎていて、どちらかの頭から茸でも生えてきそうだった。

数十分後。

案の定というかなんというか……完全に予想通りの事態に陥ってしまった。

刀子さんの目の前に置かれた空のジョッキが二つ……つまり、そういうことだ。

食事をしながら少しずつテンポ良くビールを消費していった刀子さんは、食後にもう一杯ビールを注文した。

そんな様子を見た瀬流彦さんだったが、『一杯も二杯も変わるまい！』という考えなのか、何もコメントをしていない。その心の内はもはや測れるものではないんだけど、何かしら声をかけておきたいのだが……

「ちょっとお、聞ってるの？」

……。

食後の二杯目が終わってから完全に酔いが回った刀子さんにホールドされて身動きが取れない。

それにしても、見事な酔いっぷりだ。

いつもの冷静な姿は全く見る影も無い。

「はいはい、聞いてますよ」

「じゃあ、何の話してたか言ってみてよ」

「はい。婚期の話でしたよね？」

「そうなのよお！こんな仕事してと恋人なんて簡単に出来ないし・

・どうすればいいのよ」

涙目で訴える刀子さん。

・・・本当に隣に居るのは刀子さんなのか？

最早、同じ顔をした別人に思えて仕方が無い。

「で、でも・・・ほら、刀子さんって美人じゃないですか。恋人なんてすぐにできますよ」

「・・・ほんと？」

ウルウルした上目遣いでこちらを見る刀子さん。

ヤバイ・・・可愛いぞ。

・・・。

・・・。

いやいや、ちょっと待て・・・何だこのギャップ。

これだけのやり取りで刀子さんのイメージがめっちゃくちゃ変わったんだけど。

「はい。本当ですよ」

「じゃあ、もし恋人ができなかったら彩くんが恋人になってくれるの？」

「えゝ!？」

「え、なってくれないの・・・!？」

「わ、わかりました! なります、なりますから!・・・って、はっ!？」

目の前には満面の笑みを見せる刀子さん。

かわい……

……しまった。

反射的に言葉が出てしまった。

俺とした事が……なんたる不覚……!!

ていうか、見てばかりいないで誰か助けてくれよ……笑い声とか
ばっちり聞こえてるんだからな。

——
——
——
——
——
——

——
——
——
——
——
——

——
——
——
——
——
——

「あ、ありがとうございました……」

引きつった笑みの店員さんに見送られて、俺たちはお店を後にした。

……今日ほど視線が『痛い』と思った事は無い。

ていうか、視線って痛いものなんだね……。

俺は、みんなに別れを告げた後、眠ってしまった刀子さんを背負っ

てシャークティさんと一緒に刀子さんのアパートに向かった。

「一人くらいは助けてくれてもよかったと思うんです」

少し不貞腐れて言ってみる。

俺が手を焼いてる間に、みんなったら笑ってばかりだったんだぜ？

「す、すみません・・・ですが」

「ですが？」

「なんだか楽しそうでしたよ？」

楽しそう・・・？

なんでまたそんなことを？

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

あ、そうか。

手を焼く年上・・・なんだかシルヴみたいじゃないか。

そうかそうか、なるほどな・・・そんな方程式ができてたのか。

・・・シルヴ本人が聞いてたらスリッパでも飛んできそうだな。

だけど・・・そういえば、こうして背負って家に帰る事だって何度かあったっけ

刀子さんをアパートに送り届けた俺たちは、そこで別れてそれぞれ家路に着いた。

俺は少し懐かしい気持ちになりながら、軽い足取りで寮へ戻った。

ちなみに・・・デルタフォースによる瀬流彦さんの制裁が行われるかどうかや、後日の刀子さんへの対応については、また別の話になる。

おまけ 魔法先生と親睦を深めよう@食事会（後書き）

調子に乗った結果です。

あと、別に刀子さんとフラグが立ったわけではありません。

ただ、年上女性との絡みを個人的に入れたいなあ、と思った結果です。

やりすぎたかな、とは思いますが・・・反省はしませんww
でも、タグに「キャラ崩壊あり」って入れたほうがいいかも・・・

第二十九話（前書き）

夏休み一発目はどのイベントからいこうか考えていたんですが、まずはやっぱりこれかな？と思ったやつにしてみました。

第二十九話

夏休みに入って五日が経った。

昼過ぎの街中を行き交うのはサラリーマンではなく、ほとんどが少年少女になっている。

釣竿をもって海に向かう少年、ウィンドウショッピングを楽しむ少女、野球道具一式を担いで公園へ向かう少年たち、参考書を買いに本屋へ向かう少女・・・と、その過ごし方は多種多様だ。

・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

そんな中、未だに夏休みに入る事ができない少年が一人。

この時期には見えていて暑苦しくなるようなスーツ姿で麻帆良を歩き回っていた。

side. 彩

正午辺りから始まった別荘での修行が終わってから、指導員の仕事に入る・・・それがここ五日間の俺の過ごし方だ。

何食わぬ素振り仕事をしてみる俺だけど・・・やっぱり、同年代の少年少女が目の前で夏休みを満喫している中で一人仕事をする、と言うのはなかなか気が滅入る。

しかも、寮で毎日生徒から「今日こんな事があったよ」なんて言われていると、更に休みが恋しくなってしまう。

・・・そんな俺も、タカミチさんが帰ってくれば休みに入れる。

イギリスに行っている彼からは三日前にパソコンへメールがあつて、八月に入るまでには真帆良に帰ってくるそうだ。

向こうでは予定通りに学校長に挨拶を済ませて、今は件の子供と一緒に居るらしい。

その子の名前は『ネギ・スプリングフィールド』というらしく、俺たち日本人にとってはユリ科の多年草を連想させるような名前だ。メールには向こうで撮った写真ファイルが添付されていて、ネギ君と一緒に撮ったらしい写真も付いていた。本人には悪いんだけど、ネギ君は名前からして緑色っぽいひよろひよろしたイメージがあつた・・・しかし、そんな名前から連想したイメージとは裏腹に、赤髪の大人しげだが少し活発そうな顔をした子供だった。

一見やんちゃそうに見えるがかなりの秀才らしく、この年で魔法学校の主席なんだそうだ。

もしも会うことがあったらよろしくしてやって欲しい、との事だっ

ただけど・・・会うことなんてあるんだろうか。

そんなことを考えながら歩いていると

「あ、彩くんや〜」

後ろから木乃香に声をかけられた。

そういえばこんなシチュエーション前にもあったな。

前はお見合いからエスケープ中だったんだっけ。

振り返ってみると、あの時のような綺麗な和服姿ではなく、かわいらしい洋服姿だった。

そして、今では見慣れた光景だが、その隣には明日菜と刹那の姿がある。

三人とも夏休みを満喫してるようで何よりだ。

「ああ、木乃香に明日菜に刹那。今日は三人で買い物か？」

「うん、これから水着買いに行くんよ。ところで彩くん」

「ん？なに？」

「真夏にスーツなんて着て暑くないの？」

暑い・・・か。

まあ、暑いと言えは暑い。

温度は高いんだけど、別に気にする程でもないくらいだ。

俺は子供の頃から体質上ある程度暑さや寒さには我慢強かった。

それに、直射日光が直接肌に当たらない分見た目ほど暑くは無い。
ただ・・・やっぱり島国だから湿度が高い。
蒸すような暑さにはわりと気になり始めていたりする。

「うん、少し蒸し暑い」

「じゃあスーツ着なくていいじゃない」

すかさず明日菜が指摘する。

「いや、でもなあ・・・」

「指導員の仕事って私服でやってる先生もいるじゃない。なんでスーツでしてるの？」

「あ、そういえば俺私服持ってないわ」

「「「え!?!」」」

信じられないものを見るような目で見られる。

まあ、仕方ないだろう。うん、正直俺自身も信じられない。

俺が持つてる服って言ったたら、スーツ一式と代えのワイシャツ三着とジャージと部屋着と、ここに来た時に着てたボロボロの学生服を直したもののくらいかな・・・。

バタバタしてて私服なんて全く眼中に無かったから結局買っただけだった。

ていうか、俺は何で気づかなかったんだろう。

「そういえば・・・彩さんが私服着てるところ見たこと無いわ、私」

「わ、私ものです」

「うちもや・・・」

なにやら三人でひそひそと会議をしてる。
一体何を話し合ってるんだろう・・・。

・・・

・・・

・・・

数十秒後、同時に頷きあった三人が一斉にこちらに向き直った。

「「「彩さん（くん）！」」」

「え？は、はい」

「今から買いに行きましょう」

「え、なにを？」

「彩さんの私服を買いに行くのよ」

「いや、俺仕事中・・・」

「ほら、行くえ!」

そう言うや否や、有無を言う暇さえ与えられずに木乃香には手を引つ張られ、明日菜と刹那には背中を押されて街中を歩き回る事になった。



一軒目

「これとか似合うんやない?」

「あ、確かに似合いそうね」

「このちゃん、さすがです」

「だけど、ちょっと派手じゃないか?」

「このくらいが丁度いいんよ」

「そうなのか?」

「とりあえず、一度着られてみてはいかがでしょうか?」

「まあ、それもそうだな」



二軒目

「彩さん、これとかどう？」

「あ、今度はまともやね」

「ちよつ、どういう意味よそれ!？」

「さっきまで選んでたの、全部オジサンしか着こなせそうやない服ばかりやったやん」

「明日菜さんの趣味が垣間見えましたね」

「さすがに苦しいところがあったよな」

「う・・・で、でも、今回のいいいでしょ？」

「うん、そうやね。彩くん、着てみて？」

「ああ、わかった」



三軒目

「こんな感じでどうでしょうか？」

「「……………」」

「え、えっと……………」

「「……………」すごい！」」

「へ？」

「せっちゃん、センスええなあ」

「絶対似合うわよ、これ」

「俺、一目で気に入っちゃったよ」

「そ、そうですか？」

「そうやよ。彩くん、試着室にゴー！やえ」

「はいよ、じゃあ行ってくる」



といった具合に、着せ替え人形になる事約一時間と三十分。

三人がそれぞれ選んだもからワンセットずつ・・・それと、なぜか水着も一着購入した。

それぞれどういった物か、というのは今回は割愛しようと思う。

それにしても、三人とも本当にいいものを選んでくれた。

多分・・・いや、絶対に俺一人じゃひどい事になっていただろう。
三人には感謝しないとな・・・。

そして、今

「彩くん、どう？」

「ええーと・・・うん、かわいいと思う」

「むゝ、さっきと同じこと言ってる気がするえゝ？」

試着室からかわいらしく頬を膨らませて抗議をする木乃香。

まあ、言ってる事には否定できない。

こんな相槌に等しい返され方をされてはさすがに不満だろうしな。しかし、ちょっと待って欲しい。この状況はいったいどうしたことだろうか。

女性用水着売り場に男が一人、三人の女の子の水着選びを手伝っている。

とは言っても、候補はいくつか上がっているから、後は試着してみても買うものを決めるだけなんだけど。

周りを見渡せば目に入るものは女性物の水着ばかりで、どこを向いたらいいいのかわからない。

役得と言えば役得なんだけど・・・さすがにこれは・・・。

試着室の前で立ち尽くす俺には女性店員から向けられる微笑ましいものを見るような視線と、このエリアの外の四方から突き刺さる殺意に等しい男の視線。

さすがに居たたまれなくなってきた気が気じゃなくなってくる。

気の利いたことも言えず、相槌に近い返事を返してしまうのも致し方ないと思う。

そう思うのは俺だけじゃないはず・・・だと思いたい。

「もー、彩くん聞いとるん？」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、木乃香の頬がまた膨らむ。

「こ、このちゃん、彩さんも困ってますからその辺りで・・・」

俺に助け舟を出したのは、木乃香の隣の試着室のカーテンからひよっこりと顔だけを覗かせた刹那だった。

「あ、せっちゃんも試着できたん？」

「へ？は、はい。一応・・・」

「見せて見せてっ」

「ちょ、このちゃん待っ・・・」――シャーッ！――

満面の笑みでフリルの付いた桜色のワンピース水着を試着したまま右隣にある刹那の試着室の前へ行き、勢いよくカーテンを引っぺがす木乃香。

その中には木乃香と似たデザインの、桜模様が入った白いワンピース水着を着て顔を赤くしてもじもじする刹那の姿があった。

「こ、このちゃん・・・恥ずかしい」

「恥ずかしがる事無いえ、せっちゃん。すごくかわええよ。ね、彩くん？」

「あ、うん。よく似合ってるよ。かわいいと思う」

「か、かかかかわいい!？」

「「うん」」

「っっっっ！！」——シャーッ！——

「あ、せっちゃん!？」

更に顔を真っ赤にした刹那は木乃香からカーテンを引っ手繰って、これまた勢い良くカーテンを閉じてしまった。

うーん・・・恥ずかしがる事は無いと思うんだけどなあ。かわいかったし。

「なにになに? 一体どうしたの?」——シャーッ——

今度は木乃香の左隣の試着室から明日菜がカーテンを開けて現れた。明日菜もワンピース水着なんだが、二人とは打って変わってフリルは無く、背中が大きく開いている。燃えるような赤い色の水着は、明日菜の雰囲気にも良く似合っていると思う。

「あ、アスナもええ感じやね。似合ってるえ」

「ああ、色も明日菜の雰囲気合ってるしな」

「そ、そうかな?」

照れくさそうに頬を掻く明日菜。

満更でもなさそうな表情をしてる所がポイントだな。

・・・

・・・

.....

「で、彩くん。うちのは？」

明日菜の表情に和んでいた俺の肩をとんとん、と叩いて何かを期待する表情をしてこちらを見る木乃香。

やっぱり、あれだけじゃ不満だよな・・・。

・・・

・・・

水着を着た木乃香をじっくりと見てみる。

桃色でなく薄い桃色という日本人にとって桜を連想させる色合いのこの水着は、大和撫子な木乃香には大変よく似合うと思う。

フリルもうるさくなく、落ち着いた雰囲気になっている。

・・・うん、やっぱり良く似合う。

「色合いも雰囲気も、やっぱり木乃香に良く似合ってるよ」

「えへへ」

一瞬きよんとしたと木乃香は、すぐにふにやりとした笑顔に変わって試着室に戻っていった。



数十分後、明日菜と木乃香はさっきの水着を購入し、試着が終わった後も恥ずかしがってなかなか試着室から出てこなかった刹那を引っ張り出して水着を買わせ、店を後にした。

今はみんなでフードコートで買ったソフトクリームを食べている。

・・・ていうか、結局俺は仕事してないけどいいのか？
そんなことを考えてみるんだけど・・・

「「「♪」」」

目の前で美味しそうにソフトクリームを食べる三人を見ると、
そんなことはさほど問題じゃないような気もしてしまう。
うーん・・・どうしたものか。

・・・
・・・
・・・

ま、いつか。今日はロスマー先生が回ってるし。

・・・結局、しばらくは今の状態に甘んじてしまう俺だった。

P. S. ソフトクリーム美味しいです。

第二十九話（後書き）

あれ？気づいたら木乃香がデレてるんですけどww
これは一体どうしたことか・・・。
どうやら何時の間にか好感度が上がっていたようですね。
うーん・・・ま、いっかww

第三十話（前書き）

イベントは決まっていますが上手くまとめる事が出来なくて四苦八苦してました。

そんなわけで、第三十話です。

あ、それとですね・・・明日菜が遂に一位に上り詰めました。
なんというか、あの快進撃はものすごかったですね。
さすがメインヒロイン、恐ろしいほどの人気ですww

第三十話

side. 彩

また一週間が経ち、七月も今日で終わりになった。

タカミチさんは昨日帰ってきて、俺にも念願の夏休みがやって来た。「よし、今日の午後から何をしようかな」と、久々の長期休暇に気分が高まる。

教師なんてやってはいるが、俺だって遊び盛りの16歳だ。久しぶりに釣りもしたいし、軽く旅行にも出かけてみたい・・・それはもう、やりたいことを上げたらキリがない。

・・・

しかし・・・そんな俺の夏休み一日目は、釣りに行く事も無く旅行に行く事も無くなった。

別に、天気が悪いだとか体調が悪いだとかそんな理由では決してない。

ちなみに、昼過ぎの外は文字通り雲ひとつない快晴。アウトドア日和だと言えるだろう。

・
・
・

・
・
・
・

それにも関わらず・・・俺は今、冷房のかかった自室にこもっている。

・・・正確には『俺たちは』だが。

俺の部屋の中央にあるミニテーブルを囲ってシャープペンシルを片手に持つ四人の少女と、ロフトで寝転がる金髪幼女が一人。

・・・明らかに一人態度がおかしいのが混じっているが、俺の部屋では勉強会が行われている。



事の発端は修行直後に遡る。

修行が終わり、いつものようにエヴァの家で軽く雑談のような事をしている時だった。

「あ、そう言えば明日だよ、海水浴」

「はい、明日ですね。みなさんは準備はお済で？」

「うん、あとは持っていくおやつを買うくらいかな」

「私はもう買っちゃいましたよー」

と、最近は明日にクラス全員で行く事になっている海水浴の話題で持ちきりだ。

先日知ったことなんだが、あやかの所で私有している島が幾つかあるそうで、その一つに招待してくれるらしい。二泊三日、拒否権無し of 2-A 全員強制参加イベント。

まあ、拒否する子なんていなかったんだけど。

タカミチさんは仕事があって行けないから、俺は引率という形で同行する事になったんだけど・・・休みの日くらいは教師抜きでのびのびと過ごさなくてもいいんだろうか。それに、引率と言えば雪広家の使用人の人たちが同行するなら俺は要らないんじゃないのか？と思っていたんだけど、あやか曰く「何を言っているんですか！彩先生も2-Aの一員なんですよ？引率だなんて名前だけですわ。そんな寂しい事を言わずに、是非私たちと一緒に行きましょう！」と、とんでもなく感動する事を言ってくれた。

生徒からこんな言葉を貰えるなんて、教師としてはこれほど嬉しい事はない。

だから、目頭が少し熱くなったのは仕方が無い事だろう。

そんなことを言われたとなつては、こちらとしても全力で楽しむのが礼儀と言うものだ。

誘ってくれたみんなには感謝しつつ、俺も明日は楽しみにさせてもらっている。

だがしかし、それと同様に気になる事が一つ。

「あと5日で出校日だけど、みんな宿題は進んでるのか？」

「「・・・・・・・・」」

空気が死んだ・・・・・・・・というか、アキラと刹那とさよの表情が固まった。

一つ補足を入れておくと、夏休み前に復学が決まったさよにも同じ

ように宿題は出ている。

いや、別に空気が読めなかったとかそういうわけではない・・・と思う。

ただ・・・ほら、教師としてはやっぱり気になってくるわけだ。修行に熱を入れるのはいいんだけど、学生としての本分を厳かにしてしまつては本末転倒なんだし。

そんなわけで、今回は心を鬼にして切り出してみたわけだけど・・・この反応はどうやらアウトっぽい。切り出して正解だったようだ。

「一応訊くけど、どのくらい進んでるんだ？ 出向日提出分は」

「え、えっと・・・半分・・・」

「私は四分の一・・・」

「わ、私は三分の一・・・です」

・・・なるほど、これは黙ってしまうわけだ。

二泊三日で遊びに行くとなると、実質宿題に費やせる時間は二日。一日丸々潰せば終わらない事もないと思うが・・・これは少々辛い所があるな。

「・・・ええーと、ちなみに茶々丸とエヴァは？」

「私の進行度は76%と言った所です」

「へえ、さすが茶々丸だな。もしかして前日に片付くように配分し

てるのか？」

「はい」

「じゃあ、エヴァは？」

「そんなものをつくの昔に終わらせてある」

「「「「・・・え？」」「」「」」

「おい、なんだその信じられないようなものを見る目は」

「いや、だって・・・エヴァだぞ？あのエヴァだぞ？」

「あのマスターが・・・信じられません」

「な、茶々丸まで！？お前ら一体私を何だと思っているんだ！？」

「「「「「・・・」」「」「」」

「そこで目をそらすなあああ！！」

「マスター、あまり騒がれると血圧が・・・」

・・・

・・・

・・・

なんとかエヴァを落ち着かせた所で、俺は話を持ち出した。

「よし、今日はこれから俺の部屋で勉強会な」

「え、別荘を使えば早いんじゃない・・・」

「修行で使うなら仕方ないけど、基本そんな反則技は先生許しません」

「「・・・」」

「そういうわけだから、三人は宿題もって管理人部屋に集合な。質問は？」

「はい」

すかさずに茶々丸が拳手をする。

「茶々丸？どうしたんだ？」

「その勉強会には私も参加できるのでしょうか」

「え？茶々丸も参加するつもりだったのか？」

「あの・・・駄目でしょうか？」

「いや、そんなことはない。勉強する意欲を持った子は大歓迎だよ」

「で、では・・・」

「ああ。茶々丸も参加だな」

「!・・・はい」

「「む・・・」」

茶々丸の少し暗くなった表情が明るさを取り戻す。

うん、そんなに意欲を持ってくれるなんて先生嬉しいよ。

みんなにも茶々丸くらいの勉強に対する意欲があればいいんだけどな。



っていう経緯があったんだけど、何故か宿題が全て片付いているエヴァが付いてきた。

ちなみに、宿題を確認した所、本当に全部埋終わっていた。

残るは始業式の日に提出する読書感想文だけだそうだけど・・・本当になんで付いてきたんだろう。

やっぱり家に一人で居るのは寂しかったのかな？

そう思いながら、ロフトで寝転がりながら最近新しく出たハリポッターの新刊を仏頂面で読むエヴァに目を向けてみる。

というか、リアル魔法使いが魔法を題材としたファンタジー小説なんて読んだところで楽しむ事ができるんだろうか・・・。

なんだか感想文が批判文に変貌する気がしてならないんだけど。

その一方で、ミニテーブルを囲う四人は四者四様の表情で宿題に取り組んでいる。

アキラは涼しい顔で問題をスイスイと解いていき、刹那は少し四苦八苦しながら進め、さよはすごい勢いで次々と問題を消化していき、茶々丸は残り少ない問題を黙々と解いている。

その間に俺は何をしているかと言うと、二学期で使う授業プリントの作成をしたり、行き詰ってる子の問題を説明したりしている。



カリカリとペンの走る音と、テンポ良く本のページが捲られる音が続く事二時間と少し。

そろそろ集中が完全に切れ始める頃なのか、ペンの音が少なくなってくる。

「よし、そろそろ休憩にしようか」

「「はあゝ・・・」」

大きなため息を吐くアキラと刹那とさよ。やっぱり疲れた顔をしている。

頭をたくさん使った後なんだし、そろそろ糖分が欲しくなる頃かな。

そこで、少し前にお盆に用意したおやつとお茶を台所から持ってきてみた。

「みんな、お茶とお菓子があるから食べようか」

そう言ってテーブルに置いたお盆の上に乗ってるのは緑茶と苳大福と豆大福が人数分。

今朝商店街の和菓子屋で買ったものだ。

「ほう、あの店の大福か。お前にしてはなかなかだな」

ついさっきまでロフトに居たはずのエヴァがミニテーブルの前で待機していた。

口調は落ち着いたものだが、目はずっと大福にロックオンされたまま離れない。
これを買ったお店に心当たりがあるみたいだけど、そんなにすごい大福なのか？

「この大福ってそんなにすごいのか？」

「・・・まさか、お前は知らずに買っていたのか？」

「エヴァンジェリンさん、あの店ってまさか・・・」

「ああ、そうだ。北口から四軒目あの店だ」

「な!?!?あの入手困難と言われている大福を買えたんですか!?!?」

「え? あ、ああ。今日の朝買い物に行った帰りにフラッと寄って買ったんだけど・・・」

「な、なんて強運……私なんて今までで二つしか買えた事が無かったのに……」

「北口から四軒目って言う……ああ、あの小さくて目立たないけど立派な所ですねっ」

「あ、そのお店私も知ってる。すごく人気があってすぐに売り切れちゃうんだよね？」

「ええ、それはもう。連日午前中に完売は当たり前、尚且つ朝には長蛇の列が出来るほどです。中でも苺大福が一番の人気商品で、それを買う事が出来る者は本物の猛者だと言われるほどなんです……」

マジかよ……全然知らなかった。

俺は本当に、ただ気の向くままに、足の向くままに歩いてて偶然立ち寄ったお店だったんだけど……。

しかも大福、苺大福それぞれ六つずつ買えたんだけど……。何これ……偶然が重なりすぎて怖い。

「ま、まあ、とりあえず食べようか。噂の苺大福もあるんだし」

「そ、そうですね。では……」

「」「」「いただきます」「」「」

そう言って苺大福を取って食べてみた。

感想、とても美味しい。

大福なんて数えるくらいしか食べた事はないんだけど、今まで食べた中ではダントツだと言ってしまっても過言ではない。人気商品は伊達ではなかったと言う事である。

「これは・・・」

「あ、ホントにすごく美味しい・・・」

「やっぱりあの店の大福は美味しいな・・・」

「すごくおいしいです」

「うむ・・・」

次々と感嘆の声を上げるみんな。

見てみると、みんな同じように顔をほころばせている。

頭脳労働のあとだから尚更美味しく感じているんだろうな。

あのエヴァだってあんなに美味しそうに大福を頬張ってるんだし、多めに買ってきた甲斐があったかな。おかげで丁度人数分揃えられてたしな。



十数分後、大福で糖分を補給したみんなはそれぞれ気合を一新して宿題に取り掛かった。

おかげで随分と捗っていたようで、前半よりも速いペースで残りを消費していった気もする。

その一方で、原稿用紙を持って来ていなかった為、本を読み終えて

やる事が無くなってしまったエヴァはそのままロフトで眠ってしまっていた。

あまりにも気持ちよさそうに眠っているから起こすわけにもいかず、薄手の布団をかけてそっとしておく事にした。

最終的に、みんな出校日に提出する分のほぼ全てを終えることが出来た。最初と比べたら相当の進歩だ。

うん、みんな良く頑張りました。先生は大満足です。

あ、ちなみに、眠ったままのエヴァは俺がお家に運びました。

第三十話（後書き）

最近真名とさよの絡みがたりない・・・というか、真名が出てないです。

そういうわけなので、離島イベントでは二泊三日の中で真名やいつもと違う面子にもスポットを当ててみます。

さて・・・離島イベントはちょっと長くなりそうな予感ですね。

第三十一話（前書き）

さて、離島イベントが始まります。

このイベントにはガツガツ盛り込んでいきます。

それと、この小説の設定ノートを親友に見られてしまい厨二病疑惑をもたれてしまいましたww

・・・鬱だ死のう。並みの精神ダメージを受けました。
・・・はぁ。

／（＾Ｏ＾）／

第三十一話

翌日、彩と2－Aの生徒たちは雪広家所有の離島に向うべく、雪広印のフェリーに乗って移動していた。

フェリーの甲板、屋内、いたるところで生徒の楽しそうな声が聞こえてくる中、彩は甲板の柵に身を預け、海をぼーっと眺めていた。

side・彩

麻帆良を出発してもうすぐ一時間になる。

最初は始めて乗るフェリーにおっかなびっくりだった俺だったけど、今では船に揺られる感じにも慣れて、フェリーが海水を切って進む音と生徒たちの楽しそうな声をBGMにして海を眺めている。

辺り一面中が全部真っ青だ。

子供の頃は、海が大陸を囲んでいるんじゃないかと大陸が海を囲んでるものだと信じきってたのが懐かしく感じる。

それにしても・・・見れば見るほど無性に飛び込みたい衝動に駆られそうになるな。

「あ、彩さんこんな所に居たの？」

飛び込んでみるか否かを割と真剣に考え始めそうになったところで裕奈に声をかけられた。

振り向いてみると、アキラとまき絵と亜子もいる。

・・・水着姿で。

しかも裕奈はシュノーケルセットを装着していて、今にでも海に飛び込んでいきそうだ。

モリとか渡してあげれば魚でも突いて来るんじゃないだろうか。

「あ、ああ・・・早いな、もう着替えたのか？」

「そう言う彩さんはまだ着替えてないじゃん。早く着替えなよ」

シュノーケル裕奈にビシッと指を指される。

「え、まだ着いてもないのに着替えるのか？」

「「「あ・・・」」」

そして、何故か後ろの三人が固まる。

あれ？俺、何かおかしい事言ったっけ？

というか、裕奈がプルプルと震えてるけどいったいどうしたんだろう。

「甘い!!」

「・・・え？」

「甘すぎるよ彩さん! 着いてから着替えるんじゃないよ! 着替えてる時間でいったいどれだけ向こうで遊べると思ってるの!？」

「・・・」

結構本気の目をして熱く語り始める裕奈。

後ろの三人に助けを求めてみるけど苦笑いを返されるだけだった。

・・・どうやらこの三人も時間の大切さを説かれた被害者らしい。

・・・

・・・

・・・

気づけば語られながら更衣室に連行され、

俺が更衣室で着替えてる間は更衣室の外から語り、

着替え終わって薄手のパーカーを羽織って更衣室を出た所でやっと

話が終わった。

「彩さんわかった？」

「わかりました・・・」

「よろしいっ♪」

笑顔で頷いた裕奈は、まだ着替えてない子の方に向かってずんずんと歩いていった。

・・・ああ、なるほど。

三人が俺に向けた視線の意味が分かったよ。

そう思って三人の方を向いてみると、無言で頷かれた。

・・・うん、なんだかこの三人との結束力が上がった気がした。

side. out



数十分後、フェリーは無事に離島に到着した。

そして、フェリーから出てきた彩と2-Aは全員が水着姿だった。

ちなみに、茶々丸は今日のために聡美たちが総力を結集させて完成

させた新ボディの試作型で来ている。

間接部分などは人工皮膚で覆われて、水に浸かることも可能となった今のボディは人間と区別が付けにくいほどになっている。

『海だー！ーっ！！』と、みんなが元気良く海岸に特攻していく中でただ一人、千雨だけは部屋に向おうとしていた。

s a i d e . 千雨

なんだかんだ言って周りに流されて付いて来ちまったんだが、正直ダルい。

海で水遊びなんてするよりも私にはネットをする方が有意義だ。

・・・本当に私はなんで付いて来たんだ？

考えれば考えるほどわけが分からない。夏の暑さにでもやられてたのか？

まあいい。さっさと屋内に行こ。

そう思って足を進めていると

「あ、千雨。どこに行くんだ？」

思わぬ人に・・・いや、別にそれほどでもないか。

片手に大きめの鞆を持った彩先生に声をかけられた。

「どこって、屋内にネットしに」

さらっと答えてみる。

「・・・ここに来てまでかよ。せっかく水着に着替えたんだし、少しは海にでも行って見たらどうだ？気分転換には丁度いいと思うよ」

少し苦笑いになりながら彩先生が言う。

気分転換つつたって、あそこに行けば結局面倒なイベントに巻き込まれるだけだし、気分転換が出来そうだとはともじやないが思えない。

むしろ逆効果になりそうだ。

私が気分転換できるものといったら

・・・

・・・

・・・

うん、やっぱりネットだな。

そうだ、ネットしよう。

「面倒なイベントに巻き込まれるのも面倒だし、やっぱりネットしに行きます」

「いや待て、わかった。つまり騒がしくなければ行くんだな？」

「まあ、そうかもしれないですね」

そんなことあるわけないだろ。2－Aだぞ？

お祭り騒ぎが何よりも大好きなあの集団が、ここに来て何もしないでいるわけがない。

「じゃあさ、俺と釣りしないか？」

「・・・は？」

何故か期待した目で見られる。

・・・なるほど、最初からこれが目的だったのか。

だけど、なんで私なんだ？向こうに行って誘ったらホイホイ付いて来るだろうし。

「なんで私なんですか？」

「いや、なんかさ・・・みんなそれぞれ遊びだしてるから今からだと誘いづらくてね」

「ああ・・・」

頬を掻いて苦笑いをする先生。

・・・まあ、気持ちは分かるけどさ。

多分アイツ等のほとんどは遊んでる途中だろうが付いて行くだろうよ。

「つまらなかったら途中で帰ってもいいからさ、一度やってみないか？」

途中で帰ってもいいのか・・・まあ、その条件なら付いて行ってもいいかな。

「それなら、少しだけ」

「本当か！？よし、なら行こう！」

「え、ちょ・・・」

子供のような笑顔を浮かべた先生は、私の手を取ってずんずん歩き出した。

・・・彩先生ってあんな顔もするんだな。

まあ、ある程度付き合ったところで抜け出して屋内に戻るとしよう。



「よし、着いた」

数分歩かされた結果、どうやら目的地に着いたらしい。

目の前には岩場があつて、左の方に結構離れているが2－Aの勢ぞろいしている海岸が見える。

釣りの事はよく知らないけど、どうやらここでするらしい。

鞆を開けだす彩先生。

中からは新品の釣竿四本とクーラーボックス二つ、他にも釣具やエサとかがたくさん入ってる。

もしかして、先生ってけっこう釣り好きなのか？

「あの・・・先生って釣り好きなんですか？」

黙っているのも気が重かったからとりあえず訊いてみた。

「うーん・・・どうだろう。好きって言うよりも習慣づいちゃった

って感じがするな」

「習慣？」

「そうそう。俺って今は教師やってるけど去年は田舎で平凡な高校生やってたんだよ。その時の夏休みはいつも友達に連れられて釣りに行ってたからさ。そのおかげかも」

「へえ、そうなんで・・・す・・・か？」

「・・・ちよつと待て。」

なんか今色々気になる事を聞いた気がする。

田舎で高校生やってたって？

そこから何がどうなったら麻帆良で教師になるんだ？

……わけがわからん。

つか、おかしいだろ。どうなってんだ教育委員会。

「ん？どうかしたか？」

「え？あー・・・なんでもないです」

「？そうか。じゃあ・・・ほれ、千雨はこれを使ってくれ」

そう言って釣竿を渡される。

針も浮きも付けてあるから・・・後はエサを付ければいいのか？

ええつと、エサは・・・

「うわぁ・・・」

プラスチックの容器の中にウネウネと動き回るキモい生き物がたく

さん。

・・・どうすりゃいいんだよ。いきなり積んだぞ。

「ん？ ああ、さすがに女の子にはキツかったかな。ほら、貸して」

「い、いや、私がやる」

「お、チャレンジ精神旺盛だな。千切って針に刺せばいいからな、頑張れよ」

なんだか『彩先生にやってもらったら負け』というわけのわからない観念に突き動かされて断ち切ったんだが・・・どうしよう。見れば見るほどキモい。

ええっと・・・捕まえて千切ればいいんだよな。

・・・

・・・

くそっ、こいつウネウネ動きやがって・・・このっ・・・よし、捕まえた！

後は千切るだけだな・・・

「あ、言い忘れてたけどそいつ噛み付くから」

「へ？・・・って痛っ！ テメエ、そういうことは先に言えよ！？」

「あー・・・悪い」

出だしは微妙だったが・・・まあ、こうして私と先生の釣りが始まった。

それにしても、この人意外と抜けてる所があるんだな・・・

第三十一話（後書き）

と言うわけで、千雨と釣りをさせます W W

それにしてもこの離島イベント・・・長くなりそうです。
どうぞお付き合ってください W W

第三十二話（前書き）

今回は少し短いかもしれません。

オール釣りです。

千雨と彩オンリー回です。

あと、作者は釣り知識ゼロなので過度な期待は禁物です。

第三十二話

数分後。

真夏の太陽がカンカンと照る中、麦藁帽子を被り、薄手のパーカーを羽織った彩と千雨は釣竿片手に折りたたみ椅子に座って海を眺めていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そういえば、先生」

「ん？」

「むこうのみんなは先生の事探してるんじゃないですか？」

「ああ、それならあやかに言っているから大丈夫だよ。後で合流するとも言っているし」

「・・・そうですか」

「ああ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙が破られたと思えば再び訪れる沈黙。

別に気まずいわけではない。

その証拠に、彩はどこか弾んだ表情をしている。

その一方で、千雨は気だるそうな顔をしているが、内心は少しそわそわしていた。

だが、それも当然といえば当然だ。

長い間人と距離をとっている千雨には、仲の良いと言える友人・・・
と言うか、友人と呼べる存在すら皆無である。

だからこそ、この状況下での沈黙には居たたまれない気持ちを抱いていた。

そこで、この沈黙を打破しようとは思ってはみるものの・・・

「・・・・・・・・」

クラス内でも距離をとり、常に受身体制な接し方をしていた彼女にこの場に合った会話の話題が思いつくでもなく、結局黙り込んだままになってしまう。

すると、

「・・・ん？なあ、千雨の当たってるんじゃないか？」

「え？」

いきなり話しかけられた上に、よく意味のわからない事を言われて少し呆気にとられる千雨。

「ほら、浮きを見て」

「浮き？・・・あ」

千雨が彩の指差す方に目を向けてみると、水面に波紋を作る浮きがあり、手に持つ釣竿にも少し手ごたえを感じた。

「今、魚がエサに食いつこうとしてるんだよ。多分すぐに「うわっ！？」・・・かかったみたいだな」

彩が言い終えるよりも先に、千雨の釣竿が弧を描いていた。思いの外強い手ごたえに千雨は思わず引っ張られそうになるが、立ち上がって足を踏ん張り、小型のリールを巻き始める。

「くそっ・・・こいつ、結構、強い！」

「いいぞ、千雨。その調子・・・っと、俺も当たったかな？」

千雨を見守っていた彩だったが、自分の釣竿のエサも突っつかれている感触を感じて意識を戻す。

すると、案の定竿が弧を描いて引っ張られ始める。

彩は座ったままリールを巻き始めると、程なくして千雨のリールを巻く音が止んだ。

「よっ、と。うわ、細っ・・・先生、これ何ですか？」

千雨の手には、細い円筒形の2、30cmほどの魚があった。

「ああ、それはシロギスだな。揚げると美味しいんだ」

彩はリールを巻きながら千雨の方を向くとそう説明した。

「へえ……」

千雨は始めて釣った魚に感動をしているのか、釣ったばかりのシロギスをまじまじと眺めている。

また程なくして、彩のリールを巻く音が止んだ。

それに気づいた千雨が彩の方を見てみると、彩の手にも千雨と同じシロギスがあった。

「先生もシロギスですか？」

「ああ、この時期は産卵に来るからよく釣れるんだとさ」

「そうなんですか」

「ああ……ていうか、千雨」

「なんですか？」

「針外してクーラーに入れないと……」

「へ？……あ」

千雨が手にしたシロギスを見てみると、元気がなさそうにぐったりとしている。

釣ったばかりの時の元気のよさはまるで感じられない。

そんな一方で、彩は釣ったばかりの生きの良いシロギスを針から外してクーラーに放り込んでいる。

そこで、目の前で彩がやっているように千雨も外してみた所……

「……よし、こんな所かな」

魚が動き回らないこともあってか、思いの外あっさりと成功した。あとはクーラーに入れるだけ、「（なんだ、楽勝だな）」と気を抜いたその時

――ぽちゃーん――

「……あ」

手を滑らせた千雨はシロギスを落としてしまい、最後の力を振り絞って地面を跳ねたシロギスは海へ帰って行った。

「ああああっ！！私のシロギスが！！」

「あー・・・ドンマイ」——ポン——

拳をわなわなと震わせて打ちひしがれる千雨に彩が出来る事はこのくらいしかなかった。

・

・

・

「あのー・・・千雨？」

ちよっただけ時間が経ち、未だにプルプルと震えている千雨に声をかける彩。

一方で、千雨の表情は帽子で隠れてよく読み取る事が出来ない。

「・・・じゃねえか・・・」

「え？」

ポソリと呟いた一言に彩は聞き返す。
すると、

「上等じゃねえかあの野郎！もう一遍釣り直してやるから覚悟しと
けよ！？」

そういうや否や、勢い良く立ち上がって素早くエサを針に刺し、竿を握りなおす千雨。
その目は闘志に満ち溢れている。

「・・・・・・・・」

一方で、彩はそんな千雨の行動に呆気にとらるだけだった。



side. 彩

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あれから二時間ほど経っただろうか。
俺のクーラーには子アジ五匹とシロギス三匹とカサゴが一匹。
千雨のクーラーには子アジ四匹とシロギス三匹。

それにしても、面白いくらいにポンポン釣れる。
もしかしたら結構な穴場なんじゃないだろうか。

さて、リベンジ宣言をした千雨は、あの後あっさりとシロギスを釣り上げた。

運がいいのか才能があるのかはこの際気にしなくてもいい。

ただ、重要なのはどうやら釣りを気に入ってくれたらしいということだ。

シロギスを釣り上げてガッツポーズをしていた千雨は、シロギスをクーラーに放り込んだ後、何食わぬ顔で俺の横に戻ってきた。

そして、そのまま釣竿にエサを付けてつりを再開した。

あれ？最初はあるまり乗り気じゃなかったような気がしたんだけどな・・・もう一匹釣ったら終わるのかな？と試してみたが、そんなことがもう何回も続いている。

これは気に入ってくれたと思って問題なんじゃないだろうか。

俺としては釣り仲間が出来そうな予感がして嬉しくて仕方がない。

ただ、本人は無意識的に続けているような気もするから、終わってから感想を訊いてみようと思う。

「なあ、千雨」

「ん？」

「もうすぐ昼だし、お互い一匹ずつ釣ったらみんなの所に戻らないか？」

「ああ、もうそんな時間か」

素の口調のまま千雨が答える。

結構前から戻ってるんだが、本人は自覚無しの様子だ。もしかして、それなりに気を許してくれたんだろうか。そうだったら嬉しいんだけど。

「釣った魚も結構あるし、おかずには困りそうに無いよな」

「確かにな。でも、カサゴとか食えるのか？見た目結構キモいんだけど」

「いや、それがな、カサゴって美味しいんだぞ？」

「・・・それ、マジか？」

「ああ、マジだ。なんなら後で何か作ってやるよ」

「そうか、じゃあ・・・って、先生料理できたのかよ？」

「できるよ。ちなみに家事全般は一通りこなせるな」

「なんでだろ・・・違和感を感じない」

「・・・それって褒めてるのか？」

「・・・多分な」

苦笑いで答える千雨。

しかし、どうも少し釈然としないな・・・。

そんな気持ちを持て余していると、

「お、当たったか？」

千雨の浮きが波紋を作り始める。
そして、浮きが沈んで竿が弧を描く。

「よっしゃ、来た来た」

もう動じる事も無く、慣れた手つきでリールを巻く千雨。
その表情はなかなか生き生きしているものだと思う。
うん、やっぱり誘ってみて正解だったのかな？

第三十二話（後書き）

釣った魚は一応季節に合わせてみたつもりです。

ただ、作者は釣り知識ゼロです。大事な事なので二度言いました。どうか、深く突っ込まないであげてください。

ただ・・・釣り好きの方がいましたら、知識の伝授をお願いしたい所ですね

意見、感想待ってます。

第三十三話（前書き）

台風が家の地区を通り過ぎていきました。

おかげで今日は昼間には外でセミが鳴いていました。

過去最大級らしいですからね、みなさんは気をつけてください。

第三十三話

昼の海岸には、2－Aのメンバーにもみくちゃんにされる彩と千雨の姿があった。

「ねえねえ、この魚何？もしかして長谷川さんが釣ったの？」

「あ、ああ・・・それはシロギス。この時期には浅瀬に産卵に来るからよく釣れるらしい」

「じゃあ、このちょっと気持ち悪いのは？」

「カサゴ。一年中釣れるけど冬場が一番美味らしい」

「長谷川さんすごい！」

クーラーボックスを興味津々に覗き込む2－Aのみんなに彩から習った知識をさっそく披露する千雨。

面倒くさそうな表情もしているが、その顔はどこか照れくさそうだった。

そして、そんな一方で彩はその輪から引っぱり出されてパラッチから質問という名の尋問を受けていた。

「それで、長谷川とはいったいどういったご関係で？」

「教師と生徒・・・かな」

「それにしても大変仲が良いように見えたが？」

「いろいろと通じ合う所があったからじゃないのか？（主に釣りとかで）」

「なるほど・・・そこから恋仲に発展するんですね？」

「いや、しないから」

「おや、それはどうしてでしょうか？」

・
・
・
・
・
・
・

「なるほど、つまりまとめるてみると・・・卒業するまでは手を出すわけにはいかないと？」

「お前俺の話全然聞いてないだろ!？」

「貴重なお話ありがとうございましたー!それじゃ、お次ははっせゝがわゝ♪」

「あ、おい和美!？」

彩への取材を終えた和美は鼻歌を歌いながら千雨の輪の中に突入し

ていった。

そして、残された彩は啞然としつつ、二度と和美の取材には応えまいと心に深く誓う事となった。



side. 彩

昼食をバーベキューで済ませた俺たちはパラソルの下で小休憩をしている。

なんでも、午後からはビーチバレー大会をするらしく、その準備の時間が少しかかるそうだ

ちなみに、俺たちが釣った魚はみんな美味しく頂いた。
特にカサゴは見た目と味が結びつかないからみんな驚いた様子だった。

千雨も自分で釣った魚を美味しく食べていたし、「麻帆良でも釣りができる所はあるのか？」なんてことを訊かれたりもした。

ああ、そうそう。

千雨に釣りの感想を訊いてみた所、少し頬を掻きながら「まあ、悪くなかったかな」と言われた。

あの子のいつもの態度から考えると、大分気に入ってくれているようだった。

とりあえず、今度ヒマな時でも千雨を誘って川釣りにでも行ってみ

ようと思う。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「そういうわけで、ビーチバレー大会を始めます！」

『おー！！』

十数分後、ネットの設置も完了して、現在は和美が進行役としてルール説明をしている。

こういうイベント事ではもの凄い統率力を発揮するのに、実況やらインタビューやらでは別の意味で恐ろしい才能を発揮する。というか、今さっき千雨と一緒に頭を痛めたばかりだ。

「ビーチバレーだと？また面倒な・・・」

そんな愚痴を漏らしながら俺の隣にやってきたのはエヴァだった。白スクというえらくマニアックな格好をしている。

いったいどこで仕入れてきたんだろう。

まさか、自分で作ったなんて事は・・・あり得るね。

うん、否定できないから困る。

「おい、どうかしたのか？」

白スクのエヴァをじーつと見ていたら怪訝そうな目で見られた。

「いや、なんでもない」

「?そうか?・・・それにしても、今回のお前はひどく思い切った行動をしたな」

「いきなり何の話だ?」

「私を連れてきただろうが。学園の連中に知れたらどうするつもりなんだ?お前は」

「うーん・・・まあ、別に構わないかな。どの道今年中にはバラす事になるんだし」

「は?」

わけが分からないような顔をするエヴァ。

だけど、今年中にバラしておかないと来年一つ問題が起こる。

「だってさ、教師陣に知られてないと堂々と修学旅行に行けないじゃん」

「・・・なに?」

「何度も中学生やってながら一回も修学旅行行った事が無いんだろ?来年で真正正銘最後の中学生生活になるんだから、しっかり参加してしっかり楽しんでくれ」

確か、うちの旅行先は京都かハワイの選択式だったな。

日本好きなエヴァのことだ、京都には少なからず憧れを抱いてる事だろう。

来年こそはみんなと一緒にいかせてあげたいものだ。

・・・もつとも、旅行先が京都になるかどうかは俺にはまだ何とも

言えないが。

「彩・・・」

「それに、学園長とタカミチさんからは二つ返事で了承を貰ってるんだから怖いものはない」

「じじいとタカミチが？しかし何時の間に・・・」

「昨日エヴァたちを家に送った結構後だったかな。エヴァを結界外に連れ出すことになるから大事になる前に話は通しておこうかと思っ
て」

まあ、呪いを解けた事に関してはもの凄く驚かれたけど、呪いを解いた事に関しては特に追求されなかった。

もともと三年で解けるという約束だったからなのか、それとも二人がエヴァの呪いが解けて自由になる事を望んでいたからだろうか。
俺には知る由も無い事だが・・・二人ともエヴァとは仲が良いし、後者であると信じたい。

「しかし、じじいたちが反対したりしたらどうするつもりだったんだ？」

「口論になる事も想定に入れてたし、対策も練ってあった。最悪、強制認識術式を発動させてでも納得させるつもりだったから結局はこの状態に帰結する事は確定されてただけだな」

「また無茶な事を・・・」

「経験上、無茶は得意なんだ。このくらいどうって事ないよ。それ

に・・・」

「それに？」

「よくよく考えたらさ、おかしいだろ」

「・・・は？」

「三年で開放されるはずがもうすぐ十五年だ。前にも言ったとおり時効だし、契約違反だ。本来なら殺されても文句は言えない。それにもかかわらず、ここにいる間に起こした事件は無く、本来ならする必要のない警備も行ってきた。学園側から信用を得るには十分だ。それなのに未だに行動を抑制されてるのには納得がいかない」

「お前・・・」

「まあ、考えはちょっと強引だったかもしれないけど行動に移したわけ————」

「ちょっとじゃなくて相当の間違いだろうが！さりとんでもない事をしようとしおって！お前馬鹿か！？いや、馬鹿なんだろう！？」

「うわ・・・本当に酷い言われようだ。」

「だけど、本当にどうってこと無いんだけどな。」

「俺の中ではあの程度で無茶なんて言わないんだよね・・・ていうか言えないし。」

「それにしても」

「・・・さすがに言いすぎだと思わない？」

眉がピクついてしまうのはさすがに仕方がないと思う。

「言いすぎなわけがあるか！もしも全て失敗してお咎めを食らうことになったらどうするつもりだったんだ！今回は事なきを得たが・・・だいたいな――」

「はーい、お二人さんストップ！」

エヴァの説教が始まる寸前で和美にストップをかけられる。まさか、和美に助けられる日が来るとは夢にも思わなかったよ。

「む・・・なんだ、朝倉和美。お前に用は無いぞ」

「いやいや、それが私にはあるんだよねー」

「なら四十文字で言え。それが無理なら向こうへ行け」

「四十文字!？」

「あと三十四文字だな」

「ええ!？ええっと、バレーのチーム分けしたいから集まって欲しいんだけど」

あ、四十文字ジャストだ。
これは凄い。

「チッ、本当に四十文字でまとめたか」

「え、舌打ち！？酷いなあ、エヴァちゃんは。ちゃんと四十文字でまとまったんだから集まってよー」

「ちゃん付けはやめろ、ちゃん付けは！・・・まったく。まあいい・・・おい、彩」

「・・・なんでしょうか」

「するべき話は山ほどあるが、今は後回しだ。行くぞ」

「ああ、そうだな」

「それから・・・」

「？」

「い、一応礼は言っておく・・・」

そっぽを向いて頬を掻きながらエヴァが言った。

それにしても、エヴァが素直に礼を言うなんてまた珍しいな。

「・・・ああ」

「ふ、ふん！さっさと行くぞ！」

そう言うや否や、俺の反応を待たずにずんずんと前を歩いて行った。

ここで終われば本当によかったと思うんだけど、それを良しとしない人物が一人。

「なるほど・・・会話の内容はよく聞こえなかったけど、長谷川の次はエヴァちゃんと来たかわけか・・・彩さん、さすがにエヴァちゃんを狙うのは犯罪の臭いがするんですが、そのところは？」

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
うん。

とりあえず、問答無用でジャイアントスイングをして海に放り込んだ俺は悪くないと信じたい。

第三十三話（後書き）

次回はビーチバレー対決です。

それにしても、一日目が長いww

信じられないかもしれませんがまだ続きます。

もうしばらくお付き合いください。

第三十四話（前書き）

離島一日目長い・・・。

鬼ごっこのときよりも長くなりますね、これ。

ともかく、まずは全力でビーチバレーを終わらせないといけませんね。

というわけで、ビーチバレー対戦・・・始まります。

第三十四話

ビーチバレーのチーム分けと試合順は以下の通りになった。

試合1…楓、菲VS史伽、風香

試合2…木乃香、刹那、明日菜VSあやか、千鶴、夏美

試合3…美空、ザジVSアキラ、亜子

試合4…裕奈、まき絵VS円、美砂、桜子

試合5…夕映、のどか、ハルナVS聡美、茶々丸

試合6…鈴音、五月VSさよ、真名

シード枠…エヴァ、彩、千雨

以上の13チームでトーナメントが行われる事になっている。

10ポイント先取制だが、2人編成のチームと3人編成のチームがあるため、その辺りは臨機応変にハンデをつけるようになっていく。
・・・しかし、明らかにパワーバランスが異常なため、ハンデが意味を成すか謎である。

・・・・・・

・・・・・・

・・・

三ヶ所設置されたコートで、それぞれのチームがウォーミングアップ

プをしている頃。

何時の間に用意したのか、長机とパイプ椅子、巨大アンプにマイクなどの設備が整えられた『運営』という文字の書かれたテントから和美の声が響き渡った。

『さあ、いよいよ始まりますビーチバレー大会！審判兼メイン実況はこの朝倉和美が勤めさせていただきます！はたして、優勝して景品を手に入れるのはどのチームなのか！？まもなく第一試合を開始しますので、選手は中央にある試合コートのエンドラインで待機しててください！』

和美の合図と共に、三ヶ所の内の真ん中のコートに楓と菲と史伽と風香が集まり、周りは各所に設置されているパラソルの下に入って観戦体制に入る。

『第一試合一発目は四天王が二人、長瀬&古チームVS鳴滝姉妹チーム！2-Aの獰猛者二人を相手に鳴滝姉妹はいたいどう戦い抜くのか！？』

「ふむ、拙者たちの最初の相手はお主たちでござるか。どの程度の実力が付いたか拙者に見せてみるでござる」

「あううゝ、お姉ちゃゝゝん」

「だ、大丈夫だよ。僕たちが力をあわせればきっと勝てるよ」

「で、でもゝ」

「ほ、ほら、弟子は師を越えるものって言うだろ。僕たちの力をかえで姉に見せつけるんだよ」

「う、うん。わかったよ」

「うむ、二人ともその息でござるよ。拙者たちも優勝を狙うゆえ、手加減は出来ぬ。全力でかかって来るでござる」

「・・・？結局どーゆーことアルか？」

「つまり、お互いに全力で戦うという事でござる」

「おお、なるほど！」

ボールには目もくれずに火花を散らしあう楓と鳴滝姉妹。

そして、『戦う』の方向性を根本的に間違えて明らかに打撃技を繰り出すための構えを取る菲。

・・・間違ってもこれからビーチバレーの試合をするものだとは思えない。

『さあ、第一試合からとんでもないチームを相手にしてしまった鳴滝チームに勝機はあるのか！？それでは、試合開始です！』

side. 彩

『さあ、続いては因縁の対決、神楽坂チームVSいいんちょチーム

！長くに渡って繰り広げられている二人の勝負ですが、果たして今回はどちらが勝利を収めるのか！？」

え？一試合目はどうしたかだって？

出来れば触れないであげて欲しいんだけどな・・・。

・・・まあ、少しだけなら教えてもいいか。

結果は・・・教えるまでもないと思うが楓たちが勝った。
ただ、内容が不憫すぎて俺たちは目も当てられなかった。

だってさ・・・あの二人、どんだけ頑張ってもネットに手が届かないんだよ・・・。

身長130cm未満で、映画館では小学生料金で入れる、なんてことを自慢げに語っていたあの二人が身長がある程度必要なこのスポーツをする事なんて無謀の極みだった。

スパイクを打つ事が不可能なため、使える手段はアンダーハンドかオーバーハンドパスのみ。

つまり、攻撃の手段がなく、守りに徹する事しか出来ないため得点の手段がない。

得点を得る事が出来るとすれば、相手がミスをしたときくらいか・・・。

しかし、相手は四天王とも呼ばれる武闘派チームの上に戦闘民族属性つきである。

さらに、本気で優勝狙いときている。

そんな二人が手加減なんて悠長に構えることなんてあるはずも無く、二人が勝利する確立は絶望的だった。

サーブを頑張って返しても、数秒後にはバカみたいな勢いでスパイクが返ってくる。

ブロックも出来なければ、角度が急過ぎるためにネットの直前で降下してくるボールに逃げ惑うしかない。

そんな一方的な攻撃（あいつのせう）が続き、結局は五分と経たずに10ポイント先取されて試合終了。

情けやハンデとして与えられた7ポイントが無意味に帰すことになった。

ちなみに、優勝賞品は『大会参加チームの内1チームへの絶対命令権』。

・・・うん、あの二人は完全に俺狙いだね。

試合に勝った二人が同時にこっちを向いた時は本当に寒気がしたよ・
・。

・
・
・
・
・
・
・
・

「そろそろ白黒はつきりさせる時が来たようですわね、アスナさん」

「そのよね、いいんちよ」

リーゼントなお兄さんやパンチパーマなお兄さんたちも尻尾を巻いて逃げ出すレベルでガンを飛ばし合う明日菜とあやか。※ただし水着である。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

顔がどんどん近づいていってさらにガンを飛ばし合う明日菜とあやか。※ただし水着である。

・・・あ、額がついた。

「顔離しなさいよ」

「そちらこそ離れたらどうですか？暑苦しくて仕方ありませんわ」

「そっちが離れたら離してやるわよ、シヨタコン」

「なッ！？このオジコン、ぶっ殺しますわ！」

「上等よ！やれるもんならやってみなさい！」

「・・・よろしいですわ」

「ならば」

「「戦争よ（ですわ）！！」」

言い終えると同時に二人の顔が離れてお互いにエンドラインに下がっていく。

さすが幼馴染にしてケンカ友達。息ピッタリだな。

離れる瞬間とかほぼ同時だったし。

なんというか・・・『ケンカするほど仲が良い』って言葉がまんま当てはまるよな、あの二人は。

side out

『一触即発したところで、試合開始です！さあ、因縁の対決を制するのはどちらのチームか！』

「行くわよ、木乃香、刹那さん！」

「う、うん（え、ええ）」

「行きますわよ、千鶴さん、夏美さん！」

「「あらあら、やる気満々ね（う、うん）」」

リーダーの殺る気に気圧されながらもポジションに付くメンバー。そして、全員がポジションに付いたところで明日菜がボールを高く放り投げ、バレー部顔負けのジャンプサーブを放った。

放たれたボールは、先程の楓のサーブに引けをとらない鋭さと正確さでバックライト側のエンドラインすれすれのきわどい部分に吸い込まれていった。

「あっ・・・！」

「夏美、私が行くわ！」

バックレフト寄りのポジションにいた夏美が追いかけるが間に合わず、フロントライト寄りに居た千鶴がボールを追ってジャンプレシーブをする。

「千鶴さん、ナイスですわ！夏美さん！」

「はい！」

千鶴の高く上げたボールを夏美がフロントセンターからトスしてあやかに繋げる。

「行きますわよ・・・喰らいなさい！」

そして、絶妙な位置に上がったボールにあやかが渾身の力を込めてスパイクを当てる。

あやかの放ったスパイクは刹那のブロックをかわして鋭く直線に飛び、バックセンター付近にいた木乃香の左斜め後ろに突き刺さった。

「ふふん、どうですか？アスナさん」

「やってくれるじゃないの、いいんちょ・・・木乃香、刹那さんドンマイ！次は取るわよ！」

「「うん（はい）！」」

続いて、あやかのサーブ。

明日菜と同じようにジャンプサーブで放たれたボールは、バックレフト付近に構えていた木乃香に向って飛んでいった。

「このちゃん！」

「うん！いくえ、せっちゃん！」

木乃香のレシーブが上がり、刹那が追ってトスを上げる。

「明日菜さん！」

そして、刹那が上げたトスを対角で構えていた明日菜が捕らえる

「ナイス、二人とも！喰らえ、いいんちよ！」

バスン！と、重い音を立てて放たれたスパイクはバックライトで構えたあやかの方に飛んでいった。

いち早く反応したあやかはレシーブを上げようとボールを捕らえるが、

「・・・くっ！」

予想よりも勢いの強いスパイクの力に押されてしまい、ボールはあらぬ方へと飛んでいった。

「アスナ、ナイスや！」

「ふふん。どうよ、いいんちよ」

「く・・・やりますわね、アスナさん」



現在、９－９。アドバンテージ、チーム明日菜。

デュースが発生してから１３分。

激しい攻防が何度も続き、アドバンテージが何度も入れ替わり、互いに疲労困憊状態になってきている。

両チームのメンバーの肩で息をしていて、腕は日焼けのせいなのか、それともボールのせいなのか赤くなっている。

「はぁ・・・はぁ・・・そちらの、チームも、やりますわね、アスナさん・・・」

「・・・はぁ・・・そっちも、ね、いいんちよ・・・じゃあ、いくわよ」

息も途絶え途絶えに互いに言葉を交わす。

そして、アスナが渾身の力を込めてジャンプサーブを放つ。

さすがにキレは失われつつあるが、まだまだ鋭い部類に入る。

放たれたサーブはバックセンターの少し後ろに向って突き進む。

「ちづ姉、お願い！」

「まかせて！」

自分では追いつけないことを悟った夏美は千鶴にレシーブを任せて

セッターポジションに付く。

「夏美！」

レシーブを上げた千鶴が夏美に合図送る。

それに頷き返した夏美はボールを捕らえてあやかにトスを上げる。

「いいんちょ、おねがい！」

「お任せなさい、な！」

上がったト스에勢い良くスパイクを叩き込むあやか。
だが、

「させません！」

刹那のブロックによってあやかのスパイクは弾かれる。

軽く弧を描いてあやかのコートに戻っていくボールを啞然として見
送るあやか。

しかし、

「まだまだよ、夏美！」

いち早く反応した千鶴がジャンプレシーブをしてボールを上げる。

「任せて、ちづ姉！」

そして、夏美が千鶴の上げたボールをトスで上げる・・・が、

「あっ！」

トスを高く上げすぎてしまい相手側のチャンスボールになってしま
う。

「チャンスよ、木乃香！」

「うん、任せて！」

バックセンター寄りに降ってきたボールをレシーブで刹那に上げる
木乃香。

「せっちゃん！」

「お任せください！」

セッターポジションに移動した刹那は慎重に明日菜にトスを上げる。

「明日菜さん、決めてください！」

「OK！いくわよ！」

「二人とも、全力で守りますわよ！」

「「うん（ええ）！」」

全力で攻撃を仕掛ける明日菜に対し、全力で守りに徹するあやかチ
ーム。

そして、明日菜が飛び上がり、全力のスパイクを叩き込む。
向って走るスパイクをブロックで必死に防ぐあやかだったが、

「・・・っ！」

疲労の溜まった腕で防ぎきる事が出来ずに、ボールの勢いに押し負けてしまう。

あやかはそのまま砂浜に仰向けに倒れる。

そして、少し遅れてボールが砂に落ちる音によって、この試合の勝者が決定した。

『し、試合終了ー！ー！！因縁の対決、この激しい戦いを勝ち抜いたのは神楽坂チームでした！いやー、ホントお疲れ様です！』

そして、試合を終えた明日菜は、仰向けで砂浜に倒れたままのあやかの下に向った。

「よ、いいんちょ。ほら、大丈夫？」

「・・・これが大丈夫に見えますの？疲労困憊ですわ」

手を差し伸べる明日菜に対してその手を取って立ち上がるあやか。そのまま明日菜の肩を借りてテントの下に向う。

「あはは・・・実は私も」

「ならどうしてそんなに動き回れますの？私なんてもうくたくたですのに・・・ああ、そうでしたわね。昔からあなたは体力バカでしたからね」

「む・・・なによ、またバカにしてんの？」

「バカになんてしてませんわ。ただ呆れ返っているだけです」

「同じ事じゃないのよ!」

「まさか、ぜんぜん違いますわ。知っていました? 呆れるのと感心するということは紙一重なんですよ?」

「・・・紙一重?」

「わずかな隔たりがありますがほとんど同じという意味です」

「え・・・じゃあ、まさか私の事褒めてたの?」

「まさか。アスナさん、あなたは呆れるという言葉の意味を知っていました? あまりにも酷い有様に驚く様のことを言うんですよ?」

「屁理屈ばっか並べただけで結局馬鹿にしたことには変わらないじゃないの!」

「うーん・・・まあ、そういうことになりますわね」

しれっとした顔で言うあやか。

『試合に負けたが勝負に勝った』というような顔をしている。

「あ、あんたねえ・・・」

拳をわなわなと震わせながら明日菜が言う。

だが、お互いにもう取っ組み合うような力は残っていなかったし、するつもりもなかった。

「ふふふ・・・」

「いいんちょ？」

「アスナさん」

「なに？」

「次は負けませんわよ」

「・・・うん」

第三十四話（後書き）

信じられないと思いますが、一日目がまだ続きます。

・・・というか、ビーチバレーにここまで力を入れるはずじゃなかったんです。

ホントはもっとスマートに片付く算段があったような気もするんです。

ですが・・・仕方ないですよ。

キーを叩く指が踊ってしまったんですから。

これはもう打つしかないな、と。

そう思ってしまったんです。

ともかくですね、彩の試合まで軽くスキップさせて早めにビーチバレーを終えたいと思います。

やりたいイベントがまだまだあるというのに・・・このままでは離島イベント作るだけで僕の夏が終わる気がします。

ジャレになりませんで・・・ W W W

第三十五話（前書き）

バレボーが続きます。

何とか次回で終わらせれそうです。

そのために今回はちょっと短くなってしまいます。

第三十五話

六戦目が終わり、六戦目の勝者とシード枠のエヴァチームとの試合中に事態は起こった。

――バスッ！

乾いた音を立てて真名のスパイクが砂浜に突き刺さる。

「な・・・彩！何をしている！？」

「先生・・・マジかよ・・・」

エヴァと千雨が驚愕して後ろを振り返る。

そして、そこには啞然とする彩の姿があった。

『おおっと、龍宮選手の鋭いスパイクに久寿野選手手が出ない！麻帆良のリーサルウェポン万事休すか！？』

相変わらずの和美の実況がアンプから流れてくるが、今の彩にはそんな事を気にする余裕などどこにも無かった。

side・彩

これはなんの冗談だろうか。

正直、麻帆良というものを侮っていたようだ。
どうやら認識を改める必要があるらしい。

しかし、今まで2－Aの副担任をしてきたというのに、どうして気がつかなかったんだろうか。
思い返してみれば、気づく機会なんて山のようにあったはずだ。
ここに来てからはむしろ気づかない方がおかしいと思えるくらいだ。
なのに、どうして今更になってやっと気が付くような醜態を晒す事になってしまったのか。

・・・いや、もしかすると、気が付いていたのに気づかないフリをしていたのかもしれない。

そのおかげでこんな失態を犯してしまうとは・・・なんて、無様。

麻帆良・・・本当に恐ろしい所だ。

だって・・・

「中学生・・・中学二年生で揺れるとかどんだけだよ・・・」

誰に問いかけるでもなく小さく呟く。

そして、耳に入ってくる先程自分が放った言葉を認識する。

・・・。

・・・。

・・・そうだよ。

中二で揺れるとか、いったいなんの冗談だよ。

そのワリに腰まわりはスラッとしててさ。

「あれだ、モデルにでもなっておけよ！」と思わずツツコミを入れ
たくなるようなスタイルして。

いくら俺でもこればかりは「ありえない」と現実逃避をしてしま
いなくなる。

しかも、真名だけではない。

周りに目を向けてみると、あやか、千鶴、アキラ、楓、茶々丸・・・
・まだまだいらっしゃる。

うん、あたり一面モデルまみれだ。

本当に、なんで今になって気づいてしまうんだろうか。

まあ、生徒・・・というか子供相手だし、さすがに『そういう目』

で見ることは無い。

しかし、あそこまで露骨に暴れまわられると目が向いてしまうというのは、避けては通れない男の宿命なのだろうか……。

「おやおや、彩さん。どうしたのかな？」

そんな事を考えていると、真名がこちらを見下ろしながら問いかけてくる。

……おそらくこっちの心境だってわかってるんだろうな。声色から嫌と言うほど伝わってくる。

「……なんでもない」

こんなチンケな返答しか出来ない自分が恨めしい。でも、今回ばかりは仕方が無いと思って欲しい。

「本当かな？」

真名がニヤニヤしながら問いかけてくる。

……ちくしょう。

俺に変態紳士属性があればこんな状況なんて余裕で打破できるのに！

……いや、だめだな。

教師が変態紳士なんてシャレにもならん。

それに、みんなから引かれるのはさすがにイヤだしな。というか、想像してみても自分で引いたし。

「ふふふ・・・」

不敵な笑みを浮かべる真名。

うーん・・・どうしたものか。

・・・

・・・

まあ・・・早い話、真名を見ずに戦えばいいだけの話か。

ちよっとやりづらくなるけど、精神力が削られるよりマシかな。

「先生、大丈夫かよ・・・」

少し黙っていると、千雨が心配そうに声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。次は確実に返す」

そう言って立ち上がる。

そして、こちらに「いけるのか？」と目配せをしてくるエヴァに「大丈夫だ」という意思を込めた視線を返してポジションに付く。

「おやおや、もう見飽きたのかい？彩さん。せっかく無料で見せてあげてるのに」

胸を張ってソレをやたらと強調してくる真名。

しかし、もう目なんてくれてやるものか。その手にはもう乗らんぞ。それと、無料という単語を強調するな。

「いや、今回は遠慮しておくよ。それにしても、今回はやけにサー

ビス精神旺盛じゃないか。何かいいことでもあったのか？真名」

「なに、たまにはこんな日があってもいいんじゃないかと思ってね。それじゃあ・・・いくよ？」

そう言うや否や、真名の手から鋭いサーブが放たれた。

影と音で落ちる所を先読みした俺は、バックレフト付近へ回り込む。そして、近づいてきたボールをアンダーハンドで捕らえて千雨に繋ぐ。

「千雨！」

「任せろ！」

珍しくやる気を見せている千雨がセッターポジションからボールを上げる。

「ほらよ！」

そして、スパイクを打つべく飛び上がったのは俺ではなくエヴァ。鳴滝姉妹とどっこいな身長のエヴァが飛び上がったことに千雨は驚くが、真祖の跳躍力は伊達ではない。

余裕でネットの高さを越え、上がったボールを捕らえて尋常でない鋭さのスパイクを放った。

「返せるものなら返してみろ！」

「む、速い・・・！」

真名でさえ驚愕するほどのスピードで放たれたスパイクはあっさり

と砂浜に突き刺さり、こちらに一ポイントが入った。

『おおっと、これは何という事でしょう！ネットに手が届くかさえ怪しい身長のマクダウエル選手が「うっさいわ！」・・・マクダウエル選手がすさまじいスパイクを放ち、一ポイント獲得！現在3対6、逆転勝利なるか！？」』

エヴァの抗議を華麗にスルーして実況をすすめる和美。
さすがパラッチ。スルースキルが無駄に高い。

「・・・いや、ぶっちゃけありえんだろ。垂直飛び1mは越えてたぞ」

ふと、千雨がそんな事を呟いていた。

そういえば、麻帆良に来てからしばらく聞かなかった単語だ。

俺自身は何度と無く放ってきたが。

それにしても、認識障害がかかってる筈なのにどうしてそんな単語が？

垂直飛び1m越え程度では『普通』として認識されるはずだ。

・・・もしかして、彼女には作用していない？

そういう結論に至るのにそう時間はかからなかった。

今のように認識に働きかける術が効力を成していないということは、下手をしなくても先日のアキラのようになってしまう可能性が高いだろう。

いや、寧ろ今まで巻き込まれなかった事が奇跡だと思ってても良いくらいだ。

この件については早急に手を打つ必要があるらしい。

「先生、サーブだぞ」

「ん？つと・・・」

投げ渡されたボールをキャッチしつつ、試合に集中を戻す。

負けてしまえば戦闘民族から戦いを要求される確立が上がり、勝てば心配が無くなる。

・・・そういうわけだ。

悪いけど負けるわけにはいかない。

少し大人気ないが勝ちに行かせて貰おう。

・・・やり過ぎない程度に。

s i d e . o u t

彩が少し回転を強めにかけたジャンプサーブを放つ。

すると、端から端へ対角に打ったサーブは軌道を変えてバックライ
トへ飛んで行く。

そして、さよがそれに反応してレシーブをしようとするが

「あっ！」

強回転がかかったボールはまっすぐ飛ばず、場外へ飛んでいった。

「う・・・真名さん、すみません」

「いや、いいんだよ。まだまだこれからさ」

と、フォローする真名チームに対し、

「くおら、彩！さよが怪我したらどうするんだ！？加減しろ、加減を！」

「点取ったのに怒られるのかよ・・・」

「あー・・・まあ、あれだ。ナイス、先生」

千雨と彩の力無いハイタッチが響き渡るエヴァチームだった。

第三十五話（後書き）

彩は紳士と変態紳士の割合が8..2くらいなんですか。

・・・ハッ、チキン野郎ですね。

そんな変態紳士度で主人公を勤めるとは笑止ww
僕ならガン見する自身が（ry

いきなりわけが分らないと思いますが

水着、巨乳、女の子だらけ。

こんな要素があるんだからなにかしらのリアクションを起こすべき
でしょう!?

ですが・・・だからと言って・・・!!

彩の性格的に変態紳士的なネタに走るわけにはいかず、やむなく中途半端な変態紳士ネタもどきになってしまったんですよ・・・!

ちくしょう、チキン彩め・・・おっと、誰か来たようです。

さて、次回で決勝を書いて優勝商品&バツゲームを発生させます。

バレー小説じゃないんですから飛ばし飛ばしでも構いませんよね・・・?
・?

それにしても、一目が本当に長いですね。

なんだか決まり文句みたいになってきましたwww

第三十六話（前書き）

予告どおり、今回でやっと一日目が終了です。
バレー戦を中抜きにしたとはいえ・・・長かったですね。

第三十六話

『ゲームセット！エヴァチームの勝利です！』

彩がとったチキン戦法で一戦目の難敵から無事（？）勝利を収めたエヴァチームは、二戦目の聡美＆茶々丸チームからも勝利を収める事が出来た。

「彩さん、マスター、長谷川さん、お見事です」

「あ、ああ・・・茶々丸もお疲れ様」

「ふん、従者に負けるようでは主の顔がもたんからな」

三人に賞賛の言葉を送る茶々丸だったが、彩は苦笑いをし、エヴァは「当たり前だ」と言わんばかりの顔をしている。ちなみに、彩が苦笑いをしている理由は・・・

「そっちのチーム・・・つか、最早チームじゃねえだろ。実際はお前しか動いてなかったじゃねえか・・・」

千雨がボソリと呟いた一言で大抵は想像が付くだろう。

「うーん・・・やっぱり、もう少しセンサーを・・・」

・・・そう。

分厚い手帳を片手にブツブツとマッドなことを呟いている聡美が原因である。

試合中、聡美は一人コートの隅で手帳とボールペンを手にして茶々丸に指示を出す事だけに徹していた。

サーブが来れば茶々丸を動かし、スパイクが来れば茶々丸にブロックさせ・・・と、茶々丸ワンマンアーミー体制をとっていた。

尚、ルール上一人の選手が二度連続でボールに触れる事は出来ないため、茶々丸は終始防御に徹するだけだった。

そんな茶々丸の様子がとても不憫に思えた彩と千雨は、少々苦々しい思いをしながら試合をしていた。

しかし、ここで一つ疑問に思うべき点がある。

シード枠のエヴァチームの二戦目の相手という事は、茶々丸のチームは三戦目だったということだ。

ということは、茶々丸ワンマンアーミーで二回勝ち抜いたということになる。

そんな戦法でどうやって一回戦と二回戦を勝ち抜いたのか・・・。

また、そんな戦法で勝てる相手だったのか・・・と言うことは、苦い表情をしているのどかチームを見れば、ただ単にエヴァチームの攻撃力が高すぎただけという事が容易に想像できよう。

「ていうか・・・茶々丸、腕大丈夫なのか？エヴァの必殺スパイク何回も受けてたけど・・・」

「いえ、特に問題あり——」

「ちょっと彩さん、茶々丸をあんまり舐めてもらっちゃいけませんよ？」

「ません、と続けようとした茶々丸だったが、コート端から歩いてきた聡美によって遮られる。
マッドサイエンティスト

「「「……」」」

「え、何この空気。めっちゃ怖いんだけど」

エヴァチームから浴びせられる非難に近い視線を浴び、硬直してしまふ。

言うなれば、『蛇（×3）に睨まれた蛙』状態だ。

「「「「……」」」」

「……って、なんで茶々丸もそっちに行っちゃうの……かな？」

「いえ、なんだか楽しそうだったので」

そう言って、さりげなく彩の隣に並んだ茶々丸は三人と同じ視線を聡美に向ける。

☆蛇が一匹追加された☆

「……」

にねん エーくゝみの シットめこうけゝぎ

はかせ さとみ は うこゝけない

「え？ちよつと、くーふえさん何する気？ねえ、ちよ・・・アッー
ー！！！」

せんとうみんそゝくの シゃイアントスインクゝ

はかせ さとみ は とんてゝいった

「大佐、こちらスネークアル。今、ターゲットを片付けたネ」

「うむ、よくやったスネーク」

・・・

そんなわけで、マッドなサイエンティストは頭を冷やすために海に
飛び込んでいった。

・・・それにしてもこの2-A、ノリノリである。

side. 彩

聡美に制裁が加えられて二十分。

しばらく不貞腐れていた聡美は、みんなの励ましによって復活を遂
げた。

ちなみに、俺からは「マッドな思考も程々に」という言葉を送って
あげた。

それでもって、今。

決勝に進んだのは俺たちのチームと、案の定勝ち進んできた戦闘民族タッグ。

その試合が始まろうとしていた。

ちなみに、人数によるハンデによって楓たちに3ポイント与えられた状態で始まる。

『さあ、遂に始まります決勝戦！『麻帆良のリーサルウェポン』以外に予想外の戦力が隠れていたエヴァチームVS三度の飯より組み手が大好きな獰猛四天王コンビ！果たして勝つのはどちらなのか！？』

「俺、この試合に勝ったら和美を海に投げ込むんだ」

「やめろ。フラグが立つから『試合に勝ったら』とか言うな。負けたら確実にアイツ等私たちを指名するんだろ？」

「つと、そうだったな」

「まったく・・・しっかりしてくれよ」

「勝っても負けても海に放り込むのは変わらないもんな」

「そんなことはどうでもいいわ！・・・とにかく、死ぬ気で勝つぞ。指名されたら面倒そうだしな。いいな？」

的確にツツコミが入った後、俺とエヴァに言う千雨。
何時の間にかリーダーシップが発揮されている。

「ああ」

「マクダウエルも、いいな？」

「ふん、言われるまでも無いわ」

きちんとした・・・とはまだ言えないが、返事をしっかりするようになったエヴァを見ながらチームワークが築かれつつあることを実感しているこちらに対し、

「いや、その場合は拙者がこう動くでござる」

「む、ならワタシはこう動けばいいアルね？」

「うむ、頼むでござるよ？」

・・・どうしてだろう。

普段の行いからはとてもイメージが浮かばないが、もの凄く知的なやり取りに見える。

さすが戦闘民族。カカロットとベジータ。

戦いとなると集中力が桁違いだ。

・・・普段の学習面でもあれだけ集中力を保てれば、かなり変わってくると思うんだけどなあ。

side out

『では、試合開始！』

相も変わらず和美の合図で試合が始まった。

サーブはエヴァのチーム・・・彩からだ。

「彩、今回もバシッと決めて来い」

「先生、頼むぞ」

「ああ」

そう応えて、彩は回転をかけたサーブを繰り出す。

「ブルー、アレが来たアル！」

「うむ、心得たでござる！」

楓寄りに飛んできたサーブを見て菲が楓に声を出し、楓は応えるようにレシーブを打とうと構える。

しかし

「むっ・・・！」

ボールは場外に飛び、彩の初撃は見事に楓チームを翻弄する形となった。

だが、楓チームは特に気にした様子も無かった。

「ブルー、どうだたアルか？」

「うむ、やはりお主の予測通りでござった。ただ、回転が少し厄介

でござる。回転方向を把握して打点を少しずらして返す必要があるでござるな」

「なるほど、わかたネ。次は返すアルよ？」

「うむ。そして、勝って・・・」

「「彩さん（殿）と勝負アル（でござる）！！」」

喜々とした声を上げる楓チーム。

そんな一方で、

「おい、彩（先生）」

私はあんなチームに指名されるなんて御免だぞ、と目で語りかけるエヴァと千雨。

「・・・分かってるから言わないでくれ」

やり取りが丸々聞こえてしまったエヴァチームは、自分たちには勝つ以外の道が無い事を改めて知る事になった。

・・・
・・・
・・・

そんなこんなで気を取り直して彩の二撃目。

今度は先程と逆回転で同じ場所に打ち込んだ。

「む、今度は逆回転でござるか。しかし、先程と変わらぬ回転数な

ら、返せぬものではござらん・・・イエロー！」

右上がりに振られた楓の腕がボールを捕らえ、ほぼ真上にボールが上がる。

「任せるネ！」

そして、楓が退いた所に菲が移動して前方にトスを上げる。

「ブルー！」

「承知！」

そして、ネットの直前に飛び上がった楓は、鳴滝姉妹にトラウマを植え付けたスパイクを放った。

「彩！」

「任せろ！」

相変わらずチキン戦法を発動中の彩は、影と音で落ちる場所を先読んでレシーブをする。

「千雨！」

「よっしゃ、任せろ！」

最早定位置となったセッターポジションから完璧な角度でトスを上げる千雨。

前の二試合ともずっとセッターポジションを陣取り続けていたため、

トスはすでにお手の物だった。

「マクダウエル！」

「任せておけ！」

未だにエヴァの身体能力が信じられないが、すでに見慣れてしまった千雨はエヴァにパスを回す。

そして、一回戦目から全く威力の下がらないスパイクを叩き込むエヴァ。

それでも威力は抑えられているが、並みの人間には受ける事は難しい。

.....

.....

.....

二十分近くこんな攻防が続き、気づけば10-3

チキン戦法を発動した彩は鉄壁の守りと化し、千雨は精度の変わらないただ一人のセッターとなり、エヴァは容赦の無いスパイクを容赦なく打ち続ける鬼畜と化していたこのチームに死角など皆無だった。

どこにスパイクを打ち込もうと彩が完璧にブロックしてしまうため、楓たちのスパイクが決まることは一度も無かった。

その結局、1ポイントも相手に譲ることなくひたすらのフルボッコ。

『し、試合終了ー！これはなんということでしょうか！四天王であり、尚且つ拔群のチームワークを誇っていた長瀬チームが1ポイントも奪えずに敗北！？マクダウエルチームは一体どれだけ強いんだ！？とにかく！今回の優勝者は、圧倒的な強さで大会を勝ち進んだマクダウエルチームでした！！』

観戦者一同から拍手が送られる。

『そして、優勝商品である、参加チームの内1チームに対する絶対命令権が授与されます！使えるのは明日、効力は丸一日となりますのでお間違えなきようお願いします！さて、マクダウエルチームはどのチームにどんな命令を下すのでしょうか！？』

エヴァチームに『優勝者権限』と書かれたカードが渡される。

「なあ、これどうしよう？」

「あー・・・私は別にどうでもいいな」

「何を言っている。せっかく面白いものを手に入れたんだ。使わずにどうすると言うのだ」

「まあ、使うのは明日になるんだし、今夜じっくり考えればいいだろう？」

「んー、それもそうか」

「ま、いいだろう」

もう心配ごとがなくなった彩たちが優勝商品を持て余している一方

で、負けた楓チームはと言うと・・・

「・・・あのチームの守りマジパネェアル」

「う、うむ・・・これだけ防がれば、さすがに勝てる気がしない
でござる」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・まだまだ修行が足りないアルね（でござるな）」

「そうと決まればブルー、早速修行するアル！」

「うむ、そうでござるなイエロー。夕食時までまだまだ時間はある
でござるしな」

そう言うや否や、二人仲良く海に飛び込んで沖まで泳いでいった。

修行のたびに出た二人は置いておいて・・・無事に大会を終えた一同は、夕食時になるまでの時間を海で楽しく過ごすのであった。

ちなみに、丸一日遊びまくって疲れた2-A一同は、夕食をとった後は枕投げに徹することなく風呂に入ってから眠りに付いていた。

その日の風呂場からは、日焼けした一部の女子たちの悲鳴が聞こえたそう。

第三十六話（後書き）

ちなみに、描写はしていませんでしたがアキラチームもなかなか善戦した模様です。亜子って運動神経いいですね。

かなりいいコンビだったと思いますよ。

今回は残念ながら途中で敗退してしまいましたが、もしも次回があったら描写をしてみたいと思います。

なので、今回の二人の戦いっぷりはみなさんの想像にお任せします。感想を下さる方々の中には、なかなか想像力が豊かな方も居られるようですのでw

そんなわけで、次は二日目になります。

ちなみにですが、二日目からはけっこうサクサク進んでいく予定です。

第三十七話（前書き）

やっと突入した二日目です。

さつくりと二、三話ほどで三日目に入る予定です。

離島イベントに詰め込むだけ詰め込んでいるので、このイベントが終わったら夏休みもさくさく進んでいくはずですよ。

ちなみに、時間経過の表示を

—
—
—

から

◆◆
◆◆
◆◆

に変えました。

他の話も、時間があるときに変えていくつもりですよ。

第三十七話

翌朝。

「それでは、昨日優勝したエヴァちゃんたちに、どのチームにどんな命令をするのか発表してもらいましょう！」

朝食の席に全員が集合した瞬間、元気良く和美が切り出した。

ちなみに、和美だけが他人事のように楽しみまくっているのは、優勝商品が『参加チームの内の1チームへの命令権』であるため、実に専念していて大会に参加していなかった和美は含まれないからである。

つまり、他人事のようなのではなく実際に他人事ということだ。

ちなみに、エヴァたちの方も命令対象と内容は既に決まっていた。

「長瀬楓、古菲のチームを指名する」

ちゃん付けで呼ばれたことが不服だったエヴァが少々不機嫌そうに言う。

「む、拙者たちでござるか?・・・ハッ!? もしや、遂に戦ってく

れるでござるか!？」

「ほ、ホントアルか!？」

一方で、まだ内容を伝えられてもいないのに喜び、ハイタッチを交わす二人。

席を立ち、目も輝いていて、すっかり戦闘モードに移行しそうな勢いをしている。

だが、二人の思うような内容だということはあるわけも無く、二人の予想の斜め上どころではない内容が彩から放たれた。

「楓が菲の口調で、菲が楓の口調で一日過ごす事」

「「・・・え?」」

予想外過ぎる結果に頭が付いていないため、戦闘モードのまま固まる二人。

「つまり・・・古が忍者っぽい口調で、長瀬が胡散臭い中国人っぽい口調で話すってこと?」

和美が補完して彩に確認を取る。

「そういうこと。二人とも、わかったか?」

彩が二人に言う。

今度こそはきちんと認識できた二人だったが、釈然としない表情をしている。

「えー、勝負しないアルか?」

しかし、服に付いたカレー並みにしつこく粘る菲。
敗者の割りになかなかの図々しさである。

「しない」

「解せぬ・・・」※菲

あまりにも気持ちよくバツサリと切り捨てられて取り付く島の無い事を悟った菲は、そんな一言を残して楓と共に自分の席に戻っていた。



一時間後。
海岸に移動した一同は、準備運動を終えると大半がに海に飛び込んで行った。

そんな中、岸に残った千雨は彩に声をかけた。

「なあ先生、今日は釣りするのか？」

「そうだなあ・・・千雨は釣りしたいか？」

「え？あ、まあ・・・って、なんで嬉しそうな顔してるんだよ」

「いやさ、釣り仲間ができ――」

「彩さーん、私たちも釣りしたーい！」

彩の言葉を遮ってやって来たのは、裕奈とまき絵と亜子とアキラだった。

しかも、四人とも釣り道具一式を持っている。

「ああ、それは構わないんだけど・・・その高級感丸出しの釣竿は何？しかも、そのリールも滅茶苦茶高い奴じゃん・・・」

まあ出所の予想は付くけどさ、と続ける彩の顔は少し引き攣っていた。

「え？いいんちよのそこから借りただけど、やっぱり高いの？」

「・・・少なくとも、俺には手が出せないな」

「おう、さすがいいんちよ。お金持ちは違うねえ」

指を顎に当てて竿を見つめる裕奈。

もつとも、見たところで良し悪しなんてさっぱり理解できていないのだが。

そんなわけで、この日の釣りは六人で行われる事になった。

今日も午前中は釣りをすることになった。

俺の予定としては、昨日は結局泳ぐ事が無かったから今日は泳いでみようと思ったけど、それは午後に戻す事にしよう。

せっかく千雨やアキラたちが釣りにやる気を出している事だしな。俺もこの期に釣りを満喫させてもらおう。

・・・それにしても、だ。

あの釣竿はいいなんだろう。

隅から隅まで金ぴかだったんだけど・・・。

能力で解析したから、いい竿なのには間違いない。

しかし、色のおかげで実用と言うよりは明らかに観賞用の気がする。なにしろ「さっきまで壁に引っ掛けてあった」なんて言われても納得できるような見た目だからな。

・・・本当に借りてきていいものなんだろうか。

お金持ちの感覚がいまいち掴めない俺としては、その辺りが心配でならない。

side. 千雨

なんだかんだで結構釣りが気に入った私は、今日も午前中は釣りに励むことにした。

ただ、昨日とは打って変わって今日は騒がしくなりそうだ・・・つか、騒がしくなるな。

ちなみに、沖のほうから聞こえてくるカンフー娘の忍者口調とか、忍者娘のエセ中国人訛りの所為じゃない。

左を向くと、明石、和泉、大河内、佐々木が揃いに揃って金ぴかの竿を手にして四苦八苦している。

そして、その四人を昨日の私のように指導していく先生。こうして見ていると、かなり異様な光景だ。

・・・つか、あの無駄に存在感のある釣竿はなんだ？

機能性は知らないから別として、色的に実用と言うよりは明らかに観賞用にしか見えない。

玄関とか部屋の壁とかに引っ掛けてある方がまだしっくり来る。

それに、あのバカみたいにでかい電動リールは明らかに船釣り用だろう事が私にも想像が付く。

最も、今は先生の手によって私たちサイズの手動のものに換えられているが。

「千雨、まき絵のエサを付けてやってくれないか？」

そんな事を考えていると、先生に声をかけられた。

どうやら、先生は和泉の方のエサを付けているようだ。

佐々木の方を見てみると、手を伸ばしては引っ込め、手を伸ばしては引っ込めて、としている。

・・・まあ、気持ちわかるけどな。

佐々木の表情を見ると、我ながらよくこんなものに慣れたものだと思う。

「うう・・・長谷川さん、助けて」

「あー、わかったわかった。ほら、貸してみろ」

そう言いながら佐々木から針とエサの入った容器を受け取る。
そして、素早く千切って針に刺して佐々木に返した。

「わぁ、長谷川さん速い。もしかして、釣り上級者？」

佐々木がキラキラした目でこっちを見てくる。

自惚れたわけじゃないが、尊敬の眼差しってヤツだろうか。

「いや、私は昨日始めたばかり。まだ初心者だ」

「え、嘘！？あんなに速くエサ付けてたのに？じゃあ、私も今日中に今くらい速く付けられなくなるんじゃないといけないの？」

「いや、得意不得意とかあるから自分のペースでやればいいんじゃないか？」

「・・・そう言ってくれると助かるかも」

そう言いながら、容器の中を覗いて少し顔色を悪くする佐々木。
だけど、最初はやっぱりこんなもんじゃないだろうか。
私も最初は頭の中で「キモい」を連呼していた覚えがある。
まあ、何時の間にかほとんど気にならなくなったが。

・
・
・
・
・

全員の準備ができた所で、いい具合に間隔を開けて並んで釣りを始めた。

並びは端から明石、佐々木、私、先生、大河内、和泉になった。

出来れば端が良かったんだが、気づけば佐々木と明石が右にいた。

「ししよ、なかなか釣れないであります」

佐々木が私にそんな事を言ってくる。

準備を手伝ってやったためなのか、『師匠』なんて呼ばれるようになった。

単にノリで呼ばれてるだけだから、私も特に気にしてない。

「はあ？まだ始めて三分じゃねえか。そんな早く釣れるわけねえだろ」

「ええ」

そう言いながら気が滅入ったかのような表情を浮かべる佐々木をスルーしつつ、私は考え事をしていた。

内容は、今隣に座ってる先生のことだ。

別に「異性として気になってる」だとか乙女チックなことを考えてるわけじゃない。

ただ、昨日ほぼ一日一緒に行動してみて気づいた事がある。

1つ、話してみると案外普通だった。

2-Aを始めとする麻帆良の異常代表たちから人気を集めているから、実はとんでもないような人なんじゃないかと思っていたが、案外普通だった。

授業中や春先の面談の時のように内容もちゃんとしていたし、おかしな点はどこにも無かった。

そのおかげで、学校を除いて長らくしていなかった『普通』の会話をすることができた。

2つ、意外と子供っぽい。

学校や寮にいる時とかは年の割りに落ち着いている印象を持っていたけど、案外そんな事は無かった。

割と色んな所で一喜一憂してたりする。

私が釣りに付き合うって言った時だって大喜びしてたし、さっき釣りに誘った時だってかなり嬉しそうな表情をしていた。

それに、バレーの時には龍宮と話してがっくりと項垂れることもあった。

・・・何が言いたいのかと言うと、普通の男子高生らしいって感じだった。

あ、年相応って言い直した方がいいかもしれないな。

3つ、これは常時思ってる事なんだが・・・お人よし。おせっかい焼きとも言う。

これは特に新たに発見したわけでもないから特に思い直すようなことでもないな。

・・・こんなところだろうか。

まとめてみると、先生をやっていること以外は先生って実は普通の人のような気がするということだ。

親近感が沸いたのもそのせいだろうか。

麻帆良の異常性についても、気づいてるのかは知らないが、それに期待してもいいような気もする。

とりあえず、しばらくは様子を見て、ある程度確信が持てたら訊いてみようと思う。

第三十七話（後書き）

そういうわけで、今度は運動部の皆様方が釣りに加わってきました。次回はその絡みを少し入れていきます。

三日目は一話でまとまるはずなので、もうすぐ離島が終了ですね。なんだか、これだけで一章分にまとめられるようなボリュームになった気がしますww

それから、今後の方針を軽く説明してみますと
夏休みが終わったら、まずは二学期を飛ばします。
体育祭などの時期がいまいち良く分からないため、あんまり好き勝手するわけにもいきませんので。

そして、冬に入ってちょこちょこイベントごとなどをこなしてから原作に突入するつもりです。

第三十八話（前書き）

八月に入ってから大忙しです。

おかげで更新ペースも下がり気味ですが、このように更新できる時に更新していきます。

さて、離島イベントも残り3話です。

今回と次回で二日目を終わらせ、次々回で三日目を終わらせます。

第三十八話

side. アキラ

太陽が結構高い位置に来ているし、釣りを始めてからそれなりに時間経ったと思う。

今の私のクーラーボックスの中にはシロギスが二匹とカサゴが一匹。あと、さっきアジが二匹釣れてたんだけど、小さかったから海に返してあげた。

だから、今のところは五匹釣った事になるのかな。

多い方なのか少ない方なのかはよくわからないんだけど、彩さんが言うには多い方らしい。

ちなみに、今日になって釣りをすることになった理由は、『離島を楽しみつくす』をスローガンに掲げているゆるーなの興味が向いたのと・・・「彩さんと遊びたいな」という私の気持ちが少し。

運良く釣り道具を借りる事が出来て、一緒に釣りが出来る事になったのは本当に良かったと思う。

・・・だけど、尋常じゃないほどに高級感を醸し出しているこの金色の釣竿を使うことにはさすがに抵抗感があった。

それは亜子も同じみたいで、最初は魚に引っ張られて竿が曲がったりするともうの凄く慌ててた。

最も、それに見かねた彩さんの配慮によって、今は私と亜子は彩さんが持ってきていた釣竿を使ってる。

彩さんが釣竿を四本持ってたおかげで、本当に助かったと思う。せっかく貸してくれたいいんちよには悪いと思うけど、やっぱり私たちには怖くてあの釣竿は使えないよ・・・。

「・・・お？ししょー、これってもしかして来た感じ？」

「ん？・・・ああ、そうだな」

「え、嘘！？私全然当たんないのに、なんでまき絵ばっか当たるの！？おかしくない！？」

「明石、うるさいぞ。魚が逃げるじゃねえか」

「そーだそーだ。ゆーなうるさーい」

「ふ、二人して酷い！？」

・・・まあ、ゆーなとまき絵は全く気にした素振りも無く使ってるみたいだけど。

それにしても・・・気づいたらまき絵が子犬みたいに長谷川に懐いてる。

さっきから長谷川は、まき絵が魚を釣ってクーラーボックスに入れるたびに針にエサを付けてあげてる。

長谷川は何時も一人でいる事が多かったし、あまり話したことが無かったけど、実は結構面倒見がいい子なのかもしれない。

昨日のビーチバレーも、面倒くさがってたけどなんだかんだ言って

しっかりやってたし。

そんな事を思いながら、私と亜子と彩さんは談笑に耽っていた。

「そういえば、二人とも大分慣れてきたんじゃないか？」

私と亜子の方を交互に見ながら彩さんが言う。

「彩さんが丁寧に教えてくれたおかげですね」

「うん、ウチもそう思う。授業の時みたいに分かりやすかったし」

「そ、そうか？」

私と亜子が揃って言うと、彩さんは照れくさそうな笑みを浮かべていた。

自分で思うのも説得力に欠けるものだと思うけど、最初と比べたら結構進歩したものだと思う。

今になっては、釣竿の持ち方で四苦八苦していた時の事が懐かしく思えてしまうほどだ。

それもこれも、初心者丸出だった私たちに一から十まで丁寧に教えてくれた彩さんのおかげだ。

そのおかげで、今では釣りの虜になってしまいそうなほどに釣りを楽しめてる

それに、こうしてゆったりと時間が流れるのを感じられるのも釣りの醍醐味なのかな、なんて思ってみたりもしてる。



あれから少し時間が経って、今は帰り道。

私の手には、借りてきた釣り道具一式と、最初と比べて重量感の増したクーラーボックスが一つ。
これだけで結構な達成感があった。

あれから私はアジ二匹を釣って、合計七匹の魚を釣った事になる。
でも、最終的にクーラーボックスに残った魚は三匹。

他のみんなも同じくらい残してたから、全部あわせて二十四よりも
少ないくらいかな。

みんなで食べる分としては、だいたい丁度いいくらいかも。

それにしても、みんなで釣った分が全部あったらどのくらいの数に
なってたんだろう。

今となっては分からないんだけど、もしかしたら一まとめにしたら
魚市場が開けるくらいあったのかも。

「二人とも、初めての釣りはどうだった？」

そんなことを考えていると、彩さんが私と亜子に訊いてきた。
ちなみに、ゆーなとまき絵は少し前の方で困った顔をしてる長谷川
を引っ張りながら歩いている。

「ウチは楽しかったで。またやりたいわー」

「私も楽しかったですし、またやってみたいと思いました」

「そっかそっか。ならさ、また今度麻帆良でもやってみないか？」

「え、麻帆良でもできるん？」

「ああ、森の中にいい感じの川があったんだよ」

・
・
・
・

そんな会話をしながら私は、彩さんって本当に釣りが好きなんだな、
と思いつつ

いつか彩さんと二人きりで釣りをしてみたいな、とも思いながら帰
り道を歩いた。

s i d e . o u t



s i d e . 彩

昼食を終え、疲れた顔をした千雨を除くみんなは再び元氣良く海に向かって行った。

ちなみに、今回の昼食はメニューがあらかじめ決まっていたから俺たちの釣った魚は夕食のおかずになるらしい。

そして今、本日の第二ラウンドに突入したわけだ。

俺は当初の予定通りに泳ぎに出てみようかと思っていたんだけど、ふと気になる事があったためそっちを優先する事にした。

・
・
・

そして今、俺の目の前には茶々丸が居る。

ご察しのとおり、俺が気になったのは茶々丸だった。

茶々丸は、さっきからエヴァの後ろを付いて回ってるだけで、特に何をしている様子も無かった。

訊いてみた所、実際にほとんど何をしていたわけでもなかったようだ。

エヴァからは好きにしていのように言われているらしいが、どうやらエヴァに付いて行きながら俺を探していたらしい。

だから、『そうとは知らずに悪いことをしたかな』と思いつつ、午後は茶々丸に付き合うことにした。

とりあえず、茶々丸が何をやりたいのかを訊いてみたんだが・・・

「砂に埋まってみたいです」

「……」

こんな事を言われた。

予想の斜め上どころではない。

咄嗟に反応出来なかったのも仕方ないと思ってもらいたい。

「あの・・・ダメでしょうか」

「い、いや、ダメじゃないよ。ダメじゃないんだけど・・・どうしてまた？」

「さよさんは埋められて大変喜んでいらっしゃったので」

「ああ、なるほど・・・」

よかった、どうやら周りからの影響だったらしい。

もしかしたら、最近茶々丸が時々ボケに走るようになったのも周りの影響なのだろうか。



そして、埋めてみたところ

「茶々丸、埋まってみた感想は？」

「・・・よくわかりません。ただ、身動きが取り辛いです。さよさんはどうしてあんなに喜んでいらしたのでしょうか」

「・・・それに関しては本人に訊くしかないかな」

案の定、といった感じだな。

正直、一度埋められた経験がある俺にとってはその意見には同感だった。

去年の夏休み、友達に埋められた上に彫刻を彫られた事があったけど・・・長時間も埋められっぱなしだったのはよくない意味での『いい思い出』だった。

パラソルがあったおかげで直射日光は避けられたけど、砂がすごく暑かった。

そんな中にずっと埋まりっぱなし。それに、大きめに息をすると怒られたりするし・・・。

見ている側にとっては楽しいだろうが、される側にとってはたまったものじゃない。

・・・まあ、出来上がったものはなかなかすごいものだったけど、それと同時に『二度目はごめんだ』と本気で思った。

・・・

ていうか、そろそろ出ないと茶々丸も熱が溜まっちゃうかな。

「茶々丸、そろそろ出ておいで」

「はい」

二つ返事で砂から出てくる茶々丸。
惜しげもなく砂を崩しながら出てくる様子を見ると、やっぱり砂に埋まるのは楽しくなかったようだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そして、出てきた茶々丸と無言で向かい合う形となった。

「他にはやりたいことはあるか？」

とりあえず、苦し紛れに訊いてみた。

「いえ、彩さんにお任せします」

「・・・・・・・・マジか。」

なかなか難易度高いな。

なんだか、男としての器を測られてるような気がしてならない。

まあ、もちろん茶々丸はそんなつもりは無いだろうけど・・・・。

第三十八話（後書き）

というわけで、三十八話でした。

次回は茶々丸回後編を前半で行い、後半ではあの子と二人っきりのイベントです。

・・・本当に今更なんですけど、ものっそいほのぼのですねWW
戦闘もシリ阿斯もあったものじゃありません。

・・・まあ、原作に突入すれば少なくなってしまう事もあるので、
やれるうちにやってしまおうっていう魂胆なんですけどねWW

第三十九話（前書き）

まず始めに。

皆さん、お久しぶりです。

前話を投稿した次の日から親戚の家に行っていて、つい先日帰って来ました。

一週間ぶりですが、久々に文を作った気がしますww

第三十九話

午後2時20分。

二日目の午後にして、二人はこの離島で初めての海水浴に励んでいる。

茶々丸は浮き輪の力を借りながら初めての泳ぎを実践していて、彩は浮きをとりながらそんな茶々丸を眺めていた。

ちなみに、茶々丸が浮き輪装備なのは、聡美から「茶々丸は構造的に浮く事が出来ないので、泳いだりするんだったら浮き輪とかを持たせてください」という事を言われていたからである。

side・彩

結局、なんだかんだ言っただけで最終的には海水浴でまとまった。

ていうか、こんなに綺麗な海を目の前にして考えれば考えるほど、他の選択肢が浮かんでこなかった。

まあそれに、丁度俺も入ってみたいと思ってたしな。

そして、海に入ってみて驚いた事が。

今さっき潜ってみて分かったんだが、何メートルも先の様子が見えるほど透き通っている。

現代社会の教科書に載ってた海中の写真並みだった。

しかし、こんなに綺麗な海がある島なら、国がリゾート地を作ったりすればさぞかし儲かる事だろうに。

・・・そして、そんな土地を丸々買ってのける雪広家の財力は一体どうなっているんだろう。

・・・。

・・・やっぱ考えるのやめよう。

頭の中に浮かんだ疑問をさっさと遠くに放り捨てて、俺は海を楽しませてもらう事にした。

一方で、茶々丸の方は初めての海に興味津々の様子みたいで、辺りをキョロキョロと見回しながら、浮き輪に体を通して泳ぎの練習をしている。

まあ、泳ぎとは言ってもバタ足するだけなんだけど。

ちなみに、茶々丸がやったことも無いのにバタ足の仕方を分かっていたのは、水泳の授業の時にきちんと『見学』していたからだろう。実践できているのが紛れも無い証拠だ。

そんな事を考えながら、彼方此方を行ったり来たりを繰り返す茶々丸を見守っていると・・・

バシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤ・・・という音を立てながら、茶々丸がこっちに向ってきた。もう練習は終わったんだろうか。

「・・・・」

「？」

そして、俺の目の前で止まったと思ったら、こっちをじーじーっと見つめてくる。

「・・・・」

「茶々丸？」

そして、今度は海と交互にこっちを見てくる。
本当にどうしたんだろう。

そう思っていると、

「・・・・」

「うわっ」

無言のまま、いきなり海水をかけてきた。

「……」

「??」

そして、またこっちをじーっと見てくる。

……この短時間でいったい茶々丸に何が起こったんだ。

「私には海水をかけないのですか？」

「……は？」

さも当然かのように言っているけど、俺にはさっぱりだった。

「いえ。男女が二人で海で遊ぶ時は、こうして海水をかけ合うものだと言いたのですが……」

「ああー……」

なるほど、そういうことか。

無表情に無言のまま、いきなり顔面に海水をかけられたから全然意図がつかめなかったけど、そういうことか。

確かに水をかけ合うのはありがちかもしれないけど、男女が二人でつていうのが少し気になる。

それに、聞いたって……。

まさか、また誰かの入れ知恵じゃないだろうな。

「茶々丸、それって誰から聞いたんだ？」

「先程、美砂さんが教えてくださいました」

「……………」

さよに続いて今度は美砂かよ。

まあ、いろんな子と仲良くするのは良い事だけどさ。

「あの、彩さん」

「あ、どうした？」

「私にも海水をかけていただけませんか？」

そんな事を言った茶々丸は、どこか期待するような眼差しをしているような気がする。

「あー……………わかった。じゃあ、いくぞ？」

「はい」

とりあえず、今さっき茶々丸が俺にしたくらいの量を茶々丸にかけてみた。

バシャッと音を立てて、海水が茶々丸の顔にかかるが、茶々丸は特にこれといった反応をしなかった。

……茶々丸が砂に埋もれた時と同じ空気になった気がする。

「……………どうだった？」

一応訊いてみた。

「・・・よくわかりません。ただ、少し顔が冷たいです。」

「さいですか・・・」

案の定、砂の時と同じような反応が返ってきた。

「それに・・・」

「ん？」

「海水は本当にしょっぱいんですね」

「あー・・・もしかして、さっき結構海水飲んじやった？」

「・・・はい」

少し苦々しい表情をしながら頷く茶々丸。

海初体験者が例外なく受ける洗礼・・・言わばお約束だった。

まあ、今のは完全に俺が原因だったけど。



数時間経って、今は夕方。

初めての海ということもあり、茶々丸はやっぱりいろんな事に対して興味を示していた。

周りの子がしている事を物珍しそうにしていたり、飛び跳ねた魚を見て目を丸くしたり、スナメリを見つけたときは本気で追いかけようとしていた。

そんな茶々丸と一緒にあれやこれやとこなす内に、気づけば、これでもか、と言うくらいに海で遊びまくり、この半日でひと夏分は海を満喫し尽くしたんじゃないのかと思うくらいに遊び倒した気がする。

茶々丸も同じような事を思っているのか、陸に戻る頃にはどこか満足そうな表情をしていた。

「茶々丸、海は楽しめたか？」

返ってくる答えは概ね分かっているようなものなんだが、つつい訊いてしまう。

「はい。皆さんが海水浴を楽しみにしていた理由が理解できたような気がします」

「そっか」

聞こえはやや消極的だが、茶々丸的には結構踏み出した感想だと思う。

それに、そこそこ頬が緩んでいるし、なかなか気に入ってもらえた

みたいだった。

「じゃ、別荘にもどううか。夕食時も近くなってきた事だし」

「はい」

そうして、二人で別荘へ足を進めた。

夕食といえば、午前中に釣った魚が夕食のおかずを追加されるんだったな。

どう調理されてくるんだろ。

茶々丸と一緒に遊びまわって大分お腹が空いたから、結構楽しみにしていたりする俺だった。

side. out



その夜。

夕食を結構前に終えた一同は、別荘の正面玄関前に集まっていた。

夏の風物詩として名高い『肝試し』を行うためである。

しかし、この離島には都市伝説も無ければ怪談話も無い。

このまま始めてしまった所で夜の散歩になってしまう事は目に見えていた。

そのため「テキストに怪談話を一人一ネタ話してから開始」というルールが設けられることになった。

「それっぽい空気が出ればいい」という感覚で始めた怪談話だったのだが、トップバッターとして指名された彩が初っ端からとんでもない話しをしてしまったおかげでハードルがぐんと上がり、全員が怪談話を終える頃には数人の失神者が出ていた。

「えー、と・・・始める前にして既に脱落者が数名出てしまいました。が、気を取り直してペア決めをしまーす。ここにあるくじを引いて、番号が同じ子同士がペアになり、尚且つくじに書いてあった番号が出発順になります。あ、ちなみに脱落者分は抜いてあるからその辺りは心配しなくても結構です」

脱落者を屋内に運び終えた頃に、自称運営の和美が言った。

・・・

そして、生き残っているメンバーが次々とくじを引いていく中、彩の番がやって来た。

和美の持った缶の中に手を入れ、たくさんの四つ折りになった紙の中から手に付いたものを一枚引っ張り上げた。

「彩さん、何番？」

「えーっと・・・4番だな」

和美に尋ねられた彩は四つ折りのくじを開き、書いてある番号を答えた

「はいはい、4番ね・・・お、もう一枚はまだこの中じゃん」

ルーズリーフにメモを取りながら、和美は缶をトントンと突っついて言う。

そして、それを耳にした内の若干名が小さくガッツポーズを決めていた。

・・・

そして、彩の次に刹那の番がやって来た。

「んじゃ、次は桜咲か。引いていいよ」

「4番4番4番4番・・・あ、でもこのちゃんと一緒も・・・」

そんな事をブツブツと呟きながら、刹那は缶の中に手を入れた。

（残りのくじの数は10枚。ということは、四番を引き当てる確立は10％・・・引けるか？）

がさがさがさがさがさがさがさがさがさ・・・

（そして、このちゃんと一緒になるには、まだ出ていない数字を引けばいい。今出ていない数字は三種類。つまり、このちゃんと一緒

になれる番号を引く確率は多くて60%・・・)

がさぶそがさぶそがさぶそがさぶそがさぶそがさぶそ

（つまり、彩さんかこのちゃんと一緒になれる番号を引く確率は多くて70%・・・うん、悪くないな）

がさがそ がさがそ がさがそ がさがそ がさがそ . . .

「・・・よし、これだ！」

「あー、はいはい。じゃ、開けて番号言ってね」

元気良く缶から手を抜いた刹那に対し、和美は少しうんざりした表情をしている。

三分近くも目の前でがさごそがさごそされていれば無理も無いだろう。

「あ、はい。ええつと・・・8・・・番？」

4番では無かったということに少々気を落とした刹那だったが、まだ木乃香とペアになる確率が残っている事を思い出して少し気を持ち直した。

しかし・・・

「8番、8番は……つと。ああ、長瀬とペアだね」

「ん？ おお、誰がペアになったのかと思ったら、刹那だったアルか」

※楓

「なん・・・だと・・・？」

最後の希望も絶たれてしまい、今度こそがつくりと肩を落とす刹那。
中国訛り口調に慣れてきた楓を完全スルーし、己の運の弱さを嘆く
のであった。

・
・
・
・
・
・



そんな調子でアキラや茶々丸も彩のペア枠を獲得できず、残りは五人となった。

「んじゃ、次は近衛ね」

「うん。・・・・・・よし、これや」

彩と同じように、手に付いたものを手早く抜き取った木乃香。

「何番？」

「えーっと、7番やね」

「7番、7番は・・・絡繰とね」

「茶々丸さんか。よろしゅうね、茶々丸さん」

「え？あ、はい。よろしくお願いします」

木乃香の方を向いてお辞儀をする茶々丸。

しかし、そんな一方で、視線はちらちらと彩の方を向いていた。

「ん？あんまり乗り気じゃ無さそう・・・あ」

「・・・え？」

「ほく、ふくん？なるほどな」

「え、あ、あの・・・」

茶々丸の視線の先にいた彩に気づいた木乃香は、納得したように頷いている。

しかし、そんな一方で、木乃香の行動の意味に気が付かない茶々丸は狼狽する一方だった。

・・・
・・・

そして、遂に

「む、4番か」

「ああ、4番ね。彩さんがペアだよ」

「へえ、彩さんとか・・・これは思いの外楽しめそうだね」

そう言って微笑を浮かべるのは、他でもない真名だった。



ペア決めも済み、肝試しが開始されて二十分が経過した。
最初の五分でルールの確認をし、それから一組目がスタートし、五分おきに一組ずつスタートする事になっているため、今は四組目の彩と真名がスタートをするところだった。

「はい、これ懐中電灯と地図ね。まあ、どうせ道なりに進むだけだから地図なんていらないんだけど・・・。そんじゃ、いつてらっしゃーい」

和美の軽い合図で送り出され、彩と真名は森に入っていくた。

side. 彩

「そう言えば、彩さんと二人で歩くというのもなんだか珍しいね」

森に入って少し歩いたくらいの所で真名が言った。

そういえば、確かに真名と二人きりになるのは珍しい。記憶をたどっても、面談の時と鬼ごっこの時くらいしか思い当たらない。

「確かにそうだな。最初会った時は俺は刹那を抱えてたし、他の時も大抵は誰かしらが一緒に居たし。仕事の時は話す暇なんてあまり無いしな」

「ああ、初めて会った時と言えば、そろそろ彩さんが麻帆良に来て四ヶ月になるね。今更訊くのもどうかと思うんだが、麻帆良での生活はどうだい？教師として働く事には慣れたかな？」

ふと、思い出したかのように真名が言った。

そういえば、ここ三ヶ月くらい訊かれていなかったな。

「そうだな・・・麻帆良の生活も、教師としての仕事も不自由はしてないかな。住んでる人たちも、同僚の先生たちもいい人ばかりだし。生徒もいい子ばかりだしな。・・・うん。結構今の生活は気に入ってるよ。ただ・・・」

「ただ？」

「教師と寮の管理人と指導員の仕事を全部こなすのは結構キツイんだよ・・・それに、時々夜の警備があるし。・・・ここだけの話にして欲しいんだけど、学園長は俺を過労死させるつもりなんじゃないのかと本気で疑った事がある」

自然に流れるように、ついうっかり零してしまった。

「それは何と言うか・・・ご愁傷様」

真名が顔を少し引き攣らせながらそう言った。
そういえば、タカミチさんに言った時もこんな顔されたっけ。

しかし、警備の仕事を共にする事があるからといって、生徒に愚痴をうっかり零してしまう教師というのはいかがなものだろう。

少し・・・いや、かなり褒められたものではないのだが、相手が一般生徒ではなかったということで、今回だけは目を瞑ってもらいたい。

「あー・・・ごめん。愚痴を零すつもりじゃ無かったんだ」

「あ、ああ。構わないよ。それに、たまに愚痴の一つくらいは零したって罰は当たらないさ」

「そう言ってくれると助かるよ・・・」

今回ばかりは、さすがの真名も皮肉を言ってこない。

「安請け合いするからこういうことになるんだよ」とか言われる覚悟はしてみたんだけど。

「まあ、彩さんには愚痴を聞いてくれる優しい恋人でも作る事をお勧めするよ」

「大きなお世話だ！お前は俺の母親か！？」

・・・前言撤回。

やっぱり真名は真名だった。

見てみる。気を緩めた瞬間にこれだ。

この策士め、狙って言ってるんじゃないだろうな。スナイパーなだけに。

「む・・・今の一言は聞き捨てなら無いね。私が老けて見えるって言うのかい？」

そして、何故か怒っている。

割と本気っぽい殺気を飛ばしながらドスの効いた声でそんな事を言ってくる真名。

笑顔なところが怖さを倍増させる。

ちなみに、俺はそんなつもりで言ったわけでも無ければ、実の母親を見たことが無いから母親と真名が似ているという意味で言ったわけでもない。

完全にただの言いがかりだった。

ていうか、真名・・・もしかしてその所を結構気にしてたりするんだろうか。

・・・まあ、なんにせよ、このままでは俺が危ない。

「あー・・・いや、そういうつもりで言ったんじゃない」

誤解は事故の元だ。さっさと解くに限る。

「へえ？ならどんなつもりで言ったのか、詳しく説明してくれないかい？」

・
・
・
・

――説明中――

・
・
・
・
・
・

「まったく・・・彩さんはものの言い方には気をつけた方がいいよ」

「真名の解釈の仕方が極端すぎただけだと思っただけ・・・」

歩きながらの十分を使って話し合った結果、やっと納得してくれたらしい。

・・・とは言っても、最終的には餡蜜十杯という、頭に思い浮かべるだけで胸焼けを起こしそうな量の甘味を彼女に提供することで、強制的に話をまとまらせる羽目になった。

しかし、餡蜜十杯か・・・いったいいくらになるんだろうか。

状況が状況でなければ「ああ、真名もなんだかんだ言って立派な女子中学生なんだな」と、和やかな気分になれたものを・・・。

状況が状況であるおかげでそんな気分になる事は一切無かった。

「む・・・彩さん」

「ああ。分かってる」

真名の隣を重い足取りで歩いていると、ふと風を切る音が後ろから聞こえてきた。

その『風を切って来た何か』はいい具合に俺たちの頭の間に向ってきたため、歩みを止めた俺と真名は同時に外側に首を捻ってその何かをかわした。

そして、俺たちの間を通り抜けていった何かの全貌が露になった。

「彩さん、あれはもしかして・・・」

苦笑いをした真名がその何かを指差している。
多分、今の俺も同じような顔をしている事だろう。

「蒟蒻・・・だよな」

真名の言葉を補完するように言葉をつなげる。

目の前には糸で宙にぶら下げられた蒟蒻が一つ。
振り子のように揺れていた。

そして、蒟蒻に繋がった糸は長い木の棒に、長い木の棒は草むらの中に、草むらの中には使用人さんが居た。

・・・。

使用人さんエ・・・。

・・・何してるんですかそんな所で。
本意でやってるわけじゃないのは嫌と言うほど分かるけど・・・。

「またベタだね・・・」

「だな」

とりあえず使用人さんのことはスルーしておいて、こっちに戻ってきた蒟蒻を再度かわす。

さっきよりも勢いが付いているような気がする、と思ったら、案の定使用人さんが地味に振っていた。

・・・。

使用人さんエ・・・当たらなかったのがそんなに悔しかったんかい。

そんな事を思いつつ、俺と真名は蒟蒻の攻撃範囲からさっさと脱出し、そのままゴールに向って歩みを進めた。

結果。

残りの道中での気苦労は相変わらず絶えなかったが・・・何とか無事にゴールまで辿り着く事が出来た。

「ふむ、思ったより長くかかったね」

そして、戻ってくる頃にはすっかり真名の機嫌も直っていた。
時間のおかげなのか、麻帆良に帰った後に食べられる餡蜜の事を想像していたからなのかはよく分からないけど。

「・・・ああ、そうですね」

そして、それに比例するように俺の気疲れは増していた。
理由は言うまでもないだろうけど。

・・・しかし、さっきのあれは結局俺が全面的に悪かったんだろうか。

少しだけ釈然としないような気持ちが俺の中にあった。

だけど、この話題をもう一度真名に振るような気も元氣も今の俺には無かった。

だから、さっきのことは『授業料』と『教訓』という形で無理やり自己解決させた。

。『ギブ』と『テイク』がかなり釣り合っていない気がするけど・・・

第三十九話（後書き）

そういうわけで、二日目の終わりまでをバビューンっと作りました。少し急ぎ急ぎの気もしますが。

そういうわけで、今回は三日目を一話で終わらせるつもりです。もしかしたら、おまけが一話入るかもしれませんが。しかし・・・本当にながかったですねww

それと、最近ふと気になった事があるのですが。

皆様の頭の中で、彩は誰の声というイメージがありますか？

別に、アンケートというつもりはありませんが、皆様のイメージを伺ってみたいな、と。

ちなみに、僕のイメージは『名字2文字、名前2文字の男性声優さん』です。

気が向いたらでかまいませんので、是非ともお聞かせください。

第四十話（前書き）

気づけば二ヶ月近く経っていました・・・。

ここまで投稿が遅れてしまった理由は、活動報告で述べたのもありますが、一番の理由は海のネタがいい加減なくなってしまったことですww

おかげで一話完成させるのに物凄く時間を食ってしまいました・・・orz。

P・S 主人公設定を改修しました。ごちゃごちゃした部分はカットしたり、まだ登場してない武器やら道具やらもカットしました。

第四十話

side. 彩

三日目。つまり、最終日。初日や二日目同様に晴れ。快晴だった。今日で此処の海で遊べるのも最後だと思うと、なんだか名残惜しい。昨日は飽きるくらいに遊んだつもりだったけど、一晩経ってみると、まだ遊び足りないような気がするから不思議なものだった。

そんな今日の午前中。

朝食を済ませた俺たちは、やっぱり海岸に出ている。昨日や一昨日は海に飛び出していく子達を尻目に釣りに行っていたけど、今日は俺も海に出ようと思う。菲や楓のように一日丸々使っているつもりは無いけど、一泳ぎでもしたい気分だ。

しかし、一人でぽつんと泳ぐのも些か寂しい。

誰か付いて来てくれそうな子は……

「……先生」

「ん？千雨か。どうした？」

そんなことを考えながら辺りを見回していると、千雨がやって来た。

……千雨か。

普段が普段だから見落としがちだけど、この子も運動神経は高い方だったな。

ビーチバレーでは大活躍だったし。

「あの、さ。今日も釣りしないか？」

誘ってみようかと思っていたところだったのだが、逆に誘われてしまった。釣りに。
というか……

「き、今日もか？」

「だ、ダメか？」

「うーん……」

……どうしようかなあ。

今日はずっと海に出ているつもりだったから、釣具は全部部屋に置いてきてしまっている。

が、その点を取りに戻れば済むから別段問題ではない。

ただ、昼食に魚、というのにそろそろみんなが飽きてきていないか少し心配な所だ。

それに、俺も午前中は海に出れないけど……まあ、いいか。午後も残ってることだし。

海は午後にでも堪能させてもらおうとしよう。

「わかった。じゃあ、今日も釣りするか」

「ほ、ホントか？」

少し不安げな顔だった千雨の頬が緩んだ気がした。

思ってたより釣りが気に入ったらしい。

と言うより、思いつきりハマっている様子だった。

……まあ、それに付き合う俺も俺だとは思うけど。

「ああ。それじゃ、釣具持ってくるよ。先に行ってるか？」

「んー……いや、待ってるよ」

そう言って、千雨はパラソルの方へ歩いていった。

あまり待たせても悪いし、さっさと行って戻ってくるとしようか。

side. out

別荘へ向かう彩を見送って手持ち無沙汰になった千雨は、海岸と別荘の間を再度往復させてしまった事に少し罪悪感を抱きつつ、パラソルの下に腰を下ろした。

そして、胡坐をかいて海を眺める。

視線の先には、海で楽しそうにはしゃいでいるクラスメイト達の姿。

海で泳いでいる姿だったり、砂浜で遊んでいたりと、目に映るのはそんな光景ばかりである。

「……はあ」

そんな中、パラソルの下で一人。

ポツンと座ってそんな光景を眺めているだけの自分が酷く場違いに感じ、小さく溜め息を吐きながらその場で寝転がり、頭の下で手を組む。今度の視線の先は、パラソルの内側だった。

紺色の布地は夏の日差しを受けて、繊維と繊維の細かい隙間がキラキラと光っている。

それはまるで夜空のようで、明るく騒がしい声で賑わっている向こうとは違い、静かで寂しいこの空間の雰囲気にはやけに似合っていた。

「……はあ」

前を向いても上を向いてもこんな光景を見せられ、多少憂鬱な気持ちになるが、これも釣りをすればいくらかは解消できるだろう、と。憂鬱思考を振り払うかのように千雨は軽く首を振った。

その時。

「しっしょー！ あーそーぼっ！」

不意に、その静かな空間に不釣り合いな程の明るく大きな声が千雨の耳に、人懐っこそうな笑顔を浮かべたまき絵の顔がどアップで千雨の視界に飛び込んできた。

「おわあっ!?!」

それに対し、急に視界に入ってきたまき絵の顔に驚いた千雨は、跳ねるように起き上がる。
すると――

「「あうっ!?!」」

ごっつん、という鈍い音を立て、起き上がった千雨の額がまき絵の額に直撃した。
勢いも付いていたおかげで、威力も相当のものである。

「うっわあ……痛そー」

「ま、まき絵、長谷川、大丈夫?」

「今、すごい音したで!?!」

後ろからその様子を見ていた裕奈と亜子とアキラは心配そうな顔をしながら、顔を抑えて悶えている千雨とまき絵に声をかける。
あの裕奈が心配そうな顔をしている辺り、ぶつかった時の勢いと音の鈍さが伺えるだろう。

「し、ししょー……い、痛ひ……」

「あ、ああ……悪ひ……じゃなくて!」

「うう……何?」

「何?じゃねえよ。お前らこそ何しに来たんだよ」

涙目になって額を摩っているまき絵に、同じく額を摩っている千雨が涙目で軽く睨みながら言う。

「何ってそりゃ、遊びの誘いに決まってるじゃん？」

「ねー」

「はあ？なんでまた……」

「だって、昨日は付き合ってくれなかったじゃん」

「そうだよー。今日こそ付き合ってもらうんだからねっ」

わけがわからない、と言う顔をした千雨にびしっと指差しながら裕奈とまき絵が言う。

ちなみに、昨日にも似たようなやり取りが昼食後に行われていたが、この二人（お祭り娘と天然娘）に囲まれて午前中を過ごして精神的披露が溜まっていた千雨は、それをすっぱり断って部屋に籠っていた――というのは、ちょっとした裏話。

「そーゆーわけで、ししよーを連行したいと思いまーす！へい、ゆーな！」

「OK、まき絵！」

何がどういうわけなのか、まき絵が千雨の右手を、裕奈が左手を持

って、座った状態の千雨を引っ張り上げる。

「ちょ、おい、こら！」

あまりに唐突過ぎる展開に目を白黒させる千雨にお構いなしに、裕奈とまき絵はそのまま千雨を引っ張って海まで連行して行く。

「そんな、引っ張るな……っつの！」

そんな中、千雨は抗議の声を上げるが、まき絵と裕奈はそんな様子に全く気づかず、そのまま海にざぶざぶと入って行き

「だから、ちょっと待——うわぁっ!？」

引っ張られるがままに引っ張られてきた千雨は、足が水の抵抗に捕まり、そのまま体制を崩して、海に飛び込むように転倒した。

「おおー。ししょー、いい飛込みっぷり」

「なーんだ、千雨ちゃんも海で遊ぶ気だったんだ。まだ浅瀬なのに気が早いにゃー」

一方で、そんな都合のいい解釈をしていて全く悪びれた様子の無いまき絵と裕奈は、けらけらと無邪気に笑っている。

そんな時、海の中で、ぷちん、と何かが切れたような音がし、水しぶきを立てながら千雨が勢い良く起き上がった。わなわなと震えているのは、決して寒いからではない。

そして

「てめえら……覚悟は出来てんだろうなあ!？」

うがー、という擬音が似合いそうな勢いでまき絵と裕奈の方へ猛ダツシュして行った。

「きゃー、よくわかんないけどししょーが怒ったー!」

「逃げろ逃げろー!」

「待てやこらあ!？」

「「あ、あはは……」」

そんな千雨からきやつきやとはしゃいで逃げ回る二人に対し、置いてけぼりを食らっていたアキラと亜子は、やや乾いた声で笑っていた。

……笑うしかなかった。



「……あれ?」

彩が部屋に戻り、釣具の入った鞆を持って再び海岸に出てきた頃には、既に千雨は陸には居なかった。

……が。

当然、彩はそんなことを知るはずが無いため、何かしらがあつてタ
イミング悪く入れ違いになっただけだろう、と思い、死角側では千
雨が必死にまき絵たちを追い掛け回していることに気づかないまま、
今はパラソルの下に腰を下ろしていた。

「あれ？彩さん、そんなところで何してるの？」

そんな中、砂浜で木乃香や刹那と一緒にビーチボールで遊んでいた
明日菜が彩に気づき、やや不思議そうな顔をしながら言った。

「えーっと、千雨を待ってるんだけど……」

「え、長谷川さん？長谷川さんなら、今さっきまき絵達に引っ張ら
れて海に出てったわよ」

「は？」

目を丸くする彩は、ほら、と明日菜が指差すほうに目を向ける。

すると――

side. 彩

「……」

そこには、鬼気迫るような形相でまき絵と裕奈を追いかけて回す千雨の姿と、笑顔で逃げ回るまき絵と裕奈の姿と、少しだけ離れたところで苦笑いをしているアキラと亜子の姿があった。

……この十数分の間に何が起ればこんな構図が出来上がるのだろうか。甚だ不思議だった。

「それにしても、千雨ちゃんが誰かと遊んでる所なんて、うち初めて見たわー」

と、ここでちょっと聞き捨てなら無い台詞が。

「……なあ、木乃香」

「ん？　なあに？」

「あれは遊んでるのか？」

「？　追いかけてっやないの？」

うらやましいわー、とニコニコしながら木乃香は言う。

「……」

……まあ、年頃の女の子同士がどんな風に遊ぶのか、なんてことは俺にもいまいち良くわからないところもあるし、この子達は結構アグレッシブだから絵に描いたようにはしゃぎまわることも承知の上

だ。

だけど、なんか違う。少なくとも、俺の知ってる遊びっていうのはあんなんじゃなかったはずだ。

……なんて。

まあ、実際に何が起こったかはわからないけど、昨日の釣りのおかげか、それとなく予想が付いてしまう。千雨も本気で怒ってるわけではないみたいだし。

――しかし、千雨が素の状態で接している辺り、まき絵達に対する心の壁が小さくなってきている、という事だろうか。

とは言っても、昨日の様子を見る限りでは、千雨が小さくしているのではなく、まき絵たちが削岩機とかで一方的にガリガリと削っているのが現状のようだが。

まあ……それでも、なんだかんだ言っただの子達なら上手くやれるんじゃないだろうか。

閑話休題

「ところで彩さん」

「ん？」

「この大きい鞆って何？　もしかして、彩さんの？」

俺が先生風を吹かせてそんなことを思っていると、後ろにいる明日菜から声がかかった。

振り返ると、明日菜と刹那が興味深そうに釣具の入った鞆をじーっと見つめている。

会話に混ざってこないと思ったら、そういうことだったらしい。

「ああ、これな。釣具が入ってるんだよ」

「釣具？ 彩くん、今日も釣りするん？」

「こんなに綺麗な海があるんだから、釣り以外にも何かすればいいのに……二人とも釣り好きねー」

と、釣具に少し興味を示したらしい木乃香に対し、明日菜には少し呆れ気味な顔をされた。ジト目である。

……少しぐさりと来た。

「ていうか、彩さん」

「……なんでしょか」

「何時の間に千雨ちゃんとそんな仲良くなってたの？」

「え？」

「だから、千雨ちゃん。何時の間に一緒に釣りをする仲になってたの？ あの朝倉ですら一昨日初めて知ったかのような反応してたし」

「あ、ああ……そのことか」

てっきり追撃が来るのかと思って少し身構えてしまったけど、どう

やら杞憂だったらしい。

「んー……端的に言うと、初日に俺が釣りに誘って千雨が釣りにハマった、って感じ。それなりに話せるようになったのは釣りの話題があったからかな」

まあ、実はパソコンを買うときにも一絡みあったんだけど、この辺りは千雨から口止めされてるから話せない。

「へえー。でも、なんでそこで千雨ちゃんだったの？」

「いやさ、俺がこれをもって出て来た時には、みんな楽しそうに遊んでたし、水を差すのも気が引けてな。その分、一人で……こういう言い方もあんまりよくないんだけど、特にやることもなさそうに歩いてた千雨の方が誘いやすかったんだよ」

「……え、それだけ？」

「？ ああ。それだけだけど」

「なーんだ。そんなことなら、私たちに声かけてくれたら付き合ってたのに」

と、明日菜が肩透かしを食らったような、なんとも言えない様な表情をしている。

ちなみに、木乃香も似たような表情をしていて、刹那に至っては何故かホッとした様に胸を撫で下ろしている。

しかし、ホッとする要素なんてどこにあったんだろう。

……まあ、いいか。

「それで、彩くんはこれからどうするん？ 千雨ちゃんはまき絵達に取られてもうたけど……やっぱり、釣り？」

と、木乃香が俺に尋ねる。

真っ先に釣りをするかどうかを訊く辺り、俺Ⅱ釣り、という方程式が成り立ってきてしまっているらしい。

正直、ちょっとショック。

……言うほどそうでもないと思うんだけどなあ……。

「……いや、海に出ようかと思ってるよ」

「あ、ほんまに？ セやったら、うちらと一緒に遊ばへん？」

「木乃香たちと？」

「うん。無理にとは言わへんけど、どう？」

俺自身手持ち無沙汰になってしまったばかりだ。誘ってもらえるのはありがたい。

それに、ここで断るのは野暮ってやつだろう。

でも……

「待てやコラー！」

「……」

少し心配になり、ふと千雨の方を振り返ってみると、聞こえてくるのは普段からは想像も付かないような千雨の叫び声。

……………。

うん。やっぱり大丈夫っぽい。

「えーっと……それなら、俺も混ぜてもらってもいいか？」

まあ、千雨もしばらく戻って来そうにないし、その間は俺も俺で楽しませてもらうでしょう。

s i d e . o u t

「「ごめんなさい」」

彩たちが海に出て少しした後。

砂浜のど真ん中には、頭にたんこぶを一つずつ作り、正座をした裕奈とまき絵の姿があった。砂が熱いのか、度々膝をもそもそと動かしている。

そして、その前には腕を組んだ千雨が仁王立ちをしていた。

「で……反省は？」

「「はい！　してます！」」

「……ならよし。今回はこのくらいで大目に見てやる」

「「はあ……」」

千雨が組んだ腕を解くと同時に、糸の切れた人形のようにその場へたり込む裕奈とまき絵。

ちなみに、アキラと亜子は、やっぱり少し離れた所で終始苦笑いをしていた。

「「たく……あ、そういえば先生遅いな。どうしたんだろ……」」

「え、先生？　彩さんなら、結構前に海に出たよ。明日菜と木乃香と刹那ちゃん連れて」

ぼそりと呟いた千雨に、まき絵がさらりとそんなことを言う。

「「……はあ（えっ）！？」」

驚いて素っ頓狂な声を上げる千雨に加え、理由は言わずもがな、アキラも驚きの表情を浮かべた。

「ん？　アキラどうしたの？」

「う、ううん、なんでもない」

「そう？　……あ、でも、その前に何か探してるみたいだったけど……」

「……そ、そうなのか？」

「うん。その後に明日菜たちが彩さんに声をかけて、って感じ」

ドタキャンを食らったのだと思っていた千雨は、まき絵の説明から、自分と同じように彩も明日菜たちに引っ張られて行ったのだという予測を立てる。そして、今日は釣りは出来そうにないな、と少し意気消沈した。

それに、もしも三人を連れて釣りをしていたとしても、目の前の二人レベルで騒々しくなりそうな面子がそろっている中に自分から進んで行くつもりはほとんど起きなかった事だろう。

「……」

そんなことを思いつつ、浅瀬で明日菜たちとビーチボールを飛ばし合っている彩を一瞥し――

「はぁ……どうしてこんなことに……」

がつくりと項垂れた。

「えーっと……どんまい？」

千雨の心情が全く掴めずに戸惑い気味なまき絵の励ましの言葉を背中に受け、千雨は釣りを諦めてまき絵たちに付き合うことになるのだった。

千雨の最終日が昨日や一昨日と比べ物にならないほどに慌しい一日になったという事は、考えるまでも無いだろう。

第四十話（後書き）

今回の反省点。

一日目と二日目に定番ネタを積み込みすぎたおかげで、三日目のネタが完全に消えてしまいました。

刹那とのイベントが描写し切れなかったのが少し辛かったです。

肝試しイベントで刹那と組ませればよかったかも、なんて思っても後の祭りですww

まあ、真名と組ませたのもあればあれで次の真名とのイベントに繋げやすくなったのは良かったんですが。

というか、明日菜と木乃香と一緒に居るとどこで喋らせようか迷いますww

おかげで、この話は一言も喋ってませんww

久々に書いた、ということでもキャラの感じがつかみきれなかったのもあると思いますが、これから徐々に取り戻していこうかと思えます。

というわけで、次回からは原作開始時期に向けて物語を進めていくかと思えます。

必要なイベントをこなしたら、一気にキンクリします。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514t/>

少年は境界を越えて・・・

2011年11月9日07時55分発行